

査にでも捉へられて、泥だらけになつて、人だかりに取り巻かれながら、足蹴にされてゐる光景などが、もうすぐ次の瞬間に見る事の豫想のやうに目に浮ぶ。

けれども、それは突拍子もないたゞの妄想と思はれない。何だか自分のふいと考へ浮べる事は、自分で自分に來るべき凶悪を暗示するのではないかといふ氣がする。もう、こんなたゞれたやうな、いら／＼しいだだ黒い心持に刺げて、恰もさき程見た、赤身の出た骨張つた瘦馬のやうに、やるせない毎日に生を引いて行くことは、かういふ烈しい神経衰弱と、暗い冷たい孤獨とに誑はれてゐる私には、とても長く續きさうにもないやうな氣がする。せめて、あゝいふところへ出て行くのだけは早くどうにかして切り上げたい。いつまでかうして掘いばさ／＼の麵飽の切なぞを包んで、月給の取れない、厭な烈しい勞働をしに通ふのだらう。今日は、いつも自分のテーブルに入れて置く鍵に、バタが少しもなくなつてゐたのを忘れてゐて、たうと午には何にも食はんづくであつた。側の人がある言つてくれたので、廊下に砂糖を打つて來さ

せて見たが、黒っぽい煮物用の砂糖なので食はれはしない。私はうつかりして片側を焦した麵を金網から取り上げて、何にも附けないで少し齧りくさして見たのを、かうしてそのまま包みの中へ入れて歸るのであつた。

私に寝られない夜のだだ黒い妄想のやうに、いろんな事を考へつゝ歩いて行くうちに、いつしか、私がこれから歸つて、いきなり、一人で蒲團を引きずり下して寝る、夕方に近づく午後、どんよりした、小暗い私の家の一間の光景や、盲ひた、がんぜない私の母なし子や、私のみない間を、一人でその子を守つてゐる、栗のちぢむさく解れた、見ても臭さうな氣のする、白墮落な小汚い下女の事なぞを、不愉快に目に浮べつ歩いてゐるのであつた。

もちつと外の方を見守つて立つてゐるのだといふ。どんなにかお父さんが戀しいのでせうねと下女が獨り言をいふと、子供はそれを聞いて、このくらゐお父さんが歸つて來てほしい、このくらゐだと言つて、障子へべつたり凝つて、兩手を抜けて見せる。もつと／＼、もつと大きく歸つて欲しいと言ひつゝ、壁の方へ振りついて行つて、自分のさういふ心持の大きさを告げようとするのだといふ。生れてから一寸も目の見えな、哀れな小さい私の子供には、たゞ私の聲と、私に觸れる感覚とだけが、自分のたつた一人の父なのであつた。子供は、私が被れてぐつたりして、家の前の坂になつてるところをてくてく下りて來る足音を、かすかに聞いても、すぐに私だと聞きわけて、探り／＼に上り口の方へ出て來るのであつた。

たゞこれだけ言へば、物哀れな、いたはしい小さいもののやうにのみ見えるけれど、この子の疑り深くねぢくれた、ねち／＼した性質と、頭ばかり大きく瘦せ青ざめた、血色のない、陰氣な顔と、その魚の目のやうに濁つた、白目の多い兩眼とは、生んだ父の私にさへ何だか不愉快で厭である。私はいつもこの子の事をたゞ心に考へ浮べても、目の前に見ると同じく、何だ

か私にこれから先生きてゐる限りの日が、永久に、絶えしない不安と陰黒とに鎖されてゐるやうな氣がして情なくなる。この子の顔が、私と、まだ乳のみ兒の間の目の見えぬこの子とを捨てて出た、この子の母に似てゐる事ばかりでも、この子の母の思はしい罪をいつまでも私に忘れさせないために不愉快である。

私はもう女の罪を悪みはしない。あのやうな女の事はもう考へ返すだけでも厭である。けれども、あの厭はしい、あさましい女の面影が、いつまでもこの子の顔に印されて遺つてゐるのは、どのやうに忘れようとしても、いつも、見ると不愉快でならない。この子を生んだ母は、いふに言はれない誤つた事をして、私のところから出て了つた女である。もとよりどうせ私からだつて出さずにはゐられる譯もないのだけれど。

忘れてゐる事が出來た。實際私は、伯母が手のかゝる面倒を見てくれてゐる厄介をさへ考へないで、一人の自分になつてゐた。

私は私の口からはそれ以上の事は言ふに堪へられない。女が出て行つた後、子供は、國にゐる私のただ一人の伯母が、厄介を厭はず暫く引き取つてくれてゐた。私はさうした伯母の同情で、二三年ばかりの間は、私の思はしい女を考へさせるこのいたましい不具者を、目の前から消し

さを教へられた。しまひには一人でそれに堪へられなくなつてゐるんなはかない女の肉を求めては撲つつかかり廻つて、やけ半分に、強烈なアルコールの刺激で、腐りつくやうに寂しい頭をたゞれさせた。さうして、しまひには、自分のこれまでしかけてゐた仕事も抱負もたうと擲つて了つて、たゞ食ふために、仕方なく、つまらないイクト、イズの教員になつて、本土の北の方のさびれたどす黒いところへ下つて行つた。

私はそんなにしてこちらでやけになつてゐた間に、よく悪性の病氣にかゝらないうで済んだ事だと思ふ。それを私は、かうした目下の痛ましい生活の中で――二度目の女に死なれて了つて、盲ひた子をつれて疲れさ／＼されてゐる中で、たゞ氣まぐれに似た、つまらない事から傷を受けた、未だに注射をしたりしてはかな、情ない目を見てゐるのである。

なくなつた。私はどうしてもこの汚れた、煤だらけな、困憊の巷の中で倒れ果てるやうに出来てゐるのであらう。あの寂しい小うるさい北方の町は、私をよりはげしい寂寥と、その低い空のやうなだだ暗い陰鬱とに刺させた後に、たうと私を拒絶したのであつた。

その町を出る五六箇月前である。私は腸空、扶斯のやうな、ひどい熱病にかゝつて死にかけて、それがすつかり回復し切るまで、厭な病院の一室に、陰氣な何十日かを鎖されてゐた。私が私のために選び、盲ひた子供のために母を持ち來した、私のこの間死に別れた妻は、私の宿の人から頼まれて、私の入院中附いてゐてくれた、私のゐた近處の貧しい家の女であつた。

私は女が私に附いてゐる間に、その性質をすつかり見る事が出来た。これまですべての女を疑つてゐた私も、遂にこのうら寂しい、女らしい女の氣だてが懐かしくなつた。私は自分が安んじて私の妻に選ぶべき女は——或は寧ろ、どうせ盲目の子供のために繼母となるべく、私のやうなものところへでも來る女は——この一人の女より外にはないやうな氣がして、いろ／＼歩へた木に、遂に退院後二月ばかりして、私は

この女と結婚したのであつた。私がさういふ女の手を取るといふ事は、私にとつては、寧ろ物悲しい満足だつたのである。女はこれから私の氣に入るやうな女になり得るといふより外には——その性質の外には、たゞの結婚としては何こそ私をいざなふに足るものはない。私がはじめての女にあゝいふ目を見せられる事がなかつたとしたら、——私がはじめてあたり前に女を貰ふのだつたとしたら、たとひ性質はどうでも他のいろ／＼の點から、このやうな女を要するなどといふ事はしなかつたであらう。私ももうそんな十分な事を言つてゐられるやうな幸福な人間ではなかつた。それで私はこの女の手を執つた心持の裏には、寧ろ物さびしい、自らを哀れがるやうな心が裏打されてゐたのであつた。

ところが私は、町のものたちからは、あゝいふ階級の女を引きずり込んで女房にしたのだといふやうに見られてしまつた。私が入院中にこの女と出来合つたのだといふ悪評が、狭い町のすつかりのものの間に私語された。私はそんな事は心さびしく人の批評に任せてゐたけれど、意外にも、私はそのために學校を止さなければならなくなつた。私はそれとはなく

私はいひ／＼と寂しくて堪らなくなつて、この女に、私の暗い心のために泣いてくれる涙を求め、私の一人の子供の事や、すべての事を話して聞かせた。女はまた、く灯影を下に置いたまゝ、寢臺の下に坐つて、寂しく目を伏せて聞いてくれた。

—そのお子さまは、どうして、そんなに目がお見えにならないやうにおなりなかつたのでございませう。

女は涙のたまつた臉を上げて、自分の事の悲しさのやうに、私の瘦せ果てた顔を見守つた。その夜の涙もろい目とは、——泣きほくろのある、さめ／＼しいその目は、女が亡くなつた後までも、私には最もいぢらしい、思出の一つになつて目に附いてゐる。

他人の中で育てられたのと、目の見えないのとで、何だか疑り根性の深いあの子供は、きげんの悪いときには、よく、いろんな無理な事を言つてはねち／＼拗ねたりした。私は世帯負けをした、娘中の、病み衰へた女の負擔と、私がこの子の不具のさまを見て、だだ暗く曇らされる陰鬱な心持とを救ふために、こんなものが、あのさきの女によつて残された事を恨んだ。いつそ早く死んでしまつてくれたら——こんな

轉任をすゝめられるやうなわけになつた。さういふいま／＼しいところに生きるの自分の方から厭である。私は言はれるまゝにすぐに止めてこちらへ出て來た。

私はそれでもこの女を得た事を悔いる理由を持たないばかりでなく、私ははじめて女といふものを得たやうに楽しい自分を見出した。たゞ女は、當分は半面により寂しい女となつた。何ゆゑに私たちがあの町を去らなければならなかつたかを知つてゐる女は、私のために永久の不寧を作るやうに考へて、時々、一人涙に鎖されてゐるやうであつた。そんな事も手傳つて、後には病氣を出して、ぶら／＼寝ついたりした。女はその時身持になつてゐた。私がどこにも定まつた口を見出し得ない間は、二人は小さい家に這入つて、ひどい貧しい目を見てゐた。

私が今のところへ出るやうになつてから、妻は私の盲目の子を引き取つて、自分たちの側で育ててやりたいと言ひ出した。女は自分が私のところへ引き取つてもらつてゐる償ひに、すべてに於いて私のための犠牲になる積りであるらしかつた。私は一つはこの女の氣やすめのため、一つは伯母に對しても早くさうしななければならぬので、やがて今の子供を引き取つた。

女はさうした病氣が、たうとう自分をどくしてしまふものとは考へなかつたであらう。私のもとよりたいた事にならうとは思はなかつた。

女はよく、やつれた膝に、四つになる盲目の子を乗せて、自分の生んだ子のやうに、いろ／＼、子供にわかる話をして聞かせたりしつゝ、瘦せて蒲團の上に力なく坐り直つてゐた。この女を自分の母だと信じてゐる子供は、女が一寸立つても、直ぐに探り／＼附いて行くのであつた。

私は、女にはまだ病院で私についてゐてくれた間に、已にこの子の事も、何故私がこの子を伯母に託してゐるやうな事になつたかといふ事も、すつかり話して了つたのであつた。私はその時、病氣はもう回復期に向つてゐたのだけれど、何だか私は、どうかして再び病勢があともどりをして、しまひには、どうしてもあの陰鬱な窓の下で死んで了ふやうな氣がしてゐなかつた。私は或夜、夜中に一人目がさめて、私がさういふ事になつたあとの、私の盲ひた子供、私の事などを考へて、一人しく／＼とわれを忘れて泣き入つた。女は傍にいて、蠟燭を持つて次の室から出て來て、私の寢臺のそばへ來た。

私はいひ／＼と寂しくて堪らなくなつて、この女に、私の暗い心のために泣いてくれる涙を求め、私の一人の子供の事や、すべての事を話して聞かせた。女はまた、く灯影を下に置いたまゝ、寢臺の下に坐つて、寂しく目を伏せて聞いてくれた。

—そのお子さまは、どうして、そんなに目がお見えにならないやうにおなりなかつたのでございませう。

女は涙のたまつた臉を上げて、自分の事の悲しさのやうに、私の瘦せ果てた顔を見守つた。その夜の涙もろい目とは、——泣きほくろのある、さめ／＼しいその目は、女が亡くなつた後までも、私には最もいぢらしい、思出の一つになつて目に附いてゐる。

他人の中で育てられたのと、目の見えないのとで、何だか疑り根性の深いあの子供は、きげんの悪いときには、よく、いろんな無理な事を言つてはねち／＼拗ねたりした。私は世帯負けをした、娘中の、病み衰へた女の負擔と、私がこの子の不具のさまを見て、だだ暗く曇らされる陰鬱な心持とを救ふために、こんなものが、あのさきの女によつて残された事を恨んだ。いつそ早く死んでしまつてくれたら——こんな

事もよく考へた。

私は時によると、女が、自分の生んだのでもないあんな不愉快な、ねち／＼した子を飽きもしず、母のやうに面倒を見てゐるのを目に見て、自分までが淋しく味氣なくなる事もあつた。さういふ、何の反抗も選擇もないやうな、ぐうたらな女の氣が知れないやうな心持もするのであつた。どんな目にあつても、それを一人で忍んでゐる、影のうすい悲愴な女のやうにも思へる。いづれにしても、そのやうな女をつれてゐる自分が、そんな女を選んだ自分が、人のさせた事のやうに物さびしくなる事もあつた。女の態度に、この子に對してどうしても母のやうな權威を持つて臨み得ないで、何だか、下婢が、使はれてゐる人の子供に對してゐるやうなところがあつた。私たちが二人のものゝ小陰い陰黒な影をにじませてゐるやうに不愉快で、私はそのために、よく、いつもおど／＼してゐる自分の女を叱つた。

女は私がどんな無理を言つて叱る時でも、いつも自身が足りないからだとしてゐるやうに、たゞさめ／＼と泣いてわびをいふ。私は女につけ／＼言つた後では、いつも、さうした女の哀れさに、自分の言つた事を悔いつゝ、小暗く

私はいひ／＼と寂しくて堪らなくなつて、この女に、私の暗い心のために泣いてくれる涙を求め、私の一人の子供の事や、すべての事を話して聞かせた。女はまた、く灯影を下に置いたまゝ、寢臺の下に坐つて、寂しく目を伏せて聞いてくれた。

—そのお子さまは、どうして、そんなに目がお見えにならないやうにおなりなかつたのでございませう。

女は涙のたまつた臉を上げて、自分の事の悲しさのやうに、私の瘦せ果てた顔を見守つた。その夜の涙もろい目とは、——泣きほくろのある、さめ／＼しいその目は、女が亡くなつた後までも、私には最もいぢらしい、思出の一つになつて目に附いてゐる。

他人の中で育てられたのと、目の見えないのとで、何だか疑り根性の深いあの子供は、きげんの悪いときには、よく、いろんな無理な事を言つてはねち／＼拗ねたりした。私は世帯負けをした、娘中の、病み衰へた女の負擔と、私がこの子の不具のさまを見て、だだ暗く曇らされる陰鬱な心持とを救ふために、こんなものが、あのさきの女によつて残された事を恨んだ。いつそ早く死んでしまつてくれたら——こんな

私はいひ／＼と寂しくて堪らなくなつて、この女に、私の暗い心のために泣いてくれる涙を求め、私の一人の子供の事や、すべての事を話して聞かせた。女はまた、く灯影を下に置いたまゝ、寢臺の下に坐つて、寂しく目を伏せて聞いてくれた。

—そのお子さまは、どうして、そんなに目がお見えにならないやうにおなりなかつたのでございませう。

女は涙のたまつた臉を上げて、自分の事の悲しさのやうに、私の瘦せ果てた顔を見守つた。その夜の涙もろい目とは、——泣きほくろのある、さめ／＼しいその目は、女が亡くなつた後までも、私には最もいぢらしい、思出の一つになつて目に附いてゐる。

他人の中で育てられたのと、目の見えないのとで、何だか疑り根性の深いあの子供は、きげんの悪いときには、よく、いろんな無理な事を言つてはねち／＼拗ねたりした。私は世帯負けをした、娘中の、病み衰へた女の負擔と、私がこの子の不具のさまを見て、だだ暗く曇らされる陰鬱な心持とを救ふために、こんなものが、あのさきの女によつて残された事を恨んだ。いつそ早く死んでしまつてくれたら——こんな

一間に坐つて、女のさびしい心持を考へて、自分までも涙ぐむ事があった。

女がはじめて血を吐いたのも、やつぱり、何か子供に關した事で、私からひどく叱られた日の夕方であつた。私は、女がその日に限つて、いつまでもぐづぐづ悲しんでゐるのが哀れでもあり、痛ざりでもあつて、一間に籠つたきり口も利かないで仕事をしてゐたが、その夕方近く、久しく降りみ降らずみに續いた、暗い五月の小雨が上つて、珍らしい日向の無花果の木に、雀が、久しぶりに見出した黄色い日影を嬉しんで飛んでゐるのを目をやつてゐると、女がおぼつたやうに這入つて来て、子供が外へ出たといふゆゑ、一寸表の通りまでやらせてくれといふ。女は自分も久しぶりで、そこらあたりまでぶらぶら出て見たい氣になつたらしかつた。いまだらう、少し氣分でも紛らして来るが、いと、やさしく言つてやると、女はさつきから、一人で涙ぐんでばかりゐたあとのやうな目に、子供のやうな嬉しさを湛へて、

「ほんとにからりとしたお天氣になりましたわね。と甘えるやうに言ひつゝ、少らくそこに膝をついたまゝ、外の日向を見入つてゐたが、やがていそ／＼と向うへ行つた。寝たれた女が

かう言つて、女は昔い顔をしてみゐる。無心な子供は手さぐりで私に捉まつて金魚を見よといふ。女は家の上り口まで来ると、胸苦しさうに椅子に捉まつて上つたが、六畳へ這入ると共に、倒れるやうに、そのまゝ寢床の上に伏し轉んだ。

「おい、何なら醫者を呼んで来ようか。苦しいのかい。」と言ひつゝ、肩に手をかけてゐてやると、女は何を言はうとしかけて、がぶつと、蒲團の上に血を吐き出した。そして自身でも愕いて、おろ／＼と消え入るやうに泣き伏した。

女はかうしてたうと、十日ばかり後に、腹に四月の子を持つたまゝ、多量の血を吐いて、冷たく目を閉つたのである。誰ればかうして長いけれど、私の氣分の悪いがじ／＼した頭には、さうした、自分の亡き妻についてのすべての惨ましい記憶が、錆びついたりやうに寂しく輝はつてゐる。女がじ／＼となつてから、もう五月ばかりにもなるけれど、私は仕方なく、あのちぢむさい下女にすべてを見させて、ぐづ／＼なりにその日／＼をだだ暗く送つてゐるのである。考へると、私はこれからどう定めたらいゝものだらう。下女は一人でいゝるんな面倒を見るのが何だか堪へられないらしい

の上で羽織を着て、みすばらしく瘦せ衰へてゐるのであつた。

私はそんなに起きて外へ出てまいゝのかと思ひつゝ仕事をしてみた。乏しい月給ではとても立たないので、私は、夜や休みの日を指つて、下仕事の翻譯などをしてみた。

と、女がいつまでも出て行くらしい容子がなないので、私はそれとなく見に立つた。子供は縁側にゐんで、下で、その子の下駄の鼻緒を立ててやつてゐる下女に、見えない目に訊きたい色んな事を、うるさく訊き／＼してゐた。雀がどんなにして啼いてゐるのか、かうして啼いてゐるのかといひつゝ、形をして訊いてゐる。女は三疊に這入つて何をかしてゐるらしかつた。行つて見ると、その暗いところに鏡臺を据えて、解きかけた髪を被つたまゝ、疊に俯伏して、一人さめ／＼と泣き入つてゐる。どうしたのかと訊けば、髪がすう／＼といくらでも抜けるのだといふ。こんなに抜けてしまふのだと言つて、油じみた顔についてゐるのを見入りつゝ、子供のやうに泣くのであつた。

「そんな事を言つたつて仕方がないぢやないか。今に體が直つたら髪がらゐるまゝ生えるよ。ばかだね、お前は。」と、私は物暗く責めつぱい

く、もうどうにかして出て行きたさうな口吻を漏らしたりする。私とても、あんな小汚いものいつまでも家を見させてゐるのも不愉快だけれど、どうしようと言つても仕方がない。もう女房などは持ちたくもない。来さうなあてもない。また自分とちがつた個性を引き入れて、いろんな氣面倒を見たりするのにも、當分はともうさうさくて堪へられさうにもない。じ／＼となつた女は、水も日向もなく暗いところに萎れ枯れた、病い寂しい花であつたやうに哀れだけれど、だだ暗く生き残つてゐる私と子供とは、死んですべての面倒から免かれたものよりも何いたましい。どうかしてあの子が死んででもくれなれないものだらうか。さうすれば私は足手まといがなくなつて、大分たすかる譯である。下女もすぐに解放して、あの小暗い家をたゞ一人でどこかへ逃げ込んで了ふ。さうしてゐる内には、この調子でいら／＼しい頭がいよ／＼がじ／＼いら立つて、しまひには氣ちがひになつて、あるところから叩き出されて、調査の手によつて養育院へでも放り込まれるかも知れない。もう、さうなつた私の惨ましい形が目に見えるやうな氣がする。

心持を隠して、かう言つてたしなめると、女はやつぱり小寂しい自分に考へ入るやうにしつゝ、やう／＼髪を結ひかけたが、もう出ようと

いふ氣も押けたやうな事をいふ。

それでもやつと着物を着かへて、やがて私に挨拶して、子供の手を引いて出て行つた。私は再びいら／＼して仕事を急いだが、その内に大分日がどんよりと暮れかけたのに、女はいつまでも歸つて来ない。あんなに哀へた體をして、考へもなく、いつまでも外にぶら／＼してゐるのだらうと、私は女のわきまへのないのを怒りながら、下女を通りまで見にやつたが、ゐないといふ。私は、自分で出て、ちがつた裏手の方へ行つて見た。

と、家の後の、水車小屋のあつた跡を埋めた空地を、女は、子供の手を引いてとぼ／＼と力なく歸つて来る。子供は目の見えない手に、硝子の入れものに入れた二匹の金魚を買つて貰つたのを持って、片手で女の袂につかまつて、急ぎたさうにして歩いてゐる。

「ついその通りまで行つたのですけれど、歸りにふいと氣分が悪くなつて歩けなくなつたもので、少らくあそここのところまで、石の上

に休んでゐたりしましたから。しかしそれが、私があの子供を作れたまゝでそんなものになつて了ふとか、氣分が悪くなつて倒れてしまつて、それなり冷たい死體にでもなるとしたら、あの子はあとに一人でもどうなるのだらう。盲目のあの小さいものが一人でもどうなるだらう。下女が、あの子を一人置いて出て了ふ事も出来ないで、途方にくれて警察へ出かけて行くさまがまさ／＼と目に浮べ得られる。さうなつたら、あの子も孤兒院へ入れられて、暗い冷たい一生を、青ざめ果てて生きるのか。

私は何を考へるのだらう。このやうな取りとめもないだだ黒い事を悪夢のやうに考へ入りつゝ、いつしか電車の通りまで来た。何だか腹に胃が悪い。胃袋に、どろ／＼に腐つた、濃い辛汁がたまつてでもゐるやうに、變にいら／＼と氣分が悪い。注射の跡の筋肉が、中からねちねちやう／＼に痛む。

私は何だかこのまゝ家へ歸りたくもない。あの小暗い、がさ／＼した、冷たいところへ歸るのは刑罰のやうに厭である。どこかへ行つて、何か一皿の洋食でも食つて、刺戟のきつたいアルコールでも取りたい。

けれども、物を食ふには胃が悪い。アルコールをやれば、さめたあとの、いつまでも黒く

頭の痛いのが目に見えてゐる。どうか他に
事はないものだらうか。どこかへ行くところは
ないものか。

私は停車場に立つて考へつゝ、やつて来た電
車に乗らうとしないで、しばらく自分の悪い
空を見てゐた。すると、私に悪性の病氣を注
いだ女の事がふと考へ出された。私はどうし
て、ついあのやうなところへ出かけたものだら
う。私は、下女に隠して、一人悔恨の中に熱
ぼつた毒の交つてゐるやうな息を吐きつゝ、
小暗い一室に寝てゐるところへ、子供が寂しが
つてしくしく泣きながら、手さぐりに這入つて
来て、亡くなつた母を求めてゐるんな事をいふ
のを追ひ拂うた、あの傷あとが取れるまでの十
日ばかりの間の心持が、眼みつくやうに頭を
襲うて来た。

私はあきらめて電車に乗つた。

二

私は丁目の三丁目まで、目まひがするやうなふ
らふらする心持で電車を下りた。そこから暫
くごだ／＼した裏筋を歩いて歸るのである。も
う、一つ買はなければならぬのを無理に履い
てゐる、踵の減つたばら靴は、先の方に釘が眼

いてゐて小指の先が痛い。或は血でも出てゐる
しないだらうか。何だか傷が擦られるやうに痛
い。靴も靴だけだと、このごろはすべてに一寸
も構はなくなつた自分である。そんな事にかま
つてゐる餘裕もない程、それは／＼と、埃ばかり
吸うてゐるやうな、がじ／＼しい心持にのみ生
きてゐる。

洋服のズボンには、いつか汁の汚點がついた
のが、そのまゝにこびり附いてゐる。シャツの
カフスもだだ黒く垢だらけになつてゐる。私は
何だか體中が痒いやうな、人の見る目にも氣は
づかしいやうな、不愉快な心持を湛へて、ぐつ
たりして、とぼり／＼歩いた。ズボン釣がゆる
んでゐて、ズボンが、ズボン下と一緒にずり下
るのも細ざはりである。

やがて、私の家のある小さい横町へ這入る。
その入口には、片方に汚い青物の市場があ
つて、横手になつてゐる往來へ、市の立つた跡
にちらばつた藪屋や、青物の屑が噴み出してゐ
る。いつからともなく液つたことのないその
泥溝は、そんな汚いものが詰まつて汚もれてゐ
る。それ／＼通りの家の流し水が這入つて来て、
いつもじく／＼往來へあふれてゐる。こゝを通
ると、鼻を突くやうな臭ひがするので氣持

が悪い。毎日往き通ふ分署の巡査や、町の衛生
組合がよく黙つてゐられるものだと思ふ。

その向ひの、塵芥だらけの空地には、水道の鐵
管が、水のたまつた中に泥だらけになつて積ま
れてゐる。その側には小さい假小屋があつて、だ
れか寝起きをするらしく、がた／＼の戸欄の上
に食器などが東ね上げてゐるのが見える。その
外、兩側とも、小さい汚い家はかりがぐちや
ぐちやと並んでゐる。私はこゝを通るたびに、
自分がこんなところに住んでゐるのが厭でたま
らない。さもしさうな目をした、汚く古ぼけた、
下種つばい女や、垢で眞つ黒になつた、ちぢむ
さい着物を着た、醜い女の子などがうぢや／＼
してゐる、じめ／＼しい長屋もある。

今日はその入口の共用栓のところまで、一人の
見すばらしい、殆どを食みたい女が、どこ
かで泥溝の中へでもはまつて来たらしい、鼻た
れの小さい子を裸にして、バケツの水をびしゃ
びしゃと背中からかけて、口やかましくつけつ
けいひながら、臀から下の泥まぶれになつてゐ
るのを擦つてゐる。その側では、夜店へ出るら
しいよ／＼の婆さんが、唐製素を閉鎖にして
賣る屋臺の拵へをとして、カンテラへ油を注し
てゐる。

私はそんな家れつばい、小汚いものを見るの
が厭でたまらない。そこを行つて私の家の古け
た垣根のところへ来ると、今日もまだ塵芥取り
が廻つて来ないと見えて、三つ四つ置いたごみ
面に這入り餘つた汚いものが、そのまゝそこへ
ほかしてある。私の家の並びや向ひあたりの家
が、自分のところにも裏に置きどころもあるの
に、わざ／＼こゝまで面を持つて来て、人の家の
垣根の外へ並べて置くのである。いづれも相當
な借家にある人間たちだのに、どういふ氣でよ
くさうした自分さへよければいいといふやうな
事が出来るのだらう。私の家の横手は一段低い
屋になつてゐて、小さい古けた家の背中が並ん
でゐる。近所の人は、ごみ面へ這入り切れない
ごみを持つて来て、その崖の下へも落して行
くので、そこを覗くと、いろんな汚いものが腐
つてゐる。そこにうぢや／＼わく蠅が、みんな
私の家の臺所へ飛んで来るのである。

私はいつからかそれが厭でたまらないだけ
れど、そんな事をする家へ一々言つて廻るのも
厭である。私の家の前の雨溝へ這入つて崖下へ
流れる近所の流し水が、よく崖際の土管がつま
つて、溝にあふれるばかりになつても、そこへ
水を流すでもない私の家から、下女がいつも竹

で管を液つて水をはかすより外には、どこにも
知らない顔をしてすましてゐる。

見ると、その塵屑のところへ子供が四五人
立つて、何をか汚いものを見るやうに、崖の下
を見てわい／＼言つてゐる。私は門口へ這入ら
うとして、何氣なくその子供の見てゐる下を覗
くと、そこには、犬の死屍が持つて来て投げす
てゐるのだつた。もういつからか轉がつてゐ
るものと見えて、雨にた／＼かかれた毛が片寄つて、
ぼ／＼の腹の皮が覗いてゐる。子供等は私が
覗くので調子に乗つて、

「あそここの頭のところは蛆がわいてゐるよ。」
「あゝ、腸か知ら出たら」と、口々に騒いでゐ
る。「一寸見ただけで胸が悪くなつた。私は、だ
れが持つて来て捨てたのだらうかと、見さかひ
もない下等な人間の仕打を憎みながら門口へ來
ると、私の子供が、外で面白さうなよその子供
たちの聲がするので、探り／＼に出て來たらし
く、仲間へ這入りたさうに、見えない目をして、
しよんぼりと、戸につかまつて立つてゐるので
あつた。

「もうこちらへ上れよ。何でもないのだ。お前
一人でそこから下りたのかい？ そんな大きな
下駄を履いたりして。」

私は氣分の悪いのを堪へてかう言ひながら、
入口を閉めて子供を上へ上らせた。

「あら、おちゃん、たけが一寸そこへ行つた間に
一人でどこへいらつしやつたんです。こちらへ
いらつしやいませよ。」と、下女は暗いところか
ら出て来て、私に挨拶をすると、自分の不注意
を咎められでもするやうに、言ひわけらしくか
う言つて、子供の背を抱くやうにして作れて
這入る。汚い着物に、だらけた帯を結んで、油の
腐つたやうな髪をうるささうに／＼にして
平氣である。私は、四疊半へ床を取つてくれと
いふだけの口をきくのも氣分が悪いので、パン
の包みを六疊に投げ出して、洋服を脱ぐと、一人
で戸欄から蒸籠と寝間着とを引きずり出して敷
いた。

「どうかなさりましたのでございませうか。」と、
下女は入口に来て膝を突いて訊く。
「その隙子をしめて、それから、あそここの抽斗
の胃活と水を持つて来てくれ。――胃活、藥だ
よ。抽斗を開けて見ると、小さい蠅に這入つた
のがあるから。」と、濃い顔をしていふと、やがて
下女はそれを持つて來た。子供は下女について
のそ／＼こちらへやつて来て、指をくはへて、
しよんぼりと突つ立つてゐる。

「坊ちゃんも今日は一日前が痛いし仰しやつて、御機嫌が悪かつたのでございますよ。たつた先刻までくすくす泣いてばかりいらつしやいましたのでございます。——坊ちゃん、ちやんとお坐りなさいまし。指なぞくはへていらつしやると病蟲のやうちやありませんか。お父さまの寝てらつしやる前ですから、ちやんとお坐りなさらなげや。」

下女は小さく、子供にかう言つて、こちらへ来て障子をしめる。そこを閉めると、かういふ日の室内は、一層どんよりと薄らくなる。

「さうしてたらと齒をどうしたのかい。」と、私は仕方なく訊いてやらなければならなかつた。

「どうにもしやうがありませんから、どうかしてお察せ申しませうと思ひまして、おんぶをして、立つてゐたりいたしましたけど、ひどく痛いので、お察みになれないのでございます。蟲齧でございます。」

子供はいつもよりか餘計に青ざめた、力のない顔をして黙つてゐる。

「もう痛くはないかい？ こゝへ来てお見せよ。齒がどんなになつてゐるか見せて御覽。」と、五月蠅いのを懐へて、下女の手前だけに對して、父

らしくかういふと、子供は急に思ひ出したやうにしく／＼としゃくり泣きに泣き出した。

「泣いちゃいけない。なぜ泣くのかい。——もうあちらへ作れてつてくれ。」

私はかう言つて、いら／＼寂しく目をつぶつた。頭ががじ／＼痛い。顔の内側が充血したやうにちき／＼痒い。私はかうして寝たきりで、このまゝ死んで了ふのではないかと思ふ程気分が悪い。

と、下女が、

「ね、ですから坊ちゃんも一寸寝んねをなさいましよ。——ねんねはお眠ですか。それでは、どうしませう。おや／＼お馬が来ましたよ。大きな大きなお馬です。泣かないでゐて御覽なさい。まあ大きなお馬が、ひいん／＼／＼と、ね。」と、目のない子供にだから出たらめな事を言ひつゝ、六疊であやしてゐるのが小五月蠅く耳につく。私は死んで穴にでも埋まるやうに、蒲團を頭から被つて、下女や子供の喋るのを聞かないやうに紛らしつゝ、刺げこくれたやうな眼りに落ちた。

朝になつて考へれば、あんな小汚い、臭い眼な女にまで走りかけようとした、あさましい自分の肉感と自分で胸を刺さつた。どうしてかういふ情ない、陰黒な自分を見る事かと考へて一人ひし／＼と泣しくなつた。さうしてたらと堪らなくなつて、その晩、ずつと以前に、はじめの女の事でやけになつてゐた時代に行つた事のある、濱町の或ところへ行つて、狭い一間に鎮された。

けれども、そんなところに何の味ひがあらう。私は類敗したすれつからした女の、下卑た笑ひ顔や、皮相的な下らない言ひぐさなぞが鼻について、もう、夜中でもかまはず飛びださうかと思ひつゝ、頭が不愉快に疲れて寝られぬので反轉して、やつと刑罰をのがれるやうに、まだ仄ぐらい内に歸つて来た。さうして、その一度で思々しい病毒に感染したのである。

私はさういふ、自分の下劣なところを考へると、何だか人のことやうに不愉快でたまらぬ。もし私があの下女を犯して、それがためにあの汚い女と離れられなくなつて、女を出さうとしても泣いたりわめいたりして出ないと言ひ出して、その内にあの女に子まで産ませても

さますと、もう室内はとつぷりと暗くなつてゐる。私はげつそりして、からだ中に冷たい寒汗をじつとり振いてゐる。自分がどんなに衰弱してゐるかといふ事がひし／＼と寂しく自分に分る。私は蒲團を刎ねて、押け衰へた心持をして、自分の形と、室内の夕方との間に區別がないやうに仄暗く坐つて、少らくは動かうともしなかつた。

私は、何だかいつからともなくかうしてだだ暗い夕方の中に一人見捨てられてゐるやうに寂しかつた。下女や子供はどうしてゐるのか、あたりにはだれもゐないやうに、たいとつぷりと日が暮れてゐる。

私は寝てゐた間に絶えず後悔と汚辱とに攻められてゐた續きのやうに不愉快でたまらぬ。頭も變に茫として底重たい。私はこの間下女が朝こゝを片づけるのに、私の寢床の下に蒲團があるのを見て、どこかお怪我をなすつていらつしやいますのですかと訝かしやうに訊いた時の、あの、すべてを見抜かれたやうな不愉快な心持が、つい今あつた事のやうに私の氣分を塗つてゐる。私は、自分の食器を別に置いて置くやうに命じた。この間内は沃度ホルムの臭ひがぶん／＼してゐた。注射のあとが痛いので

した。——何を私は考へるのだらう。

私は氣味の悪いまでに汚い不愉快な心持に襲はれて寢床をはなれた。

立つて障子を開けて見ても、外はもうすつかり暗くなつてゐる。黒ずんだしめ／＼しい土の上に、低い無花果の木がたつた一本植つたばかりの古ぼけた庭は、見る／＼夜になつて行くやうに、暗いたそがれの影に充ちてゐる。私は取りすがたよりもなく、いつまでもかうした暗い生を見るべく一人鎖されてゐる人間のやうにひし／＼と泣しく、子供のやうに泣き出したやうな氣がする。

私はその／＼暗い臺所へ出て、水口へ下りて顔を洗つた。そこらには、物の始末の自障落な下女が、いろんなものをこた／＼取り散らしたりしてゐて、歩くと何だかねば／＼したものが氣味悪く足の裏にこびりつくのであつた。私は顔をしかめて足拭を探した。

「おい。たけはゐないのか。」と言ふと、

「はい。」と六疊の方で、時さうな倦怠い返事をしたけれど、直きにはこちらへ出て来さうもない。私はそちらへ行つて、

「お前、暗いのにしよんぼりして何をしてくのかい。その電氣のねちを一寸捻つたらいいぢや

變な足附をして歩いてゐた。當分はふろへも得行かなかつた。いろんな事で下女は何とか疑つてゐやまいかと思ふ。それを知つてゐて黙つてゐるやうな氣もする。私は下女の前私にのすべてを失禮して了つたやうに氣が引けてならぬ。女房を正しくして、どうする事も出来ずに、すべてを下女にまかせて、あゝいふ子供の面倒まで見させてゐる。さうして、時には二日も三日も小遣が一つもなく不自由な目をさせたりしてゐる。さういふところへ、私は無名病氣にかゝつて醫者へ通ふ。——何だか人にも言はれないやうに氣はづかしい。

それが下女に對してばかりならい、けれど、亡くなつた妻の前にも、生きてゐて見られでもするやうに氣が替める。何といふあさましい私だらう。神經衰弱で體にも心にも一向力もないのに、どうしたのか、この間うち病氣的のやうにまで肉感の刺戟がはげしくて、五六日つづけてそのために夜寝られないやうな事があつた。私はいく度となく熱ぼつた苦しい寢返りを打ちながら、あちらの室で子供と並んで寝てゐる下女の寢息が聞えてもするやうに耳を傾けながら、もつと出て行つて、どうかしようと思つたくらゐ、もう何の選擇もなくいらだつて

朝になつて考へれば、あんな小汚い、臭い眼な女にまで走りかけようとした、あさましい自分の肉感と自分で胸を刺さつた。どうしてかういふ情ない、陰黒な自分を見る事かと考へて一人ひし／＼と泣しくなつた。さうしてたらと堪らなくなつて、その晩、ずつと以前に、はじめの女の事でやけになつてゐた時代に行つた事のある、濱町の或ところへ行つて、狭い一間に鎮された。

けれども、そんなところに何の味ひがあらう。私は類敗したすれつからした女の、下卑た笑ひ顔や、皮相的な下らない言ひぐさなぞが鼻について、もう、夜中でもかまはず飛びださうかと思ひつゝ、頭が不愉快に疲れて寝られぬので反轉して、やつと刑罰をのがれるやうに、まだ仄ぐらい内に歸つて来た。さうして、その一度で思々しい病毒に感染したのである。

私はさういふ、自分の下劣なところを考へると、何だか人のことやうに不愉快でたまらぬ。もし私があの下女を犯して、それがためにあの汚い女と離れられなくなつて、女を出さうとしても泣いたりわめいたりして出ないと言ひ出して、その内にあの女に子まで産ませても

さますと、もう室内はとつぷりと暗くなつてゐる。私はげつそりして、からだ中に冷たい寒汗をじつとり振いてゐる。自分がどんなに衰弱してゐるかといふ事がひし／＼と寂しく自分に分る。私は蒲團を刎ねて、押け衰へた心持をして、自分の形と、室内の夕方との間に區別がないやうに仄暗く坐つて、少らくは動かうともしなかつた。

私は、何だかいつからともなくかうしてだだ暗い夕方の中に一人見捨てられてゐるやうに寂しかつた。下女や子供はどうしてゐるのか、あたりにはだれもゐないやうに、たいとつぷりと日が暮れてゐる。

私は寝てゐた間に絶えず後悔と汚辱とに攻められてゐた續きのやうに不愉快でたまらぬ。頭も變に茫として底重たい。私はこの間下女が朝こゝを片づけるのに、私の寢床の下に蒲團があるのを見て、どこかお怪我をなすつていらつしやいますのですかと訝かしやうに訊いた時の、あの、すべてを見抜かれたやうな不愉快な心持が、つい今あつた事のやうに私の氣分を塗つてゐる。私は、自分の食器を別に置いて置くやうに命じた。この間内は沃度ホルムの臭ひがぶん／＼してゐた。注射のあとが痛いので

ないか。日が暮れるのに、平氣な女だね。といふと、

「さうでございましたね。」と氣のない返事をしながら、やつぱり長火鉢の前に、暗がりに漬つて坐つたまゝ、うるさく下つたぐらゝの頭をして、そこにかけた鍋の下を吹いてゐる。

「子供はもう寝たのかい。」といへば、
「はい。でも御飯が澤山餘つてゐるのですから、あなたが召し上るくらゐだけ温めてゐるんです。」と、何か自身の事をでも考へてゐたらし、はきちがつた返事をする。

私は電氣をつけた。子供は三疊に敷蒲團だけをかけられてもう寝てゐる。いつを晝と夜との別もなく、暗い目に一人さびしい子供は、もう日の入る頃から早く寝入るのであつた。

「ちき御飯をお上りなさいませうか。」と下女は、だらけた自落さうな坐り方をして膝頭を出してゐたのを隠し包みつき、顔を上げもしないで、向う向きになつたまゝで言ふのである。

「何でそんなに不機嫌さうにしてるのかい。」と私は氣に任せぬやうに訊くと、
「別に何でもないのですが、つい物を考へてゐたものでございますから。」と、つまらなささうに立つて行つて、戸欄から冷たい寒の

私もしさうにでもなるとしたら、いろ／＼死後に見られたくない手紙や物の控へなどが、押入の行李にぐちや／＼に入れてあるのが氣がかつたやうな心持になる。

やがて下女は、それでは一寸ふろへやらせて戴きますと言つて出て行つた。門の鈴が鳴つて跡はまたしんとする。

その内に下女はついかへつて来た。顔をてかてか光らせて、
「只今歸りました。」と挨拶をする。その間私はいつまでも一人かうして坐つて、何を考へてゐたものだらう。

自分に返ると、考へつめて頭が茫となつて底痒い。私も氣分を直しにふろへ出て行く。こちらの裏の方の狭い往來は、電燈の線を埋めるのに掘り込んでゐて歩きざつと下女は言つた。

出て見るとその掘り返したところに、二三間置きに、煤の立つてゐたりする、曇つた硝子燈が、黒い夜の中に仄暗く並んでゐた。

と、家の横手の方の、一段低い家の固まつてゐる中で、
「玉やあ、――」と、氣がちがつて

でもゐるのぢやないかと思はれる程、陰鬱な、青ざめた女のやうな聲が、冷たい闇の中で、問を

運入つた皿を出して茶ぶ臺の上に置く。
私は先にふるに行つて来てそれから飯を食へば胃の工合もいゝのだがと思つても、下女に反抗する事が出来ないものやうに、仕方なく、寝起きのまゝの氣分をして、そのまゝ茶ぶ臺に坐つて、加減の拙い茶を調へて不愉快に飯を食ふのであつた。

「おい、まだ小遣はあるかい？」と私は客を置いた時はじめてかう言つて、不安な口を利いた。
「えゝまだ。昨日戴いたばかりですもの。いくらも遣ひはいたしません。昨日あれを買つて、それから」と、一々の用途を言はうとしかけるのを、

「そんな詳しい事はどうでもいゝ。――お前、飯をすましたらふろへでも行つておいでよ。ぐつたりしたやうな顔をしてゐるね。ふろへでも這入つて早く寝るが、子供の世話だけでも大抵ぢやないからくたぶれるだらう？」

私はこんな事も言つて、この女の機嫌を取らなければならなかつた。
「おれも早く一人どうかしなければならぬのだが、こいつばかりはさう大猫を貰ふやうには行かないから。」と、もう少しお前もこの儘で辛抱してくれなければ困る、どうせいつまでもこ

置いてはかう言つて、蒲かなぞを呼び探してゐる。私がその坂を下りて、下の町筋へ出るまで、そのあたりをうろ／＼とゐるやうに、いつまでも呼び續けてゐる。何だか聞いている内にぞつとすするやうな氣がする。聯想の悪い、何事かの凶悪を先づかすやうな厭な女の呼び聲である。

私は湯へ這入りはしたけれど、もう汚れてゐて臭かつたので、何だか不愉快になつて、遠くへ来ない方が氣が利いてゐると思ひつゝ、ろくにゐるもしないで上つて来た。職工かなぞのやうな小汚い男などがせぎ／＼になつて流してゐるのが、だれかさき程表の往來で電車に轢かれたとかいふやうな事を話してゐた。何だかえたいの知れない女だつたとか言つて、見て来たらしい一人が辯じてゐた。女ぢやそんなに潰かして殺して了ふのは惜しいもんだ、血が出てたかいたなどと、しまひには汚らしい事まで言ひ出してげら／＼笑つたりした。

そんな事を聞いた私は、何だか自分が、その死體をでも見たやうに、電車の石の上に黒血が固まつて落ちたりしてゐるところを氣味悪く目に浮かべながら、さつきの暗いところを通つてかへつた。轢かれて死んだ女といふのは、さき

んなにしてゐる譯でもないから、といふやうにかう言ふと、下女は、
「ほんとにあの奥さまが御丈夫でゐて下さりさへすれば、皆さんがいふ事はありなさらぬのに。」と言ひさして、しよんぼりしたやうに火鉢の灰を掻きならしつゝ、その壁に、ほろろ冷たい夜の、暗い影法師を映してゐる。

私は今日の新聞を探して、それを持つて四疊半へ行く。下女はさつき私が持つて歸つたパンを焼いて食べるのだと言つて、皿に醬油を入れて、板の間から金網を持つて行つた。

私は一人で、物足りないがさ／＼した暗い心持に、手あぶりの火鉢の前に坐つて新聞を讀まうとしたが、その儘ちつと機嫌をして、いろんな事で不寧な自分自身の事を考へかけた。こんなに振らない暗い思ひばかりして、厭な仕事につかれて来て、がじ／＼とした、いろ／＼しい日にのみ生きてゐるのがばか／＼しいやうな氣持がする。

私は人間がいろんな場合に、いろんな方法で自殺する心理状態などを考へて見たりした。何だか私がピストルかなぞで自分の額を打ち抜いて、血まぶれになつてこの四疊半に倒れるといふ事も、あり得べからざる事とも思はれない。

ほどの、玉や／＼ぢやないかといふやうな事を考へる。女といつても、たゞの女ぢやなさうである。何だか水膨れのしたやうな、刺げこくられた、汚い女が日に見えて、晝間犬の死骸を見た時のやうに胸が悪くなつた。

かへつて見ると、子供はもう三疊からこちらの方へ移されて、本當に寢床をして寝かされてゐた。覗いて見ると、下女はその蒲團の裾に、疊の上で鉛筆で手紙を書きかけたなりに、俯つ伏して居眠りをしてゐる。汚らしい軒をかいてぐら／＼言つて寝てゐる。

私は今夜はもう寝て了はうと思つて、さつき片付けさせた蒲團を再び四疊へ運んでゐると、下女はふいと目をさまして、びく／＼したやうな顔をする。
「どうしたんでございませう。さつきから眠くつて眠くつて、といひながら立ち上つた。そこには鉛筆を削るのに持つて来たらしい庖丁が疊の上に轉がつてゐる。

「おい、そこいらを少し片づけなさいか。汚いぢやないか。――あんなものもどこかへおやりよ。汚いね。」と私はつぶやいた。
「あれは解いて洗はうと思ひまして。」と、取りちらしてゐたものをくる／＼丸めて表の間へ出

「下女自身の垢じみた着物である。私はこちらで蒲團に這入って、目をつぶりかけたけれど、今日は夕方まで晝寝をしたりしたので容易に寝つかれさうにもない。下女はあちらでございそ言はせてゐたが、やがて、ここそと寝床を延べるやうな気がした。私は頭ばかりいら／＼と痛くて寝つかれない。體を延ばして電氣を點けて、火鉢を引きよせて煙草を吸つた。もうすつかり粉ばかりになつて了つて、辛くて身にならない。燃元がぞくぞく寒くて掻きさまに寝が出来る。と、下女がのそ／＼寝床から出て来たらし、寢間着姿で這入つて来て、

「これを下に召しておやすみにならないぢやお風邪を召しますから。」と、寢間着の上に着る羽着を出して持つて来た。

「私がお煙草を今日買つとききましたけど、こんなものでは如何でございませうか。」と小寒さうにして、哀れつぽい小さい袋の刺みを持つて来る。あれでも、いろんな事に氣をくばつてゐるのがいぢらしいやうな氣もしたが、こんな小汚い下女が、私の蒲團のはしをのさ／＼踏んで歩くのが不愉快で堪らない。私は汚いものが行つて了ふのを待つやうに、黙つて顔を伏せてゐた。

私はいそがしからうと、いつまでも寝つかれないのに困つた。暗い中に、腐れるやうな、變な胃の調子と、毛蟲が刺すやうないら／＼痛い頭とに氣がき／＼する。いろ／＼に體の向けやうを變へて見たりして蕩擻けれど、焦れば焦る程駄目である。かうしてまた明日、一層厭な頭を見るのかと思ふと、氣が氣でない。それに、かういふ寝られない時にはろくな事は考へない。血を吐いて死んだ妻の哀れつぽい短い生涯、これまで、困憊と不安といらだたしさとこの外には、何にもなかつたやうな、私の生の黒さ寂しさ、そのやうな滅入るやうな悔ましい回想や、子供が百日のまゝに大きくなるのをどうしたらいいかと言つたやうな、しめ／＼しい行先の心配や、氣ちがひになつて倒れる私や、赤身の出た馬や、刺げた犬の死體や、書間見たすべての不愉快な氣分やなどが、汚く、臭く、重たく、息苦しく胸を刺す、がじ／＼と赤身を擦るやうに痛い頭に纏はつて物狂ほしい。

私はしまひには蒲團から軋ね出て電氣をつけて、兩戸を開けて、毒を吹くやうに、外の眞つ黒い闇の中へ顔を出して息をした。何だか死んで穴の中に生き返りでもしたやうな寂しさが、ひし／＼と闇の中から湧いて、私の心と肉體

だれかゝるつて、怖がつていらつしやるものですから、私は氣のせみでさう仰しやるんだらうと思つてゐましたけど、それでも何だか怖くて、二人で小さくなつてゐたんでございませうが、やつぱりさうだつたんでございませうね。

「何だ、坊も起きてゐるのかい。」

「え、私はよ／＼と寝て何にも知らなかつたんでございませうけど、坊ちゃんのがこ／＼寢床を出ていらつして、怖い／＼と言つて私の中へお這入りなさるんでございませう。私はびつくりして目を開けたんでございませう。坊ちゃんはお耳が敏いのでございませうね。まあ、今時分穴を掘つてどうするんでございませう。」と不安さうに佇んでゐる。

「茂。」と私は子供の名を呼びつゝ六疊へ行つて見ると、子供は下女の寢床の中で向うを向いて返事をしない。

「おい、もう怖くはないから安心してお寝なさい。お父さんもちゃんとゐるんだから。」と言ひつゝ、側へ行つて顔を覗くと、子供はもうすや／＼と寢入つてゐるのであつた。何だかいつもよりかざつと顔の色が青いやうな氣がする。然るでもあるのぢやあるまいかと思つて顔に手を當てて見るとさうでもない。蒼ざめた小さい寢息をして

とに浸み入るやうな氣がする。こんな時に人はビストルで首を割つて倒れるのぢやないかと思ふ。

私はぞく／＼と自分が怖ろしいやうな心持になつた。自分が毎日のやうに、こんなにして眠はしい夜表をのみ見てゐる内には、何を仕出すか分らないやうな氣がして物怖ろしい。私はこのやうな私をたゞ一人不眠に殘して、冷やかに黒くすべての眠れるものを音もなく包んでゐる闇の中を、忌々しく見廻した。

と、前の、裏手の竹垣の隙間から、ちらりと赤い火の影が見えて、つと消えてしまつた。私のたかぶつた神經に見えた幻影であらうか。何だか、詛ひのやうな、小黒い色を帯びた火影であつた。何だか低く私語く人聲がする。私は何かの凶悪が私の家に加へられるのぢやないかとぞつととして、冷たい痺れのやうなものが私の脇から背中を傳はつた。二三人の人間がカンテラを點けて何かやつてゐるのである。何をするのだらう?

私は氣味が悪いけれど、不安なので、表口へ行つて下駄を持つて来て、土の上に下りた。

垣の根へ行つて覗いて見ると、後の空地に黒い筒袖を着た二人の人影が、赤い裸火を圍

んでとゞまつてゐる。泥棒ぢやあるまいかと打たれるやうにさう思ふ。よく見ると、人が穴を掘つてゐる。中へ一人這入つて肩から上を出して、黒ずんだ土を上げてゐる。掘つてゐた一人が、

「替らうよ。」と私語くやうに言つて、穴の中へ這入ると、先の男が上に上つた。三人とも夜の暗さの中のみ棲息してゐる人間のやうに、眞つ黒いものを着てゐる。今時分あそこに穴を掘つて何をするのだらう。やりかけてゐる電線の工事とも違ふ。あんな突飛な空地の眞ん中へたつた一つ大きな穴を掘るのである。

かう思ひつゝ、不氣味になつてこちらへ上りかけると、下女がふいと向うの兩戸をがらつと開けて、

「旦那さまですか。」と愕いたやうにいふ。私の室の灯がさしてゐるので姿を認めたのであつた。

「何をしていらつしやるんでございませう?」

「已は何にもしてゐやしない。だれかあそこで三人して穴を掘つてゐるんだ。」

「どうしたんでございませう。」と、下女は私のゐる方へ来た。

「もう寝てるよ。」と私は這入つて来た下女にさう言ひつゝ、ちつとその哀れな寝顔を見た。下女は、

「坊ちゃんがさつき妙な事を仰しやるんでございませうよ。」と言つて、這入つたまゝのところを膝を突く。

「何だつて。」

「あのさつき怖い／＼と言つていらつしやるかと思ふと、坊やは母さんの顔を知つてゐるよ、お前は知つてゐるかいつて、さう仰しやるんでございませうよ。いつ、どうしてお母さまのお顔がお見えなさいましたかとお訊き申しましたら、だつて知つてる、お父さんの顔でも知つてるつて仰しやるのでございませう。」

「變な事をいふ子だね。」と私は下女にはさりげなくさう言つて、どうして目の見えないう子供が、ふいとそんな事をいふのかと訝しみつゝ、その目を閉つてゐる顔を見つゝと見入つた。私は何事かこの子に豫言されでもするやうな、呪ひなるものを形なく見るやうな、不安な心持がするのであつた。

「そんな事を仰しやるかと思ふと、外に人がゐる、人がゐると言つて顔へいらつしやるので

大 伯 母

先月私の祖母が亡くなったとき、私のたゞ一人の伯母がはる／＼出て来た。殆ど生れたばかりで母を失った私は、子供の間は、すつかり祖母とこの伯母とに育てられて来たのであった。

伯母は、祖母の働かばかりの形見を片づけてゐるうちに、祖母が昔から持つてゐた、黒い濃紙を貼つた小さい竹行李の底から、一冊の藍紙の横綴の本を見出した。併詰り部集の寫本の「炭俵」の巻であった。お家流の小さい字で丁寧に書いてある。伯母の伯母に當る人が寫したのださうである。

私は子供の時に、この本を祖母のところから持ち出して、譯もわからないなりに読んで見た記憶が微かにある。最早それから二十年ばかりもたつた今日、久し振で再び目に見るのであった。かういふものが祖母の手にあるといふことも私はすつかり忘れてゐた。

伯母は、さうした積りから、私が小さい時に、祖母やこの伯母から聞いたこともあるやう

いすよ。昨夜寝かされたのを、引取人が来るまであそこへ埋めといたんでございませう。一服だなあ。——もうどこかへ運んで行つたのかい。

「何ですか、その儘にしてあるのでございませうよ。私がお隣りの方から聞いたんでございませうけど、氣味が悪いから行つて見もしませんが、あすこの土の上に血がぼた／＼落ちてゐますつて。と、こんな事をいふ。

「あらで子供がぐ／＼言つて下女を呼んでゐる。

「行つて見ておやりよ。子供が何か言つてゐるぢやないか。」

私は顔をかめて立つて、障子を開けて外を見た。また今日も、だだ暗い陰鬱な空が低く壓へ下つてゐる。そのすぐ外の外に、若い女の死骸が埋めてあるのかと思ふと、胸が悪い。警察が許してそんな事をさせたのだらうか。

氣分の悪い私は厭な思ひ、心持をして顔を洗ひに行つた。もう今朝は急いで出かけなければ、勤めに間に合はない時間であつた。

(大正元年十一月)

な、私の家の昔の事などをあれこれと話した。私は大伯母については、これまで少しも知らないういふ事は私に少しも話さなかつた。

私が大伯母について聞いてゐたすべは、その私の祖父の姉なる人は、殿さまの奥方のお局に上つてゐた人で、字が上手、併句が上手であつたといふこと、男にも稀な程の賢い人で、少しゆつくりした性質の祖母は、家へ嫁入つて来たら、母人よりもこの大伯母に氣が置けて、いゝんな人知れぬ苦勞をしたといふこと——たゞその位のことであつた。それから家の過去帳に、何々童女、さよの女行年一歳、かういふのが書いてあるのを知つてゐたけれど、御殿にゐた大伯母が、それからどこへ嫁入したものか、さうして何故にその人の生んだ子の戒名が私の家の過去帳に載つてゐるのか、私はさういふことを考へようとしたこともなかつた。伯母に今度聞いたのでは、大伯母は、私がこれまでぼんやりと想像してゐた人とは全でちがつてゐた。

赤 菊

いろはを習つたら別れても手紙が出せるかと訊いたゆゑ、自分は日に二三字づつお綱に平假名を教へた。小女は土の上で稽古した。素直な子であつた。

毎日二人で、翌る日食ふ米を、月の中の兎が搗くやうな臼で搗いた。夜裏大きな浪が壁の後の石崖に碎けた。

自分はお綱を置いてこの西の國の果に三月ゐた。女はいつも縁側の隅に、ひひの入つた古鏡に黒ずんだ櫛を載せて置いてゐた。頭は藁で束ねてゐた。

女が消炭の炭をかけた裏の柿の木の下に、まばらな低い菊の一株が乏しい苔を仄暗く閉けてゐた。いつまで経つても堅く閉つた儘であつたが、たうと自分がこの浦里を引上げる前日に、小さい赤い花を二つ淋しく開いてゐるのを見た。

別れてから二年振に不圖お綱からの手紙が廻り廻つて来た。自分の教へた假名を綴つて、私は辰といふ者の女房になつてゐる。綱の家は去年浪がさらつて行つたと書いてあつた。

(赤菊 終り)

とだけれど、どうも桐江さんが亡くなったのは、たゞの亡くなりやうではないやうに思はれてた。それには、小さい私一人の目に觸れただけで、だれも氣づかないで了つたことが一つある。私はそれをだれにも言はなかつた。亡くなつた人だからさうなのだらうと、子供心にたゞさう思つただけで、人にいふべき特別の事だとも思はなかつた。

桐江さんはたうとしまひに、寂れた裏町の、わびしいところで亡くなつたのである。さうして、だれとして引受人がないために、町役人から遂に私の家へさう言つて来たけれど、私の父は已に紀の國屋とは縁を切つた人の亡きがらを、表向き家の方から引き取りに行くわけには行かないので、どうしたものだらうかと考へた。

母はその知らせを聞くと、さめ／＼と涙をこぼして、やがて竊かにこの寂れた人のために佛さまにお灯を點じ、線香を立てて、一人拜んでゐた。次の間では、父と店の方の主立つたものが二人と膝を合せて、前後の處置を相談した。私はそのときのことをよくおぼえてゐる。「お万さん、こゝへお坐りよ。伯母さんが亡くなりなしたのぢやけのい。さ、手を合せて、母さまと二人でこゝから拜んで上げようぞい。お

の物置倉の後に立つてゐる、顔の黒つた物見の窓から、
「お万や。」と、母がそこへ来て待ち受けてゐて私を呼びとめた。格子の内には、おはぐるをつけて、平打の銀の簪をさした、眉毛のあとの青い、目の下に私の好きな大きいほくろのある母の顔が覗いてゐた。そこは、庭から出て倉の間を抜けて来る、淋しい物見の窓で、段々を上つて、戸棚のやうな重たい板戸を開けて這入ると、三疊ばかりの暗い畳じきになつてゐるのであつた。いつもは母たちが自分でこんなところへ来て覗いたりすることなどはもとよりないのである。
「お前のい、人がどこの子かと思つたとして、黙つて聞えぬふりをしてゐるのぞい。家のものだといふ事が知れてはいけないのぢやけのい。」と念を押した。
「佐吉は提灯を持つてゐないのぢやのい。」と、母は次いで爺やに向けて言ふ。
「いえ、疊んで、懐に入れて居りますでござりませう。」と爺やは答へる。
秋も木で、その扉の下には、家の裏の大きい木から散つて来た銀杏の葉が、ばら／＼と、仄暗いたそがれに黄色く落ち敷いてゐた。

万をよくいとしがつてくれなした桐江さんだつたのに。
かう言つて、母は、仄ぐらい一間に、晝をまたく佛さまの蠟燭の灯を見守りながら、しよんぼりと、考へ入つたやうにしてゐた。
夕方になつて、通ひ番頭の清助と、秋八といふ年上の手代と二人が、祖父の代に主人の一人娘だつた桐江さんの亡きがらゆゑ、亡くなつた祖父に對して、父たちに内股で竊と引き取りに行く體にして派せられた。店が忙しくて、夕方まで奥へ這入つて来る間になかつた兄は、それまで何も知らずに、帳場に坐つて、子供相應の手傳をしてゐた。

二人のものが出かけたすぐあとから、私は、ついに不歸のまゝの着物で、佐吉といふ、年取つた爺の爺やに負されて、裏木戸から、二人のものあつたを追うた。
もとより、すべて後になつて母から聞いたことだけれど、私がさうして負されて行つたのは、母が、一人の了見で、せめて小さい私を、家の血筋の名代にして、父には言はずに、それとなく桐江さんの亡きがらに會ひに行かせるためであつた。

「のい、お万はいゝ子だから、黙つて爺やに負

二

小さい私は、桐江さんが、そのときどんなところはどうしてゐたのかといふ事も、その他の何ごとをも知らなかつた。たゞ、あの自分の好きだつた伯母さんが亡くなつた、さうして私は佐吉につれられて、その亡きがらに會ひに行くのだといふことだけ分つてゐたのである。
けれども、たゞそれだけでも私には十分悲しかつた。人が訊いても、どこの子だといふことを告げてはならぬと母が口止めをしたのが、なぜさういふのか、それはその時私には分らなかつたけれど、さういはれたのが、何だか、私の沈んだ子供心を曇らせた。
私は物心が附いてから、伯母さんの桐江さんとなつてゐたといふのは、たゞ、その三四年ばかり前に、桐江さんがお局から下げられて、家へ来てゐた間の、僅かもの十日か十五日ばかりが程のことであつた。それでも私は、これまで自分を大きくしてくれてゐた人のやうに考へられた。伯母さんが間もたたくまどこへか行つて見られなくなつてからでも、いつまでも好きな人だと思つてゐた。
私は小さいときには、この伯母さんに非常に

されて、伯母さんを見て来ておくれよのい。母さんも父さんも、だれも、行くわけには行かんのぢやけのい。お前がみんなの代りに竊と行くのぞい。」と母は小聲で私にかう言つた。
「それでは兄さんも行つてはならんのい？」と、私は涙ぐみながら母に訊く。
「兄さんもい。」と母は私の髪に櫛を入れる。
私は、さう言つたやうな、そのときのことをよくおぼえてゐる。佐吉といふその爺やが、母が私のところへ来たときに、たけといふ女中と共に母について来て、こちらの家に使はれる爺やになつたのであつた。

裏木戸を出ると、そこは少しの間、ひつそりした人通りのない町筋であつた。こちら側は、私の家の長い練堀で、向うには、米の取引所の、白壁に丸に七の字の印のついた倉が並んでゐた。そこには「ろ組」の火消しの溜り場があつて、半鐘の高桶子の下の、小さい小屋がけの前に、竹の棒子に並んで、勇ましい鬨が立つてゐたのが、今でもあり／＼と目に残つてゐる。

私は佐吉の背中に負されて、もうそろ／＼日もくれかける練堀に沿うて、とぼ／＼と出て行つた。
すると、その堀の向うの角の、丁度、家の裏

可愛がられて、母人へよりも、伯母さんの方へ餘計になつてゐたさうであつた。伯母さんは人形のものを持ち／＼やうに、私のために、いろんな着物やら巾着やらお守り袋やらを持ち、それを着せたり附けたり、私の小さい嬰を分けたりして、自分のものやうにいとしんでゐたといふ。けれども、それは後になつて母たちから聞いたことで、私が、やがて何でも口を利くやうになり、晝の着物の赤い紐をでも一人で結べる子になつたときには、伯母さんはもう家に居なかつた。私はさうした伯母さんがあると聞くだけで、顔もおぼえてはゐなかつた。伯母さんはそのときには、もうお局へ召し出されてゐたのであつた。
伯母さんがさういふところへ上つたといふのは――それ等はすべて私が一人の女となつてから、ずつと後に知つたことだけれど――それにはいろ／＼こみ入つた譯があつたのであつた。
母から聞いたのでは、家ではおさよきんと言つたこの伯母さんは、もと／＼、私の父とひどく氣の合はない人だつたさうであつた。女ながらてきはきした人で、小さい間から、女のするだけの業の他に、いろんな事に才があつて、町

人では男にさへ用なきものとなつてゐた漢書の
學問さへ、一わたりは修めてゐた。それから伯
母さんのお父さんになる、私たちのお祖父さん
が俳諧に堪能であつて、その方の交際から、いつ
も入り代りいろんな俳人などが廻つて来ては、
いつまでも泊つてゐたりするやうなわけだつた
ので、おさよさんも小さい時から、おつとさう
いふ方の道をおぼえて、後には女ながら父の
俳諧の座にも交つて、俳人の間に評判されて
ゐた。お祖父さんは、それを何よりの誇りとし
てゐた。おさよさんは、用うちでも名代の、い
器量の人であつた。

發句のことをいへば、おさよさんがまだ十一
か二かの小娘だつた時分に、人々につれられて
氏神さまの祭へさむつたときとか、そのとき
の夜の見世物で見て来た事をそのまゝに、
山雀の文讀くはへてお初かな
といふ句を詠んで、お祖父さんを愕かせたと
いふことを、私はいつ誰から聞いたのだつたか、
この句だけは伯母さんの句としてたつた一つお
ぼえてゐる。私は若いうちには、よく、子供の
ときのことを考へ返すたびにこの句を思ひ出し
て、何だか、それに寫されてゐる情景が、自分
が小さい日に見た事の記憶のやうに、たつたか

く目に浮んだものであつた。
私のお祖父さんは、二人ある子供のことで、女の
方のこのおさよさんが何より気に入りで、この
人のためには全で目がないくらゐであつた。と
ころが、それに引きかへて、私の父には、すべ
ての點が全で他人のやうに冷やかだつたさうで
ある。父は、子供の間には整つてどんよりした
人だつたとかで、それが姉さんの人なみはづれ
て利發だつたのに對して、お祖父さんには餘計
にまどろかしく思はれてゐたのであらう。長じ
てからでも、父はたゞこつ／＼と家の商ばいの
事をおぼえて行くより外には、他にこれとて能
のない、平俗な人だつたので、何かにつけてお
祖父さんや姉さんから見下されてゐたものらし
かつた。

さういふ父は、おさよさんについては死ぬま
で得難いなかつたやうな悔しい目を見たことが
いく度もあつた。その一つは、父が十四五の時
分のことだつたさうだけれど、或日店の帳場へ
出て、お祖父さんの前に坐つて、何かの帳合せ
をしてゐたときのことであつた。まだ年の行か
ぬ父は、計算の少し紛らほしいところへ来て行
きつまつて、何處も算盤を置き直したりしてま
ごつてゐると、一度そこへ何かの用事で店へ

出て来たおさよさんが、やがて父のさうしてゐ
る側へ来て、少らくちつと覗いてゐたが、父の
算盤がのろいので、つい何の氣もなく口を出し
たのだらうけれど、さつきからいら／＼してゐ
るところへ持つて来て、おさよさんが、はたか
ら、
「お前さん、さうお置きだからいけないのえの。
貸してお見。私がそこだけ上げてよ様に。」
そんなことだから、いつでもお父さんに叱られ
るのぞい。」と言つて、帳面を向け直すので、父
は何だか情なくなつて、
「ではどうでもおしやがたい。」と、ねつちりし
た父もく／＼したまぎれについて算盤を投げ
出して立つて了つて、店の次の間へ這入つて、そ
この柱にすがつて、悔しさにおろ／＼と涙を滴
んでゐると、後からお祖父さんが跡を追うて這
入つて来て、手に持つてゐた算盤でいきなり父
の頭を振りつけた。
さうして血がたら／＼と流れるのを押へさせ
もしずに、目の廻るやうなのを引つ張つて行き、
店のもや、取引に来てゐる人たちが大勢で見
てゐるところで、姉の前に坐つて、兩手を突い
て今の不行儀のむづさを言はせた。父の頭には、
そのときの、算盤の角が三角に食ひ込んだあと

が、生涯大きな傷になつて残つてゐた。

それは併し、父が悪かつた罪罰で仕方がない
けれど、そんな事よりも、父が最も侮辱を受け
たのは、お祖父さんが、行く／＼は、父をさし
おいて、二つ年上のおさよさんに家督をつがせ
るつもりで、父に十七で私の母を持たせると同
時に、おさよさんへ仙から養子婿を取つたこと
であつた。たゞ、たま／＼その養子は、一年た
らず同様ただでちぎ別れて實家へかへり、お
さよさんは、それから私が生れた後、家
のお祖父さんの娘なる人が嫁つてゐる、山内
といふ、一寸した侍の家へあづけられて、やが
てそこから、その家の娘分になつて、代瑛院さ
まといふ、殿さまの奥方のお局へ上り、それから
三年ばかりしてお祖父さんが亡くなつたので、
父は二十三で家を継いだのであつた。

この事だけは母がしまひまで私には隠して、
たうと何にも言はなかつたけれど、おさよさん
の養子婿が、そんなにして間もなく歸つて行つ
たり、それからおさよさんが山内へ預けられ
たりしたのは、おさよさんにはいつの間にか竊
かに言ひかばした男があつて、大分ごた／＼し
たからの事だと言はれてゐる。それは、家では、
父母とお祖父さんたちの外には、だれにもわか

らないやうに秘密にされてゐたのだと言ふけれ
ど、そのことは私と早い學校友だちだつた、亡
くなつた山内のおかうさんが、ずつと後に、年
取つてから、私に話したのである。

とにかく男があつたといふのは間違ひないら
しい。おさよさんは、お祖父さんの計らふ事な
ので、仕方なく養子をもらつたには貫つたが、
表面きではそれとなく笑うてゐて、その實、二
人が同様してゐる間、その養子には一寸も膚身
を許さなかつたといふやうな事も聞いた。その
おさよさんの言ひかばした男といふのは何人だ
か、とにかく、いくらお祖父さんでも、許してお
さよさんに添はせる譯には行かない人だつたも
のと見える。それで二人の間を割くために、山
内から、御殿の方へ上げて置くことにしたので
と、おかうさんはかういつたやうに話した。
おさよさんは、私のおぼえてゐるだけでも、
目もとの黒い、髪もふさ／＼した、瘦型の綺麗な
人であつた。お局へ上つたのは、二十一二年
だつたらうと思はれる。

三

私はその桐江さんがお局に上つてゐる間に、
一度、迎へるものにつれられて、御殿へ會ひに

行つた事があつた。
それは、何でも、私が極々小さいときの事だつ
たらしい。そのときは、母たちから聞いて、
そんな事もあつたのかと思ふだけで、私自
身では殆どおぼえがないけれど、さういはれて
見ると、私はたつた一つ、そればかり前後もなし
にぼんやり目に遺つてゐることがある。

そのとき桐江さんは、最早二十五六になつて
ゐた勘定である。あゝした利發な人だつたとこ
ろへ持つて来て、何一つこれとて出来ぬ事なの
いやうに、すべてのおさよさんの備はつてゐる人だつ
たから、お上に非常のお氣に入りでしばらくの
間にずん／＼抜上げられて、その時分には、も
う一人のずつと年上の人と二人で、御前筆の役
目を申附かつてゐた。それはお局では老女に
あつた。二十代のもので、さういふ御用に仕へ
た人は、これまで桐江さんより外には未聞の事
だつたさうである。

桐江さんは、さうして一方では代瑛院さまに
引き立てられてずん／＼上へ進んで行つたし、
一方では、山内のおかうさんの言つたやうな譯
で家から出たのだとする、お局を戴いて下る
にしても、もう、お祖父さんもゐなくなつて氣心

の合はない私の父が家督を取つてゐる中へは、向さら歸りがよいといふ事もあつたらうし、また外にもいろ／＼考へて、その年までお局を下りないでゐたのだ、察しられる。おかうさんの話では、桐江さんに取つては、その間の月日は、上部には隠してゐても、忘れようにも忘れられぬ男の事で、何事にもあぢきない暗い年月であつたらうといふ。桐江さんはその間、お祖父さんの亡くなつた時の外には、一度も宿下りといふ事をしなかつた。

桐江さんは、家にゐた間は父とは仲がよくなくとも、私の母を好いて、母には情をつくしてゐたさうで、お局へ上つても、しげ／＼消息をしてみなし、とき／＼、いろんな下されものまで分けてよこしたりしてゐたさうであつた。私もいろいろのものを送つて貰つて、大きくなるまで大事に持つてゐたものがさま／＼あつた。桐江さんは段々に物が自由になるやうになつてから、まだろくに立ち歩きも出来ないうらゐの小さかつた間に可愛がつてゐた私を、久しぶりで目に見たくて、母へ手紙を持たせて、人をつれによこしたのださうであつた。かういふ話をする、今ではあんなになつて了つてゐるあのお局に、まだ大きな矢倉や、

白い道すがら高く横いてゐて、御門々々の石がけに、乳房のやうな金具が二ばいに附いた、いかめしい門の固めがしてあつたのが目に浮んで来る。あの外側のぐるりのお漆などは、今ではあつて泥で埋まつてゐるけれど、殿さまのゐられた昔には、塵一つも浮ばない水が、底もわかぬほど青く湛へてゐたもので、たゞのものは、その漆のところまででも、減多には近づけなかつた。私は、桐江さんのゐた御殿は、西北の御門から這入つて行つて、ずつと奥の方にあるのだといふ事を後に教はつたけれど、あのとき桐江さんのところへ行つた時分には、どんな人につれて、どこをどう行つたものか、何にもおぼえがない。

たつた一つ微かに目に通つてゐると言つたのは、どうした續きだつたものかそれは分らないけれど、とにかく、桐江さんのお局の小さい一間に、私は一人、小さい膝に手を置いて、所在ない心持をしてしよんぼり坐つてゐた。そこは、どんよりした、お暗いやうな一間であつた。さうしてゐる私の前には、だれだか知らない一人の年若い女の人が、黒い色の、襦袢のやうなものを着て、唐紙の方を向いたまゝ、何をか待つてゐるやうにちつと坐つてゐた。そんな

な人形が折へて据ゑてゐるのではないかと疑はれる程、ちつと目を伏せたなりに一寸も身動きもしない。私に後に坐つて、その人の後姿をまんじりと思つてゐた。すると、さうして向うを向いてゐるこの女の人の目が、何だか、その頃鳥屋町の角の紅屋の店先に招牌に立たせてあつた、大人程に大きな京女郎の人形のビードロの嵌つた目のやうに、その瞳が冷やかに光るまゝで固まりついで、たゞちいつと一つとこゝろを見たなりに動かないのであるやうな気がして来た。私はさう思ふと、何だからす／＼怖いやうな心持がして、もうこゝにゐるのは厭で、早く家へ歸りたくなつた。私はさう思ふと、譯もなく物悲しくなつて、誰か一ぱい涙をためて、二人でしく／＼と泣きながら、向う後から見守つてゐた。

私はさういふ前後もない事をぼんやりと記憶してゐる。それから、もう一つ私は、桐江さんのお居間の前かなぞの、縁側のはしに立つてゐる柱につかまつて、だれかが、もうおよしなきいませ、危うござりますすけと止めるのを聞かないで、げら／＼笑ひながら、縁側から足を離しては、くる／＼と柱を抱いて廻り／＼した、さ

ういふ私の小さい姿がかすれ／＼に目に浮ぶ。私は、紐のついた、小さい白絹の足袋をはいてゐたやうに思ふ。

その外の事はなんにも知らない。お局がどんなであつて、桐江さんがどんな桐江さんであつたかといふことも、なんにも頭に遺つてゐない。だから私は、桐江さんがその後御殿から下つて、私の家に歸つてゐたときに一寸の間一しよにゐたばかりの私、私のはじめて見て、それきり永久に別れた私のたつた一人の伯母さんである。

その桐江さんが御殿から下つてゐたといふに附いては、私はだれに聞いたものだつたか、小さい時からかういふ事を聞いてゐる。それは、その時分、お局の若いお女中たちの間に、正月の一の寅の晩に「寅待」といふ事をしたものださうであつた。詳しいことは知らないけれど、なんでも、その一の寅の晩の寅の刻が近づくと、お女中たちは四人づつ別々に大きな部屋へ這入つて、その真ん中に白木の三つを据ゑて、それへ、かねて銘々の人が用意しておいた、七色の絹の絲の小さい束を持ち寄つて、その三束に供へる、それから部屋の四隅へ一臺

づつ、銀の燗壺を置いて燗壺を熱して、四人が銘々鏡を持つて、一人づつ四隅に分れて、燗壺のもとに坐るのださうである。

その晩はみんな綺麗にお化粧をして、自分の一番い／＼着てゐる着物を着てゐる。さうして、息をしつめて、ちつと鏡の表を見つめてゐる。次の間でも、その次の間でも、四人づつ同じやうにさうしてゐると、お局の矢倉で、寅の刻の太鼓が夜更に傳はつて響いて来る。瞬間に、自分がさきで一生つれ添ふ男の顔が、さうつとその鏡の表に仄かに寫つて来るといふのである。

桐江さんが御殿から下つたのは、その寅待の晩に、さういふ四人づつのお女中たちの組が、一組だけ人数一人が足りないの、老女の指圖で、上役の桐江さんが、それを埋めるために、お女中に交つて鏡を見てゐた。すると待ち受けた寅の刻が来て、一目鏡の中に見えるといふ面影を、人々は、私は見た、私には見えなうと、同じ合つてゐる間に、一人口をつぐんで、襦袢の袖を顔にあてて目を伏せてゐた桐江さんは、やがてついと立つてどこへか出て行かうとした。居合はせたものは、その顔がまつ蒼になつてゐるのに傳いて、どうかなさりましたのでござりま

すかと訊く間もなく、桐江さんは二足三足歩みかけていきなりぱたりとその場へ倒れて正氣を失つた。

御殿中は大ききわぎになつた。桐江さんは手當を受けてやう／＼息を吹き返して、自分の局へはこぼれたさうだけれど、それから當分は杖を上げないで、いつまでも昔い／＼して、がたがた振へてばかりゐるやうな状態が續いた後、今で辭の扱けたやうな女になつてしまつて、ふら／＼と出て行つては、物暗いところをぼんやり立つてゐたりした。口を利く事が何をやつてゐるのか取りとめがつかない。人が側へ行くと、さめ／＼と涙を流して俯つ向き込んで了ふのださうであつた。

御殿中では、これはきつと、だれかこの女の出世を始むものがあつて、竊かに呪ひをかけたにちがひないといふ事になつた。老女たちは、奥方のお言ひ附けで、一々の局や、下女の部屋にいたるまで、各の部屋の床下をめぐり上げ、天井裏へまで人を入れて、五寸釘の刺してある藁人形が隠されてゐるかと限なく探させたさうであつたが、そんなものは更に見附からなかつた。尚もう一つの呪ひの仕方として、桐江さんの着物に針でも刺してはないかといふので、

着物をすつかり出してそれをも調べて見たけれど、別にさういふ形跡もなかつた。人々の間にはいろ／＼の噂がさ／＼やかれた。着ざめ果てた桐江さんは、いつまでも元の人の返らないで、たうと一先山内の方まで下げられた。

四

桐江さんが私の家へ歸つて来たのは、さういふ状態からやう／＼恢復して、もとの桐江さんになつてから後であつた。私の家では、山内へ迷惑だから、御殿から下げられると直ぐにこちらへ引き取つて徐かに養生させるからといふので、父が出て行つたのださうであつたが、桐江さんはあそこへ歸るのは厭だと言つてどうしても聞き入れなかつた。いゝんな人が代る／＼行つて勧めたけれど、どうしても歸らうと言はなかつた。それが、すつかり直つてもとのやうになると、何だか一寸家へ行つて見たいからと、自分から言ひ出したのださうであつた。

山内の若黨がついて、駕へ載せて伴れて来ると、あとから、山内の奥さん——それはお祖父さんの嫁で、私にかういふ事を話したおかう江さんの前で選り分ける。「お方さんは、どれがいゝのい？ これ？」で今度はこれにしようかといふと、桐江さんは私の相手になつてくれながら、私が迷ひ／＼い加減に指す布を取つてはお人形に着せて、母と二人で微笑み興じる。そのとき桐江さんは、小さい青い蚊蜻蛉が、外の雨を避けて、障子に來てとまつたのを捉へて、赤い絹で括つて、それを障子にとまらせて見てゐたりした。蜻蛉は長い糸を重たく垂れたまゝ、障子の棧から棧へ移つてまひ／＼してゐた。

雨の降らない日には、黄色い柔かい目影が、倉の後の、高の青葉に射してゐる午下りに、私は、倉の草履をはいて、浮き足に土を踏んで下りて來た桐江さんを、その叢の中に、水色の葉草の花を摘みつゝ迎へて、その花や葉の穂のやうな毛のある花をも取つて桐江さんに上げた事もあつた。そこには自然生えに低く生えた桑の木などがあつて、その若い柔々しい葉の裏に、山藨をつける蝶々の卵が、青い粒々に附いてゐるのを、桐江さんは私を指して指したりした。五月といへば、私の家の表の、大屋根の下に深り屋根の賑やかなつてゐる時で、私は、門口

さんのお母さんに當る人——その人も、駕であとから出て來られた。

その時私は七つばかりの娘であつた。二人が前後して家へ着いたときの事などはかすかながらおぼえてゐる。併し、もとよりすべての仔細を知つてゐるわけもなく、たゞ私を可愛がつてくれたお母さんが、御殿から逗留に來られたものとのみ思つてゐた。

私がその後すべての事を知つてから考へ返しても、桐江さんは、そのときさうした病氣舉句の人のやうには見えなかつたやうに思ふ。私には、そのときの桐江さんは、目元のりんとした、綺麗な、好きなお母さんだといふ記憶が、いつまでもなつかしく選つてゐるばかりである。

愛はお局風の、髪は整つた、白いたけながをかいた、肩はづしといふ結び方にして、定紋を打ち出した平打の大きな銀の袴をきて、お母さんらしい人に似合はず、厚くお化粧をして、口紅も濃くしてゐた。着物は、水色の上布に、金や銀の帯、赤色の袴で、大きい襷袢を縫取したのへ、朱色の帯を胸高に結んでゐた。細かしいことはおぼえないけれど、私は、さうした御殿風をした綺麗なお局さまが私のお母さんで、それが母たちと打とけて話したりしてゐる

ところを、よその人に見せて誇りたいやうな心持がして嬉しかつた。

桐江さんは家に逗留してゐる間は、母のものが入れてある倉に隣つた、青桐の大きなのが幾本か植つてゐる、障子の一間にいつもゐた。わたしは今でも、黒塗りの障子の嵌つた、その墨の青い一間に、桐江さんの紫色の着物が衣箱にかゝつてゐて、その下の、青色の焼物の香爐から、匂ひものの煙が細く立ち迷うてゐたさまなどが、はつきり目に浮いて見える。

それは五月の青い雨のしと／＼と降る日であつた。私は桐江さんの膝の前に坐つて、桐江さんが小さい春日人形を拵へてくれる手元を、長い睫を見張つて神妙に見入つてゐた。その人形は、厚紙を、湯斗を伏せたやうな形に貼りつけて、その上へいろんな布切をくる／＼巻きに貼り、首には奉書を小さく巻いて挿しただけの、一寸ばかりの小さい人形であつた。

桐江さんは小さい愛などを使つて、そんな人形をいくつも拵へて、錦を貼つた私のみだれ箱の中へ並べてくれる。と、そこへ、母がいろんな布の箱に入った墨紙を持つて來て、「どうもあんまり面白い布もございませんけど、どんなのがよろこばいませうぞい。」と桐

の色の暖簾をくゞつて外へ出て、乙鳥の巢のごだ／＼と込み合つたさまを見て來たりして、子鳥がどのやうにして飛んで歸つたなどといふ事を一々桐江さんに話して上げた事もある。家の表には、黒ずんだ格子が長く横いてゐて、その上の小屋根のもう一つ上の屋根裏に沿うて、いくつともない乙鳥の巢が、下から見れば青が生えたやうに、一面にべつたりと附いてゐた。

私はその外いろ／＼の事を思ひ出すことが出来る。けれども、桐江さんがゐた間、どんなことを私は言ひ、桐江さんが、どんなことを私に言つたかは忘れて了つた。たゞどうかしたときに、「お方さんは家中でだれが一番好きかいの？」と訊かれたとき、私は恥かしさうに、「ふふふ。」と笑つて、眞赤い顔をして決て顔を掩うた。そのときに桐江さんが、あの黒いしめじめしい目をして私に何とか言つた聲は、今でもまだ耳に残つてゐるやうな気がする。

桐江さんは、さうして逗留してゐる間は、たゞ子供やうに、私をのみ相手にして、青桐の一間にばかり閉ぢ籠つてゐたのださうであつた。「私はもうすつかりもとの私でせうぞい？ 私は一體どうしてお局を下つてこゝにゐるので

せうぞい、自分では何にも知らないうちに、こんな事を母に訊いたりした。一人である時には、その障子の側なぞにつくねんと坐つて何をか考へ探らうとするやうな目元をして、しよんぼりしてゐたさうであつた。

母は、夜分なぞは、よく桐江さんのところへ行つて、早く蒲團に這入つて、目を開けて淋しさをしめてゐる桐江さんに、何くれとない話をしておとぎをして上げてゐたといふ。桐江さんは私と母をのみ好いて、父に對しては全く口をつぐんでゐた。父が行くと、たゞ下を向いて黙つてゐたさうであつた。それだから、父の方でもなるべく桐江さんの前には出ぬやうにしてゐた。——母は私にから話した。

桐江さんは十日だか十五日だか私の家でさうしてゐた後に、もう私はすつかりもとのやうになつたと思ふから、山内の方へ歸つて、またお局へ上るやうにしようと言つて、或夕方突然駕を仕立てさせて、山内へ向けて立つて出た。

私はそのときのことよく覚えてゐる。桐江さんがさう言ひ出したとき、母は、「何だか今日は大そうお顔色がよくないやうですけれど。」と案じて言ふと、「いゝえ、私はもう何でもないのですけい。」

と愛想よく微笑んで、駕を待つ間に、私を膝に抱き上げながら、
「お万さんや、私は今度はいつお万さんと遊びに来ませうぞのい。」と、こんな事などを言つて、何気なく興じてゐたが、桐江さんはその時、山内へは歸らずに、變な方へ駕を向けさせて、それきり、私の家とも山内とも自分から絶縁してしまつたのである。

私はずつと後に、山内のおかうさんにあらましを聞いてから、もう三四人の子をも持つた後、その事について母に訊いたけれど、母は言葉をそらして、いゝ加減らしい事を言つて濁してゐた。桐江さんは御殿で人の嫉みから狐をつけられて、山内まで下げられたので、それからいろいろな加持祈禱をして貰つてやう／＼直つて、あのとき家へ逗留に来てゐたのだと、たゞこれだけ言つて、實待の夜のことなどは、それは皆へごとで、人がいるんことをいふのだと打ち消した。

それはいづれが本當にしても、桐江さんは家を出て山内へ歸つたのではないことだけは確かである。何れでもその時父への書置に、どうかこれぎり私を助當して了つてくれといふ事だけが書いてあつたさうである。それで、父はいろいろに考へなやんだ事句、御殿の方へは、桐江さんにはたうと狂人になつて了つたといふお扇をしてお扇を買ひ、桐江さんとはそれきり往來をしない事にしたのであつた。

五

そのときにはまだ何にも知らなかつた私は、母に出窓から言ひ含められた事を、何とは知らずうら悲しく思ひながら、佐吉の肩に負されて、夕方の町筋をとぼ／＼と、伯母さんの亡きがらに會ひに行つた。

伯母さんにはあの時きり會はないまゝでゐた、私はそのときにはもう九つの子になつてゐた。伯母さんはどんなところでどうして亡くなつたのだらうかと思ひつゝ、佐吉がつれて行くまゝに行つて見ると、そこは、その頃にはもう町

たちがいふやうに、前住のものが、伯母さんの死と共に何もかも剃ぎつたのかも知れないと母は言つたが、併し伯母さんの男がしたことだとも疑へば疑はれた。母は、伯母さんは家を出て、二人で家を持つて、人に俳句などを教へて暮してゐたのだといふやうに言ひ續つてゐたが、男のところへ選んで行つて、二人でそこちへ住んでゐた果が、あゝしてあんなところで死んだのだといふのが實際らしい。家では、うるさい引つかゝりが出来ては面倒でもあるし、事が表立つて、色んなことが世間へ知れては家の恥だからといふので、及ばないあとの詮議はしないことにして、すべての疑問を葬つて了つた。

はづれになつてゐた三川町の、長屋のやうな汚い家ばかり續いた裏通りで、がた／＼した、貧しい煙囪屋と、もう一つは木柵の宿のやうな家との間の、狭い煤けた露路を這入つた、たつた二間だけの、曇もぼろ／＼になつた小さい裏店に、伯母さんは、御殿で着てゐた、桔梗紫の、定紋を抜いた甲斐絹の表に、赤い裏の附いた蒲團を一枚着て、やはりお扇から持つて来た朱塗の杖をして、別の人間のやうに、瘦せ落ちた顔を見せ、曇の上になかに寝て、冷たく目を閉つてゐた。蒲團も大分垢じみてゐた。着て寝てゐた物は小綺麗な銀糸の經のあるものではあつたけれど、葬れて行く秋の着物はななくて、八月の頃に着る薄着であつた。家の中には、それこそ洗ひ上げたやうに何にもなかつた。押入に大きな袂箱が這入つてゐたけれど、それにも、はたいたやうに何一つ這入つてはゐなかつた。

桑の實

おくみが厄介になつてゐるカフアエーは、お
かみさんが素人の女手でやつてゐられる小
い店だけれど、あたりにかういふものがない
で、ちよいと出前もあるし、お客さまもぼつ
ぼつ来て下さるので、人目にはかなりやつて
行けるらしく見えたが、中へ遣入つて見れば
いろいろあれがあつて、おかみさんは、月末に
なると、よく浮かない顔をして、ペンと帳面を
手に持つたま、ぼんやりと一つところを見つ
めてゐられるやうなことがあつた。

おくみは自分がいつまでもぶらぶらとこゝに
かゝりものになつてゐるのが済まないやうな
氣がして、いつも自分で先へくと用事を求
めて働くやうにしてゐるのだけれど、料理場
の男と店の方を受持つてゐるべきはあなた
と、もう一人の女中との外に、下を働く女が
一人、出前持の小僧が一人ゐて、それへお
かみさんも出来るだけは立ち働いてゐら
れるので、おくみ

はたい十になられるあき子さんと小さい男のお
子さんの面倒を見るのと、一寸したお針な
どをしたりする外には、これとてすること
もなかつた。

「おくみさん、もうお寝なさいな。十二時よ。
私もそろそろ目をつぶりかけるわ。」

夜分など、おくみはもうするだけの事はして
了つて、客のない店の鏡のところへ出てしよん
ぼりと髪を解いた後、窓の硝子を通して、向う
の郵便局をしてゐる家の赤い電球を見ても
なく見入つて立つてゐると、おかみさんが所
なさうな顔をして出ていらつして、椅子を片
寄せながらかう言つて、眠さうな欠をなさる。
女中のお安さんは、多い愛のハイカラな巻
かたに、黄色い厚い留袖を見せて、向うのテ
イルに俯した儘、正體もなく居眠をしてゐる。
「雨でも降つてるのかしら。髪にしつとりして
るやうだわね。」

「さうでございますか。」
入口の硝子戸を開けておくみに覗いて見た。

雨ではないけれど真つ暗い夜である。店の少
い通りとて、もうどこにもすつかり戸を入
れて、人の往来もない。頭の上には、たつた
つ黒く消えかけた星が、小さい星のやうに
いてゐる。

おくみは戸をしめておかみさんの方へ来る。
外を見た目で店を見れば、水の中かなぞのや
うに青いガスの濃つた室内には、すべての
窓のやうに光つて見える。少しもあくだい
飾りなどない、さつぱりした店である。よく
へ来られる青木さんが置かれた、西洋の女
子にかけてゐる畫と、黒い畫にさまよひの
花をさしたのとの、二枚の小さい油畫が、テ
イルかけの玉子色の上に際立つて見えた。
二階には女づれの西洋畫家と、つれの一人
がまだカルタを引いてゐた。

かういふつゞきから、おくみはおかみさんが
ぼつねんとかけてゐられる椅子のところ
ながら、さつきも頭りに考へたやうに、自分
これからの身の振り方について惑ふ心持を
おかみさんに話した。
「だつてなまじつかなところへ奉公なんか
と、身をしくじる元だから、それこそよく
た上でないよ。——私も何とか考へて上げ

つもりでゐるんだけれど、でもくみちゃんに
ては、いつまでもこゝにかうしてゐるのも損
ないしね。」と、こちらの氣にもなつて見て、
ここにゐて、きくしてゐてもするやうに言は
れる。おくみはさういふ得手勝手なわけから
もとよらない。
かうして何一つおかみさんの足しにもなら
ないのが済まないから色々考へるのであつた。
「私がもつと何か出来ませうといふんでござ
いますけど、かういふ調子で一寸もの間に合
ひませんし。」

おくみはこんなときにも、自分の心持はこ
れだけしか得言はなかつた。

「そんなことをお考へのは、まだ私を他人の
やうに思つてゐるからだわ。私のところにく
みちゃん一人ゐたつて何でもないぢやありませ
んか。ゐて貰へば私だつてそれだけ助かつて
だしね。——いゝからまあ當分の家の子にな
つていらつしやいよ。」

おかみさんは氣よくかう言つて下さる。
「それよか一寸こちらを向いて御覽なさい。面
白いところにはくろがあるわね。」
「これでございますか？」
話はこの風にして飛んでしまつた。

おかみさんは寧ろ氣のいゝが、主人に亡
なられたすつてから、二人のお子さんをつ
いて、いゝ言ふに言はれない苦勞をなすつて、ど
うかからかこれまでにやつて來られた人程あ
つて、すべてにしんみりした思ひやりがあつた。
亡くなられた主人は洋畫家だつたのださうで
ある。おかみさんも、二人の小さいお子さん
抱へてさへゐられなかつたら、こんなことな
をなさらなくともいゝ人柄である。この店を
入れて下さつたり、それから同じやうな畫家
ちがも多く出入りして下さるのも、亡くなつた
家の未亡人に對する同情であつた。併し店と
しては餘りはかん／＼しくもなかつた。

おくみはこゝへかゝりものになつて來てから
浮か／＼してゐるうちにこれ二月以上にな
つた。

考へると自分ながらたよりのない身の上であ
る。お父さんには二つの年に亡くなられて、十
一になるまで繼母の手で大きくなつたのが、繼
母はそれまで一人でやつて來たのに、四十にな
つてからおくみを人にくれといひ、よそへ再婚
した。繼母は赤十字病院の看護婦長のやうな
ことをしてゐた。おくみが買はれたのは、その

病、院で書記をしてゐた人のところであつた。
おくみはそこから、續いて學校へもやつて
つてゐるが、さうしてゐるうちに、その養父は
おくみが十四になつて女學校へ上げて貰つたば
かりのときに急に亡くなつて了つて、おくみは
また養母とたつた二人になつた。そんな事で學
校も間もなく下つた。

養母はどこからも金が這入るところがないの
で、ずつと小さいところへ移つて、人の針仕事
などをして貧しい日をしなければならなかつた
ので、おくみも僅かの日給を取りに、下町の商
品陳列館の小賣部へ働はれて賣子のやうなこ
をしたり、或小さい商會へ給仕に出たりして
ゐた。

養母はもとから少し下種なところのある、冷
たいたちの女であつたが、夫が亡くなつて手も
とが苦しくなつてからは、貰ひ子のおくみを足
手纏ひのやうにつけ／＼當り出した。おくみは
勤め先へ通ふ電車の中などで、よく、先の繼母の
ことを考へ出して、たよりのない自分に、一人涙
ぐまれるやうなことがいくどもあつた。
繼母はおくみを今の家へくれといひ、後の夫
と臺灣へ行つて了つたのであつたが、このとき
には上海にゐるとかいふ事を、養母が赤十字

病院の人に聞いたくらのことで、向うへ行つてからとき／＼便りをしてゐたのが、二年ばかり前からふつりはがき一つもくれなくなつた。どうしてゐるのかさつぱり分らない。養母がそんな事などを悪くいふのが、おくみには自分の引け目のやうに辛かつた。

二人はそのやうにして一年ばかり貧しい日を送つてゐたが、養母は仕事だつても一向ないし、おくみが得る金も、電車賃やその外のつましい入用を引くとおくみが一人の口を立てるのにかつかつぐらゐなわけだつたので、苦しい目を厭ふ養母は、おくみさへどこかへ嵌めることが出来たら、いつそ、大きなところへお針にでも住み込みたいやうに言ひ出した。

そんなことで、おくみが商會で新聞の職業案内を見て、或日曜の日にたづねて行つたのが今のおかみさんのところであつた。おかみさんは、そのときは主人に亡くなられて間もない頃で、水道町の小さいところに装飾美術の手工を教へる看板をかけてゐられた。おくみはそこへ女中代りに這入つて、間々にさういふものを教へて貰ふ女になつた。養母は間もなく、考へどほりに、青山の方の或伯爵家へお針女に這入つて今にそこに勤めてゐる。

あれではとても退屈なかつた。月々の利息ばかりにでも困られた。

お買家の方はどうかやつてゐられるのさうであつたが、もつ／＼おかみさんは、お父さまたちのお聞きにならないのを逃げ出して來られて先の主人に投じられたので、おかみさんがかうして一人になられるまでは、買家の方からは絶交されていらつたのであつた。ミルクホールを出されるときの元手は、お父さまとお母さまとが竊かに工面して下さつたのださうだけれど、家を細いでお見さまはいつまでも解けて下さらなかつた。おかみさんが負債の方へは夜逃げでもするやうにして、さういふ中へ歸つて行かれるのは、どんなにか辛かつたやうであつた。

おくみはおかみさんのお近づきの方の世話でおかみさんの立たれるのと共に、さし向或西洋人のところに子供のお守に這入つて、そこに七八箇月の後に、青山にゐる養母のついで、この間まで四年足らずの間、山の手の、或、外務省に勤めてゐられる人の邸へ小間使に上つてゐた。養母には西洋人のところゐる間に二年ぶりであつたのであつた。これまで手紙のやり取りはしてゐたが、平河さんのお家がミルクホール

このおかみさんは、おくみの氣立を哀れがつて、自分の血を享けたものやうによくして下さつた。そのときには今のあき子さんがまだ五つか六つかで、下の坊ちゃんはんの赤さんであつた。おかみさんに仕事を習ひに來る人は多いときでも四人ばかりしかなかつた。おかみさんはそれらの人に教へてら手傳ひをさせて亡くなつた主人の知合の董家たちが畫いてくれた下圖によつて、西洋のものやうな意匠の壁かけや、テーブルかけや、カーテンのやうなものを縫取りして、下町の賣店へ託しに行かれた。おくみは坊ちゃんやんが寝たりしてゐられる間などに、來たての人たちに交つて、編物や、子供のエイパインや帽子の拵へかたなを習つた。

二

おくみはそこを自分の生れた家のやうに思つてたよつてゐたが、おかみさんはそれから一年もたない内にどうもその仕事では立てて行けないので、いつそ身を下げて千駄木の方へミルクホールを出されることになつた。さうして片手間で受合仕事のレイヌ細工などをされたが、その方は大した足しにもならなかつた。おくみ

ルなどを出されたりしたことは隠して、これまでのやうに仕事を教はつてゐるやうな體につくろつてゐた。西洋人のところゐるのを告げたときには養母は愕いた。

平河さんのおかみさんには、お別れしてもしげしげ手紙をいたゞいてゐた。おかみさんは間もなく、小さいお二人を置いて出てこられて、或私立の女學校へ手工を教へに行つてゐられたが、後には二人をつれておいでになつて、女生徒を預る素人下宿を開いたり、いろ／＼に迷はれた後に、たうと今のカツプエーをお出しになつたのであつた。

おくみはこれまででも、おかみさんのところを買家のやうにしてときをりたづねて來た。女生徒を置いてゐられたときには、正月の宿下りに行つて泊めて貰つたりした。

おくみはお邸にゐる間に二十といふ年になつた。これから先いつまでもこのやうに、同じことばかりして人の家に奉公してゐることかと思ふと心もとないやうな氣がしたけれど、歸らうにも家はないし、何かして行かうと言つたところでも何一つ手に入つてゐる業もない。女のすべきお針さへも——そのお家で少しづつ教はりはしたけれど——まだやつと一通り道が聞い

は店で牛乳を沸かしたりして手助けをした。おかみさんは、このやうなことにおくみを使つてゐたのでは、元來の約束にも反くし、おくみが何一つ先のために得るところがないから、どこか程よいところへ世話をしたいと言つて氣にされた。おくみの方でもいゝ思ひつきがあつたらその方へ行つてくれると安心だがと、あれこれ考へたりして下さつたけれど、おくみの方では、おかみさんの窮してゐられるのをほつといて、よそへ出て了ふ氣になれないばかりでなく、自分もこの人のところからはなれなくなつたので、奥さんが置いて下されば、いつまでも伴れてゐて戴きたいと涙ぐみながら言つた。おくみはそのときはまだ十六になつたばかりであつた。

ところがミルクホールも一寸もはやらなくて、これも一年ばかりで店を閉ぢて、おかみさんはお子さま二人をおつれになつて、仙臺のお買家の方へかへられることになつた。たゞ自分たちが月々を立てて行かれるだけならどうにかやつて行けないこともなかつたのだけれど、おかみさんはさうした女手一つの間から、亡くなられた主人の遺された負債の方へ、毎月少しづつ入れて行かなければならぬので、少々

たくらぬのことで何にも出来なかつた。性質の大人しいおくみは、上に立つ女中や、いろんなところに氣くばりして、辛いうるさいことが多かつた。けれどもだれとて語るべき人もないので、一人で詰めてゐる外にはすべしなかつた。養母にはそのやうな事は言ひたくなかつた。

おかみさんは黒人の出の人だとかで、短氣な、氣に入り悪い方であつた。それへ大勢のお子たちがあつたりして勤め辛かつた。今から思ふとよくあれだけの間あそこゐたものだといふやうな氣がする。おくみは、自分が辛いと思ふときには、いつも平河さんのおかみさんのことを考へ合はせて、これでもまだ今のうちは自分の方が仕合せのやうな氣になつたりして、何れとも思ふで來た。考へると女程つまらないものはないやうな氣がした。

今度は、主人が、政府が變つたのについて出世されて、西洋の大使館へ代られることになつて、こちらをすつかり疊んで行かれたので、おくみたちに閉が出たのである。おくみは歸るところがないので、平河さんへおたのみして、どこへか身の振方の方につくまでかうして當分來てゐるのであつた。

この間内まではおかみさんが少しお體が悪かつた上に、小さい方がはいかにかゝつたりされて、おくみがゐるのが切つてはめたやうに役に立つてゐたけれど、今ではゐてもゐなくてもいいやうな自分である。どうせずつとこゝにゐられるわけでもないの、何とかしなければならぬのだけれど、養母がいふやうに、またどこかのお邸へ上るといふのもう氣が寒がるやうで進まない。水仕事のやうなことをしてもいいから、のんびりしたところにあたいやうな、我儘な心持が動くのである。ミシンの教はるところがあるからそこへ遣入らうかと思つたけれど、それはおかみさんが捕らなれないといはれる。何をすると言つても今からではもう遅いし、どこで取りつくとこもないやうな氣がする。

出来ることなら、このまゝこの家のものにして戴いて、いつまでもおかみさんを頼りにして暮らして行つたらと思つたりするけれど、自分には何とて候つた用事も無い。お安さんがしてゐるやうなことが出来たら、あゝした全くの他人を置いたよりもおくみが働けば丁度いいのだけれど、お客の氣心には合はして笑つたり相手になつたりすることはおくみには出来ないうし、もしなければならぬとなつたら情ない。

そのときには別にお家のことなども聞かなかつたけれど、その次に青木さんが坊ちゃんをつれて來られて、婆やが近々に息子のところへ歸つて行くといふのだけれど、婆が困つて了ふがどうしたらいいだらうとおかみさんに相談されるのをおくみは聞いて、話の容子で青木さんは奥さんが亡くなられたかどうかして、婆やに出してはれると坊ちゃんとなつた二人になられるらしく思はれた。

「あなたも少しのんきだわ。なぜかうなるまで黙つていらつしたんでせう？」

「だつて、さう急いだわけでもないと思つたから、その内代りを探さうと言つたきり、私も急がしいんでつい忘れてゐたんです。」

おかみさんと二人でこのやうなことを言つてほそ／＼話して行かれた。それから日を置いて二度ばかり來られた。

昨日は青木さんから、どうも困つたといふはがきが來た。その晩に、おかみさんが當惑したやうにおくみにそれを仰しやつて、どうでもおくみさんにでも當分行つて上げて貰はなければならぬまい、氣の毒だけれど、と、困つたやうに言ひ出された。

おかみさんはそれから青木さんのお家のこと

やつぱりまたどこかへ奉公に上らなければならぬまいか。――

小さいあき子さんと一つ寢床に寝てゐるおくみは、板戸の隙間が仄かに白んで來た明方など、一人このやうなことを考へて、早くから目を開いてゐたりした。

三

おくみは丁度さう言つたやうな先へ、たまたま青木さんのところに代りの婆やがゐるの、だれか來るまでの間、一寸手傳ひに行つてお上げすることになつた。

或雨のふる午後、青木さんはいつものやうにしよんぼりした顔をして出ていらつして、こちらへお上りになつて、おかみさんといろんな打明話などをなさつた後、店のタイプルでお安さんを相手に、食事をされて、少しばかりのウキスキで赤い顔になつて、ガスが附くところに雨の中を歸つて行かれた。

青木さんはおかみさんとの話が杜切れたとき、

「おくみさんは私を覚えてゐますか。」と、こちらで押肉のハンドルを廻してゐたおくみに訊かされた。

「だつてこの間も一寸お目にかゝりましたぢやございせんか。」と笑つたら、

「だけれど、私といふことを忘れてゐやしないかと思つて。――私はこの間はだれだらうと思つた。すつかり見ちがへましたよ。」と仰しやいながら、おかみさんの前にごろりと寝ころんでおいでになつた。

「あなた様はあの時分と一寸も變つていらつしやいませんよ。」

「水道町の頃と？」でも四つになる子供のお父さんだのに。」と、あちらを向いたまゝさうお言ひになつて、おかみさんと話をつゞけられた。

「おくみさん、あき子さんをつれて出て來ませんか。山羊の乳を飲ませるよ。」

「お家に山羊がゐますのでございませんか。」

「二匹ゐるよ。二匹。」と青木さんは赤い顔をして歸つて行かれた。黒い長いネクタイを大きく結び切りにして垂れてゐられた。さういふ風にしてゐられても少しもげ／＼しくお見えにならないところが却つて人を引くやうに思へた。つましく寂しく暮してゐられるやうに見えた。

おくみはおかみさんから、青木さんが去年まで二年ばかりフランスに行つてゐられたといふ話を話された。

話を話された。青木さんの奥さんは去年の暮あたりから、坊ちゃんを青木さんの方へお置きになつて、牛込のお實家の方へ歸つてゐられるのださうであつた。大分久しからヒステリーのやうになつてゐられて、いつもぼろ／＼してゐられるのだといふ話であつた。

「青木さんがあゝしたおとなしい、いゝ方だから餘計に氣の毒でね。――どうせその内にどこからかい、奥さんをお貰ひなさるだらうけれど、」

「でも只今の奥さんもお氣の毒でございませぬ。」

「それがね、言はゞ奥さんの方の考へで以て、今一寸離婚されたすつたやうな風になつてゐるんだから。」

かう言つておかみさんは顔をお換へになつた。何か／＼したわけがあるらしく見えた。

今ゐる婆やは、青木さんに學校時代から使はれてゐる女で、青木さんの洋行中は、奥さんと二人で小さい坊ちゃんを護つて留守をしてゐたのださうだけれど、今度どうしても息子の方へ歸らなければならぬなつたのださうである。

青木さんは亡くなられたこの主人によくしてお貰ひになつた方で、主人が亡くなられてか

らは、すべてにおかみさんの方になつて上げてゐられるのであつた。おかみさんもさういふわけで青木さんのためにはどのやうにお世話でもなさらなければならなかつた。

一時おかみさんが女學生を預つてゐられた頃に、二人の間に何かありでもするやうに、下宿してゐる女學生たちに評判されてゐられたらしいやうな事も聞いたけれど、おかみさんの氣質を知つてゐるおくみには、もとよりそんなことは信ぜられる筈もなかつた。たゞ青木さんが一寸々々出入りされてゐたのを見て、根もないことを言ひたがつたのに極つてゐる。青木さんにしたつて、あゝした堅い方である上に、そのときには、ちやんと、お貰ひになつたばかりの奥さんがおありになつた。

「併しその中に都合よく代りのものが目附かるかも知れないけれど、いよ／＼どうにもならなくなつたら、十日かそこいらのところを、おくみちゃんが行つて上げて上げるつもりにしてくれないうこと？」

おかみさんは言ひ感さうにから仰しやるのであつた。

「何でも構はない方だから、たゞ御飯を拵へて上げて、小さい人のお守をして上げればそれで

いゝんだもの。——兼の内は坊ちゃんをつれて所中こゝへ来てたつていゝね。それにさつきも言つたやうに、今丁度弟さんが入學試験を受けるので来ていらつしやるから、あそこの家だつて夜になつてもさう淋しくはないわ。」「さうですね。」とおくみは考へてゐた。

「厭？」
「いえ。たゞ私のやうなもので間に合ひますかしらと思ひまして。——お勝手元のことなぞでも本當に何にも出来ないのをごさいますから。」
「大丈夫よ。」

青木さんがたつた一人であつしやるのだつたら、若い女がついてゐるといふ事が、何だか世間の手前などに對しても變なやうな氣もするけれど、それにはちやんと弟さんもうらつしやるのだしするから、そんなに何も心配しなくてもいゝしと、おかみさんはおくみの身になつてから仰しやる。おくみは行くところが極るまでの間、かた／＼自分に取つても都合がいゝやうに思つた。

おかみさんがその事をはがきでお知らせになると、青木さんは御安心なすつた。それでもなるべく来て貰はないで済めばといふ御返事であつた日本製や、帯の巾中の恰好などは、どうしても、きちんとした、上品な小間使らしい女に見えた。

おくみは、電車を下りてどこをどう来たのだつたか、もう分らなくなつた。そこから間もなく、西洋人の名札の出た、白いベンキ塗りの、小さい平家だての西洋館の前を通つて一寸行くと、右手の杉垣のつゞきの中に、青木さんのお家の瓦斯燈が見えた。

「ね、小ぢんまりしたいゝお家でせう。あたりはこんなだしね。——あの二階が青木さんがお仕事をなさる畫室よ。」
おかみさんはかう言つて、先に立つて木戸口をお開けになる。上に見えてゐる二階のこちらの側は、硝子戸の内に白い布が引かれてゐた。

おくみは一足後れて洋傘を差んだ。そこには青木さんのお名前が、黒いペンキで標札に書いてあつた。
おくみは何となく青木さんのところを、だだ廣いばかりで陰氣な、さびれた家のやうに想像して来たけれども、それとはちがつて、小造りな、建つて間もない明るい綺麗な家なのですつとするやうな氣がした。
おかみさんが入口の硝子戸のベルをお押しに

つたが、二三日して、やはりおくみが借りられる事になつた。
おかみさんと二人は、朝、支度をして、白い服を着た料理人の男が、買ひ出しから歸つて来るのを待つてゐた。

四

おくみはおかみさんと二人で山の手線の小さい驛へ下りた。
おくみはいつかこの電車で品川へ行つたときに、そこに今見えてゐた、何かの工場らしい大きな赤い煉瓦の建物や、きつきの牛乳屋の、牛がいづくもゐた標などを、この驛の目印のやうに見て通つた氣がするけれど、このあたりへ下りたのは今初めてであつた。

「もうこゝまで来れば大方来たやうなものよ。」
おかみさんはブリツヂを下りて了ふとかう言つて、帯の間から切符をお出しになる。驛を出て互に洋傘を開く手に、おくみはおかみさんのお土産のハンケチ包みを持つてゐた。
いろんな店なぞの出でゐる、場末らしい町筋を少しばかり行つて、或、貧しい草花の鉢物を乏しく並べた、黒ずんだやうな家と、活動のびら下つた小さい床屋との間の狭い横町へ進入つ

なると、障子のちき内に附いてゐるらしい椅子段からどなたか下りて来られる足音がした。
と、取次に出て来たのは十八九くらゐの、ハイカラな東髪の水の女であつた。派手なメレンスの帯をしめて、丁度店のお安さんのやうな人馴れたところが見えた。
「お家でいらつしやいますか？ 平河でございますが。」とおかみさんが仰しやる。
「どうぞ。と言つて硝子戸の栓を開けてくれる。つゞいて青木さんが氣色で知つて下りていらつした。

「さ、お上り下さい。今日は仕事をよして待つてたんですよ。——林さん、こちらにしよう。そこをちやんと片付けて下さい。」
青木さんは下の間へ通すやうに女の人にさうお言ひになる。
「婆やさんはどこかへ行つたんですか。」
「え、子供をつれて一寸そこまで使ひに。——今のモデルの女。」と青木さんは小さい聲で仰しやる。

「私はこんな妙な風をして来たんですよ。——おくみはハンケチ包みをそこらへそつと置いて、お二人の役から襖の内へ進入つた。

それから、そこを左の方へ折れるまでの間は、汚らしい長家のやうな家ばかり並んだ、ごた／＼したところであつた。
やがて再び幅の廣い通りへ出た。
二人は、粗末な貸家なぞがぼつ／＼立ちかけてゐたりするやうな、草原なぞの多い、寂れたところを近通りして、小さいな家の並んだ上品な通りへ来た。
「まあ珍らしいごさいますこと、妻の穂が出てをりますよ。」
「きれいに作つてあるのね。あの家の裏手になつてゐるんだわ。——あそこを御覽、水引よ、あれは。」
「あんなにして拵へるんでございませぬかね。こちらにも並べてありますよ。赤いのが綺麗ですこと。」
二人はこのやうなことを話しながら、立木なぞの澤山ある、青々とした通りを歩いた。

そこは六疊ばかりの綺麗な一間で、大きな鏡のついた西洋風の圓卓の上に、赤い西洋花が小さい青い壺に、一かたまりさへれて、それが鏡に寫つてゐるのが第一におくみの目についた。
下には、とき色で十字型に色を出した敷物が一枚敷いてあつた。低い小さい臺へかけた變つた經取りをしたテーブルかけを挟んで、青木さんの考案らしい質素な椅子が二つ置いてあつた。
「おくみさん、こゝへおかけなさい。私の椅子はこちらにあるから。」と向うの持つていらつして、
「どうもお急がしいところをわざわざ。」とおかみさんにお禮を仰しやる。
「いえ。いつも午前は何の用事もないんですもの。たゞおくみさんに少しお氣の毒なだけ。」
「ね、とおかみさんはくつろいで冗談のやうに言はれる。
「私は何にも出来ませぬのでございませぬから。とおくみはまぶしきうにこれだけ言つた。
「どうぞ一寸の間面倒を見て下さい。のんきな家だから何でもありませんよ。——婆やはもう昨夜から行先を出してござへやつてますよ。」とおかみさんと二人へから願々に仰しやる。
「いつ立つんです？」

「おくみは、電車を下りてどこをどう来たのだつたか、もう分らなくなつた。そこから間もなく、西洋人の名札の出た、白いベンキ塗りの、小さい平家だての西洋館の前を通つて一寸行くと、右手の杉垣のつゞきの中に、青木さんのお家の瓦斯燈が見えた。
「ね、小ぢんまりしたいゝお家でせう。あたりはこんなだしね。——あの二階が青木さんがお仕事をなさる畫室よ。」
おかみさんはかう言つて、先に立つて木戸口をお開けになる。上に見えてゐる二階のこちらの側は、硝子戸の内に白い布が引かれてゐた。
おくみは一足後れて洋傘を差んだ。そこには青木さんのお名前が、黒いペンキで標札に書いてあつた。
おくみは何となく青木さんのところを、だだ廣いばかりで陰氣な、さびれた家のやうに想像して来たけれども、それとはちがつて、小造りな、建つて間もない明るい綺麗な家なのですつとするやうな氣がした。
おかみさんが入口の硝子戸のベルをお押しに

「一人目でも早く立ちたいんでせうよ。年寄のくせに氣のいらしくした女ですからね。」

「だれでも年取つた人は、かうと言つたらたまりがないんですわ。――坊ちゃんはおれからいかいです。」

「え、相變らず。昨夜から少し歯痛が痛いと言つてぐづぐづ言つてゐます。どうも私のやうなものは子供なんか全く荷厄介だ。」

「それや無理ありませんわ。今日までだつてよくやつておいでになつたやうなものですからね。」

おくみは一人外の方を見てゐた。

「どうして子供なんでものが生れるのかな。餘計な事だと思ふんだけど。」と、青木さんは兩の巻煙草を取つて火をお付けになる。

「全くね。」とおかみさんは口もとでお笑ひになつて、

「あなた、どうぞお構ひなさらないで下さいましな。お客さまおやないんですから。」と、さつきの女の人にさう仰しやる。その人が銀色の盆に紅茶を入れて来たのであつた。

「これは家の山羊の乳ですよ。」とおくみに仰しやりながら、青木さんは手のついた、黒ずんだ色の、變つた面白い小さい蓋から、三人の紅茶を注いで来た。

「さやうなら。――どうぞお心安くお願ひ申します。」

「私こそどうぞ。」とおくみは言ひ後れたやうにかう言つて下り口に腰をついた。

「これから外は追々暑くなりますね。」

「段々に厭になつてまゐりますわ。どうぞあなた、あちらへいらしつて下さいまし。すみませんでございまして。」と、林さんはさきくに挨拶をして格子戸を締める。縫直しの着物の、色の變つたところが出てゐるのを着てゐたりするのが何となく氣の毒で、おくみはそれを見まいとつとめるやうな心持がした。

こちらでは青木さんが、おかみさんにこの女の人の話をしてゐられた。

「くみちゃん、折角のが冷たくなつたわ。」

おくみは馴れない手附をして、半冷たくなつた紅茶を飲みながら二人のお話を聞いてゐた。

青木さんはサンドキツチを一つ二つお上りになる。

モデルの女の方は赤坂の方から来るのださうであつた。午前に二時間の割で飾つておいでになるのださうで、まだ後十日くらゐは来てくれなければと青木さんは言はれた。さういふモデル

へ乳をお注しになる。

「冷たくならない内にお戴きなさいな。」

おかみさんとお二人は匙を取つてそれを飲みながら話をされる。おくみは氣を利かして、お土産をそこへ出す積りで席を立つた。

さつきの三疊へ出てハンケチ包みを取つて、次の間を覗くと、そこにはモデルの女の人が、すゝもなやうに障子のところにぼつんと坐つて、新聞を拾ひ讀みしてゐた。外の土の上には小さい花壇が作られてゐて、赤いゼラニウムや、その外の花の色が目立つてゐた。

「どうぞこちらへいらつしやいませ。」と、女の人は愛想よく迎へて新聞を片づける。そこは青木さんの弟さんの部屋にしてあると見えて、青い羅紗のかゝつた一間張の机の上に、英語の辭書やインキ壺などが置いてあつた。

おくみはこの女の人にさう言つて菓子鉢にするものを出して貰つた。向うに、茶の間の四疊半と、臺所と湯殿と、もう一間附いてゐるらしかつた。どこもきちんと片附けられて小ざつぱりしてゐた。四疊半には、坊ちゃんの、紙のついた小さい着物が柱の釘にかけてあつた。

女の人は不馴れた容子でそちこちの押入を開けたりして、有り合せの西洋風を一枚出してく

れた。

「え、これで結構でございます。」と禮を言つて、おくみはそれへ、ハンケチから出した、バセリをそへたサンドキツチをよそつた。包みのナブキン紙には妻楊枝まで附いてゐた。

「林さんとかいふ方をこゝへ呼んでお上げなさいよ。」とおかみさんが青木さんに仰しやる。

「女の人は用事かと思つて出て来たが、――いえ、私は澤山でございます。一寸歸りに用足しをして行くところがございますから、これでおいとまいたします。」といふ。

「さうですか。もう少しばらくゐたつていゝでせうか。――ではすまないが二階のテイブルの上で置いてある手紙をポストへ入れてくださいませ。明日は必ず坐つて貰ひます。」

青木さんは灰皿に煙草を消しながら仰しやる。

「女の人は二階へ上つて行つた。おくみは袋裏に出て三疊に立つてゐた。女の人は手紙を懐にはさんで、帯揚げを結び直しながら下りて来た。――何かお忘れになりましたか？」

「いえ、――一寸と、林さんは次の間へ這入つて、そちらの方を向いて手紙ながら、懐鏡を出して、懐中時計でそこ／＼に時を直してこ

か。とおくみは訊いた。
「それへふすまと言つて小麥の皮の粉になつたのを交せて食はずんです。」と青木さんが仰しやる。

おかみさんはそれから毎日の買物やなにかについで訊かれた。
「日の前の外の日向を、青く光つた蟲が、青い縁を引くやうに筋を附けて飛んでゐる。」
やがて、婆やが坊ちやんを伴つて歸つて来た。

五

おかみさんは晝室からお下りになつて、奥の方へ出て御覽になつたりした後お午近くに歸つて行かれた。
「では婆やさんが立つたらこの人をつれていらつしやいな。一通りのことだけして置けばあとはどうでもいゝんだから。家の内といふものはさう何から何までしようとしたつて限りがないものだからね。——久男ちゃん、今度はこのお嬢ちやんに伴つて来てお買ひなさいよね。さうさう、あそこで電車に乗つて、それからまたもう一つ電車に乗つてね。——よくお嬢ちやんの言ふことを聞いて大人しくしていらつしやいな。」
久男ちゃんが無理を言つて困らせたりすると、

お嬢ちやんは直ぐ泣いてをばちやんの處へ歸つて了ひますからね。久男ちゃんはずつきお嬢ちやんを大好きだつて言つたでせう？——
おかみさんは洋傘をおさしになつた片手に、鬘の後の毛の下るのを氣になさりながら、そろそろ歩いてお行きになる。おくみは小さい久男さんの手を引いて、さき程通つて来た、白い西洋館の先まで送つて行つた。
「たゞ、水道がないのが一寸困るわね。風呂だけは青木さんの弟さんが汲み込んでくれると言つたけど。」
おかみさんは別れるまであれこれ言ひ足して行かれた。
お母さまのいらつしやらない小さい坊ちやんは、もうおくみにおれになつて、人なつっこさうに手に攜つて歸つておいでになる。向うの電車の音が、あたりの青い木立の中に軋つて聞える。
後から水色に染つた洗濯車の車が来た。
おくみはおかみさんの行つてお了ひになつたあとを、しまひにまた振り返つた。ずつと前に千駄木のお家から西洋人のところへ行つたときに、寒い雨のしよぼ／＼降る中を、おかみさんが、小さいのを負つて車屋まで附いて来て下さ

女の持つてゐる籠に下りて来る。一つは半ば戸口に這入りかけてゐる。女の足の下には、見たことのない異つた草の花が咲いてゐる。一間程の幅の、珍らしい裝飾であつた。
「こゝへ出て御覽なさい。向うの森がすつかり見えますよ。」
青木さんは、おくみがさうして外を見て了んでゐた籠のやうに言はれる。おくみは赤い鳥から目をはなした。
青木さんは起き直つて乳を注がうとなさる。
「すみませんでございました。と、おくみは壺を取らうとした。
「いゝんです。私が勝手にやるから。」
「さうでございますか？ ではまたあとでゆつくり見させて戴きますから。と、おくみは晝室をもこちからたゞ一寸見たばかりでそこ／＼に下へ下りた。このお家へ来て青木さんに馴々しく對してゐるやうに見えては、婆やの前に何となく變なやうに氣が置けるからであつた。
「どうぞお二人でこゝで召し上つて下さいな。何にもないのですみません。」と、婆やは、おくみを目上の人のやうに、坊ちやんと二人で先に食べさせようとした。

つたりした事なぞが、どうしてか思ひ出された。あのときにはおくみは生みの母にでも別れて出るやうに悲しくて、襦の中でおる／＼と泣いて行つた。
おくみはそのときまだ年の行かなかつた自分が、おかみさんに推へて貰つた不慮着を下したのへ、赤い色縞子の帯をして、あそこの家を出た妻があり／＼と目に浮んだ。あれからでもいゝんな事をしに来られたおかみさんも悲しい人のやうに思はれた。
「おや、下駄が脱げましたの？ 早くおはきなさい。——まあ坊ちやんはお手がずるぶん汚くなつてゐるんですね。」
坊ちやんは白地に赤い筋が雨の絲のやうに這入つた、厚い浴衣のやうな木綿の着物が、五月らしく着せてあつた。目もとだけは青木さんに似てゐられるやうだけれど、あとはすつかりお母さまに似てゐられるのらしい。ひよわい、沈んだやうなお子さんである。片つ方の人差指を口に銜へてとぼ／＼とお歸りになる。
青木さんは臺所の水口の前にこゝんで、バケツに入れた山羊の食料の豆腐がらへ、鹽を振つて混ぜてゐられた。坊ちやんはおくみの手を引張つて、格子戸の方から上らうとなさる。

間もなくお午になつた。

青木さんは、サンドキツチを食べたから、午は乳だけでいゝと言はれたさうで、おくみは婆やが生温かくして壺に入れたのを、コップと共に盆に載せて二階へ持つて行つた。
青木さんは小さい方の室に、蔓の寝椅子に長まつて、少し開けてある硝子戸を通して外を見てゐられた。欄下には、下の西洋櫛の木が、大きな柔々とした青葉を揃へてゐる。青い空には低い雲が迷ふやうに消えて行つた。
おくみは寝椅子の側の物置臺へ乳を置く。
「さつきからそこへ小さい鳥が来て啼いてゐるんだが。——もう行つて了つたかな？」と、青木さんはちつとしたまゝさう言つて耳を澄ましてゐられる。

「いゝお天氣でございますね。」と言ひつゝ、おくみはそこにゐるで、青木さんの足もとの方の壁にかけてある、珍らしい壁かけの晝を見てゐた。
それは女の神さまらしい一人の西洋の女が、青い鳥籠の戸を開けて、木の上に棲つてゐる七羽の赤い小鳥を呼び入れてゐる圖案で、すべてが、色の珍らしいさま／＼の布を貼り合はせて晝にしてあるのであつた。鳥は木をはなれて

お嬢ちやんは直ぐ泣いてをばちやんの處へ歸つて了ひますからね。久男ちゃんはずつきお嬢ちやんを大好きだつて言つたでせう？——
おかみさんは洋傘をおさしになつた片手に、鬘の後の毛の下るのを氣になさりながら、そろそろ歩いてお行きになる。おくみは小さい久男さんの手を引いて、さき程通つて来た、白い西洋館の先まで送つて行つた。
「たゞ、水道がないのが一寸困るわね。風呂だけは青木さんの弟さんが汲み込んでくれると言つたけど。」
おかみさんは別れるまであれこれ言ひ足して行かれた。
お母さまのいらつしやらない小さい坊ちやんは、もうおくみにおれになつて、人なつっこさうに手に攜つて歸つておいでになる。向うの電車の音が、あたりの青い木立の中に軋つて聞える。
後から水色に染つた洗濯車の車が来た。
おくみはおかみさんの行つてお了ひになつたあとを、しまひにまた振り返つた。ずつと前に千駄木のお家から西洋人のところへ行つたときに、寒い雨のしよぼ／＼降る中を、おかみさんが、小さいのを負つて車屋まで附いて来て下さ

六

よ。私は坊ちやんのお給仕をしといて、あとで一人戴く方が片づいていゝんですから。」
氣のいゝ婆やは心安くかう言つて、坊ちやんの燵元へナブキンを挿んだ。
「何だか私をお客さまのやうになさるわ。」
おくみは困つてもぢ／＼してゐた。
坊ちやんは食べかけて、また齒が痛くなつた。婆やが鹽水を含ませたのが浸みて、ひどく泣き出された。
食事が済んでから、おくみはその痛む齒へ、婆やに買つて来て貰つたケリツソートを附けたりして、やうやく坊ちやんを泣寝入りに寝せつけて、一人枕もとに坐つてゐた。
全て村かなどのやうに、あたりのひつそりしてゐる土の上を、黒い大きな鯉が這つた。

その時青木さんは、フランスにゐられた仲間會へ行かれて留守であつた。弟さんは下ではうるさいからか、二階の晝室へ上つて晝をしておいでになる。下では婆やとおくみとが茶の間の四疊半で坊ちやんの相手になつたりして、電氣の下に坐つてゐた。
おくみは夕方に行李が着いたので、手帳を着

物に着換へてゐた。婆やは明日立つのだから、

「坊ちゃんはお眠いでせうよ。今夜はこゝへお床を取つて上げますからもうお寝みなさいな。——おくみさん、済みませんがこれと着換へさせて下さいませんか。」

婆やはあちらの四疊の押入を開けて蒲團などを出して来た。坊ちゃんは寢床へお這入りになるとまた目がさえたやうに、しばらくはしやいでいらつしたが、その内にくたぶれて寢人つてお了ひになつた。齒の痛い方の片頬が熱を持つたやうに膨れてゐた。

「やつとお寝みなすつた。かういふ小さいお子さん一人にでも随分手がかゝるんですから、これから少くの間お氣の毒でございませぬ。と、婆やはほつとしたやうに言つて、長火鉢へ坐つて煙草を喫んだ。

「どうもお母さまがお弱いせむかして、この小さいのがいつもどこかこゝかお悪いのでね。一ころなどは少し物を召し上ると直きもどしてお了ひなすつたものですよ。」

どこかの誰の取れない言葉で、あれこれと語して、さういふひよわいお子さんが、お母さまなしに、不自由ばかりして来られたのだから、こ

の人がだれよりもお可哀さうでならないと言ひながら、口を少し開いて、睫毛の長い目を閉つてゐられる坊ちゃんの寝顔を見守つた。

「それはお母さまがゐるなられた當分しばらくは、夜裏となく母さまへ行かう、母さまへ行かうつてお泣きなすつてね。それが丁度旦那が久しく不眠症で困つていらつしたところで、折角やう／＼のこと夜中時分にどうやらお眠りなすつたらしいところを、この人が目をさましてお泣きになると、私は身を切られるやうでしたよ。——任方がないから、眞つ暗いのに負つて裏の方へつれて出て、人の寢入つてる夜中にそこらを負り歩いてすかしながら、お可哀さに私までおろ／＼泣いて、この裏どなりが空家だつたときの屋根下へ立つてゐた事もありました。——どうやらこのごろは大分開きわけがついて、母さま／＼と仰しやるのだけは止んだんですけど、お體の方はまだあゝいふ風にお弱くつていらつしやいますのでね。——私は今度このお家を出るのについて、このお子の事が一等氣になりますよ。あなたのやうない方がずつとゐて下さるなら言ふことはありませんけど、さういふ譯にも行かないし。——いづれどこからか奥さまがお見えになるにしても、餘つ程苦

勞でもしていらつした方でない、生んだ子のやうに顔の面影を見ては行けないものですからね。私ならかまはずびし／＼叱つても上げる代りに、このお子なら目に入れても痛くないんですけど。」

婆やはしんみに坊ちゃんの事を氣にしてゐるやうであつた。

この人は青木さんに七年の間ついてゐたのださうである。坊ちゃんは青木さんの洋行に立たれてから四月ばかりして、お留守中にお生れになつたので、坊ちゃんが三つになられるまで向うにゐられた青木さんには、子供をそれまでにする苦勞が分つてゐない。そんなことから、あの人はこのお子に對しては人の子のやうに冷やかだから、はたのものは一倍このお子によくして上げなければいふやうなことを婆やは言つた。

おくみは後にはそれらの譯がよく分つたが、とにかく今婆やが言つただけでは、奥さんはこれなりでもう歸つていらつしやらないやうな容子であつた。

「婆やさんこれまで大抵ぢやございませんでしたわね。と、おくみは自分がその身になつて見るやうにかう言つた。

「いゝえ、私はいふ人間で、んから役に立たないもんですから、まあせめて毎日の物費りでも少くなるやうにと思つて、自分の事のやうにつましくやつて来たつもりですが、どうもそれが却つて青木さんのお氣に入らないやうな場合がありましたね。そこへ行くときといふものは氣が小さいものですから、一寸したもので、また變るかと思つて取つては、そこらが汚らしいと言つては叱られたりね。よく二人で口喧嘩をしたんですよ。さつきもお前が行つて了つたら家がせい／＼するだらうつて悪い顔をしていらつしやるんですよ。」と婆やは笑つた。

「でも氣はいふ人ですから、私を可哀さうだ可哀さうだと言つて、たうとこの年まで置いて下さつたんです。私も随分不幸な人間でしてね。」

婆やは息子が一人ありながら、いろんな譯があつて、その子にかゝることが出来なくて、五十六の年に、一人で、こちらにゐた她の方へたよつて来て、それからこゝへ來公に來たのださうであつた。それがこの冬ごろから、息子の方から頻りに歸つて来てくれと言つて、しまひにはわざわざ人をよこしたりした。それには一寸込入ればならないので、たうと今度は立つて行くの

だ、かう言つたやうな事をぼんやり話した。

「おくみさんはこちらでお生れなすつたんでせうからようございませぬ。田舎は萬事がうるさくてそれは厭です。」

「でも私は家といふものがないんですし、言はばたつた一人ぼつち見たいなものですから詰りませんわ。と、おくみは爪先に目もとを集めて、さつきから半分外の事を考へてゐた後にかう言つた。

「それでもまだあなたはこれから自分の家が出て来るんですもの。お氣に似合はずよく出来ておいでだから自分にもお仕合せですよ。何でもきちんとしておいでですとね。と、婆やはおくみの愛の形からをなつかし／＼に見入つた。

二人は十時前までそこに坐つてゐた。婆やは小遣帳をつけた後に、眼鏡をかけて、貸本屋から借りた古けた講談本を讀んだ。

おくみは行李からレイス絲を出して、いたづらに、小さい肩掛袋を編みかけた。青木さんの弟さんは退屈さうに下へ下りて、そこらをごそさせていらつしたが、再び二階へ上つておいでになつた。

「洗吉さんは取かしがりやですからね。あなたがいらつしたので極りが悪いんですよ。いつも

だ、と退屈するとこゝへ来てごろ／＼していらつしやるだけだ。」

婆やはまだいろいろな話をしたけれど、奥さんの事については、あれきりで何にも言はなかつた。

「おくみさん、旦那は今夜は終ひごろの電車でなくてはお歸れないでせうからもう先にお寝みなさいな。今日はあなたもお疲れたし。」

「いゝえ、私はこの間から馴れて了ひまして、夜分は幾時までも起きてゐるんですよ。平河さんのお店では、二時ごろまでお客さまがおありになることがあるんですからね。」

七

おくみは婆やを手傳つて座敷の椅子やタイプルを片よせて青木さんのお床を取つて置いた。

翌朝おくみが一人四疊で目を開くと、婆やは已にいつの間にか起きて、板の間でこゝ／＼と仄暗い水使ひの音をさせてゐた。

おくみは襦子の戸を開けてきちんと晝の着物の帯をしめた。

そこらの、まだ露ばんでゐるやうな土の上には、ちやんと、すが／＼しく霧の目がついてゐた。どこか裏の方の木のうで、雀の子がまだ目

をさましたばかりのやうに暗きうに集つて暗いてゐる。いつも着て来た寝間着をたむにも、どことなく町中とちがった朝の気分、何だか自分が奮分しつとりと居着くところへ来たやうな心持がするのは、からした、いろんな人のごたごたもない、たゞの家だからだろうか。おくみは、平河さんのおかみさんたちが、いつもまだ今時分は、狭いところへ固まつて寝てゐられるのが目に見えた。あの、テーブルや椅子がどんよりと集め寄せられてゐる席の戸を、お安さんがいつまでも眠さうな目をして開けに行き、客子なども考へ返された。

坊ちゃんも昨夜の茶の間に、そのまゝ、すやすやと寝てゐられる。あちらのお二人の方は、まだ夜のやうに暗く戸が開つてゐる。
「まああなたもつとゆつくり寝んでいらつしやれば、いゝものを。私はあなたが目さめないやうにと思つて、そつとこゝらの事をしてみたのに。」と、無理におくみのために湯殿へ水を取つてくれた婆やは、漆喰の上に立つて前垂で手を拭いた。昨夜あれから一人考へて、どうでも今日午後の汽車で立つことにしたのださうであつた。
「私はそれまでに、ぜひ一軒いとまをひに行つ

て来たいところがあるので、手廻しに少し早く起きたんですよ。」
「では随分お早いですね。私が出ることだけは何なりといたしますから、あなたはい、加減にしているんなお支度をなすつて下さいよ。」
「私は支度も何も、たゞもう着替えへ着換へれば、いつでも立てるやうにしてあるんですよ。——おや、うっかりしてました。一寸待つていらつしやいな。くせ直しのお湯を少し取つて上げますから。」
「いゝえ、よござんすよ、婆やさん、いつでもたゞかややつて置くんですから。」
「さうですか？ 何ならついでさうさはありませんよ。」

おくみは髪梳へ洗面器の水をつけて、柱の鏡に映して髪を掻き上げた。婆やが、表の戸を開けて、裏手の草つばへでも廻つて、青いものを見ていらつしやいな、と言つてくれる。
おくみは徐かに戸を開けて自分の下駄を履いて、表の戸を開けに行つた。その邊もすつかり掃いて敷石に水まで打つてある。郵便受に手を入れて見たがまだ新聞も来てゐなかつた。向ひの家の硝子燈には夜のつゞきの灯が白けて點

つてゐた。早くから動かしらしい電車の警笛が、間近さうに、手に取るやうに聞えて過ぎた。
おくみはこれとてする事がないので、婆やがいゝといふのを無理に器を出して貰つて、中庭の方を掃きに行つた。
物置の横手から廻つて行くときに、裏の山羊がもう起きて小屋から出てゐるのが見えた。裏には一寸した地面があつて、山羊のゐるところと小さい島とが作つてある。幾二三枚ばかりに青く生えてゐる芝生にはベンチやぶらんこも拵へてあつた。
山羊は、左の方の隅を五坪ばかり低い欄で圍つて、それへ二匹飼つてゐる。
欄の中には松の木が五六本植ゑられて、その下に山羊の這入る小さい小屋が出来てゐる。片方に、二匹に一間半ばかりの欄が四五尺程の高さに作られて、兩方からそれへ上り下りが出るやうに板がかゝつてゐる。白い體をした頭の長い山羊は、大きな赤い乳房をだらりと垂れて、一匹は欄の柱に頭を擦り／＼していたづらをしてゐる。他の一匹はおくみがこちらにぞんぞんをみると、欄の側まで歩いて来て、頭を出してぢつとこちらを見てゐるのであつた。
欄の横手の高は、半分が草花の床になつてゐ

て、黒い柔かい土に、いろんなものが植ゑてある。こちらには玉蜀黍と豆とが作られてゐる。後に立つてゐる栗の木、青葉の間には、青い匂ひのする栗の花がうす黄色に咲いてゐる。それらのすべてが、まだ日の出ない朝のしづかな朝の中に、青い眠りからさめたやうにしづとりしてゐる。生垣の外は霧が間近に下りてゐる。

そここゝに白い野天の花がちらほら見えた。おくみはくゞり戸を開けてこちらの庭へ這入つた。雨戸の閉つてゐる六疊の前の、色とりどりの草花に目さめるやうな気がする。おくみは座敷の方の片隅から掃いて行つた。
手水鉢のそばの南天の木に、白い花がさいてゐる。一つ／＼拵へたやうにあざやかな葉の蔭に、蜘蛛のやうな蜘蛛の巣がかゝつたのへ、夜露のしめりが小さい粒になつてゐるのも早い朝らしかつた。

やがて半分ばかり掃除が出来たときに、座敷の雨戸の中で目ざましの音がちり／＼と鳴つた。しばらくして戸袋の戸が開いた。
青木さんが寝間着のまま、雨戸をお開けにな

すか。と、おくみは聞へ行つて他の人が目さめないやうに小さく言つた。
「寝られましたか。」
「えい、よく寝まして寝功をいたしました。私が開けませう。」
「昨夜は會で少し酒を飲んだので目が赤いでせう？」
おくみは上へ上つて徐かに寢床を覗んで置いた。
土の上を掃いて了つて裏へ出ると、青木さんが山羊の欄の中で乳を搾つておいでになる。
「まあ、そんなに取りますのでございませうか。」

おくみははじめて見るので珍らしかつた。山羊は二匹共欄の柱へつながれてゐる。青木さんは小さい臺へ腰をかけて、兩手で腹の下の乳房を搾み下すやうにして、下へ置いたバケツへ乳をお搾りになる。次にはもう一つの方へ行かれる。山羊は大人しくぢつとしてゐる。
「あちらではこんな事は小さい女の子がしてゐますよ。よく出るでせう？ これには少し上手下手があるんですよ。」

毎朝兩方で一升位取れるのださうで、みんなで飲めるだけ飲んだ餘りを潤めといつて牛酪な

ぞにするのだと言はれる。
「おくみさんもこれからお飲みなさいよ。牛乳よりも餘つて程養分が多いんですよ。」
欄の隅には小屋から出した敷草が擧げられてゐた。雀が二三匹小屋の屋根へ下りて啼いた。

八

七時を打つと婆やは洗吉さんを起した。洗吉さんは眠さうな目をして掃枝を擧げて水口から下りて行かれた。六月に高等工業の試験をお受けになるので、その準備に神田の方の學校へ通つてゐられるのださうであつた。學校は八時に始まるので、婆やはせき立てて一人先に御飯に坐らせて、お給仕をしながらお掃當をつめた。
おくみは坊ちゃんを起して着物を着換へさせたり、顔を洗ひにつれて行つたりした後、そこら掃除した。

洗吉さんが貞打帽子に袴をはいて、眠い／＼と仰しやりながら出て行かれてから、おくみは婆やを手傳つて、みんなの御飯の支度をした。おくみは婆やが切つて来た麴麴を、長火鉢へ餅網をかけて焼いて、バターをつけて、座敷のテーブルの上に運んだ。
婆やは山羊の乳を温めて黒い表へ入れた。

「さ、もうそれでよござんすから、あなたも行って一緒に坐つて下さいよ。その積りで麴餅も餘計にあれしんですから。」
 坊ちゃんもあちらから呼びにいらつして快におつかまりになる。
 「半階はお厭ぢやないでせう？　ぢやいらつしやいよ。一度だけですよ。もうお夕飯からは厭でもあなたがすつかりなさらないやならないのだから。」
 「ぢや私はお給仕にだけ参りますわ。」
 おくみはかう言つて坊ちゃんに附いて行つた。
 青木さんはティブルにかゝつて新聞を読んでゐられた。ティブルの上には小さいベイズに、新しい黄色い花が挿されてゐた。
 「坊ちゃんはお嬢やと並んでおかけなさいませう？　ね？」
 おくみは黒い壺の乳を二人に注いだ。
 「あなたもお上んなさい。坊やはほつとけば一人で食べるんだから。」と、青木さんは小皿へ麴餅を挿んで下さつたり、乳をついだりして下さる。婆やが、洋壺に入れた玉子の半熟に、小さい匙を添へて三人に持つて来た。
 おくみは仕方なく一緒によばなければなら

なかつた。
 「坊やはこのお嬢やんと婆やとどつちが好きだい？　婆やの方が好きかい？」と、青木さんがお訊きになる。
 「それを食べてからお言ひなさい。そんなに頬ばつてちや口は利けないよ。」
 「お嬢ちゃんも好き。」と坊ちゃんが言はれる。
 「も好きか。」
 「どつちも好きでございますつて。」と、おくみは微笑みながら、坊ちゃんの膝の上にごぼれた麴餅の屑を拾つた。
 「おくみさんは是は好きですか。——尤も近頃は極端なふざけたやうな重も出ますけれどね。——あとで二階へ上つて私の重いたのを見て下さい。二枚ぐらゐは出来のいいものもあるから。」と、青木さんはおくみに話しかけられる。
 おくみはどう言つていいのかわからず、自分かちやんとした一人前の女かなぞのやうに言はれるのが極りが悪いやうであつた。
 「私は何にも分りませんのでございませうか。」とおくみは顔を赤らめた。
 婆やは小さい皿にお漬物を入れて持つて来た。
 「おくみさん、御遠慮なさらないで澤山召し上

の泡を立ててゐる手許へ来て手んでおいでになる。
 「あそこへ行つて山羊を見ていらつしやいませ。二つとも棚の上へ上つてあんな事をしてゐますでせう。をかした山羊ですこと。」
 ぶらんこの側の物干綱へ洗つた物をかけて置いて、坊ちゃんを伴つてこちらへ歸つて来ると、八百屋が御用を開きに來た。何を取つといていか分らないから歸した。すぐ近くだといふから、あとでだれかが行つてもいいと思つた。
 おくみは坊ちゃんの手を引いて、何かの廣い部屋が太鼓を叩いて驅れて來たのを見に出たりした。
 やがて家へ這入つて、坊ちゃんのお相手をしたがら、昨夜の編物を出して編んだ。坊ちゃんは壁に足を投げかけて仰向きにお轉びになつたまま、物尺を持つて塵を掃つておいでになる。
 さうかうしてゐる内に、いつしか十一時過ぎになつた。モデルの女の人は日課を済まして歸つて行つた。肉屋が挽肉を持つて來た。
 坊ちゃんは二階の棒子段を上つたり下りたりして動き廻つてゐられたが、一人で厭々して何かくれるとお言ひになる。おくみは眞入らずを開けて、いろんな鹽や薑物などを開けて見た。

れよ。お乳はまだお代りが温めてあるんですよ。」
 おくみは何だかしまひまでもち／＼するやうな氣がしてゐた。
 御飯が済んでから、婆やはそこらを探きはじめた。おくみも襦袢をかけてバケツの水を取り代へに下りた。
 さうしてゐる内にモデルの林さんが今日は大分めかして出て來た。こちらへ這入つて來ると、六疊で叩き人形のお相撲を並べて足を投げ出してゐられる坊ちゃんを、後から手で目隠しをした。
 林さんは間もなく晝室へ上つた。婆やも、やがてそこ／＼に着換へをして出かけた。
 「あのね、おくみさん、私は旦那に黙つて出て行くんですからね、もし後でお訊きになつたら、一寸自分の買物に四谷あたりまで出かけたくんですつて、たゞさう言つて下さいました。大抵お午に間に合ふやうに歸つて來ますから。」と、坊ちゃんのいらつしやらない處へ、やうで、小さい聲でかう言つた。
 「坊ちゃん、婆やがいとお土産を買つて來て上げますから、おとこしくしてお嬢やんと遊んでいらつしやいよ、ね。」

朝が早いから、もうお腹がすいたのただらけだ、婆やはねつから歸つて來なかつた。
 おくみはさつきから度々時計を見た。もう五分ばかりで十二時になる。欄の床に馬鈴薯の買ひ置きがあるので、それをあしらつて、さつき牛肉を煮て先にお午にしようかとも考へた。
 青木さんが退屈なすつたやうにとこ／＼二階を下りていらつした。
 婆やはやつと、おくみがお午の後じまひをしてゐるところへ氣を急いだ容子で歸つて來た。
 「お午にはおまごつきになつたでせうね。どうもすみませんでございました。つい話が長くなつたものですから。——どうぞそれはさうして下して下さい。私がしますから。」と言ひつゝ、汗ばんだ顔をして帯を解く。
 「實はね、旦那に内證で一才奥さんのところへお暇をひに行つて來たんですよ。あの方には随分よくして戴いたんですからね。」と、婆やは人に物を得らざるやうに、腐とおくみにかう言つて、押入から不審の着物を出したが、
 「いつそもうこの儘にして置ませうよ。おき汽車の時間が來ますから。」と言ひながら、手拭で顔を拭いた。
 青木さんは坊ちゃんを伴つて後の原へ出てゐ

朝が早いから、もうお腹がすいたのただらけだ、婆やはねつから歸つて來なかつた。
 おくみはさつきから度々時計を見た。もう五分ばかりで十二時になる。欄の床に馬鈴薯の買ひ置きがあるので、それをあしらつて、さつき牛肉を煮て先にお午にしようかとも考へた。
 青木さんが退屈なすつたやうにとこ／＼二階を下りていらつした。
 婆やはやつと、おくみがお午の後じまひをしてゐるところへ氣を急いだ容子で歸つて來た。
 「お午にはおまごつきになつたでせうね。どうもすみませんでございました。つい話が長くなつたものですから。——どうぞそれはさうして下して下さい。私がしますから。」と言ひつゝ、汗ばんだ顔をして帯を解く。
 「實はね、旦那に内證で一才奥さんのところへお暇をひに行つて來たんですよ。あの方には随分よくして戴いたんですからね。」と、婆やは人に物を得らざるやうに、腐とおくみにかう言つて、押入から不審の着物を出したが、
 「いつそもうこの儘にして置ませうよ。おき汽車の時間が來ますから。」と言ひながら、手拭で顔を拭いた。
 青木さんは坊ちゃんを伴つて後の原へ出てゐ

られるのであつた。

「旦那が何か仰しやいましたか。」

「いえ、青木さんはたゞどこかへ行つたのかつて仰しやつただけで、他に何にも仰しやりやしません。たゞ、今日立つと言つたけどどうする積りでゐるのかしらと仰しやつていらつしやりました。——ではどうしても五時のお立ちになるんですか？」

おくみは濡れた手を拭いてこちらへ来た。婆やが留守の間の坊ちやんの事を尋ねた。

「私は今も奥さんといろ／＼坊ちやんの話をして来たんですよ。奥さんが初めから終ひまであのお子さんの事を言つてお泣きになるんでせう。どうかして出来る事なら自分で伴つて来て下さいね。」

「え、私は何にも言やしませんから安心していらつして下さい。」と、おくみはすべての事は分らないけれど、さう言つて受合つた。

「あ、旦那が何か仰しやりましたか。」

「いえ、青木さんはたゞどこかへ行つたのかつて仰しやつただけで、他に何にも仰しやりやしません。たゞ、今日立つと言つたけどどうする積りでゐるのかしらと仰しやつていらつしやりました。——ではどうしても五時のお立ちになるんですか？」

おくみは濡れた手を拭いてこちらへ来た。婆やが留守の間の坊ちやんの事を尋ねた。

「私は今も奥さんといろ／＼坊ちやんの話をして来たんですよ。奥さんが初めから終ひまであのお子さんの事を言つてお泣きになるんでせう。どうかして出来る事なら自分で伴つて来て下さいね。」

「え、私は何にも言やしませんから安心していらつして下さい。」と、おくみはすべての事は

分らないけれど、さう言つて受合つた。

「あ、旦那が何か仰しやりましたか。」

「いえ、青木さんはたゞどこかへ行つたのかつて仰しやつただけで、他に何にも仰しやりやしません。たゞ、今日立つと言つたけどどうする積りでゐるのかしらと仰しやつていらつしやりました。——ではどうしても五時のお立ちになるんですか？」

おくみは濡れた手を拭いてこちらへ来た。婆やが留守の間の坊ちやんの事を尋ねた。

「私は今も奥さんといろ／＼坊ちやんの話をして来たんですよ。奥さんが初めから終ひまであのお子さんの事を言つてお泣きになるんでせう。どうかして出来る事なら自分で伴つて来て下さいね。」

「え、私は何にも言やしませんから安心していらつして下さい。」と、おくみはすべての事は

「あ、旦那が何か仰しやりましたか。」

「いえ、青木さんはたゞどこかへ行つたのかつて仰しやつただけで、他に何にも仰しやりやしません。たゞ、今日立つと言つたけどどうする積りでゐるのかしらと仰しやつていらつしやりました。——ではどうしても五時のお立ちになるんですか？」

おくみは濡れた手を拭いてこちらへ来た。婆やが留守の間の坊ちやんの事を尋ねた。

「私は今も奥さんといろ／＼坊ちやんの話をして来たんですよ。奥さんが初めから終ひまであのお子さんの事を言つてお泣きになるんでせう。どうかして出来る事なら自分で伴つて来て下さいね。」

「え、私は何にも言やしませんから安心していらつして下さい。」と、おくみはすべての事は

分らないけれど、さう言つて受合つた。

「あ、旦那が何か仰しやりましたか。」

「いえ、青木さんはたゞどこかへ行つたのかつて仰しやつただけで、他に何にも仰しやりやしません。たゞ、今日立つと言つたけどどうする積りでゐるのかしらと仰しやつていらつしやりました。——ではどうしても五時のお立ちになるんですか？」

おくみは濡れた手を拭いてこちらへ来た。婆やが留守の間の坊ちやんの事を尋ねた。

「私は今も奥さんといろ／＼坊ちやんの話をして来たんですよ。奥さんが初めから終ひまであのお子さんの事を言つてお泣きになるんでせう。どうかして出来る事なら自分で伴つて来て下さいね。」

「え、私は何にも言やしませんから安心していらつして下さい。」と、おくみはすべての事は

「あ、旦那が何か仰しやりましたか。」

「いえ、青木さんはたゞどこかへ行つたのかつて仰しやつただけで、他に何にも仰しやりやしません。たゞ、今日立つと言つたけどどうする積りでゐるのかしらと仰しやつていらつしやりました。——ではどうしても五時のお立ちになるんですか？」

おくみは濡れた手を拭いてこちらへ来た。婆やが留守の間の坊ちやんの事を尋ねた。

「私は今も奥さんといろ／＼坊ちやんの話をして来たんですよ。奥さんが初めから終ひまであのお子さんの事を言つてお泣きになるんでせう。どうかして出来る事なら自分で伴つて来て下さいね。」

「え、私は何にも言やしませんから安心していらつして下さい。」と、おくみはすべての事は

九

おくみは物を出しに四疊の間へ行つたとき

その柱に、忘られたやうにかゝつてゐるめくり障子が、いつまでも一つ目を示した儘になつてゐるのを見て、固めてそれを割がして来た。婆やが行つて了つて、おくみが一人になつてから、丁度一週間といふものがそ／＼と立つた。

おくみは一人でこ／＼と、出来るだけの事をして行つた。手の空かないときなどは洗吉さんが使ひたさずして下さるし、青木さんでも二階などの掃き掃除や何か自分でして下さるのでどんなにか助かつてゐる。大抵のものは廻つて来てくれるので、おくみは一々外へ買ひに出たりする世話がなくてすんだ。洗濯石鹸やマツチや元結のやうなものまで坐つてゐて用が足せ

た。それにみなの方が何でもおくみにするだけの事で辛抱してゐて下さるので、おくみは考へてゐた程一人でまごつく事もなく、どうかからかやつて行けた。

たゞ困る事は、これまで、餘りしつけてゐないので、煮物の加減などが不安であつた。その日その日のおかずの取り合せにも氣を使つた。「どうも遅くなりました。もう電氣が来てをりますでせうね。何だかまごついてばかりゐます。」おくみは額際を汗をにじませて、袂を衝へ

ながら、下手なよそひ方なぞをしたお皿を、ちやぶらの上に乗べた。「お加減がいかがでございますか。召し上られますかどうですか。と物馴れない恰好をして坐つた。

「昨日は平河さんのおかみさんが容子を連れて下さつた。おくみは落着いたら一度坊ちやんをつれて出かける積りでゐたのだけれど、何かとどきどきして出られなかつた。青山の養母へ、こゝへ来てゐる事を知らず手紙を書くのもまだその儘にしてゐるやうな譯であつた。

おかみさんは物の煮方の事なぞあれこれ言つて行つて下さつた。おくみは夜茶の間の電氣を低く下げて、小遣帳をつけた後に、おかみさんの言はれたのを考へ出して、あくる日のおかずの拵へをノートへ書いて見た。

お小遣はふろを立てない日に坊ちやんをつれて外へ行つたりなぞする外には、おくみの手で遣ふ費りが少しもないやうな日があつた。「それは何かと氣をくばるばかりにでもくたぶれるでせう。もう少しの間だから辛抱してゐて下さいな。——その内には段々調れても来ようしね。」と、おかみさんは氣に下まつた。

でも皆さんがこゝろよくして下さいますから、一寸も氣が置けませんので、のんびりして用事に鈍な私でございますから。……と、おくみはたゞ人々に氣の毒なやうにかう言つた。

「青木さんは今もおくみさんをいつまで借してくれませんか。お訊きになるのよ。まあせいぜい早く代りを目附けなければ、あの子もこれから行くところがあるでせうから言つていたけれど、あの人はいふ事には少しのんきな人だし、それに刻に都合の少い方だから、私がそちこち當つて見て、その内にかしませますよ。とにかくそれまでね。」と、おかみさんは裏の玉蜀黍のところ立つてさう言はれた。

おくみはそれから坊ちやんの事を話したりした。坊ちやんはすべてに聞分けのよいお子さんで、少しも無理をお言ひにならないから、おくみも餘程し易かつた。最初二三日の間は、ときどき飽きて来ると、淋しさうな顔をして、婆やはまだ歸らないのかとお訊きになりながら、着物の裾を纏んでしよんぼりして立つてゐられるやうな事もあつたけれど、追々に、おくみと二人になつたのに馴れて、機嫌よく外へ出て遊ん

で来たならさる。
 おくみがお年などに呼び出ると、坊ちゃん
 は向ひのお家の門の中で、紙で捲けた帽子なぞ
 を着せられて、その家の同じくらの小さな
 女のお子さんと二人で並ばされておいでになつ
 た。その女の子のお兄さまらしい、六つばかり
 のお子さんが、大将のやうに二人を率ゐてあら
 れた。そのお家は、一寸した西洋間なぞの附い
 た、上品な家であつた。

家の中に入られるときには、坊ちゃんはおく
 みが動く方へ附いて廻つて、おくみのする事を
 立つて見たりなさりながら、大人しく遊んでゐ
 られた。

「さ、それぢやありませんか。坊ちゃんには何
 を買つてお上げ申しませうね。——おや、金魚を
 ですか？ お湯屋の前に？ でなければ、お父さ
 まがお叱りになりはしませんかしら。」

二階でひっそりと晝が晝かれて行く青い午前
 などに、おくみはそこを閉め切つて置いて、白
 い洋傘をさして、坊ちゃんの手を引きながら、脚
 の近くの通りまで、東髪へ入れるすき毛を買ひ
 になぞ出て行つた。髪がゆるんだので解いて了
 つて、この間から西洋髪にしてゐるのであつた。
 おくみは大分しばらくからいふ髪を結はなかつ

た。通りを行くと、店の硝子なぞへ自分の髪が
 寫るのを、おくみは何だか變つた自分のやうに
 見て通つた。

おくみは自分のお錢で坊ちゃんに欲しいもの
 を買つて上げた。

夜になると、坊ちゃんが寝てゐられる枕もと
 に、三匹の小さい金魚が這入つた硝子の壺が、電
 氣の灯を受けて、赤いのが大きく見えてゐた。

「もう寝たの？ これがあるのにおくみさんの
 厄介も大抵ぢやないね。」

青木さんは、話相手を求めになるやうに、
 二階からのそつと下りていらつして、しばらく
 そこへこゝんで煙草を吹かしたりされた。

「何だか婆さんなんぞがぶなくなつてから家の
 中がからりとしたやうな氣がしますよ。あの婆
 さんには随分役に立つて貰つてたけれど、どう
 もとき／＼頑固を張られるのでね。——何でも
 自分のしようと思ふ通りに出来ないとぶつ／＼
 言つて膨れる婆さんだから。」

こんな事を、窓口といふ程でもなくお話しに
 なりながら、膝頭を抱へて柱に倚りかゝつてゐ
 られる。

「一寸あちらの灰皿を取つてまゐりませう。」
 「何、もう直き行くから澤山。」

裏の寫眞畫を見せた。
 「だれかやつて来たよ。」と、青木さんはそれを
 下へ置いて戸口の方に耳を向けられた。

ベルが鳴る。
 「はい。」と、おくみは立つて出て、上り口の電
 燈を振つた。

「青木さんはおますか。」と格子戸の外から訊か
 れる。

「どなた様でいらつしやいますか？」と言ひつゝ、
 おくみは格子戸を開けて下りた。

「や、どうぞ。」と、青木さんが出て迎へられた。
 ネルの單衣にステツキをお持ちになつた、髪のある
 春の髙い方が這入られた。

「二階に灯が見えてゐたからまだ大丈夫だと
 思つたけど、差支へがあるんぢやないの？」

「いや。家のものばかりだ。さつきから下へ下
 りてぼんやりしてたところだ。」

かう仰しやりながらお二人とも二階へお上り
 になる。

おくみがあとからお客様の座蒲團を持つて
 上ると、青木さんが上り口へ来てお取りになつ
 た。

「すまないが戸棚の葡萄酒でも持つて来て下さ
 いな。小さい洋傘を二つと。」

おくみはやがてそれを銀色の壺へ載せて餘か
 に持つて上つた。平つたい壺にはお酒は餘り澤
 山も残つてゐなかつた。

こちらにござんと横におなりになつて、そこ
 らの書物を見てゐられたお客さまは、おくみが
 次の間に坐つてお辭儀をするのを見て坐り直さ
 された。横の机に置いてある本棚の側に、白い大
 ききな壺に蘭子の花が澤山束ねて挿してあるの
 が、電氣の灯の中に赤く目立つて見えた。

おくみはそのまゝ下りて来た。さつきからど
 んな方かよく顔を見ない儘であつた。おくみは
 上り口に投げ出されてゐた、その方の、縁の小さ
 い柔かい帽子を拾つて帽子かけにかけた。

洗吉さんは六疊の机の前に坐つて、インキ壺
 の口にこびり附いたインキを紙で拭き取つてゐ
 られる。

「これから御勉強でございませうか。」と、おくみ
 は後で、衣桁にかけてあつた袴を下して疊んだ。

「今頃は少し歩き過ぎたから草臥れた。」と仰し
 やる。

「どちらまでおいでになりましたんでございま
 す？」

「一寸とこつちの方を廻つて、あそここの活動
 館の前まで行つて来たんです。今晩はあの邊の

「ついそこにございますから。」
 おくみはそれを取つて来て再び坐つて、これ
 とて話もない目を伏せて、着物のはしを爪先で
 擦つてゐた。

「本當にひっそりして居りますですね。」
 「一人でぢつとしてると淋しいでせう？」
 「いや、そんなにも思ひませんでございませう。
 私は一體陰氣なんでございませうね。かうい
 ふしんとしたのが好きなんぞでございませう。」
 顔を動かすと、疊と壁とに横がつて寫つてゐ
 る墨法師も軽く搖いだ。

「夜分は電車の音が随分近く聞えますこと。」
 洗吉さんが外から歸つていらつした。

「おくみさんへ繪巻書が来たよ。」と仰しやる。
 店のお安さんがよこしたのであつた。二つ
 巴の紋の社印に、大小をさした、いたいけな
 い子供役者の寫眞姿で、市村座五月狂言力無
 何々と役者の名前が赤く摺つてある。

「これはお客さまから貰つたのです。ちか／＼
 にお遊びにいらつしやいませ。おかみさんもお
 持ちになつていらつしやいませ。青木さんによ
 るしく。」と、表に鉛筆でがさ／＼と書いてある。
 「お安さんからあなたさまによろしくと書いて
 ございます。」と言ひつゝ、おくみは青木さんに

「さうでございませうか。私はどうなつ
 てゐるんですか、このあたりを一寸も存じませ
 んのでございませう。」

「あ、さつきの繪はがきを見せて下さいな。」
 「あそこでございます。」とおくみは立つて持つ
 て来た。

洗吉さんは半ばおくみの方を向いて、膝を崩
 してお坐りになつて、

「これは、役者ですか。と、お訊きになる。
 どうでございませうか。私はお芝居の事は一寸
 寸も分らないのでございませうけど、それはずむ
 ぶん可愛らしい子でございませうね。」

おくみは遠くに坐つて、片手を疊に突きなが
 らから言つた。

「お國にはあなたさまのお下はもうおありにな
 りませんでございませうか。」

「弟がまだ一人ゐます。いたづら坊で母が弱
 つてるんですよ。」

「でも男の御兄弟ばかりがお三人もお揃ひに
 なつていらつして御結構でございませうね。」

「だつて二人はまだどんなものになるか分らな
 いんですもの。」

洗吉さんは繪はがきを丸めて眼鏡のやうに覗

いて、向うの壁などを見てゐられる。
おくみはしばらくそのまゝそこに坐つて、縁
屏の落ちてゐたのを爪先で弄つたりしながら、
こんなことを話してゐた。

+

おくみはお安さんから「おくみが来た翌々日、
青木さんにさう言つて、少し早午を載せて、坊
ちやんを伴れて一寸店へやらせて貰つた。
別にこれといふ用事があるのでもないけれど
一度行かないと何だか變なやうな気がするから
であつた。行けばもう一つの行李から出して来
たいものもあつた。

「まあ、すつかりハイカラにおなりなすつたわ
ね。家では毎日お噂をしてたんですよ。——お
かみさんは今一寸お湯。もう直き歸つていらつ
しやるでせうよ。」

お安さんはもう一人の女中さんと二人でぐ
りの腰板を拭いてゐるところであつた。

「こなひだから一寸上りたいと思つても、一人
ですから容易に出られないんでせう。——どう
ぞついでに片づけて下さいな。」

「もう済んだんです。綺麗になつたでせう。さ
つからそこいらの抽斗の金具からすつかり磨い

ちやつたところ。」
坊ちやんは喉が乾いてか、水が飲みたいと仰
しやる。

「ちや待つてらつしやいませよ。——帽子の紐
が取れたんでございますか。——お姐ちやんが
附けて上げますつて。どうもすみません。」

おくみはかう言ひながら、コップを持つて奥
へ白い砂糖を取り上つた。

「何ですか、家でもよく水を召し上るんですよ。
習慣になつていらつしやるから別にどうもない
やうですけれど。」

おくみはお安さんと話しながら、ティブルの
上の水挿の水を小さいコップへ半分注いだ。

「もう途中に水筒が一すく出て居ります
ね。」

「え、もう扱つからでございますよ。」と、
もう一人の女中さんは鏡の前で汚れた手を洗つ
た。

おくみは椅子の肩をハンケチで軽く押へなが
ら、お安さんとあちらの容子などを話したりし
てゐた。

その内におかみさんが石鹸入を手拭に包ん
で、下のお子さんをつれてお湯から歸つていら
つた。

「おや、久男さんは靴を履いていらつたの？
そしてい、提袋をかけて。——さうですか？ お
姐ちやんに編んで戴いたんですか？」

坊ちやんはおかみさんには馴れてゐられるの
で、坊ちやん相應のいろんな事を機嫌よくお話
しになる。

「さ、お姐ちやんはこちらへお上んなさいよ。
今日は夕方までゆつくり遊んで行つてもいゝん
でせう？」

お安さんはそこらの事をしながら坊ちやんと
お家の三郎さんとの相手になつてゐる。

おかみさんは、その後の事を訊いて下さつた。

「もう、あのモデルの方をお使ひになつた畫は
二枚ともお仕上げになつたやうでございます。

女の人は「昨日からもういらつしやいません。」
青木さんのお仕事の話に移つたとき、おくみ
はかう言つた。

「こなひだ一人、この裏の方にゐる四十くら
の行きもどりの女で、さういふところへなら早
速行きたいと言ふのがあつたのよ。」と、おかみ
さんは鏡を直した鏡臺を片づけて、手拭を外
の掛竿へかけて來られた。

「裏の家主さんでさう言つて下さつただけ
ど、お安が言ふんでは、よくそこいらへ出てべ

ちやべちや下らない事を喋つたりしてゐるとい
ふから、そんな女では困ると思つてね。——探
す段になると一寸ないものよ。滅多なものはお
世話は出来ないしね。その前にも私は一軒心
當りのところへ行つて見たんだけど。」

「おかみさん、私にならどうぞ何にもお構ひ
なさらないで下さいまし。只今御飯を戴いてま
ゐつたばかりでございますから。」

「揃らないものがあるのよ。一寸鏡瓶のお湯を
見て頂戴。懐中汁粉を他家から買つたから。」

坊ちやんには何を上げようね。

おかみさんはどうかして早く代りの人が出来
ればと言つて氣に下すつた。

「私は人さまの事だから、くみちやんにはまだ
何にも言はなかつたけれど、婆やから何か青木
さんの奥さんの事を聞いて？」

おかみさんはやがて、話の續きからかう言は
れた。

「いえ、別に何にも……たゞ、いつも坊ちや
んの事を大變氣にしていraftしやるといふ事だ
け婆やさんから一寸聞きました。」

おくみはかう言つて、婆やがこなひだ奥さん
に會ひに行つた事や、着物を二枚話かつて來た
事などは、口止めをされてゐるので少く黙つて

ゐたが、何かそれではおかみさんの前を俯つ
てゐるやうで變であつた。

「婆やさんは、奥さんの事は何でも青木さんに
は隠してゐるやうでございますね。」と、半ばは
その言譯のやうにおくみは言つた。

「あの婆やもよくないのよ。一寸々々青木さん
に内證で奥さんに會ひに行くださうだから
ね。だから青木さんは、一方から言へば、あの
婆やが行つて了つたのを知つて喜んでいらつし
やるのよ。——少し詳しい話を話さないとなら
ないけれどね。」

おかみさんはかう言つて、長火鉢に炭をお懸
ぎになる。

「それはだれよりも青木さんが一番お氣の毒な
のよ。」

やがて三郎さんが、店で遊ぶにも飽きたやう
に、滑かない顔をしてこちらへ上つて來られた。

坊ちやんも來たさうにして覗かれた。

「もう三時を少し過ぎました。ございませぬ。
私はそろ／＼おいとまをいたしませう。あさ
子さんは今日はまだ學校からお歸りにならない
のでございませぬか。——坊ちやん、待つていらつ
しやいませよ。もう直き歸りますからね。」

おくみはそれから尙三十分ばかり青木さんの

方のいろんなお話を聞いた後そこ／＼においと
まをした。

電車は兩方で四十分と見れば澤山だから、も
う少し遊んで行つたらと言つて止めて下さつた
けれど、電車を下りてから、坊ちやんがよち／＼
お歩きになるのにも手間取るし、ぼつといて來
たお家の事も氣になつた。來がけには少し坊ち
やんを負つて上げたけれど、随分重くつて困つ
た。

「それぢや左様なら、何かお飽氣ないやらね。
今度は朝からいらつしやいよ。青木さんには少
しくらゐ留守をして戴いたつていゝわ。お午の
代りにお蕎麥でもさう言つといつて出て來れば。」

おかみさんは出口まで送つて來てかう言はれ
た。お安さんには、不歸の宿衣の紐を直しを一
枚仕立てて小包みで送つて上げる約束をして、
戸欄の中の自分の行李から出した悪い帯と表と
一緒に風呂敷に包んで抱へた。

「今度は私面白い手紙を上げますから返事を
下さいな。」と濃く白粉をつけたお安さんは、な
すび顔を見せて笑ひながら外に立つてゐた。

おくみはそれから少し歩いて賑やかな通りへ
出て、勝手を使ふ胡椒や、自分の白粉下のクリー
ムや、針や絹糸などの買物をして、ついでに

す先まで行つて乗換へのない電車に乗つた。坊ちゃんには白い紙のついた風船玉が持たせてあつた。おかみさんのところで戴いたお菓子の包みはおくみが預つてゐた。

そこから終點まではかなりある。おくみは、まだ河をか買ひ落したやうな気がするのを考へへ川さうとするやうな心持をして、向う側の窓の外などを見てゐた。

山の手線の驛で電車を待つてゐるとき、おくみには、さつきはじめておかみさんから聞いた青木さんのお家の事情が自分の事のやうにうら寂しく心に染り返されてゐた。

十一

おかみさんは、さまで詳しくはお言ひなさらなかつたけれど、青木さんと奥さんとの間にはいろんなごた／＼した事がおありになつたらしいやうである。

奥さんはかうなるまでも、一度少く別れてゐられたのださうであつた。それにはお二人の間に互に誤解もあるのださうだけれど、青木さんの方から言へば、少くとも、奥さんが、もともとひどく感情のきつい人で、どちらかといへばわが儘な、ハイカラなたちのおお氣に入ら

なかつたのだとおかみさんは言はれた。

青木さんはあゝいふおとなしい方だから、大抵のことは奥さんの言はれる通りになつてゐられたけれど、たゞ、奥さんが何かにつけてなさら方が派手なのをいつも不平を言つてゐられた。

それはまだ奥さんがすべてにお馴れにならないといふ點もあつたらうけれど、とにかく、これまでが費澤にやつて來られたので、その習慣で餘計なところに氣を張つて、いろ／＼無駄な事もしてゐられたやうであつた。

はじめの内は、よく實家からお金を取つたりして、竊と青木さんの手前をつくるつてゐられたやうな事もあつたらしい。併しそれはそれとして、自分だけでは青木さんのために辛い事をも辛抱してゐられたのも事實である。どうして

も青木さんのやつてゐられるやうなお仕事では、とかく収入も不定なので、奥さんは來られた間もないのに、自分のものを賣やの手から持つてかせたりして、月末の工面をされるやうな事もたび／＼であつた。

さういふ點は、奥さんをよくお言ひにならないうおかみさんも、自分のして來た事に引き較べて十分同情してゐられた。

お二人は、はじめの間はもとよりこれといふかつたので、家の内は青木さんを陰鬱な色をして受取つた。

奥さんは間もなくたうと入院されることになつた。たしか乳かどこかを切開されたつたので、その方はやがて直つて退院されたけれど、それから後がいつまでもヒステリーのやうな風に、變になつてお了ひなすつた。

そのとき、或日青木さんがおかみさんのところへいらつして、あの女は私の洋行の留守の間、だれかほかの男と關係でもしてゐたのではないだらうかといふやうな事を言ひ出された。さう考へると、いろんな點で疑はしいところがある、少くとも、私に對して下手な隠しだてをするのが變だと言つて、あれこれ少しづつ

の事實をお並べになつた。併し、變だといへば變だけれど、たゞそれだけではまさかさういふ推察は出来なかつた。たゞ青木さんは奥さんが陰氣に滅入つてふら／＼してゐられるばかりでも氣がくさ／＼なさるやうなところから、さういふ一寸した事もひどく青木さんを不愉快にさせたのは止むを得なかつた。

それに奥さんも悪いのは、青木さんに對してさつぱりと物事を言つてお了ひにならなかつた。例へば、病院から出られて間もないころ、

事もなく暮してゐられたのであつた。併しどういふ譯でか、奥さんは、どうかすると、一人で人のみないところに一人で、少く／＼泣き入つてゐられるやうな事を、よく變やは見たりであつた。青木さんが洋行されたのは一月に結露されたばかりの十二月で、お立ちになるときは奥さんのお腹には今の坊ちゃんが出來てゐられた。

奥さんは或女學校を出られた方で、もともちがった名前でも少しばかりの物をお書きになつてゐた事もあつたさうで、青木さんの洋行のお留守の間には――さびしかつたからであらうけれど――一寸々そち／＼短いのなぞを出してゐられた。しかし、世間から作家として許されるまでにはもとよりまだ大に間があつた。

たゞ自分が好きで氣なぐさみにやつてゐられたといふだけであつた。

青木さんは女としてはそのやうな事をなさるのには好きにならないので、あちらから眼みをお言つてよこされた。奥さんは分らないつもりでやつてゐられたけれど、青木さんからさう言はれて、自分でお書きになるのはお止めになつた。

青木さんは、平河さんのおかみさんには、自分夜中にそつと寢床を出ていくつかの紙を火鉢でもやしてゐられたことがあつた。それを青木さんは次の間で目を開いて見られた。それをも奥さんはどうした手紙かといふ事を、その後

に訊かれてもどうしても譯を言はれない。私だつてどこからでも手紙は來ようではないかとさうやうな事を言ひ返して、しまひには一人いつまでも泣いてゐたりされたさうであつた。

それに青木さんがあちらにゐられた間、奥さんは、いつも小さい坊ちゃんをつれて實家の方へ行つてゐたりされたといふやうなあたり前の事を、青木さんに隠されるのからも變であつた。それから奥さんの入院中に、だれかマントを着たまゝ奥さんの寢臺の側の椅子にかけて話して行つたといふ見まひの人を、飽くまで實家のお父さんだと言ひ通されたのも青木さんの氣を悪くさせた。看護婦から聞いたのと奥さんの口とが違つてゐた。

もとより青木さんは、しかとした事を捉へるまでは、奥さんに向つては、そんな事だけで奥さんのすべてを罵られるやうなものだけけれど、おかみさんだけにそつと疑ひをもらされたのであつた。青木さんはそんなわけで勢ひ洋行前のやうに

が西洋へ出でからといふものは、どうも妻が自分に對して冷やかになつたやうで變だといふことを言つて來られたさうであつた。奥さんの手紙についてさう言はれたものらしい。それはこちらにゐられた前から、少しはそんな事を言つてをられた事もあつた。あの女はまだよく自分を解してくれてゐない。自分は妻に對しては、とき／＼他人と一つ家にゐるやうな、さびしい氣分になることがあるけれど、どうも女のたちが、少し私には觸りが冷たいからだらうかと言つて、沈んでゐられた事もあつたさうである。

青木さんは、先からおかみさんにはどんな事をでも話されるのであつた。ときには奥さんに相談なさるべきことを、その方へは黙つておかみさんの方へ持ち込んで來られることさへあつた。

あちらからさう言つて手紙をよこされたのに對して、おかみさんはおかみさんだけの温かい手紙を上げて、間接に慰めて上げるより外に仕方がなかつた。

青木さんが二年振であちらから歸つていらつしたときには、奥さんは丁度體がお悪くて醫者にかゝつてゐられて、瘦せ青ざめて寢てゐられた。そこへ坊ちゃんもとかくそち／＼がお弱

奥さんをたよりにしなすらなくなった。
さういふやうな事からでもあるまいけれど、奥さんは病気が段々にひどくおなりになるばかりで、後には「ふら／＼」と足で下りて、裏の夕方の木の下へ行つて、一人で土の上に髪を流してしよんぼり坐つてゐたり、夜分に、大きな蠟燭が出て自分を食ふと言つて家の中を方々へ逃げ廻つたり、さう言つたやうないろんな事をされるやうになつた。さうして、實家へ歸してこれと言つていつも泣いてばかりゐられたさうであつた。
それで青木さんも、とにかく實家の方へやつて解養させる事にされた。さうして二月ばかりちつとしてゐられる内に、どうかかうか直つて、つねのやうになられるのはなられた。
「奥さんはそれで一旦青木さんの方へお歸りになつたんだけど、やつぱりたうとどうもあれだものだから……それは詳しく言へばもつとあるんだけれど、まあさう言つたやうなごた／＼した事である／＼何してね。——併しこんな事は、青木さんにもだれにもおくみさんが知つてるやうに言つちやいけませんよ。人さまの大事な事ですからね。」
おかみさんは、さう言つてるところへお安さ

んが顔を出したし、それきりあとは濁しておくみにお言ひにならなかつたけれど、前後の口振では、やつぱり青木さんの洋行のお留守の間に、何か間違つた事がおありになつて、たうと幽縁になられたのぢやないかと思はれた。
おくみは下目になつて聞いてゐた顔を上げて、おかみさんの目の色を讀むやうに見ただけで、自分からはそれ以上にほじつては得る訊かなかつた。
もし果してそんな事だつたら、奥さんも何といふ人か今で気が分らない。一通り以上に立派なお家からおいでになつた方が、人の奥さんとして、どうして、さういふふしだらな事が出来るのだらうと思ふと、それは自分のかんちがひぢやないかといふ氣もするものであつた。
おくみは青木さんの心持にもなつて見て、何だか言ふに言はれないやうなお氣の毒な思ひがした。
突やも言つてゐた事だけれど、おかみさんが、なぜかこの坊ちゃんを青木さんがあまりおかはいがりにならないから、坊ちゃんもお可哀さうだと、別の事ださう言はれたのも、どうやらそんな意味があるやうな氣もされた。
坊ちゃんは何にも知らないで、風船玉の縁を

待合室のベンチのはしに巻きつけたりして待つてゐられる。
やがて速い電車が軋つて来た。
「ではお落しにならないでちやんと持つていらつしやいませよ」と、坊ちゃんが、おくみの手に持つてゐる切符を貸せといはれるのに對してかう言ひつゝ、おくみはベンチに置いた買った買物の風呂敷包みを手頭にかけて、兩手で坊ちゃんを抱へてそれは／＼と電車に乗つた。
おくみは何もお知りにならない坊ちゃんが、一寸もお母さまとお言ひにならないで、婆やが行つて了へば今度はおくみをしんみのやうにたよつて附き離うてゐられるのが今日は餘計にいたはしいやうな氣がした。
「坊ちゃん、ちつとしていらつしやいませよ。もうちきでございませうからね。ずるぶん長く遊びましたからお飽きになつたんでせう。」
おくみは、腰をかけるところに立つて、しよんぼりと窓の硝子の縁を弄つてゐられる坊ちゃんを抱くやうにして言つた。鼠毛の長い淋しい坊ちゃんの黒い瞳に、おくみは自分の顔が小さく寫つてゐるのを見た。
やがて坊ちゃんの手を引いてやう／＼家の門口へ歸り着いた。もう午後の日もそろ／＼暮ば

んで、門の内は鈍い色に沈んでゐた。
洗吉さんもどこかへ出てゐられて、青木さんが一人、二階で留守をしてゐられるやうであつた。おくみは氣のせむか、同じさうしたしんとした家へ上つても、これまでになく、何だか陰氣な色の中に入つたやうな氣がするのには、暗いにおくみは奥さんの事でも厭な目を見られた青木さんの心持を考へるからであらうか。
「坊ちゃん、お父さまに只今をしていらつしやいませよ。お父さまからいとお土産をお戴きになつたのをお言ひなさいませよ。」
おくみは自分の下駄を下駄箱にしまつて、坊ちゃんのとから二階へ上つた。
青木さんは留守にその押入などを掃除なすつたと見えて、梯子段を上つたところに、反古や不用の雜誌などが寄せ集めてあつた。「昨日からの花の苗の鑑育子が、最早ほろ／＼と散り落ちて了つたらしく、その花びらも反古の中に交つてゐた。」
晝をお書きになるところは、すつかり容子がちがつたやうに、ごた／＼したものが片づけられてゐた。青木さんは所在なきにぼんやりと何をか考へ入つてゐられた後、やうな沈んだ顔をして、横になつて煙草を喫んでゐられた。

「坊やまたはまたそれをお姐ちゃんにねだつたのかい？」と仰しやる。
「どうも遅くなりました。おかみさんからよろしく仰しやいませうございます。」とおくみはこちから手を突いた。
十二
おくみはさういふ、このお家のことを聞いてからは、當分はこちの氣のせむか、何だか淋しい人たちの間に來てお世話をしてゐる自分たといふやうな心持がそれとなく考へられた。
さつきも青木さんが坊ちゃんを外湯へつれて行かれて、もうとつぷりと目もくれかけた、雨もよひらしい夕方を、浮かぬ顔をしてとぼとぼ手引いて歸つて來たときにでも、青木さんがどんなことを考へてゐられた續きかといふ事が、おくみにはちやんと分るやうな氣がして、自分までがさびしいやうな心持がした。
おくみは門口の戸が開いたので、上り口へ出て、電氣を捻つて待つてゐた。
「おかへりなさいませよ。」と言ひつゝ、手拭や石鹸などを受取ると、青木さんは、
「この櫛はやつぱりお湯屋へ置いて來たんだつた。」と仰しやいながら、あちらへいらつして、

髪をお梳きになる。坊ちゃんは黙つておくみの袂につかまつて、おくみの行く方へ附いて來られた。
おくみは夜分なぞも、みなさんがお寝みになつたあとに、なほしばらく一人茶の間の電氣の下に坐つて、お安さんのものの繕ひかけをついでに仕上げて押しを切つて、もう寝ようかと思つて綿などを巻きながら、ふと蠟燭が來て自分を食べると言つて恐ひ歩かれた奥さんの事なぞを考へ返して、しばらくまんじりと一つところを見入つてゐたりするやうなこともあつた。
坊ちゃんはおくみの中へ這入つて寝られるので、その周囲の、小さい寢息の枕もとには、おくみの枕と寢間着とが置かれてゐた。
電氣をうす明りにして盥へ這入つたおくみは、足を出してゐられる坊ちゃんの着物をかき合せて、やがて自分も目を閉いだけれど、さつきこの人たちについてあれこれと取りとめもないことを考へてゐたあとの氣分が、何だか人のことではなくて、自分のこれから先の事をそれとなく自分に教へられでもするやうに思へて、いつまでも一人寢入られないやうなこともあつた。
おくみはさうした心持から、自分がさき／＼

どんなことになつて行くだらうかと云ふことを考へて、心細い思ひに目を開いてゐた。あつてないやうな自分の養母のことも考へられた。こへ来てゐる譯を、一寸手紙で言つて置いたのだけれど、養母からは、いつか平河さんの方へ向けて、いつまでもそこでぶら／＼してゐるのはどう云ふ氣なのかと言つて訊いて来た、あの手紙以來、一寸もたよりがないのであつた。

おくみは自分の家と云ふものがないことや、だれ一人しんみりした血つゞきの人もゐてくれない事なぞが、あぢきなく考へつめられた。山の手におくみは、よくそんな事を思つて一人寢床の中で泣いてゐたりした事がいくどもあつた。

おくみはいつしか自分の小さかつたときから今日までの事をそれからそれへと考へ返して、言ひ知らない涙つばい自分を見守つた。しまひには、たと女に生れて来たと言ふ事それ自身さへはかないやうな心持がした。

おくみは、かういふ夜を寝て目覚めた朝などは、坊ちゃんやんが暗い内からもう目を開いて、齒間の中でおくみの肘を枕に、雀の子がちい／＼と啼くのを聞きながら、たわいないな獨り言を言つてゐられたりするの、何だか、もうすつかり他

人ではないやうな氣がした。自分もこれからまた他へ行つて、氣の分らないところへ來公に上つたりするよりも、いつそこの儘、こゝに置いて買ひたいやうな、はなれ難い心持がする。青木さんも、おくみが來てゐてくれるのをよるこんでゐて下さるので、おくみも何となく張合があつた。

おくみはあれこれ氣をつけて、行き届くだけのことをして行かうとすると、これだけの人数のお家でも、一軒の家となればいろ／＼する事があつて、手の安まらないやうな事もあつた。

夜のひまなぞには青木さんの不眠症などで寢ひかへたいものを一枚づつ解いた。自分もお針の方はまだ何でも縫へるまでは行つてゐないのだけれど、それでも縫やがして置いたものの中には、ずんぶん變な事がしてあるのがあつて、青木さんがこんなものを黙つて着てゐられたのかと思ふと氣の毒であつた。

おくみはそちこち汚點が附いてゐるまで行李にしまつてあるやうなものなぞも、裏の中に一々きれいにしておいて、そこらの押入の中を段々にきちんとして行つた。お天氣のいい日には、襦袢を擦つて煮て、解いたものを張板へ張つた。

「こゝです。一寸こゝまで來て御覽なさい。」青木さんは井戸の方のこんもりした生垣の外から覗いておいでになる。「まあ、どこにいらつしやるのかと思ひました。」と、おくみは側へ行つた。「一寸手を受けて下さい。こゝから。」と、青木さんは變なところから、手の平に何かを捲うてお出しになる。「何でございませう?」「食べられるもの。零れますよ?」「まあ、桑の實でございませうか。」と、おくみは言つた。

「汁が手に附いたでせう。まだありますよ。」一寸待つて下さいませ。それではお皿か何か取つてまゐりますから。」おくみは黒く熱したつぶ／＼の實を兩手に受けたまゝ、急いで桑所へ行つた。

それを有り合せの瓶へ入れてこちらへ來る。「おや、大きなものを持つて來たんですね。もうそんなにはない。小さい木だから」と、片手へ一ぱいだけお入れになる。「こちらからは何にも見えませんが、ございませう?」

「おくみさん、坊はどこかへ行きましたか。」と、青木さんはおくみが裏でその薬物を割がしてゐるところへぶら／＼出ておいでになつた。「私、これが済みましたら紅茶でも入れて持つて上らうと思つてをりましたところ、ございませう。坊ちゃん、洗吉さんと御一緒に驛の方へおいでになりましたやうでございませうよ。」

「何をしに?」「坊ちゃん、電車に乗りたいたいと仰しやつて、お午ごろからねだつていらつしやいましたものですか。」「洗吉はもうぢき試験なのに、あんなにぶらぶらしてゐてもいいのかな。」「でもずんぶん御勉強もなさつていらつしやいますわ。」

青木さんはその儘その花床へいらつして、草花の若い芽生についてゐる蟲を取つたりなすつたが、その中にまた表の方へ行つておひひになつた。

おくみはやがて、土の上の莫庵へ坐つて襪りもの押しをして、もうこれから夕方の支度をするまでには、何をやる間もないと思ひつゝ、襪がけのまゝ物置の片側に立つて、襪の毛に掃を入れたりして息休めをしてゐた。

「こゝから覗いて御覽なさい。――ね、まだ赤いのがぼつ／＼實つてゐるでせう。かういふのはこれから熟れるんだ。」赤いのが未だ大分實つてゐるやうでございませうね。筒でございませうこと。――あそこに白い花が澤山咲いて居りますやうでございませうね。野薔薇が咲いてゐる。――あれは秋になると雨天の實のやうな赤い實が果つてかはいらしいもんでせう。平生はだれも人が這入らないものと見えて、草が随分高く延びてゐる。――こゝは一體となりの地面になつてゐるのかな」と青木さんが言はれる。

すぐそちらには、三尺ばかりの幅を置いて、となりの家の物置の黒い板扉の背中が見えてゐて、その下に、白く雨ざらしになつた大きな貝殻が二つ三つ、土の中に覗いてゐる。そこへはあちらの草原からついでに入れるやうになつてゐるのださうである。草の中に藪が澤山に生えてゐる。

「あなた、お召しものへ澤山泥坊草が喰つ附いて居りますよ。」「頭も蜘蛛の巣だらけだ。もう出よう。――赤いのも少し取らうかな。これがあちらから見え

おくみは自分だけの氣で知らぬけれど、このお家へ來てから、かうしてこちらを見て、柔かい青葉に充ちた外の色に對して行むと、何だかその青い色が、人の感情を吸ひ集めでもするやうに、すが／＼しい中にも何となく物の哀れになつていふやうな心持が燃つて、なんでもな、小さいときの事なぞが、とりとめもなく一人思ひ返されたりするのであつた。

今小さい島の彼方の果の木には、段々として傾いて行く日足が、黄色い灯を點したやうにしづかにさしてゐる。おくみはその光を通す葉の色に、濃くうすく蔭が出来てゐるのを見入つてゐた。重なつた葉は蔭が濃くて厚い葉のやうに見えてゐる。下には、山の中にもまはりにも、毛の並んだやうな海黄色い果の花がばら／＼と落ちてゐる。半朽ちて土にまぶれたりしてゐる上へ、日ごとに後から落ちては來るらしい。

山羊の柵の中にもばら／＼と落ちてゐる。山羊は二匹とも椋椋の木の下に固まつて、白い背中に日影を削ぎてうづくまつてゐる。――と、おくみさん。と青木さんがお呼びになる。おくみは、

「はい」と言ひつゝ、こちらへ來てあたりを見廻した。

「ものだから這入って見たんだけど。」
青木さんはしまひに御り言のやうにかう仰し
やつて、桑の枝をたわめて、少しばかり赤い
をお取りになる。ひとりで生えて大きくなつ
たらしい一本の桑の木が、こちらの生垣の中か
ら覗いてゐるのであつた。

「おくみはいつしか垣の根へこいで、土の上
に置いた筈の實の中に、青木さんが草の上へお
置きになつたか、朽ちた細い芝草のごみが交つ
てゐるのを取つてみた。指の先が薄い紫色の
汁に染つた。おくみは桑の實といふものを久し
ぶりで見るとやうな気がした。」

「狭いところをさわ／＼と草を踏んで出て行か
れた青木さんは、やがておくみが常なりその
實を洗つて、押入から白い西洋皿を出して入れ
てゐるところへ、表から廻つて歸つておいてに
なつた。」

「おくみさん、それを二階へ持つて二人で
食べようか。」と青木さんは水口へ覗いて、眞
で、子供のときと言ふやうな事を尋ねた。
「只今すぐにごさいますか？」とおくみは優
笑みながら、皿のふちの濡れてゐるのを布巾で
拭いた。
「一寸甘いもんだよ。」と仰しやうつ、そこか

ら上へお上りになつて、おくみの手にある皿か
ら摘んでお食べになる。

十三

おくみは牛肉屋が挽肉を持つて来たのを戸棚
へしまつて置いて、やがてその桑の實の西洋皿
へ匙をつけてお盆へ載せて、二階へ持つて上つ
た。

青木さんは机をちがつた方へお明りになつ
て、黒と赤とで縫取りをした布をかけた上へ、
その半分ばかりの白い大理石の板を置いて、そ
の上にいるんな物を並べたのをこちらから見
入つてゐられた。

「こんな風をしてまゐりまして。と、おくみは
気がついて、襪をはぎして持つてゐる手で前垂
を取つて、お盆をそこへ出した。
「すみませんが紅茶を入れて来てくれませんか
か。おくみさんのものも。」もう夕方まで用事は
ないんでせう？」とお訊きになる。
「では少しこゝでお話しなさいよ。」と一人では
せいがいややうに仰しやる。

おくみは下へ行つて瓦甌をつけて鐵瓶をかけ
て置いて、裏の裏扉を片づけて、張物などをこ
ちらへ持つて歸つた。

湯が沸くのを待つて紅茶を入れようとしたが
何だか、おずまひも取り亂してゐるし、この間か
ら着てゐる着物がもう鹽たれかけてゐるので、
二階へ行つて坐るためにも、ついでに他のと着
換へたくなつた。

「行半から、こなひだ平河さんへ着て行つたと
きのネルの着物を出して着る。もう前からこれ
を下さうと思つてゐたのであつた。それへ帯を
そのまゝ結んで、湯殿のところの鏡に後の恰
好を寫した。

「すつかり着物を着換へて改まつて来たんです
ね。」と桑の實を食べて待つていらつした青木さ
んは、おくみの姿を見てからお言ひになる。
「あんまり氣持が悪うございましたから。」と、
おくみは顔を赤めながら坐つた。

「おや、一つだけしか拵へて来たなかつたんです
か。」
「私はこれを着ますから澤山でございま
す。」
青木さんが紅茶を召し上ると共に、おくみ
は桑の實を一つ二つ匙で取つて戴いた。

「さう甘いといふ程のものではないけれど、野
生のものを取つて来てからして話しながら食べ
るのは何だかいね。」と、青木さんもお上りに

なる。

「久しぶりのやうで珍らしいございますわ。」
おくみはハンケチを出して指先を拭いた。ち
やんと着物を着換へた裏の心持にさそはれて、
うつすらと目立たぬ程白粉をつけて来たのが、
氣はづかしいやうでもあつた。

「甘いですか。」
「え、甘しうございますわ。私は小さい時分
に祖母と芝のはづれの方に居りましたときに、
近所にお社が何かありまして、その後のと
ころで二三人でこれを探して食べたのをかすか
に覚えて居ります。——さう言へば坊ちゃんも
早く歸つていらつしやいますと、みんなで一所
に食べますのに。」

「何、とき／＼ぬないでくれてもいいよ。子供
といふものは絶えずがさ／＼動き廻つてちつ
としてゐないから、こちらの氣が落ち附かなか
うと仰しやる。」

「よく子供のときには、これを食べると後で舌
の見せつこなんかしたものだかな。——舌が黒
くなるでせう？」と、青木さんは話をとへか
へして、のんびりした心持のやうに足をお返ば
しになつて、紅茶を飲んでおしまひになる。
「もう一寸いかりでございます。」

「今度は砂糖を入れないで山羊乳ばかり飲んで
見よらかな。乳だけの方が木の實を食べるのに
よくうつるやうだね。自分が搾る乳だし。」

「まだ今日はあの歯へ半分ぐらゐる残つて居りま
す。」
おくみは下りて乳の入れものを持つて来た。
青木さんは、長まつてゐられて、おくみがそ
れを注いで上げるのに目を止めながら、おくみ
さんはこゝへ来てから少し捜せやしないかと言
つて下さる。

「でもこちらへ上りましてからはすつかりのん
きにしつゝおさせて戴きますから肥るはずでござ
いますけれど。——私はもとからこんなに肉附
がないのでございます。」と、おくみは下目にな
つて窓のあたりを掻き合はせながら、極り悪さ
うに坐つてゐた。

「だつて一人ぢやぶん忙しいでせう？」
「そんな事は私は何でもございませぬけど、
すべてがお氣に召さない事ばかりでございませ
うと思ひまして。」

「そんなどろぢやない。あなたが一人で何でも
しなければならぬんだから、とき／＼すまな
いやうな氣がするんだ。」
「いえ、え——私が何でも勝手な事ばかりして

居りますのですから一寸も氣苦勞がないのでご
ざいますもの。却つて一人の方がしようござい
ますわ。」

「さういふものですかね。」
「どうしても女はほかにゐるんな方がいらつし
やいますと、拙らぬ事にまで氣を使ひますも
のですから。」と、おくみはひひすひの這入つた細
い金の指輪を嵌めた手に、鬘の袷れ毛を掻き上
げながら、つゝましくかう言つた。

「もう食べないんですか。」と、何をか考へたや
うにしてゐられた青木さんは、しばらくしてか
う仰しやうながら乳を飲んでおしまひになる。
「私はもう澤山戴きました。あとは坊ちゃん
に取つといつてお上げ申しませう。」

「うんう、赤いのを食べたら酔つぱかつた。」
「何かへお出しなさいますか？」とおくみは袂
の中を探らうとした。

「澤山です。あとから甘いのを食べれば同じだ
もの。」と笑ひながら仰しやる。
「子供見たいだね。」

「え、とおくみも微笑んだ。
青木さんは何をか言はうとしてお止しになつ
たやうに、巻煙草に火をお移しになつたが、
「おくみさんはすつとこのまゝ私の家におゐてく

「ね、お嫁に行くまでここにゐて下さいよ。」と、灰皿へ灰を落して、遠慮らしく軽くさう仰しやる。

「そんな事はいつでもございませうか。」と、おくみは、さう言はれて何だか暗に寂しいやうな気分を見つゝ、ハンケチを口もとへ當てて、はづかしさうに下目になつた。

「平河さんのおかみさんに、私がさう言つてるがどうしたらいいだらうと相談して見るといい。でもおくみさんに外に考へがあれば仕方がないけど。」

「私も別にどこへ言つてまゐる處もございませぬし……と、おくみは指先に目もとを集めてこれだけ言ひかけたが、あとは得言はないで顔赤らめてゐた。いつそさうして載れば自分も出来るだけ働いて行くけれど、平河さんでどうお言ひになるか、何だか自分からはおかみさんに言ふのが難だしと思つて見る。

「私はおくみさんが来てくれてから、すべてに不平といふものが一寸もなく、のんびりした気分になつて来ましたよ。何だか暗いところか

ら日向の中へ出たやうに。——そんなだから、この間から何か愉快にものが畫けさうな気がして考へてゐるんです。明日からあの机の上のものをやつて見ようかと思つてゐるだけ。——いゝろんな動物が並んであるでせう？ あの後へこれから何か面白い布をつるして背景にして、それからあの花挿へは他のいゝ花を何か挿す積りですがね。」

青木さんはかう言つて、横になつてゐられる肩を起して、あちらの机の上のものの位置を考へておいでになる。

「坐つてゐて透かして見ると、あの大理石へ花挿の青い蔭などが寫つてゐるでせう？」

「え、うづすらすら寫つて居りますね。」と、おくみは片手をついてしばらくそれを見入つた。

「歸つて来たな。久男が大きな聲でたらめの歌を詠つてるよ。」

十四

その翌日、青木さんは終日二階からお下りに

ならないで畫をかいでおいでになつた。お午にも、山羊に飼料をやりを下りていらつしたついでに、たゞコップで乳を召し上つたきりで、物を喰むのが面倒だとお言ひになつて、御飯もお上りにならないで、また上へ上つてお了ひになつた。

三時頃におくみは、青木さんがお腹がすきはしないだらうかと思つて氣になつたので、しづかに梯子段を上つて行くと、青木さんは前のこちらにお坐りになつて、片手に繪具の板と、片手に畫筆をお持ちになつたなりに、ぢつとそちらの畫を見入つておいでになつた。

おくみが遠慮して梯子段の上に立つた儘、何か召し上らないでもおすみになるのでございませうかと訊くと、

「いや、何にも。ぢきあとで下りるから。」とお言ひになつたばかりで、目をお放しにならな

いで考へ入つておいでになる。おくみは邪魔になつては悪いと思つたのでそれきりで下りて来た。どんな畫が出来かけてゐるのか、こちらからは見えなかつた。

おくみは坊ちゃん、そちちお歩きになつたりするのにも氣を使つて、竊とこちらへ伴れて来るやうにしてゐた。

洗吉さんは、家にばかりおいでになつては氣がつまると見えて、何か書きぬいたノートを持つて裏手の草原の方へお出ましになつて、木の下の下なぞを歩きながら、諸記物か何かをしてゐられた。

坊ちゃんが生垣へ覗いて、

「叔父さんあん／＼と、用もないのにお呼びになるのを、おくみは、

「もう黙つていらつしやいませよ。叔父さんは勉強していらつしやるのでございませうからね。こゝへ来て御覽なさいまし。あの栗の木にあんな大きな黒い蟲がゐるでせう？ あとであれを取つて筆で車を引かせませうかしら。板でも何でも上手に引くんですよ。」と、こんな事を言ひながら、そこらの土の上を掃いた。

やがて青木さんは、

「おくみさん、さつきは失禮。畫を見せようか。」と、おくみが茶の間でマツチ画へ筆をつけて、蟲に引かせる荷車を描へてゐるところへ下りておいでになつた。

「もうお出来になりましたのでございませうか？」と、おくみは自分のものが出来でもしたやうにかう言つた。

坊ちゃんも、白線でつないだ圓い角のある黒

い蟲の荷馬を持つて、後から上つておいでになつた。

もう畫がちゃんとお出来てゐた。畫を一つだけにして、小さい畫にしたと仰しやつて、昨日の大理石へ一寸した畫を載せて、庭の赤と白とのハイヤシンスを盛つて挿したのを、二尺に一尺位の大ききの布へ寫生してゐられた。後には、色のぼつとした、赤やもえぎや紫の五色に染め別けた、だんだらの綺麗な大巾な絹の布が、柔かい垂袋を見せてふらはりと吊されてゐた。

畫には、大理石の表にその色調やハイヤシンスや青藍色の畫が斜につや／＼して潤んで寫つてゐた。

「まあ綺麗にお出来になりましたこと。」

おくみは、自分たちの目で見ればかりでは、さまで意味があるやうにも思へぬ廢物が、畫になると、同じものでありながら、何だかものものに比べてこんなに引きつけられるやうなしつとりした色になつてゐるのを見くらべながら、それが畫の力といふものなのかといふやうな事を、何にも分らぬ心に考へながら、兩手をついてぢつと畫面を見つめてゐた。

「どうです。氣に入りましたか。」と、青木さん

立つておいでになる。

「私にぞには分りませぬけど好きでございませぬ。」

「その布の色なぞが？」

「え、——布もでございませぬが、畫のすつかりが。——下の大理石へ寫つてゐるのが何とも言へませぬでございませぬね。」

「うん。」と、言つて、見ておいでになる。おくみは本當にさう思つた儘を言つたのであつた。青木さんがお書きになつたのだと思ふから尙計にいいと思ふのかも知れないけれど、大層よくお出来になつたやうに思はれた。

「何でございませぬか、この寫つて居りますところを覗くと、こちらの顔まで寫りさうでございませぬね。」と、おくみは黒い目を上げて青木さんのお顔を見上げながら言つた。

「さうですな。」と、青木さんはおくみの側にお躰みになつたが、

「ぢつとこの畫を見てゐるとどんな氣がしますか？」と、煙草を取つて火をおつけになつて、おくみの方へ送らうと行かうとする煙を口で吹きお吹きになる。

「分りませぬわ。」とおくみは、自分の感じ

つたやうに極く悪くかう言つた。
「これを見てみると気分が浮き／＼するやうに愉快になりますか？」
青木さんは微笑みながら碎いて訊き直して下さる。

「私の氣のせるでございませうか、よく見て居ります中に、何だか寂しいやうな氣になつてまゐりますけど……」
おくみはためらひながら正直に言つた。

「さうでせう？ あんなに静やかな色ばかりで書いてあつても、全體の氣分には、丁度大理石そのものの澤のやうな寂しい心持が底を流れてゐるでせう？ 浸み出るやうだと云つてもいいかな。——これは私の所作かも知れない。——ふいとふらふらものが出来た。」
「お目出度うございませう」と、おくみは自分までが何ものかを待たやうにかう言つた。

「好きならおくみさんに上げようか」と眞面目になつて仰しやる。

「これをでございませうか」と、おくみはそれでも御冗談だといふやうにかう言ふと、
「それぢや、これから銀座へ行つていゝ箱巻を買つて来て、おくみさんの部屋へかけて上げようね。」

「おくみさんの部屋と言つたつて別にないんだけど、ぢやあの四疊か。あそこにあなたの荷物が置いてあるんでせう？」と仰しやる。
おくみは何と言へばいいのか困惑しつゝ、
「だつて私にだにかういふものを……それよりか大事にしまつてお置きなさいませうよ。」と、もぢ／＼してゐた。

「お禮に上げるんだからいゝよ。」
「ほゝ、何のお禮でございませう。」
「この畫の寂しいところを分つてくれたのと、私の畫が一つ出来たのを悦んでくれたから。」と仰しやる。

「畫がどことなく寂しいのは、私がいつも寂しいからなんだ。おくみさんにはそれがいつも分つてゐてくれるやうな氣がして感謝したくなつたんだから買つておきなさい。私は自分の畫いたものはやたらに人にくれたいふのだから。」
おくみは、
「有難うございませう」と口の中を言ひながら、改まつてお禮儀をした。

「おくみは黙つて下目になつてゐた。
「何、冗談ですよ。——たゞ上げたから上げるんだから買つておきなさい。私は自分の畫いたものはやたらに人にくれたいふのだから。」
おくみは、
「有難うございませう」と口の中を言ひながら、改まつてお禮儀をした。

「ふゝ、そんなに眞面目にならなくもいゝや。」
さう言はれておくみは何か言はうとして微笑みながら、譯もなく涙ぐまれるやうな目を見上げた。なぜだか、ひとりでにさうしたしみ／＼した心持になつて来た。

「坊ちゃん、蟲の絲を持つて這はせながら、二人の顔を見くらべておいでになる。」
「坊や、下へ行つて二人で山羊に餌をくれようか、ね。」と青木さんはおくみの目もとを見ないやうにして下さるやうに、坊ちゃんにさう仰しやる。

「坊ちゃん、はい、つてお返事をなさいませう。」とおくみは涙になりさうな心持を隠しながらかう言つた。

十五

やがていつものやうにおく飯が済むと、青木さんはしばらくそこいらで妻楊枝をお使ひになりながら、朝の新聞を披けて飛び／＼に讀んだりしてゐられた。
と、どうでも二才銀座へ行つて、さつききの畫の前巻を買つて来よう、他にもついでに廻つて来たところもあるからと、さうしないでは氣が

済まないらしく仰しやつて、あちらでこそ／＼と洋服を買す支度をなさるやうであつた。

皆さんのお給仕をしたあとに、一人坐つて御座を戴きかけてゐたおくみは、箸を置いて立つて、青木さんが座敷の押入の前でワイシャツなぞをお召しになる側に附いてゐた。
「でもこれから大變でございませうね。」
おくみはその電氣を捻つた。

「何、二時間も経てば直きに歸つて来るんだから。と、青木さんはダブルカラーをお附けになつて、いつもの黒い長いネクタイを大きく結び放しにして、挿入の上の段の、小さい鏡にお覗きになる。

「何かそこへ線が下つて居りますでせう？ おや、そのところから解れたんでございませうか。ネクタイの先の線巻の線が下つてゐるのを、おくみは直で切つてお上げした。

青木さんはワイシャツの袖へいろんなネクタイを一ぱい持つておいでになるのだけれど、この幅の廣い黒いのをそんな風にお結びになるのが一等好きだと見えて、いつもそれはかりをお附けになる。
「こんなに洋服なんかに着換へるのは厄介だけど、おはあの銀座の通りなぞの凄噴になつてゐる

やうなところを靴でさつさと歩くのが好きだものだから。」と、おくみが着せる上衣に手をお通しになる。

「おくみはあちらの長火鉢の押入から、洗濯して置いたハンケチを出して来た。
「お靴はこの方でよろございませうか。」
おくみはやがて土間へ下りて、こなひだ履いて出られた黒い編上の方を下駄箱から出した。

「どうぞ、もういゝから。——久男は何をむしやむしや食べてるんです？」と、青木さんはそこへ出ておいでになつた坊ちゃんを振り返りながら靴の紐をお結びになる。
「坊ちゃん、そんな叔父さんのお西洋鉄なんかあちらへ置いていらつしやいませう。さ、お父さまをそこまでお見送りいたしますせう。」
おくみは久男さんを負つて後から門口まで附いて出た。

「坊ちゃんがお父さまに左様ならでございませう。と、こちらから言ふと、青木さんはおとなりの門口で振り返つて、
「坊やはいゝ子だからおとなしくしてお姉ちゃんも待つておいでよ。今日は直き歸るんだから。」と、しまひはおくみに言ふやうに仰しやつて、二三間ばかりお出かけになつたが、ふと思

ひ出したやうに引き返しておいでになる。
「何かお忘れになりましたんでございませうか。」
おくみもこちらから近づいた。
「あの、ひよつとしたら歸りに一寸平河さんの方へ寄つて来るかも知れないけれど、何か用事があれば——併しどうするか分らないけれどね。」
「いゝ元別に何にも……もしお寄りなさいましたらどうぞ皆さんによろしく仰しやつて下さいまし。」
おくみは坊ちゃんを擦り上げながら靴んだ。氣が附くと、お向ひの家の奥さんらしいのが、いつも坊ちゃんとお遊びになる小さい女の子さんを負なすつて、門の内になつておいでになつた。おくみは何だか極りが悪かつたので丁寧にお辭儀をすると、急いでこちらへ歸つた。
顔などはよく目に這入らなかつたけれど、西洋装にお結びになつた、どこやらいきな造りをしてゐられるその若い奥さんは、きつきから、それとなくおくみの方をまじ／＼と見てゐられたらしかつた。
「お父さんはもうあんなに遠くまでおいでになりましたよ。あそこに。」と、おくみは家の門口で尙しばらくあちらを見送つてゐた。

暮れて行く往來の向うは、もう雨の生垣の色も、薄で霞つたやうに茫々と黒くなつてゐる。ついそこの近い木立の間にも黒い蔭が濃くなつて、そこちの閑遠な瓦斯燈の灯が、しよんぼりと夜の色になりかけてゐる。あたりは見る見る暗くなつて行くやうに見える。

青木さんのお姿は間もなく見えなくなつた。おくみは何だかいつももなく、青木さんの行かれる先がどこはなく物戀しいやうな心持がする。

おくみは大分久しく行つたことのない、銀座あたりの賑やかな通りの、青白く霞つた、瓦斯の灯影の中に並んだ品物の、華やかな色取りや、さういふ店に客足を呼ぶ著音器や、遠くの高い屋根の上に、青や赤の電氣の大きな廣告の字が、黒い空に消えたり點つたりした記憶なぞを、かうした留守居の心に懐かしいものやうに思ひ浮べながら、坊ちゃんを負つてゐる片手で門口の戸を閉めた。

おくみはそれから御飯をしまつて、やう／＼そこらを片附けた。

坊ちゃんはずつきから、洗吉さんに相手になつてお貰ひになつて、六疊でふざけておいでになつたが、見ると、どうしてか忿つてはたきを

振上げて手向ひをしてゐられる。

「坊ちゃん、もうお止しなさいましな。御覽なさいまし、叔父さんがあんなに泣いていらつしやいますのに。あなたの方がお強いんですから、もう慄へてお上げなさいましな。――ほ、ほ、ほどうしたつて仰しやるんでございませう。」

洗吉さんは泣く眞假をしておいでになる。もう御勉強なさらないならばならぬからと思つて、おくみは坊ちゃんをなだめてこちらへ伴れて来た。

「二人でお二階を閉めてまゐりませう。坊ちゃん、私は私の好きな好きな、お子さまですから、叔父さまに今のやうな事を仰しやるものぢやございませぬよ。おや／＼、梯子段が眞つ暗です。」

おくみは二階の十六畳の部屋をばつして来て座敷の暗い十畳と取りかへてお上げた。洗吉さんはこの頃はこゝのテーブルが好きだと仰しやつて、こちらへ来て椅子におかけになる。氣のせむかこなひだ内から目に見えてお瘦せになつて、何だかおつかかりしてゐられるやうに見える。

「もう大抵一泊りはお調へがついたんでございませうか？」と、おくみは坊ちゃんと二人でしばら

くそこにゐる。

「何だかあんまり勉強したつて捕らないやうな氣がするけど……これだけのものを見たつて、化學はたつた二問題ぐらゐしか出ないと言ふんだもの。と、氣乗りのしないやうな顔をして、本の小口を割つておいでになる。

「ほんとお辛うございませぬ。あと幾日でございますか？――ではもう催かでございますからついでにしつかりおさばりなさいましな。この電氣をもつとこちらへやりませぬでもよろございませうか。」

おくみはこちらの換を閉め切つて置いて、やがて茶の間の電氣の下で、坊ちゃんを傍へ坐らせてお針をする。

坊ちゃんは、鳥や猿や象などがいろんな眞假をしてゐる色摺の繪本を一枚々々開けて、その繪の譯をお訊きになる。おくみはぼつ／＼とい加減な事を言つて聞かせて上げながら、不斷に締める夏帯の悪いのをくけた。

「それだけ？ うん、もつと――もつと長いのを。」と、坊ちゃんは、話の一回切毎にさう仰しやるので、段々引つぱつて行く内に、しまひにつゞまりが附かなくなつた。

「もうこれだけでおしまひでございます。今度

は坊ちゃんをして聞かして下さいましな。こなたひだの雀と鳩のお話がいゝでせう？ あの本もみんなこちらへ持つていらつしやいました。」

おくみは坊ちゃんが譯の分らない事を仰しやるのを、笑ひ／＼、分つたやうに聞いて行つた。

その内に時計が八時半を打つた。青木さんがお出かけになつてから、かれこれ二時間ばかりになる。あゝは仰しやつても、平河さんへでもか寄りになればどうしても長くなるから、やはりこなたひだのやうに遅くなつてお歸りになるかも分らない。おくみは青木さんが頼んで包んだのを抱へて、物に考へ入つたやうにして、電車へ乗つたり下りたりなさるところなぞを日に畫いた。

考へて見ると、何だかいつも何一つこれといふ御愉快な事もなくて、たゞ一人のやうにからして暮しておいでになるお心持がお氣の毒なやうな氣がする。あまり人に物事を仰しやらぬ性質だから、それだけ御自分ではお淋しいであらうと思はれる。後の奥さんの事なぞも、この先どうなさるおつもりでいらつしやるのだらうと、おくみは青木さんの氣になつて、いろ／＼たよりない心持がする。

そのうちにいつしか自分の事にも移つて、自

分がお屋敷にゐて、この帯を新らしく結んでゐた頃の事なぞがあれこれと思ひ返された。

おくみはそれから坊ちゃんに赤い練の束を手に掛けてお貰つて、巻巻へ二つばかり巻き取つた。

灯取置が電氣のかきに来てまひ／＼する。坊ちゃんは、もう繪の本にも倦くにお飽きになつて、足を投げ出して、紙箱の蓋を裂き／＼してゐられたが、やがてもう眠くなつたと見えて、せいのない、浮かない顔をしておいでになる。

「それではもうお床を取りますから待つていらつしやいませう。まあ／＼、ずる／＼散らかりましたわね。」と、おくみはここの坊ちゃんのものゝ急いで片づけて、櫃の上を掃いて、四疊へ蒲團を出しに行つた。

押入の蒲團を抱へてこちらへ来ると、坊ちゃんは、急に何をか思ひ出してなすつたらしく、一人悲しきやうにしく／＼泣いておいでになる。どうなすつたのかと訊くと、お父さんがゐないからと、やう／＼の事それだけお言ひになる。

「叔父さんがあちらで御勉強なすつていらつしやるんですから、もうお泣きなさらないでお寮間着をお洗濯へなさいまし。一番に帯を解いて、ね。お如と二人でゐるんですから何にも悲

しい事はないでせう？」

坊ちゃんはあやす／＼悲しくおなりになつて、涙を頬に光らせて、いつまでもしやくり上げてお泣きになる。

「では負してお父さまを見にまゐりませう。ちやんと涙を拭いて――もういゝでせう？ お父さんはちきお歸りなさいますのですからね。」

おくみは洗吉さんに氣傘をして、負つて門口へ出た。

「あそこを御覽なさいまし。あの硝子燈に小さい蟲があんなにたかつて飛んでせう？ 大變な蟲。――お父さまは今どこをお歸りになるでせうね。こなたひだ坊ちゃんとお如と二人で坊ちゃんの小さな下駄を買ひに行つたでせう？ あそここの家のをばちゃんがお湯で何だつて言ひました？ 坊ちゃんは一寸もお泣きになりませんでしたか？ 坊ちゃんは一寸もお泣きになりませんでしたか？ 今にお父さまが歸つていらつして、坊やはちやんと泣かないで待つてましたか？ 仰しやつたら坊ちゃんはどうかお言ひなさいませうか？」

おくみはお向ひの家の門の電氣が、往來を區切つてさしてゐる中に立つて、坊ちゃんを揺ぶつてゐた。

ちやんでございますよ。長い／＼影法師。」
 おくみは中の人をなだめながら、そこらへを往き返りした。ひっそりとした往來には暗い森りが深く擴がってゐる外には何にもない。ずつと向うの、お湯屋がある通りの角に、自動電燈の赤い電氣がたつた一つ、眠つた港の灯か何かのやうにぼつちりと寂しく見えてゐる。暗い方が一寸這入つて、もとの灯のさした中を見るとき、瀬戸物の小さいかけらの土に埋もれたのが、金色の灯を寫して潤んだやうに光つてゐる。あたりの生垣の中には、とろ／＼に灯影がちら／＼と漏れた。
 「もうちつとそのまゝ寝なさいませよ。お父さまがお歸りになりましたら、お姐がちやんと起してお上げ申しますからね。」
 おくみは自分が小さいときに寝せられた子守唄を、うる覚えに小さい聲で詠つた。
 何だか自分のためにも青木さんの靴の音が近づくのが待ち入られるやうな氣がする。
 口にごそ言ひ得ぬけれど、昨日今日は、どうしても青木さんが自分の血つゞきの方でもあつたやうに物悲しい。あの薄いた雲にどのやうな顔縁がつけられるかといふ事も子供のやうに樂しみでもあつたし、そのやうな事が、この頃のたつた

一つ、物悲しさである自分が、考へればいつまでも頼りない身の上のやうに小寂しくもある。おぢやん。——もう眠つておしまひになつたんですか。
 ふと黒い空を見ると、疎らにまた、いてゐる薄い星の間を、自分の心持の中でのやうに、それかなきかに小さい星が微かに流れた。
 十六
 おくみは背中で寝入つておしまひになつた坊ちやんを、假りに裏の着物の儘で赤圍にお寝かせて、座敷へ行つて青木さんのお床を伸べて置いた。
 洗吉さんは椅子にかゝつてこつ／＼と體強しておいでになつた。
 おくみは、それから再びさつきを帯を這ひ上げにかゝつて、坊ちやんの寢床の傍へ坐ると、間もなく門口の戸が開いた。遅くおなりになるだらうと思つた青木さんが歸つておいでになつたのであつた。
 おくみは上り口の電氣を附けて、障子に手をかけて膝を浮かしてゐた。青木さんは、郵便受に這入つてゐた手紙の表をすかしてお讀みになりながら、格子戸を開けてお這入りになる。

「お歸りなさいませ。」とおくみは板の上へ下りて手を突いた。
 「途中でビールを二杯飲んだものだから、まだ少し酔つてゐるんですよ。」と、仰しやつて、心持顔を赤くしておいでになる。
 「でも早くお歸りになりました。……たつた今まで坊ちやんを負してそこらまでお迎ひに出て立つて居りましたんでございますよ。今お寝みになつたところでございます。」
 「それは済まなかつたね。洗吉は強強してゐますか。」と、靴を脱いでお上りになる。
 「これが頼縁でございますか。」とおくみは英語の新聞で包んだ、かさばつた包みを受取つてこちらへ這入る。
 「頼縁は駄目だつた。出来たのでいゝのがないから尋平町の頼縁屋へ送つて置いた。銀座にないからそつちへ送つて見たら、そこにもなかつたものだから。——それをそつと開けて、中のもを出して下さい。」
 青木さんはおくみが出して来た着物とお着換へになつて、湯殿へ行つて顔や手を洗つて、二階へお上りになる。
 「洗吉、つまらないものを買つて来たからおいでよ。」と、座敷を覗いて仰しやつた。

おくみが開いた包みの中には、菘をお菘きになる板が十枚ばかりと、黒や赤などの、五色ばかりの粗いスコッチの線と一線に、珍らしいぼん／＼の、紙袋のついた袋が四つと、平つたい小さい壘に這入つたウキスキーかしらと、蠶豆の油で揚げたやうなのを壘に詰めたのと、それだけが這入つてゐた。赤い版行で色づけたぼん／＼の袋は、どこかの縁日の、夜店のカンテラの灯と、ざわ／＼した人の往きかひを思はせた。
 おくみは氣を利かせて、お酒のおさかなのお積りらしい蠶豆を小さいお皿に少し分けて洋盃を添へて、ウキスキーやぼん／＼と一緒に一つのお盆に載せて持つて行つた。
 青木さんはお讀みになつた御手紙を袋にお収めになつて、
 「これは皆が一つづつ取るんだ。」と仰しやつて、ぼん／＼の袋を一つおくみに下さる。
 「この豆は甘いね。——洗吉は来ないつて？」と、自分でウキスキーをお注ぎになる。
 「洗吉さんは御勉強ですから、御土産があつたら下へ買つて来てくれつて仰しやつていらつしやいます。」
 おくみは珍らしいぼん／＼の袋を指で吊しな

がら言つた。青木さんは、何か厭な事でもおありになつた續きのやうに、浮かない顔をしておいでになる。
 「平河さんへはお寄りにならなかつたんでございますか。」とおくみは、さうした青木さんのお顔許を覗ひながら訊いた。
 「何だか面倒くさくなつたから止して来た。そしたら丁度留守へおかみさんから手紙が来てゐた。」と、今讀んでおいでになつた手紙を見やりながら仰しやる。
 「おかみさんの手でございますね。」と、おくみは上書をこちらから見ながら言つた。
 「別に變つた事ぢやございませんか。」
 「うゝん。」と首をお振りになつたきりで、ウキスキーの洋盃をお上げになる。おくみは壘を取つて注いでお上げする。
 「この豆を食べて御覽なさい。胡椒が少し振つてあつて甘いよ。名古屋の名産だつて。」
 「でもこちらでも賣つてゐるのでございますか。」
 「銀座に賣つてゐる。」
 「ちやんと壘へ這入つてゐるんでございますか。」
 「大分これはたのが交つてら。」と仰しやりながらお掴みになる。

おくみは、おかみさんの手紙は、こゝの代りの婆やでも見當つたといふのではあるまいかと思つたので、訊いて見たが、
 「何、何でもない、外の事が一寸書いてあるだけだ。」と仰しやつて、氣をお換へになつたやうに、京橋に近い和泉町の通りで、よその格子の内で上手な清元を講つてゐたのをしばらく立つて聞いて来たといふお話をなさる。
 「私にはよく分らないけれど、三味線も上手な人が弾くといふもんだね。」と仰しやる。
 「私がこの前に居りましたお屋敷の奥さまが義太夫が大變にお上手でいらつしやいましてね、——でも減多にお語りにはなりませんでしただけれど、とき／＼旦那さまのお歸りの遅い晩などに、私たちの前で講つて聞かせて下さいました事がございました。」
 おくみはおかみさんの手紙の事はそれきり氣にもしないで、さういふ話をしかけたけれど、何だかそんな事でなくて、何か言ひたい事があるやうな氣がする。それが堀川とか野崎とかいふものを聞かせて貰つたときの物悲しい心持に似てゐるやうにも思はれる。さういふ義太夫なぞの事を思ひ出したからであらうか。

おくみは少しく下目になつて袂の先をいぢつてゐる自分に気がついた。
「ではこれを一つ洗吉さまにお上げ申してまゐりませうね」と心持書を赤らめて言った。

十七

その内にちぎりに月も六月に迫つて、いつしか単衣になつた膚にもなづんで来ると、やがて間もなく厭な梅雨の季節が来て、物の微附くやうな、うつたらしい雨が、毎日よく傾きもしずじめ／＼と降りつゞいた。
「ほんとに何といふしつづこいお天気でせうね。」

裾をからげて湯殿へ這入つたおくみは、後に立つてゐられる洗吉さんに言ひながら、さつき折角洗つた洗濯物を取り入れたのが、じつと濡れたまゝで竿にかゝつてゐるのを片寄せて、その板の間の眞ん中へ雨が漏るのへ、パケツを受けておいて、まはりがとばしりでびた／＼になつてゐるのを竿で拭いた。
「まあこゝはかうして置けばすみますけど、他のところが漏りでもしたら大變でございませうね。」

おくみは念のために方々の押入の中なぞもついでに見て廻つた。

いであつた。

魚屋がお午近くになつてやう／＼廻つて来た。足袋踏足で、頭からづぶ濡れになつて、おから等を流らしながらはん豪を披けるのを、おくみは水口の敷板の上へ下りて、戸口にかゝるしぶきをよけながら、見つくるろひをしてお皿を出した。

そこを閉めると餘計に小暗くなつてしまふ板の間に、おくみはどんよりした戸欄から煮物の砂糖の入れものを出したりして、うつたうしくこいで、アルミニウムの手鍋の下の瓦斯を振ぢた。

さうしてゐると青木さんが山羊へ餌をやり下りておいでになる。

それもこんな日には大變である。着物をまくつて、穴のあいた毛布を背中におかけになつた青木さんは、古い冬帽子を頭に被つて、飼料のパケツを提げて裏へおいでになる。山羊は少しも泥のついたものなどは食べないので、八百屋が外へ置いたといつた青物も、一々雨の叩いた洗つて持つてつておやりにならなければならなかつた。

おくみはその間井戸ばたへ出て、棲をからげて傘をさしかけてゐてお上げた。山羊はじと

じと水を吸うた櫛の板屋根の下に小暗く引つ込んで、人のけはひを懸しがるやうにみい／＼啼いた。

午後おくみが茶の間でつれ／＼の新聞を讀んでゐると、青木さんがつくねんとした傘をして下りていらつして、こんな日にはいつそ寝るのもいゝかなと仰しやりながら、やがて押入から蒲團をお出しになる。

「二階でお寝になりますのでございませうか。では私が持つて上ります」と、おくみはさきくに毛布と敷蒲團を抱へて先に立つた。

「そのカーテンをすつかり引いてくれませんか。あゝあぢな日だ。」と青木さんは、おくみが小さい方の間に敷いた蒲團の、自分で縫模様をお入れになつたシートの上に、毛布を着て長まつていらつして、下りて行きかけるおくみに生欠伸交りにお言ひつけになる。

そちらの書室の方には今日も籠取りの櫛が据ゑられてゐて、藍の布へ、黒と茶色と赤のスコッチの緯で蔓草のやうな模様を織ひかけてある。近い内にどこかでかういふ手工品の陳列會があるのへ、夏のティアルかけを十枚ばかり出品するのだと仰しやつて、もうこなひだからいろんな柄を圖案して慰み半分は縫つておいでになる

のであつた。

硝子障子の外には、方々の木立が、しと／＼と降る雨の中に青白い霧に纏つてゐる。板戸が少しづつ閉めてあるので、白いカーテンを引くおくみの背や帯が仄かにその硝子に寫つた。

「もう他に御用はございませうか」と、おくみは蒲團の裾に手を突いた。

坊ちゃんはじめ／＼した家の中をそちこちして、一人でつくねんと遊んでゐられたりするけれど、家にばかりゐて、屈になると、降るのも構はないで、入口の格子戸の外へ出て、雨滴の水溜りを弄りなぞして、着物を濡らしてお上りになる。時には、小さいお體へ、土間に濡れて立てかけてあるお父さまの洋傘をおさしになつて、小降りになつた雨の中を、よち／＼とお向ひの家まで出て行つたりなさる。

「おくみさん、久男が着物を泥だらけにして、跣足で往來に出てるがね。——どこかの小さい犬を帯で縛つて、びしょ濡れになつて引つ張り廻してゐるんだよ。」

或午後青木さんが二階からさういふのを御覧になつて、早く伴れて這入つてくれとお言ひになる。
「まあ、ついさつきまでお座敷でおとなしく遊

んでおいでになつたのでございませうよ。」

おくみは用事を指いて、急いで傘をさして出た。

「坊ちゃん、もうちつとお家で遊んでいらつしやいませうよ。さつき叔父さんが拵へて下さいました旗をどうなさいますか？」

おくみは脱がせた着物を湯殿の盥の中へ入れた。

坊ちゃんは、赤い西洋紙を移筆へ貼つた小さい旗を、疊の合せ目へいくつも立て並べて、叔父さんと二人でお遊びになる。

「おや／＼、あそこの花壇の花がすつかり倒れて了りましたのね。」

二人のさうしてゐられる前の、縁側のしぶきを拭いたおくみは、雨戸のところに行んで、庭先の雨の中を見入りながら言つた。煙草の木のやうな葉をした、白や赤の花がかはいらしく吹いてゐた何とかいふ草花などは、すつかり土の上に伏してしまつて、あさましく雨の脚の弾く泥にまぶれてゐる。

「あなた、あそここの縁の下へあんなに水がずんずん這入りますのでございませうがどうしたらよろございませうね。」

やがてけうとい雨の暗くたそがれて行く夕方

を、おくみはすつかりの雨戸を閉めかけたとき、お湯から歸つていらつした青木さんにかう言つた。

「それから書に言はうと思つて忘れてゐたけど、昨夜あたりはもう蚊が二三匹出て寝られなかつたから、今夜はぜひ蚊帳を吊りたいんだがね。」と、青木さんは手拭をかけ竿にかけながら仰しやる。

「こちらにも昨夜は一二匹居りましたけど、私は無神経でございませうから構はず寝てしまひましたのでございませうよ」と、おくみは食卓を抱へて運んだ。

「私は仕方がないから、夜中に押入から風呂敷を出して、それを被つて寝たんだ」と仰しやる。

おくみは御飯が済んでから、四疊の押入の下から、微臭い臭ひのする蚊帳を取り出した。それを包んだ、つぎだらけの大きな風呂敷の合せ目から、鼠のふんが澤山出た。大きな蚊帳と小さいのと二つしかないで、今夜から洗吉さんは青木さんと一緒に、座敷で寝て戴かなければならなかつた。

洗吉さんは釣手を茶の間へも附けるために、四隅へ釘を打つて下さる。青木さんは、釘が一

本足りないと言つて、そこらの柱に遊んでゐる釘を、手拭のはしをかぶせて、爪立をしてがくがくと抜き取つて下さる。おくみは両方へ灯を送るやうに、電氣を倒さにして持つてゐた。「今外がびか光りましたわ。」

「大分大きな降りになつて来たやうですね。」

寢がけにおくみは長火鉢の火を火消壺へ入れながら、お湯を呑んでゐられる洗吉さんと話した。

洗吉さんはまだこれから一人起きてゐて試験の調べをなさるのであつた。

十八

間もなく洗吉さんにはその試験が来た。體格検査の日とすべてで四日の間、市内の割引が上らない内から蔵前の學校までお出かけにならなければならぬので、おくみはそれにゆつくり間に合ふやうに、暗い内から起きて御飯の拵へをした。

はじめの二日はいゝあんばいにお天氣が持てたけれど、それからとはまた雨になつた。「ついでに今日明日だけ降らないといふんですのね。何だか變に晴うございますこと。——今日はインキはお持ちにならないのでございま

すか？」

坊ちゃんも青木さんもまだお目ざめにならぬ、眠さうな雨の色の格子戸に、おくみは襦袢を手に持つて下り立つた。

「今日ですつかりしくじりさうな氣がして……」

「たい問題はどこで活版に摺るのかしら。あれを摺る男が、竊と一枚取つといひ私にだけ先に見せてくれるといふんだがな」と、洗吉さんは子供のやうな事を仰しやりながら、帯の間の時計を見て、風呂敷包みを持つた手に洋傘をお開きになる。

「もう何にもお忘れものございませんか。——どうぞよくやつていらつしやいませよ。」

おくみは、洗吉さんが氣が立つてゐるやうな御容子で、元氣よく出ておいでになる後を見送つた。あんなに心配していらつしやるのだから、お通りになつたらどんなにお嬉しいだらうと、祈るやうな氣がする。

「今日はどうぞございませうね。もう一時間目に半分ばかりたつた時間でございますよ。」

おくみは青木さんと坊ちゃんとの朝御飯のテイブルに附いてゐて、洗吉さんの事を話した。「どうも危さうだね。」

青木さんは何でもない事のやうに晴やかに仰

しやりながらお乳をお上りになる。

「でも一心になつていらつしやるんでございませうからね。」と、おくみはさう言はれて何だか不安なやうな心持をも見つかう言つた。

「洗吉さんはお試験がお済みになるとすぐにあちらへお立ちになるんでございませう。早く歸りたくて仕方がないつて仰しやつていらつしやるんでございませうよ。」

「試験なんか受けるときは全く厭なもんだ。併しあちらへ歸るとまたおき出て来たくなるんですよ。」

後程、青木さんが外の面から出して来て下さつた郵便物の中に、青山にゐる養母からおくみへ久々で来た手紙も濡れて交つてゐた。

「どうもすみませんでございませう。」と茶の間でうつたうしく髪を結ひかけてゐたおくみは、青木さんにお禮を言つて、間もなく根だけを括ると、半ば髪を前に被つたまま、油手を拭いて封を切つた。

あれから二度目の手紙を出して、一寸こちらにも代りがないので私もいつそ當分しばらくこゝに置いて置かうかと思ふがと、相談のやうに言つてやつたのに、何とも返事をくれないから、どうしたのだらうと思つてゐた矢先であ

手紙には、

「こなただ内少し氣分が勝れなくてぶら／＼してゐたので、つい返事も得ず出さなかつたが、お前さんは變りがないさうで何よりと悦んでゐる。その内いつか都合のいゝときに一寸出て来てくれる譯には行かないか。何かの話も手紙では書けないから。併し別にこれといふ用事があるでもないから急ぎはせぬけれど。」とかう言つただけの事が、假名ばかりの字で長たらしく書かれた末に、

「もう今ではすつかり元氣も出て、いつものやうに暮してゐるから、氣づかはないでくれ。」と書き添へてある。このまゝこゝにゐるゐないに ついては何にも言つてはなかつた。

とにかくおくみには、何だか養母が近頃ひどく氣が弱くなつてゐるやうな容子が、手紙の上に見えるやうな氣がした。おくみはお座を下つた當座一度會ひに行つたのを、たつたこなただのやうに思つてゐたけれど、もう彼は四月から上になる。

おくみは養母の事を考へると、しまひにはいつも、自分の體が自分のものでないやうな厭な氣がする。

とにかく後で早速お舞の手紙を書いて出して置いて、その内お天氣にでもなつたらまた一度行つて来る事にしようと思つた。

やがておくみは髪を結つてしまつて、後の恰好を合せぬに寫した。

道具を片附けて油手を拭いてゐると、櫛子の外の生垣を籠めてし／＼と青く降る雨に、どこか間近の草の中で、まだ早い蟬が一匹、ひそひそと青白い絲を引くやうに鳴いてゐる。その聲を聞くと、この雨でも舞つたら、段々にじりじり舞くなつて来る先觸れのやうにも想はれて、けたるい眞夏の、やりどころのないやうな心持なぞも物寂しく持設けられた。

おくみはそのやうな聯想から、平河さんへ置いてゐる行李の中の、三枚の浴衣の柄を目の前に並べたりしながら、あの中のものでこの雨に汚點が出るやうなものはないだらうかと氣になつた。

平河さんへもあれからしばらく御ぶさたをしてゐる。おかみさんはまだ代りの人が日附からないと見えて、その後何とも言つておよこしにならない。青木さんはもう自分がこれなりでここに置いて置くものと極めておいでになるやうで、あれなり人をお探しにならうともなさら

ないやうである。おくみはずつと置いて貰ふのなら貰ふやうに、おかみさんにその事を言つて置かないでは落着かないやうな氣もする。それも、青木さんが、洗吉さんがこゝにおいでになる内におかみさんにさう言つて下さらないと、二人になつてからでは何となく變なやうで極りが悪い。

それともいつそ代りの人が早く出来れば何にも片附いていゝのだがとも思つて見る。おくみは青木さんにはつきりと相談して見たいと思ふけれど、そんな事を自分からは言ひ出しにくい。

おくみはそのやうな纏まらない心持をして、洗吉さんのお机に坐つて、思ひ立つたついでに、養母への見舞の手紙を書くと、丁度青木さんが坊ちゃんをつれてお湯へお出かけになるのでついでに出して置いた。

やがてお午近くになると洗吉さんが歸つていらつた。

「今日はどうぞございませう。」と、おくみは顔色を窺ひながら氣にして訊いた。

「もうどうでもいゝから今日は遊んだ。」と、投げやるやうに仰しやりながら、じ／＼に濡れた袴を脱いで衣箱へおかけになる。

「でも随分早くお済みになりましたんでござい

「おくみは洗吉さんが口ではあ、仰しやつてもそんなに情けもおいでにならないから安心した。洗吉さんは障子のところへごろりとおなりになって、自分で昨日今日取れたと思ふ點數を見積つて平均して見たりしておいでになる。」

「まだ御勉強でございますか。朝がお早いのでございますからもうお寝みにならないと明日ぼんやりなさいますよ。」

おくみはその晩一時を聞いてから、寝間着姿の上にまた帯だけ一寸巻いて六疊へ行つた。

「今ついでに机の斗をすつかり掃除してゐるんです。もう本なんか残らず行李の中へ収めちやつた。」と仰しやつて、笑ひながら押入を開けてお見せになる。

「明日試験を済まして歸つたら直ぐに立たうかしら。」と仰しやりながらせいのなささうな欠仰をなさる。

「まあ、そんなにお歸りになりたいいんでございますか。」

おくみは微笑みながら、そこらの反古を手に拾つた。

「おや、寫眞をお撮りになつたのでございますか。」

「うん、これは人の寫眞だから。」と言つてお隠しになる。

「ほ、ちやんとこちらから見えたんでございますのに。」

十九

洗吉さんは試験がお済みになつていつでもお立ちになれる段になると、何だかもつとこちらに居つて見たいやうな氣もすると仰しやつて、

どうしようかと迷つておいでになつたが、その内に、外國語學校にゐられるお友達のところへお遊びにいらつして、その方の試験がお済みになつてから、御一緒にお立ちになるやうに約束してお歸りになつた。

「でもこの次の土曜日といへばもう直ちやございせんか。」

おくみはそれにしてもあわたしいといふやうにかう言つた。

「もう、明日、明後日、明々後日……」

洗吉さんはいつとも寢がけには、その間がもちもちされるやうに仰しやりながら長火鉢の斗の蓋を弄つたりなさつて、おくみが縫物の針を送り／＼する前に坐つておいでになつたりした。

「深山でございますか。」とおくみは少々なら口分でも持つてゐるからと思ひながらかう言つたが、

「何、取りに行けば買へるのがあるんだから。」とお言ひになつて、やがて下町の方へ出ておいでになつた。

洗吉さんは新橋までお見えに見送つてお買ひになつて翌の九時の急行でお立ちになつた。

お立ちになる前の日には、高等學校をお受けになる、おつれの方がいらつして、二人で一緒に市中へお出かけになつた。

家を出てずつと有樂町まで電車で行つて、日比谷から銀座通りへ出て、たうと眞直に須田町まで歩いたと仰しやつて、お國の弟御さんへのお土産に、よく子供が飛ばしてゐる飛行機の玩具や、市内の名所の繪はがきなどを買つて、午後になつて歸つていらつした。

飛行機は坊ちゃんがお覧になるとお欲しがりになるからと、寫と手鞆の中へしまつてお置きになる。坊ちゃんは何にもお知りにならないで庭先の日向にこゝんで、赤い蝶が何をか引いて行くのを見ておいでになる。

洗吉さんはお腕れになつた足を膝側におおはしになつて、買つてお歸りになつた繪はがきを御覧になる。

おくみも側へ行つた。

「あなた、昨日のお寫眞を私に一枚、記念に下さいませ。」と、その繪はがきを見せしめてからおくみは言つた。

「あんな變な寫眞なんか極りが悪いから。」と頭を押へておいでになつたが、

「では、おくみさんのを下されば。」と洗吉さんであつた。

「下度今八時十分でございます。今朝は麵屋を取りに行つたりいたしましたから、大分遅くなりました。」

「ではあの子はもうちゃんと家へ着いてるな。」

「十時間以上でございますから随分お疲れなさいましたでせうね。」と、おくみは青木さんに二度目の乳を注いだ。

青木さんは、汽車と言へば西洋ではそちこちと長い汽車を乗り通してうんざりしたといふお話をなさる。

「その上に、ちがつた國へ這入ると乗合の人とも一寸も話が通じないんだから捕らない事でもございばかりゐて厭なもんだ。」

から言つて麵屋をお裂りになる。

「もうそろ／＼暑くなつて来るな。今はまだいけれど。——それにこのあたりは木が多いから蜘蛛が山あるんでね。」

食事が済んでから、青木さんはしばらくそのまゝ椅子におかけになつて、垣の向うの高い木立の方に目をおやりになりながら、煙草をお上りになる。

おくみはテーブルの上を片付けて、濡らして持つて来た手拭で、パタの光つてゐる坊ちゃん

は顔を見ながら言ひ悪さうに仰しやる。

「私はもう先に一度撮つたきりで近頃のは一枚もないんでございますよ。もしあつても私のやうなもの寫眞なんか仕方がございませんわ。」

「ではつまらないな。」

「え、。」とおくみは微笑みながら、下目になつて他の事を考へた。

夕方、洗つて干して置いた若さんの下駄を取りだれに行くと、洗吉さんは、一人でこつそり裏の草場へ出て、お土産にお買ひになつた飛行機を飛ばしておいでになつた。

「お前、どうしても明日立つ積りかい。」と、夕御のときに青木さんがお訊きになる。

「だつてさつきはもう少し歸りたくないやうな事を言つてたからさ。——それならそれで己の都合があるから。」

洗吉さんは先に御飯をお済ましになつて、子供かなぞのやうに、自分の頸を抱へて唐紙の根に寝轉んでおいでになる。

「あの子のお金を借りて使つたから拵へて来て返さなくちや。」

洗吉さんがやがてはがきを出しにおいでになると、後で青木さんが仰しやつた。

二十

「いつもいらつしやつた方がいらつしやらなくなりましてせぬですか、何だか御飯のときが變でございますね。」

翌の朝坊ちゃん三人で麵屋と山羊乳のテーブルに着いたとき、おくみは坊ちゃんのためにパタのナイフを取りながら、急に容子が違つて来たやうに思ひながらかう言つた。

「もう七時半は過ぎたらうな。」と、青木さんは鏡の前の置時計の方を御覧になる。

「あれは昨夜から止つてをりますのでございませうね。」

おくみは間で立つて茶の間へ見に行つた。洗吉さんの汽車は今朝の七時三十分分に着くの

の手先を拭いてお上げしてゐた。
「蜘蛛はお嫌ひでございませうか。」と微笑みながら訊くと、

「だつてあれが浴びるやうに啼き立てると、ただでも暑い日光が油でじり／＼沸え立つやうな気がしていかにも暑くらしいからね。」

青木さんは、もう今からさういふ眞夏の裏をお厭ひになるやうな顔をしてお言ひになる。

「さう言つてる内にもう直ぐでございませぬね。」
おくみは坊ちゃんを膝の上に抱へ上げながらかう言つたが、青木さんは、他に何か不愉快な事を思ひ出しでもなすつたのか、それには返事をなさらないで、指の爪先を見て考へ入つたやうにしておいでになる。

おくみもそれざりて話を杜切つたまふ、すぐ前の西洋櫻の木の中に、蜘蛛がちつととまつてゐるのを、見るともない目に見入つてゐた。
外には赤味を帯びたやうな日影が、段々と朝の氣を消して淡つて行くやうに、すべての青いものの上に射し波つてゐる。蜘蛛の巣の絲は光りに紛れて見えないので、ちつとしてゐる小さい蜘蛛は、空間に喰つ附けられてゐるやうに動かない。土の上には濃い木の蔭がはすかひに寫つてゐる。しばらく雨が續いた間に、生垣の下

葉が長く伸びて覗いてゐる。

「おくみさん、新聞はまだ来ませんか。」と、青木さんは灰皿へ煙草をお消しになりながら仰しやる。

「いえ、もうさつきまゐつて居ります。うっかりして居りました。」

おくみは氣が附いたやうにタイプの傍を離れてあちらへ行つた。

坊ちゃんはその障子に嵌つた硝子へ息を吹きかけて、指でいたづら書きをしておいでになる。

「今日はもうこの月も二十二日。」

おくみは持つて行く新聞のはしを唇に見ながら獨り心にかう思つた。

やがておくみはそこいらへ雑巾がけをしたついでに、洗吉さんが使つておいでになつた六所の押入の半分が、上下空いたのをきれいに拭いて、その儘あつてもいいと思ふ机だけを置いて、あとの要らない本棚や、その外の洗吉さんのものを差向下の段へそつくりしまつて置いた。

「おくみさん、この晝はこゝへ懸けようか。――かうするとちやんと整らしくなつたでせう？」

青木さんは昨夜歸りに取つておいでになつた櫃の廣い金色の額縁へ、この間戴いた晝を入

れて下すつたのであつた。

「こゝへから持つてくより外仕方がないな。」と、押入の左手の、半間幅の中頃の壁へあてがつて、恰好を見ておいでになる。額は稍太目の赤い絹の打紐で吊すやうになつてゐる。

「まあ、――このお部屋がすつかり變つてまゐりましたわ。」

おくみはいそ／＼と襦袢をはづしてそこへ坐つた。

「あその梯子段の上の戸欄に鉤があるから取つて来て頂戴。」

青木さんは袂から眞鍮の螺旋釘をお出しになつて、鴨居の下へお打ちになる。

「かうして見ますと晝がまた引き立つて来たやうな氣がいたしますね。」と、おくみは嬉しさに晝面を離れて坐り直した。

「さう言へばいくらかちがふかも知れない。」

青木さんも側へ来てお坐りになつて、少くちつと見入つておいでになる。

「まあ、あの下へ寫つて居ります色が好うございませうか。」

「ええ、と、おくみは目もとを輝かして言つた。「この前に思つた程よくもないけれど、これで

もどろにか晝にだけはなつてゐる。――晝をもつと短くしようかね。――一寸マツチを。」

晝に氣を取られてゐたおくみは、青木さんが指の間に巻煙草を持つていらつしやるのに氣が附かなかつた。

「ついでにその安つばい机もどこかへ仕舞ひ込むといふね。代りにいゝのを出して上げるから。――そして、この邊をちやんとして、こゝをおくみさんの部屋にするといふ。」

「はい、大變でございませぬね。」

おくみは軽くさう言つて微笑みながら、あちらの押入から出して来た洗吉さんのお蒲團を縁先の日向へ披けて、上蒲團の襦當の汚れてゐるのを解きはづしてゐたが、後に裏で一二枚洗ひ

ものをして、それを竿へかけといつて手を拭いて上へ上ると、青木さんはいつの間にか、二階に物なぞを載せてあつた檜材の小机を、先の机のあとへお据ゑになつた。それへこなひだ内から

縁取りをなすつた麻の地の机かけがかゝつて、青い色の小さい花挿にナスタシヤムの花が二輪さして載せてある。

その机かけは、たま／＼この間、十枚ばかりの中でおくみが一番好きだと言つた分で、縁で赤い鳥を上下へ二寸ばかりの幅の中へ縫ひ並べ

た、女のものに似合はしい、柄の飾りものである。鳥はいろ／＼の形をして一ついきに棲つてゐる。

「何だかすつかりいゝお部屋になつたこと。」

おくみは一人かと思ひながら、やつと一通り朝の用事のすんだ襦袢をかき合せて、ぼつとしたやうにまた晝の前に坐つて、大理石に寫つた五色のだんだらの絹の色をなつかしんだ。

外の方で、さつきからお向ひのお子さんと遊んでいらつしやる坊ちゃんの聲がする。障子の方を見ると青葉を越えてみなぎつた黄色い日影は、かうしたきれいに取り月づいた部屋の疊のはしまで射し込んでゐる。

おくみはすつとした氣分をして、留櫛の髪を振り直したりしながら、しばらくそのまゝ坐つて息休めをしてゐた。

縁先の蒲團の上の日向を、晝が一匹まひ／＼してゐる。

と、二階へ上つておいでになるのだとばかり思つてゐた青木さんが、庭先からぶら／＼上つていらつした。

「こゝがちやんとなつたでせう？」と仰しやりながら、机の側へこゝんで、赤い小鳥の圖案のはしに下つてゐる縁屏をお取りになる。

「ほんとに見ちがへるやうなお部屋になりました。」

おくみは微笑みながら側へ行つて、晝を突いた。

「ではついでに四疊にあるおくみさんのものをみんなこつちへ持つていらつしやいな。行李などは私が抱へて上げるから。」

「いえ、私のもはあそこで澤山でございませぬ。」

「でもすつかりこゝへ持つて来て置かなければ自分の部屋らしくないぢやありませんか？」

青木さんは立ちかゝつてゐて仰しやる。おくみはさつきは御冗談のやうに聞いてゐたけれど、やつぱり自分のためにこゝをこんなにして下さつたのであつた。

「まあ、私がこのお部屋を戴きますのでございませぬか。」

おくみは何だか縁取りが悪いやうにもぢ／＼して言つた。
「これからこゝでお針でも何でもするといふ。女があたりを袴前にして物なんか縫つてゐるのはいゝものだ。」
おくみは顔を赤らめて目を伏せてゐた。
青木さんはおくみに鏡を持つて来させて、縁

先で爪をおきりになる。
 「そちらは私が取つてお上げ申しませう。」と、おくみは日向の堀へ出た。
 「何大丈夫。鉄がよく切れるから。」と左手でお使ひになる。
 「もう日向は、いね。」
 「また蜂がまゐりました。」と、おくみはまぶしい日向を見た。
 「どなたかおいでになりましたやうでございませぬ。」
 おくみはやがてかう言つて上り口へ出て行つた。
 おくみは折角だかと思つて、あとで四疊に置いてある自分のものをすつかりこちらの押入へ運んで、ついでに青木さんや坊ちゃんのものゝ運入つた行李も、ゆつたり分けかへた。そして、左側の上の方を空けて、新聞を敷いて、そこへ型ばかりの化粧具や、ちよい／＼とした自分の手廻りのものを収めた。
 坊ちゃんがそこへしよんぼりして歸つていらつして、指をくはへて、何かくれとおねだりになる。
 「もうちきですから一寸待つて下さいませよ。こゝろちやんとして置きませんとね。」とお向ひを向つて置いたので、テーブルの上の色取りだけは綺麗であつた。
 「青木さま。」とおくみは梯子段を上つて、こちらの間からお呼びした。
 「一寸下を御覧なすつて下さいませんか。」とおくみは自分の指へが気がかりなやうに小さい聲で頼んだ。
 「いゝですよ。いつもの通りでいゝんだから。」と、青木さんはたゞさう仰しやつて、やがて二人で何をかお笑ひになりながら下りていらつした。
 「何にもお構ひをいたしませんのでございませうから……」とおくみは極り悪く挨拶をして、後から、いつもの着物の、切昆布の佃煮を小さいものに分けたのと、胡瓜のお漬物とを持って来てお盆から移した。
 「方々にいゝ部屋があるんだね。」と、六疊の方の縁側から歸つていらつした、晝なぞで見る西洋の方のやうに、長い髪をお分けになつたお客さまは、葡萄色のふつくりしたネクタイをお直しになりながら椅子におつきになる。
 「君だからわざと御馳走をしなかつたんだよ。」と、青木さんは御主人役にお着をおよそひになりながら仰しやる。

「その代り方々にはどこかで珍らしいものを食べさせるよ。」
 「これで結構だ。あちらでは馬鈴薯の中から釘が出るやうな、青木さんのお料理でもおとなしく頼んだものね。」
 お客さまは快活にお笑ひになりながら、おくみの注いだ葡萄酒の洋盃をお上げになる。
 「さう言へばあの釘はまだ鳩小屋の中に運入つてゐるだらうかね。——おくみさん、フランスではね、この人と二人で、一夏プロモンビルといふ田舎で一精に自炊をした事があるんだよ。」と、青木さんはおくみがこちらへ廻つて注ぐ手元に目をお置きになりながら、微笑みつゝお言ひになる。
 「丁度二月ばかりあそこにおゐたんだね。」
 「蒸が降るやうに深山あつた。」
 お客さまはかう言つて、ハンケチで眼鏡の曇りをお拭きになる。ついでに西洋からお歸りになつたばかりなのだと思ふ青木さんが仰しやる。
 「まあ、さやうでございませうか。」とおくみはただつゝまじやかにさう言つて、少く椅子のはしにかけてお給仕についてゐた。
 「自炊といへばずるぶんな事があつたね。」

「一寸あそこのおすいでもさう言つてまゐりませうか。——でも不味いおすいでございませぬね。」
 勝手もとを取り散らしてゐるおくみは、前垂のはしで胡麻を煎つた焼餅を取り下して、考へふやうにさう言つた。
 「何、それだけあれば深山だ。あの男はさういふさつぱりしたものを喜ぶんだから丁度いゝ。」と、青木さんはさうさうなく仰しやる。
 「しまひに御飯をお櫃に取つて前庭に汗を見たくみは、支度した皿のものをお盆に載せて、そろ／＼座敷のテーブルに運んで、袂の先を衝へて、すべてのものを恰好よく並べた。
 「たいあり合せのものでいゝと仰しやつたので御馳走はほんの小籠が十匹だけあつたものを焼いて、生姜の汁をさした三ばい酢に漬けたのと、しんぎくの、麻汚しのおひたしと、たつたそれだけしかないものであつた。それを色のいゝ、すつきりした形の深皿を二枚並置から借りたのへ二つに入れて、小皿を四つ重ねて別の箸と一精に眞ん中へ置いた。さつきテーブルかけを取り換へて、洗濯したばかりの、とき色の筋の運入つた氣持のよい布をかけて、片はしへ、鏡の前に据ゑてあつた、西洋茶のばつとした赤い花の壺

のお籠さまと何をしてお遊びになりましたか？」とおくみはかう言つて紛らしながら、干してある蒲團を側へやつて裏返して、もう一度疊の上へ帯を當てた。
 「何だか汗ばんだやうに臭くろしくなつたおくみは、茶の間の戸棚を開けて、買つときのお菓子の餅を出すのに、櫛子から来るそよ／＼した風が、押足のあたりに小綺麗なやうであつた。
 「それからあとでお客さまへ御飯を出すのに何を指へませうね。」
 おくみは坊ちゃんを相手に獨り言を言ひながら、臺所着の胸かけをかけて、襪を取つた。
 「二階には洋服を召していらつした、秋本さんといふ兼家の方が、青木さんと話しておいでになる。久し振でおいでになつた方らしかつた。」

二十一

「ね、おくみさん。何なら簡単にそばでも取つて済ましていいんだだけどね。」
 やがて青木さんは、おくみがごた／＼しなげればならぬのを氣にして下すつたやうに、申途で下りていらつして臺所をお覗きになつた。
 「もうこれだけいたしましたらいいんでございませうけど、あんまり何にもございませぬから、

「第一妙なものはかり食べさせられてこり／＼した。併しもうあんなことはしたくも出来なないね。」とお客さまは快活にお笑ひになりながら割箸をお割りになる。
 「だつて君はたゞはたでませ、返すだけの役だからのんきだつたけど、日に二度づつさういふ料理をする身になつて見たまへな。」
 「でも買物や下働きはみんな僕一人がやつたんだもの。」
 「あんな下働きならだれでもするよ。」
 青木さんは洋盃を干してお受けになる。
 「ふゝゝ、あれは人參だつたかね。君がスープを拵へて待つてる間に、僕が急いで買ひに行つたまではないが、歸りにジブシーの肌うたひがゐたのへ附いて廻つてゐる内に、買つた物をどこかへ忘れて着手で歸つて来た事があつた。」
 「そんな事は所つ中だ。」
 「そのとき君は一人で待ちくたぶれて、ベッドに這入つて午寝をしてゐたから、僕も眞假をして寝ちやつたよ。」
 「それでたま／＼手柄をしたつもりで得意になつて来るとあんなかたつむり何かだろ？——この人がね、おくみさん、或日珍らしく午寝もしないで、下の運河のふちで一生懸命にかたつむり

を取つて廻つてゐるんでせう？ 暑い目がかんかんしてゐる中ですね。こちらはあれを取つて何にするんだらうと思つて窓からぞつと見てみると、しまひに、おい見ろ、夕方の御馳走だよつて、汗だらけになつて下からハンケチ包みを持ち廻すんだ。——そんなところどころがつてるやうな斑點のあるかたつむりはいくら秋本でも食はれやしないものを。」

「ふふ、それを黙つて見てゐるんだから君の方が餘つ程ひどいよ。」

「おくみも一緒に笑ひながら、お客さまにおひたしをよそつてお上げした。」

「これはもうこれだけでですか？」と青木さんがお訊きになる。

「いえ、もう少しは残つて居ります。——ぼつちりしか持つてまゐりませんでしたから……」

「おくみはお客さまがそれを珍らしさうに深山召し上つて下さるのを悦びながら臺所へ取りに行つた。」

「坊ちゃんがお腹がすきになつたらうと思つて、胡麻鹽を振つたおむすびを二つばかり拵へてお上げて置いたのを、鼻の先に御飯粒をお付けになつて、縁先で足を投げ出して一人で食つておいでになる。」

「ほんとは何にも召し上げるものがございませんで……」

「おくみはこちらへ来てお二人の御飯をよそつた。」

「そんな事でたうとあの黄色い馬車も賣つてしまつたんだよ。」

「お客さまは何かお話のつゞきをなすつておいでになる。」

「どうしてまた、さういふひどい怪我なんかしたんだらう。あのよく窓から赤いハンケチを振つたりした、一寸雀斑のある女だらう？」

「あの子のもう一つ下の妹さ。」

「それでは何とか言つた瘦せた子かい？——可哀想に。」

「こなたはあちらを立つ前に、例の別居して居るお母さんのところへも行つたんだがね。青木さんからはずるぶんしばらくおたよりがありませんが、どうしていらつしやいますでせうなんて、入前の頬を押へながら訊いてゐた。やはり例の大きな銀の十字架をこんなところへかけてね。」

「僕はあの人には一番多く厄介になつただけだね。」

「お二人はさつきとは異つたところの事を話して……」

「おいでになるやうであつた。」

「食事がおすみになると、おくみはテーブルの上をきれいに片づけて、番茶のむひのいゝのを燗じて持つて行つた。」

「ね、かういふのを一つ女の帯に應用したらどうだらう。」

「面白いかも知れないね。」

「第一にこの方に一筋拵へて上げて、試しに結んで見て貰ふといふ。」

「お客さまはおくみを意味してかう仰しやしながら、青木さんがいろ／＼持つて来てお見せになつてゐる、こなた内内の織取りの、最後の一枚を御自身の腕にかざして御覽になる。」

「おくみさん、こんなので帯を拵へたら結んで見る氣になりますか？」と青木さんは御元氣にお訊きになる。

「さうでございますね。——でも地はどんなものをお使ひになるのでございますか？」

「おくみは人さまの前でそんな批評がましい口を利くのを極り恥がるやうに、半ばためらひながら言つた。」

「さうだね、——地は今一寸考へが附かないけれど、とにかく言つたやうな柄を、こんな風に縫取つて帯にしたらどうだといふのさ。」

「それはお召しなさるかたがお召しになりましたら、ずるぶん製つてゐて面白うございますでせうね。ですけれどよつ程はでな方でございませんとらうりませんでございませう。」

「おくみはお茶を注いでお二人の前に配つた。」

「併しそれにはまづ着物から選んで来なければこれまでの着物では釣り合はないだらう。」と、お客さまは再び順に見返しながら仰しやる。

「おくみは呉服屋の店先にでも立つたやうに、傍でそれを覗いてゐた。」

「青木さんは先にお茶をお上りになる。」

「これはやはり先からのお茶？」

「いえ、今朝程取つてまゐりましたのでございます。」

「おくみは自分の袂の一寸觸つた、テーブルの上の花の形を直しながらかう言つた。」

「これなどは大分變つて面白いですね。」

「お客さまは、金色の黒く採けた、昔のあついたのきれや、柿色のごろ細などを使つた圖案のを抜き出しておすめになる。」

「その齒染のもう一つ下のを見て御覽。——その百合の、花の部分などは僕の手袋の革を切つて染めたんだよ。」と、青木さんは笑つておいでになる。

「この麻絲をこんなになつたとこゝろなどはオースタリヤあたりのベザント、アートにでもありさうだね。」

「おくみはそこらに一寸觸つてゐた端を手先で追うて、そこ／＼にこちらへ下つた。」

「これから自分たちの御飯にするのだけれど、坊ちゃんのおかすが何にもないので、また例のお好きな玉子焼を拵へてお上げする。坊ちゃんはこちらで食べるのを仰しやるので、おくみはちやぶ臺を六疊の方へ抱へて行つて二人で坐つた。」

「唐紙のそちら側では、お客さまが西洋の女の着物の意匠の事などを話しておいでになる。」

「だからこちらの着物でも、帯だの襟だのといふものは單獨に買はないで、自分の體に附けるだけのすべてをのものを統一して、自分の特有の意匠をさせて見たら面白いだらうがね。」

「それでは一そろひづつが、纏つた一つの創作なんだね。」

「さうしなければ自分の着物といふ氣がしない筈だがね。色や柄が自分自身の調子にしつくり合ふ點から言つてもそれがあたりまへなもの。」

「併し君の指圖で君の好きな色ばかりを着せられたりすると、大分變つた畫が歩くわけになる。」

「ね」と、青木さんが間を置いて仰しやる。

「さうなれば色んな意味でこちらも愉快だよ。」

「お二人はお笑ひになる。」

「でも一々畫家へ足を運ぶばかりでも大變だね。」

「だつて世間の女は一々流行を追うて捌らないものにずるぶん手かざや金をかけて着てるんだもの。」

「その内につしかまたあちらの畫のお話になつたやうである。お客さまは、どこかで天幕の下で駝鳥を寫生したといふやうな事をお話になる。こちらで御飯を戴いてゐるおくみには、そのやうな事が聞くともなしに聞えた。」

「おくみさん、あそこにあるワイシャツが二枚とも汚れてるんだが、いつかの分はまだ出来て来ないの？」

「後程裏口で生姜の餘つたのを土の中に入れてゐると、青木さんがいらつしてお訊きになる。」

「これから御一緒にお出かけでございますか？」

「おくみはこちらへ歸つて、洗濯したばかりのワイシャツへ袖口のぼたんなどを附け換へた。」

「では夕御飯は一緒に外ですまして来るからね。早く歸りますよ。」

青木さんはお出かけのときに小窓でお言ひになる。
「お客さまは今朝お泊りになりますのでございますか。」

「いや、なぜ？」
「それならようございませうけれど、お泊りになるのですと、お荷物が……」
「うん、あれは見貴のところにお泊りするんだから。」
「おくみはたゞきへ下りてお二人のお靴を拭いた。」

二十二

「もうその外には御用はございませんですね。」
青木さんにお留守をして戴いて、これからお湯にやらせて戴くおくみは、もう薬所の方を閉めたので、お出しになるはがきを持ってこちらの方から下りた。
坊ちゃん、さつきはまた少し齒が痛くてむづかっつていらつしたのが、やつとおまざれになつて、六疊で青木さんをお相手に待つてゐて下さるのであつた。
「今晚はお向ひの方で蓄音機の聲がいたしますよ。」

てゐるのが聞えた。
おくみは歸ると門口をかけて、内へ這入つた。さつきは歸つたら何をか青木さんに言はうとした事があつたのに、それが何であつたか分らなくなつた。
青木さんが机に倚つて、さつきの本を見ておいでになる側に、坊ちゃん、座蒲團を枕にさせてお貰ひになつて、すやくとうたゝ寝をしておいでになる。
「たうと寝てしまつたよ。」
「お世話さまでございました。只今ぢき蚊帳を吊つてお上げ申します。」
おくみは湯上りの顔にうつすら白粉をつけてゐた。
「足へ蚊がとまつてる。」と仰しやつて、青木さんは手を伸してお叩きになる。
「こんなに血を吸つてるよ。」
「まあ。」

おくみは側へ行つて坊ちゃんの足の方を包んで置いてお上げする。
「今日は午後中、馬車ごつこだと仰しやつて、大きな函を引き廻していらつしやいましたものですか、がつかりなさいましたのでございませうよ。」

おくみは忘れたものを取りに上つて、押入を開けながら言つた。
「外は眞つ暗でせうね？」
青木さんは電氣を低くして、厚い晝の御本を膝に置いておいでになる。
「でもたゞあそこの間だけでございませうから。」
おくみは自動電話のある角まで暗い通りを行つて、八百屋の前ではがきを入れた。
その貧しい店先へ買ひものに来てゐる女の人、は、もう村の人かなぞのやうな型の浴衣を着て、空色の襦子の帯を結んでゐた。家へ廻つて来る若い男が、これから市場へ買ひ出しに行くのだと見えて、店先へ下した荷車の下へ這入つて、心棒へ何をか括りつけてゐた。その男が土の上に置いてゐるカンテラに、赤く長く揺いでゐる火の色の、もうそろそろ浴衣がけになる頃の夜らしく、鼻くろしい色に見えた。

そこからお湯屋の前へ行くまでには、一寸した小さい店が二三軒飛び／＼にある。その一つ、のいろんな煎餅を賣るきれいな店の前には、青い瓦斯が晝のやうに湧えてゐる中に、硝子函の上に飾つた、鉢植の赤と白との石竹の花が、微つた灯を吹うてゐるやうに目立つて見えた。
あたりには女の子が二三人で、明るみと

おくみは急いで押入を開けて蒲團を出した。「さ、寢間着を着換へるんだよ」と青木さんが仰しやる。
「ほゝゝゝ、お手をそんなところへお通しなさいませんでしたね。」
青木さんも手傳つて下すつて、一間へ一ぱいに吊る蚊帳の、向うのはしを吊つて下さる。
「どうも傾りさまでございます。」と、おくみは蚊帳の中へ這入つて、まはりの裾をひろげて廻つた。
「まだ今晚はずぶん早いのでございますね。」
やがておくみは蚊帳のはしに障つた髪形を押へながら、こちらの裾から言つた。
青木さんは敷物を縁先へ出して、灯を肩に背びて坐つておいでになる。
「こゝは木などが多い割合に蚊が少いので餘つ程涼しいんだけど」と仰しやる。
「さうのやうでございませうね。ところによりますと、このごろでも、もうこんなに坐つてな

開との押をかけ廻つてさわいでゐた。
おくみは歸りには荒物屋へ寄つて、言ひ附かつたペン先を買つた。がた／＼の抽斗から出して来た小さい名刺入の面に残つてゐる乏しいペン先は、半分は錆び附いたやうになつてゐた。
おくみはついでに毛すちと燻入の齒みがき粉を買つた。
かうしたものさびれた町の夜の灯も、おくみには何となく、自分にしたい或物の含まれてゐるやうな、小なつかしい晩であつた。
今日は髪を結び直したかつたのに、午後またちがつたお客さまがあつたので、どさくさして結ぶ間がなかつたけれど、それでも、お湯に這入つてのんびりした気分には、大分うるさいと思つてゐた髪のことも忘れて、たゞしつとりした平和な心持の下に、よその小家の瓦斯燈の文字なぞさへなつかしまれるやうな自分を見つ、また、もとの自動電話の赤い灯に滑うて曲つた。
暗い通りを、よその女の人が、背中の子供に母人らしい何事かを言ひながらすれちがつて行く。右手の杉垣の門口に、女髪結の看板のかかつてゐる家の竹窓には、すだれを通して男の浴衣が見えて、小さい男の子の聲で本をさらつ

ぞゐられないやうなところがございませうよ。」
「でもすつと暑くなつたらこんなことでは濟まないけれど、まあ、刺にみない方だらうね。——その代り小さい蟲が澤山灯に集つて来る。今でも少しはまひ／＼してゐるでせう？」
おくみは蚊帳の側をくゞつてそちらの方へ坊ちゃんの着物を取りに行つた。
机の上の方へ引いて置いた灯は、暗い晝の一部分に光りを擡げてゐる。右手の、開の中に隠れてゐる樫の木が、夜の色より黒く染んでゐる。
「もうみゝが鳴くやうになりましてございませうね。」と、おくみは晝の際に膝を突いた。ちつとしてゐると、そこらの暗い土の上に水のやうな色でも擴がるやうに、じいゝといふ煙のやうな聲が立ち浸みてゐる。
「何だか少し蒸し暑いやうな晩だね。——もう蓄音機も止んだのかしら。」
青木さんはかう仰しやりながら、何をか他の事を考へておいでになるやうに、土の上の一つとところを見入つておいでになる。
「今日いらつしやいましたお客さまは、いつか、晩にいらつしやいました方でございませう？——私はすつかりお見忘れ申して居りま

して、どなた様でございますかとお訊き申しましたのでございますよ。」

おくみはお湯できれいになった指先を見つめながら言つた。

坊ちゃんのお召物が、裾の方に泥が少しついてゐるので、襦袢へ出て落して、こちらの衣箱にかけて置く。通りすがりに蚊帳が邪魔になるので、机の方の一隅はづして置いた。

おくみはそれから夕方に竿から下した青木さんの膚着のシャツを、ほかのものと一緒に四疊へ置いたのを思ひ出した。

壁の中でそのシャツのボタンが一つ取れたのを、物置のこちら側の出張つた臺石の上に置いたといたので、蚊帳を貼して、臺石の口を開けて探しに行つた。

裏の方は眞つ暗である。そこらの軒下に立かけてある鹽や炭俵などが、蚊帳のろうとした黄色い灯の中にしんかんとして見える。ぼたんは洗濯石鹸の小さく減つたのと一緒に、置いたところにあつた。

蚊帳の端がぼた／＼と土の上に滴る。

襦袢の山羊が灯を懸ひてみい／＼鳴く。たゞ一色に黒い闇とばかり見えたと向うの方も、よく見れば栗の木も山羊の襦も灰かに黒ずんだ形が見

分けられた。

おくみは茶の間の灯の下でぼたんを附けて白い綿のはしを縁切前で切つた。一人襦袢の方においでになるのだと思つてゐた青木さんが、入口の格子戸の方から上つておいでになる。表の郵便面を見にいらつしたのらしい。

「洗吉からはがきが来た。」と仰しやつて、灯のところへおこいみになる。

お着きになつたお知らせであつた。青木さんはお読みになつておくみの前へお出しになる。「おくみさんによろしく。」としまひに書いてあつた。

「まあ、あなたのお手とそつくりのやうでございますね。」

「さうかしら。變な字だ。」と仰しやりながら、一緒に郵便面の中に這入つてゐた何かの雑誌の帯封を切つて、ところ／＼を御覧になる。

おくみは雑誌のはしを巻いて小箱へ入れた。「昨日の目附になつて居りますのに大變遅く着きましたものでございますね。——消印がすすれて分りませぬけど。」

「何だか今日は私もがつかりしたやうな気がする。——でもまだ寝るにも早いし。」

青木さんは所在なさうに仰しやつて、長火鉢のお湯を土瓶へおさしになる。

「もう、出がらしてございますから。」とおくみはそれを空けに立つた。

「今日の人に来るといつでも座が長いんでね。尤も私だつて人のところへ行くとつい長くなる癖があるんだが。——その代りめつたに出かけないし、行くところも餘りないんだけど。……先の薬やは人が来るのが大嫌ひでね。」

「なぜでございますか。」

「なぜといふこともないだらうけど、人が来てゐるといふことで、變に氣がつまるやうな心持がするのだらうね。」

「でもこちらの方とは別でございますのね。」

「何か少し變つた婆さんだつたから……」

「お湯が少しぬるうございましたでせう？」と、おくみは襦袢の下火をかき探した。

「そろ／＼あちらへお床を延べて置きましたも宜しうございますか？」

二十三

青木さんは後程お寝みになるときに、これから追々足へかける蒲團が重くろしくなつて不愉快だと、蚊帳の中からお言ひになる。

「暑くなりまますとほんとに厭でございますね。床に這入りましてからいつまでも寝附かれませんくらゐ苦しい事はございませぬわ。」

おくみは蚊帳の裾に膝を突いてかう言ひながら、髪の後れ毛を掻き上げて、お脱ぎになつたシャツをさつきの洗つたばかりのと取りかへて置いた。

「もう電氣を消しても宜しうございますか。——はお寝みなさいまし。」

おくみは屏の襖を開めてこちらへ来た。それからしばらく今日のお小遣をつけたりした後に、そこ／＼に茶の間の灯を消した。もういつしか十二時を廻つてゐた。

さしむき、九月ごろまでしまつて置くのに洗濯した、自分のこの間からのネルの着物を、さつきから膝の下に敷いて押しを切つてゐたのを、ついでに裏床の下へ入れて寝ようと思つて、こちらへ持つて来る。

自分の這入る蚊帳を覗くと、坊ちゃんはお暑いのだと見えて、枕をはづして横の方へおあばれになつて、お臂をすつかり出しておいでになる。おくみは寝間着を着換へて、赤い投帯を結ぶと、書の帯を解んで置いて蚊帳に這入つた。一さ、ちやんとお枕をなさいまし。まあ、お顔に

じつとり汗をおかきになつて……」

おくみは獨り言のやうに口の内でかう言ひながら、自分の袂の先で額口を拭いてお上げする。

何だかいつになく少しむしむし／＼するやうな気がするけれど、また雨にでもなるのではあるまいか。

おくみはさつきの着物を敷蒲團の下へ入れると、再び蚊帳を出て、押入から半紙を出して来て、床の上で、枕紙を取り換へた。く／＼り綿を結ぶ新しい白い紙の上に、電氣が蚊帳の邊を寫してうす青く射した。

おくみは、やがて中からその電氣のかさを引きよせて灯を扱つた。

暗がりでも坊ちゃんを少し上の方へ引き上げてお腹のあたりまで蒲團をかけてお上げして、自分も横になつたが、さうした蒲團の厚ぼつたいやうな手觸りに、さつき青木さんがお寝みがけに仰しやつた事が思ひ出された。全くかういふ冬のまゝの蒲團では、これから先は暑くするしくお困りになるだらうと思はれる。

さつき程はついそこまで考へなかつたけれど、青木さんのお召しになるのを一枚だけでいゝから、薄い夏蒲團を拵へてお上げ申せばさうさ

ないのだがと思ふ。去年もあの儘でお済ましになつたのだらうけれど、何だかこのやうな事にも、誰とて氣をつけてお上げ申す人がなくていらつしたのが、お氣の毒なやうな気がする。

おくみは暗い蚊帳の中でしたらしく目を開いて考へた。

さう云へば青木さんにはこれからのお召し物も御不慮の一枚しかおありにならない。外へ召してお出ましになるのには、箱の東京箱のいゝのが一枚と、それから白緋の帷子の一寸したのがあつたけれど、あとはお浴衣が二枚ばかりある外に、今召しておいでになるたてじまの木綿の一枚だけで、洗ひ代への不慮着が一枚もおありにならないのである。

もう一つのかすりは、もうずるぶんいたんでゐて、ちよい／＼つきも當つてゐるので、門口へも着てお出ましになれない。せめてもう一枚だけでもおありにならないと御不自由である。これも去年はあのまゝでとお通しになつたのであらうか。

ついで一寸した久留米綿でもいゝから、一枚お拵へになるといゝけれど、かういふ事は何だか私が言ふのは言ひ悪い。お蒲團の方ならば、さつき御自分でもあゝ言つておいでになつたのだ

から、一應さう言つた上、こちらでどうか都合をして拵へてお上げ申しても變ではないやうな気がする。

夏のだから暑も少なくていいし、布も三巾と四巾とでいいであらう。よく裏には水色の麻などがつけてある。あれだと一圓も出したら買へるであらう。綿は一枚どほりにして八百日もあれば澤山である。百日十二錢としてざつと一圓に、それから表は涼しうなメレンスの柄のいゝのをでもさがして来れば何かある。表も麻にするとしたら、先のお邸でお子さま方のお拵へになつたやうな更紗型のもよかつた。それなら裏の麻も白いのがよくうつる。どちらも一反づつ買へば、やつぱり富前に四巾に五巾の大ささになければ布が無駄になる。

それでもいくら安く積つても、すつかりで三圓五十錢はかかるから、そんなに調なくも出来ないうけれど。

その内、平河さんのおかみさんでもおいでになつたら、御相談をして見ようかしらと思ふ。平河さんへもしばらくごぶさたをしてゐる。どうしてと思つておいでになるであらう。おくみは何だか日がさえて、急には寝つかれさうにもないので、輪だけは合はせても、頭の

中ではそれかなほいろくの取りとめもない事を考へつゞけた。

鼠がさつきからがり／＼と、どこかそこの天井の中で何をか齧つてゐるのが氣になる。

「おくみさん。」と、唐紙のそちらから青木さんが小さくお呼びかけになる。

「はい？」とおくみは、鼠でおめざめになつたのかと思ひながら御返事をした。

「もう寝たんですか？」と仰しやる。

「どこをがり／＼やつてるのだらうね。昨夜もよつびで耳について寝られなかつた。――どこかそちらの押入の中ぢやないの？」

「さうでございますね。私は寝ましたら何にも分りませんので。――昨夜からでございますか？」

おくみは蚊帳を出て電氣をつけた。

「こちらの天井でございますよ。」

しばらく止んでひつそりした。

青木さんは、

「何だか今夜は變にむし暑くてさつきから一寸も寝られななんだよ。」と仰しやつてごそ／＼させておいでになる。

「何でございますか厭な晩でございますね。――」

「はい、何でございますう？」

「どこ？」

「小屋根。」

「ええ。」

とたん張りの上をばた／＼言はせてゐる。

「雀が下りて走つてゐるのですよ。」

「雀？」

「ええ。――雀のお宿。」

「ほう、坊ちゃんは何ぼつかりお上手ですね。」

おくみは單衣のメレンスの長襦袢の袖をくけながら言つた。

やがて髪結の家のすき手が来た。髪結さんは手順が違つたので、午後でなくては来られないからとことわりに来たのであつた。

「まあさうですか？」

おくみは困つたやうに立つて行つた。

とにかく来られるだけ早く来て見て貰ふ事にして、使の女を返したけれど、そんなににしてゐては今日の間には合はないやうな氣がして、いつそ髪だけ結つて、行くのは明日にしようか、それとも平河さんの方はこの次にして、養母のと

お手拭でも濡らしてまゐりませうか。冷たいのを目の上へ當ててお寝みになつて御覽になりましたら……」

おくみは唐紙を開けて膝を突いた。

「今もう何時ですか？」

「二十四」

ついでさくさくしてゐて、青山の養母のところへもあれなり得う行かないであらうおくみは、今日はさし向これといふ用事もないやうだから、午後一寸お宿を敷いて、程によつたら平河さんへも歸りにお寄りして来たいと思つて、朝早く、青木さんが山羊の乳を搾つていらつしやるところへ行つてお願ひした。

坊ちゃんはまだ蚊帳の中でよくお寝つておいでになる。

おくみはその間に通りの髪結さんのところへ行つて、朝の内に来て貰ふやうに頼んで来る積りで、その押入を開けて懐中鏡を立てて、ひんやりした蚊帳の色のすが／＼しい青木さんにやみながら、そこへ出るにもあんまりな、髪をあたりを掻き上げた。

「あちらの髪結さんなら一寸上手でもございませうし、おとなしい人であるんな事をべちや／＼

こゝろへだけなりと、折角だから一寸行つて来る事にしようかと思ひながら考へ違つてゐると、表口の格子の呼鈴が鳴る。

出て見ると、思ひがけなく平河さんのおかみさんがいらして下さつたのであつた。

「おや、いらつしやいます。まあ、丁度今さう思つて居りましたところでございますよ。」

おくみはさつきからのつもりを話した。

「さう？　でも別に變つた事ぢやないでせう？　私は今間違へて、もう一つあちらの通りから這入つて来てするぶんまごつたのよ。そちらにいらつしやるの？」

おくみさんはおくみに附いて六疊へお通りになる。

「只今一寸そこらまでお出かけになりましたのでございませうけど、今に直き歸つていらつしやいます。」

「私失禮して上だけ取つてよ。今日はあちらの電車で来て、あそこからすつと歩いたものだからすつかり汗になつて……」

「まあ、あちらからですと大變でございませうでせう？」

おくみはいそ／＼して、手拭のきれいなのを絞つてお盆に載せて来たりました。

「言ひませんからうるさくなくてようございませうよ。」と、いつかお湯屋の女の人から聞いた分へ、少し遠いけれど行つて頼んだ。

「おくみさん、何ならいつそ午前の一寸行つて来たらどうだらう。久男は厄介だから、置いてけば一人で遊んでよ。今日はこれでは午後には暑くて歩かれないよ。」

青木さんは朝御飯の後で小襦袢をお使ひになりながら、いら／＼と坐のはしへ射し入つてゐる日影を見つめてかう仰しやつて下さる。

「でも、これから髪を結つて貰つたりしてゐますとどうしてもあれでございますから……、おくみは柱の時計を見た。

「さつき仰しやいましたのは、本當でございませうか、坊ちゃん。大人しくお父さまとお二人で待つて下さいませうか？　さうして下さいますといふ坊ちゃんでございますかね。」

やがておくみは着て行くものを揃へながらかう言ひつゞさつきから髪結さんが来るのを待つてゐた。

「如ちやん、何あれは？」と、足を投げ出して坐つておいでになる坊ちゃん、他の事を仰しやりながら、不審さうに外の方を上目に見て、きよと／＼しておいでになる。

「いい、極の座蒲團ね。青木さんのお見立てで、おかみさんは手拭をお使ひになつてさつぱりなすつたやうに、そちらのはしへ出てお坐りになる。」

「大分しばらくでございました。どなたさまにもお變りもございませんで……」

「おくみは改めて御挨拶をした。」

「もうこなただから、一寸お伺ひいたしませんではと思つて居りましたので……」

「いどさくさいたしまして……」

「私こそいつもおはがきを貰つても、返事もしげないし、ずるぶんでせう……」

「おくみやんはどか加減でも悪いぢやないかと」

「思つたりして心配してゐたのよ。水が變るとよくある事だしね。家ではつい一昨日あたりまであきが少し熱があつて、學校も三日休んで寝てたんですよ。」

「さうでございますか。私は一寸も存じませんものでございますから。」

「もうすつかりよくなつただけだね。……」

「おみやん、一寸髪染を貸して頂戴な。私の髪はちきこんなに上るのよ。もうお婆さんになつて髪も少くなつたし……」

「おかみさんは髪のを洗でなから仰しやう。」

「おくみはお服になつたお羽織をそつと衣紋帯にかけて置いた。お店の方では女中さんが代つて、ほかの一人来たけれど、何だか思ふやうにないといふお話をなさる。」

「お安は相變らずのんきよ。あれでなく、もう一人のおさむと云つた女……何だか自分で……」

「お安は相變らずのんきよ。あれでなく、もう一人のおさむと云つた女……何だか自分で……」

「おくみはこちらでも、洗青さんが試験がおすみになつて、一昨日目急にあちらへお立ちになつて、あと三人きりになつた事や、坊ちゃんや青木さんの御容子などを話した。」

「坊ちゃんも今一緒に出ていらつしたの？」

「いえ、つい今までこゝで遊んでいらつしやいましたので……」

「おくみは一寸失禮して立つて、お茶を入れるためのお湯を五瓶にかけた。」

「おくみやん、もう何にも構はないで下さいな。お茶も澤山。……それよりかね……」

「お呼びになりまして？」

「いえ、えね、あの私今日来たのは外ぢやないけれど、いゝ都合にこゝへ来てくれる代りの人が見附かつたのよ。」

「おや、さうでございますか。」

「おくみはこちらの敷居際に腰を突いた。『まあこちらへいらつしやいよ。私になら何にもいゝから。』」

「おくみは茶戸欄の前に坐つて、ついでにお茶を入れた。」

「これは昨日大阪の方から来ました茶屋でございませうけど、いかゞでございますか。生憎何にもお茶受がございません。」

「瓜とお扇子とを少しばかり切つて小さい荷物へ入れたのへ小楊枝を添へて出した。」

「まあ珍らしいものがあるのね。……」

「生徒さんたちを預つてゐたときに、一人あちらの方の人がゐて、その家からよく買つたけど、あちらのはそれは甘しいのね。」

「おかみさんはかう仰しやしながら、上り口の方へお立ちになつて、何かお土産に持つていらつした風呂敷包みを、こちらへ持つておいでになつた。」

「ぼんのつまらぬもの。あとで坊ちゃんに上げて頂戴な。……」

「ね、まあやつとの事でこれならと思ふのが有つたのよ。くみやんは先に私たちが千駄木にゐたときに、あそこの大観音へ曲るところの角に」

「さういふ家がございましたかね。」

「おくみは心持額を赤くして、うつすら覺えてゐる、あのあたりの通りを目に描かうとした。」

「とにかくその瀬戸物屋が今下谷の方で小さくやつてゐる店の前を、この間おかみさんはよその歸りにふとお通りになつて、店先にゐたかみさんと久しぶりでお話をなすつたのださうであつた、そのときお話のついでに、このお家に要る髪やさんの事をお頼みになつたら、二三日して心當りがあるからと言つて、わざ／＼はがきをよこしてくれて、昨日その當人が、おかみさんの方へ出て来たのださうであつた。」

「何でも四十六だとか言つてたけど、見かけはもつとふけて見えるの。いろ／＼これまでの事を訊いて見ると、とにかく正直一方らしい氣のよささうな婦人なのよ。早く夫と別れてさんざ苦勞をして来たんだつて。」

「その人はついでにこなたまで、七年ばかりの間、小石川の方の或學生の塾で勝手だの面倒を見てゐたのださうであつた。それが近い頃その塾の監督をしてゐられる方が奥さんをお買ひになつたので、言はゞその髪やが要らなくなつた」

「のだけれど、それでもさしむき行くところがなしたために、半ばかりそのまゝ置いて貰つてゐた。併し下を働くには下女もあるのだし、そんなにしてゐるのが氣の毒なので、こなたが困を貰つて、今自分分の嫁とかのところに……」

「その嫁の家といふのが大變困つてゐるらしいやうな話ぶりなのよ。とにかくまああれなら人柄だけは情かなやうだから、私はあらかた取り極めて置いたんだけれど、いかに何でも、かうしていつまでもくみやんを使つてゐるのがすまないから、二人で氣を揉んでゐただけで、これやつとくみやんも一應私の方へ歸れるわ。今日でいく日こゝにゐたんでしたかね。」

「青木さんが歸つていらつしたやうである。」

「おかみさんは、實は今日その髪やさんの件でおいでになるお積りだつただけれど、今朝になつて、今日は日か悪いから明日にして戴きたいと言つて、本人がことわりに来たのださうであつた。」

「私は折角ちやんと着換へまでして待つてたんでせう。ではともかく私だけ行つてお話をしつて置くからと言つて、その儘出て来たの。丁度よかつたかも知れないわね。いきなり伴れて来た」

「でも却つて何だつたらうし。」

「から仰しやつてゐるところへ青木さんが這入つていらつした。」

「どうもしばらく……」

「まあ、いゝ花ですね。」

「青木さんはあちらの通りの植木屋さんへ行つていらつしたと見える。」

「色が少し變だけ……」

「薄紫の西洋花の鉢に、きれいな籠が飾つてゐるのを机の上にお置きになる。」

「おかみさんは早速髪やのことをさう仰しやつた。」

「おや、さうですか。そしてもう極めてしまつたんですか？　まあ座敷の椅子へいらつしやい。」

「こゝは何だか狭つくるしいから。」

「おくみは急須を持つてあちらへ立つた。」

「ね、こちらの方がひんやりしていいから。」

「と、青木さんはお座敷からお言ひになる。」

「くみやん、もうおきお午だわね。私は丁度中途半端なときに来て……」

「おかみさんは茶の間の方へいらつしてかう仰しやる。」

「おくみはヤがてこちらで、そろ／＼お午の支」

度をした。
「くみちゃんはお午後青山の方へ行く筈になつてゐるんですつてね。——私はもうこれでお暇をするから、くみちゃんはいく加減に何して、髪を結びに行つてはどう？」

おかみさんはお話を済んだと見えて、こちらへいらつしてかう言つて下さる。
「いえ、あの方はいつだつていゝのでございませうから、どうぞ御ゆっくりなすつて下さいませ。もうちゃんと御飯をさし上げるやうに出来て居りますのでございませうよ。」

おくみは袋戸棚の抽斗から、おかみさんにさし上げるお茶碗を出して布巾をかけながら言つた。
青木さんもそこへいらつしてお引止めになつた。
「そんなに今日に限つて急いで歸らなくてもいいぢやありませんか。まあこの晝でも見て下さい。近頃は何にも晝かないものだから……」
「さつき一寸拜見したんですけど、何でこんなところへかけてお置きになるの？」
お二人はおくみが戴いた晝の前に立つておいでになる。おくみは晝の間でおかみの煮魚をよそひながら、あつした晝を自分が戴いたりして

ゐるが、それとなくおかみさんの前に気が替るやうな心持がした。青木さんが自分を一人前の女のやうに扱つて下さるのに馴れて、いい氣になつてゐるでもするやうに見えさうで、まゝが悪い。
おかみさんはどこもかしこもちゃんと綺麗になつてゐると仰しやつて、青木さんに賞めておいでになる。

二十五

その内に丁度坊ちゃんも外から歸つていらつした。
「おや、そんなところからお上りになりましたの？ あちらへいらつしたら坊ちゃんとお手を交してをばさまにお辭儀をなさいませうよ。」
おくみは晝をはづしながら言つた。
「一寸お待ちなさいませう。帯が後へ下つておます。まあきれいなお手、土をお掘りになつたんでせう？」
「一寸こちらでお洗ひなさいませう。このお着物も、もうお着換へにならないといけませんね。」
おくみは洗濯したのを出してついでに着換へさせてお上げする。
やがて、皆さんは座敷でテーブルにおつきに

變なとき来てくれるんですこと。」
おくみは返事をしつゝ立つて行つて、いつそ明日の朝来て貰ふやうにさう言つて、すき手の女を歸した。
「あら、なぜ？ 構はないぢやありませんか。一寸そこからお呼びなさいよ。私がゐるからなの？」と、おかみさんが仰しやる。
「いえ、さうぢやございませぬ。もう行つてしまつたんでございませうから。」
おくみはかう言ひながら後れ毛を掻き上げて椅子に着いた。
「唯な人、ついあちらで、一寸結つて貰へば帯があいていゝのに。」
おかみさんは氣にして仰しやつた。さうさせて戴かつかとも思つただけけれど、あんまり氣儘なやうだつたから。——そしてどうせ明日でも同じであつた。
「こゝらの髪結さんのの？ 上手ですか。」
「どうぞございませうか。まだ今度はじめてなんですけれど、何ですか結びつけない人に結つて貰ふのは髪に氣になるものでございませうね。」
「くみちゃんには東髪だつてよくうつるんですのね。」と、おかみさんは青木さんに仰しやる。
「しばらくこんなにしてゐましたから、今度あ

なつた。
「久男さんはお姐ちゃんを並んで食べるんだと仰しやるから、くみちゃんも一緒にこゝでお食べなさいよ。」と、こゝまで運ばせて大變ね。」と、おかみさんは青木さんの御飯をよそつて下さる。
「さ、坊やはこゝへ来るんだよ。何でもお姐ちゃんお姐ちゃんと言つて世話ばかり焼かせるんだね、お前は。——今にお姐ちゃんがるなくなつたらどうするんだい？」と、青木さんが仰しやる。
「をばさまにお上りなさいませうすつて。お父さまには？ ほゝ、いゝお行儀でいらつしやいますこと。」

おくみは微笑みながら仰に腰をかけてお給仕に附いてゐた。
「折角くみちゃんになつていらつしやるのに、また違つた人が来るのだから何だか當分お可哀想だわね。」と、おかみさんもお箸をお取りになつた。
「僕だつて困りますよ。もうこの儘いつまでもゐて貰へる積りでゐたんだのに、餘計な婆さんなんぞを見附けて来るんだからいけないや。」と、青木さんは、御冗談でもないやうに仰しやる。

「では私は飛んだ憎まれ役ですな。だつて仕方がないわね、くみちゃん。」
おかみさんは笑ひながら袂のハンケチをお出しになる。
「坊ちゃんはお不思議さうにお二人のお顔ばかり御覧になつていらつしやいますよ。」
おくみはつゝましく坊ちゃんを見守りながらかう言つた。
「このお加減が大變いゝこと。ほんとに上手に出来ててよ。」と、おかみさんは牛蒡のきんぴらを買めて下さる。
「いかゞでございますか。そちらのお魚の方は少しおしたじが足りませんでしたかと思ひますけど……」

「うゝん、丁度いゝ。この玉子はどうして魚の身の中で固まらせるんです？」
「こちらも甘しく出来てるわ。くみちゃんはいつの間にかういふお稽古をしたんでせう？」
「ほゝ、大變でございませうね。」
おくみは極り悪さうに、下目になつて、坊ちゃんが御膳にお客になる御飯粒を拾つてゐた。からしてるところへ、あちらの方で御免下さいといふ女の人の聲がする。
「いえ、髪結さんでございませうよ。まあ、

變なとき来てくれるんですこと。」
おくみは返事をしつゝ立つて行つて、いつそ明日の朝来て貰ふやうにさう言つて、すき手の女を歸した。
「あら、なぜ？ 構はないぢやありませんか。一寸そこからお呼びなさいよ。私がゐるからなの？」と、おかみさんが仰しやる。
「いえ、さうぢやございませぬ。もう行つてしまつたんでございませうから。」
おくみはかう言ひながら後れ毛を掻き上げて椅子に着いた。
「唯な人、ついあちらで、一寸結つて貰へば帯があいていゝのに。」
おかみさんは氣にして仰しやつた。さうさせて戴かつかとも思つただけけれど、あんまり氣儘なやうだつたから。——そしてどうせ明日でも同じであつた。
「こゝらの髪結さんのの？ 上手ですか。」
「どうぞございませうか。まだ今度はじめてなんですけれど、何ですか結びつけない人に結つて貰ふのは髪に氣になるものでございませうね。」
「くみちゃんには東髪だつてよくうつるんですのね。」と、おかみさんは青木さんに仰しやる。
「しばらくこんなにしてゐましたから、今度あ

たり前に結ふのには髪が寝ないで髪でございませうね。
「さうでもないわ。癖直しをよくすればちゃんとなつてよ。たゞこんなにしてると髪が切れてね。」
やがて皆さんのお食事がすむと、おくみはあちらへ下つて一人で戴いた。
「くみちゃん、あとでお手水鉢へ水を入れといつて下さいな。すつかり片附いたらこちらへいらつしやい。まあほんとにいゝ晝だわね。」
おかみさんは通りすがひにかう仰しやる。
「青木さんがあれを私に下さると仰しやるのでございませうよ。」と、おくみは箸を置いて、後ればせにかう言つた。
「さうだつてね。いつまでもいゝ記念になるわ。」
おかみさんは事もなげに仰しやるのであつた。もう青木さんからお聞きになつたらしかつた。

それからみんなでテーブルに集つて、おかみさんのお土産のさくらんぼを戴いてゐると、外を金魚賣が長い聲を引いて通る。おくみには擔がれて行く桶のなまぬるいやうな水に、赤い色がせぎ／＼に動いてゐるのが目に見えるやうな

それからみんなでテーブルに集つて、おかみさんのお土産のさくらんぼを戴いてゐると、外を金魚賣が長い聲を引いて通る。おくみには擔がれて行く桶のなまぬるいやうな水に、赤い色がせぎ／＼に動いてゐるのが目に見えるやうな

して、青木さんの夏のお節を捲へてお上げし
 ようかと思ひつゝ。去年拵へてまだいく度も
 結ばない帯だから、前へ出る方なぞも一寸も汚
 れこはむない筈である。あの白いメレンスの、
 蝶々を扇した涼しい柄なら、丁度これからのお
 節にいいかも知れない。さうすれば裏と綿と
 だけ買つて戴けばいいのだから。——それもつ
 いでに私が買つて、だまつて拵へて納つて置
 けばいいのである。

おくみはかう思つて行李を開けて、申程に這
 入つてゐるその帯を、そつと引き出して披けて
 見た。

物尺を出して横つて見る。一丈のたけだから
 たつぷり取つても一尺は餘るであらう。巾は二
 巾にして、兩方へ二寸ばかりは縫ひ込まなけれ
 ば廣すぎるかも知れない。おくみは念のために
 座敷のお節帯を一枚出して、縫ひの寸法を測し
 て見た。

片づけこちらへ来て、ついでに帯を解しに
 かゝる。やつぱり軽い帯を附けてちやんとしな
 ければならぬから、縫ふのはあすの午後でな
 くでは出来さうにもなかつた。

見ると丁度宵中に出るあたりのところに一寸
 したしみが出来てゐる。泥か何かの遺がつい

て、私はその場を測して置いたんだけどね。だ
 つてそれはくみちゃんにしてもよく考へて見な
 いと一寸引受け悪いでせうか。——まあ、とにか
 く一應歸つた方がいゝわ。青木さんには氣の毒
 だけど、くみちゃんの方から言へば、まだどち
 らにしても、ちやんとした女の人に附いていろ
 り教はつて置かなければならない事もあるん
 だしするからと、おみさんは裏口へいらつし
 たときに小窓に手紙を覗きながら仰しやつた。

青木さんはおみさんを送りながら、湯へ行
 つて来ると仰しやつて、坊ちゃんとお二人で一
 緒にお出かけになつた。

おくみはその間に一寸縁側で髪を解いて結
 びかへた。

何だかおみさんに相談したいことを言ひ遺
 したやうに思つてゐるけれど、考へると青木さ
 んのお節帯のことその一つであつた。あすは
 婆やさんを一人でおよこしになるやうに言つて
 お歸りになつたけれど、馴れない人には家が一
 寸分りにくいだらうが大丈夫かしら。おくみは
 そのやうな事もそれとなく氣になつた。

髪を結つて了つて油手を拭く反古の一つに
 は、養母から来た手紙のちぎれの字が讀み返さ
 れた。これでもうから一應すぐ平河さんの方へ

た跡でもあるやうに、小黒く濡んでゐる。あ
 とでそつと濡み洗ひにして見よう。

おくみは鏡を入れては髪を解しながら、そ
 の抜いて行く糸の一筋つづに、まつきからの、小
 さびしい自分の心が讀み返された。

二十六

—もうお湯へも召していらつしやいましたので
 ございませうか？—

—おみさんがよろしくつて。——久男がどこ
 までも附いて行くもんだから、たうとう青物市
 の近所まで行つたんだよ。—

青木さんは、おくみが裏の山羊の欄のこちら
 で青い綿豆をつんでゐるところへいらつして、
 お湯上りの袂から煙草を出しておつけになる。

日はもうさつき、栗の木の後、となりの屋根の
 向うへ這入つて、一日のいきれからよみがへん
 たやうな青い霞が下りてゐた。

—今これを少しばかり取つて見ましたのでござ
 いませうけど、まだやつとこれだけしかござい
 せんですの。—

おくみは小さい笠を持つて湯を出た。

—ほんの十ばかりだね。—

—さうでもございませぬわ。こんなに小さいの

歸るとして、それから先をどうしたらいいもの
 かと考へると、自分ながら心もとない氣がす
 る。

おくみはここに膝を突いた儘、お向ひのお家
 の二階屋根の片面に、黄色い色に染まつた夕日
 の影を見るときもなく見入つてゐた。今度はも
 う平河さんのお家へもさう長く御厄介になつて
 ゐたくない。おくみはこのやうな事を相談すべ
 き人がだれ一人とて無いのであつた。

それから氣がついて薄面をひづける。障子の
 縁に立てた、懐鏡の蓋の赤い布がかうした沈ん
 だ心持を色づけるたつた一つの赤い色のやう
 に小淋しい。

おくみはその一隅を掃き出しながら、かう
 して青木さんたちによくして戴いて、自分の家
 かなぞのやうに心安く置いて戴いたこの二月
 ばかりの間のことが、この先いつまでも自分の
 一番戀しい頃のやうに思ひ返されるであらうと
 いふ氣がする。

おくみはそれから押入を開けて、お午前に、お
 かみさんがいらつしたときに念いで取り片づけ
 たまゝの着換への着物を出して、襟をつけかへ
 たばかりの長襦袢もちやんと疊み直した。

ふと、もう一つの悪い方の丸帯を解して表に

氣がした。

「このお節帯は、これからでもひんやりしてゐ
 ていいでせうね？ 建前の工合でせうか。」と、
 おかみさんが仰しやる。

「どうしてもこゝいらは市中とは暑さが違ひま
 すでせうね。」

おくみは坊ちゃんのお出しになる種をお盆の
 はしへ置いた。

「その代り蝉が澤山ゐてうるさいや。」

青木さんは巻煙草に火をお付けになる。おく
 みはこの間もさう仰しやつたのを思ひ出して、
 餘つ程蝉がお嫌ひなのだらうと思ひながら微笑
 んだ。

おくみさんはそれから二階へお上りになつた
 り、裏口へ出て御覽になつたりして、しばらく
 お遊びになつた後、午後の日ざしのまだ残つて
 ゐる中を歸つていらつした。

青木さんはおくみのゐないところで、いつそ
 このまゝおくみにもうしばらく面倒を見て貰ふ
 譯には行かないかとおかみさんにお訊きになつ
 たのださうであつた。

「それやくみちゃんの氣持一つで、私がどうつ
 て事は勿論ないんだけど、それにしても、また
 お母さんの方の考へもあることだしとさう言つ

ばかへた。

何だかおみさんに相談したいことを言ひ遺
 したやうに思つてゐるけれど、考へると青木さ
 んのお節帯のことその一つであつた。あすは
 婆やさんを一人でおよこしになるやうに言つて
 お歸りになつたけれど、馴れない人には家が一
 寸分りにくいだらうが大丈夫かしら。おくみは
 そのやうな事もそれとなく氣になつた。

髪を結つて了つて油手を拭く反古の一つに
 は、養母から来た手紙のちぎれの字が讀み返さ
 れた。これでもうから一應すぐ平河さんの方へ

「それに愛やさんがまゐりますと、蚊帳の都合があれでございませうから。」
 「蚊帳なんかどうだつてなるよ。一張り買ったつて借りたつてどうでもなるもの。」と、お笑ひになる。
 「あなたが坊ちゃんとお寝みになつて下さいませば、一晩ぐらゐは、私たち二人があつた蚊帳でもすみますけど、でも愛やさんに一日だけ一緒にあつた蚊帳を買つて置きましたら、大抵何にも分つてくれますのでせうから……」
 おくみは茶を持ってきて、棚の中の山羊が、自分のくれた餌を食べてゐるのに目を遣りながら言つた。
 「くみちゃんにはおかみさんが何とか言つた？」
 「いえ、別に何にも仰しやしませんですけど……なぜでございませう？」
 「何、たゞね……もつとおくみさんを借してくれと言つただけで御裁可にならなかつたんさ。どんな愛やが来るか知らないが、私はもう厭になつた。久男さへゐなければいつそ一人でどこかへ下宿でもするんだかね。あの子をだれか貰つてくれないものかしら。」
 青木さんは、棚の横木に釘が出てゐるのを内

へおいでになる。
 坊ちゃんの外の方で、お向ひの女の子さまたちと歌を詠つていらつしやるのが聞える。歌に合せて銀笛をお吹きになるのはお向ひの一番上のお子さまらしい。何だかいつにない物哀れな夕方のやうな心持がする。
 おくみは瓦斯をつけて、鶏豆を茹でるための鍋をかけた。それをさつと茹でて入れて、味さへつけければシチューが出来るやうに拵へが出来てゐるのであつた。
 青木さんが茶の間へいらつして、袋戸棚を開けてウキスキーをお出しになる。
 「いよ、あちらへ持つてつて一口飲めばいゝんだから。」と、自分で持つていらつしたが、しばらくして、あちらからお呼びになる。
 「何か御用でございませうか。」と、おくみは青木さんのおかけになつてゐるテーブルのところへ行つた。
 「もつとこちらへおいでよ。今晩は何にも拵へなくていいから、こゝへかけてこれを注いでおくれよ。」と、いつになく御自分からお言ひになる。
 「では一寸お待ちになつて下さいませば、只今ちき、召し上げるものを拵へてまゐりますから。」

「でも細君なんていゝ加減なものだからね。また變なものに來られたら大變だ。——御覽よ、今時分蝶々が二匹あそこを飛んでら。」
 青木さんは考へたくな事を考へさせられてもなすつたやうに、他の事を考へひになる。
 「もう今日もこれで暮れてしまひませうね。」と、おくみも話を換へて、そちらのぶらんこの柱のそばの土の上を、二つもつれて低く舞ひくする黄色い蝶々の方を見た。
 「玉蜀黍がいつの間にかあんなに高くなつた。」
 「あそこの花床にはずるぶんいるんなものが蒔いてあるのでございませうね。」
 おくみはお先へ失禮してあちらへ歸りかけた。
 と、
 「おくみさん、背中に襦袢が附いてるよ。」と仰しやつて下さる。
 「さうでございませうか。さつき襦袢をあれいたしましたから。」
 「もつと上。」取つて上げよう。待つて御覽。」
 「どうもすまませんでございませう。」とおくみは顔を赤らめた。
 「たうと自分で髪を結つたの？」
 「髪でございませうか。」
 おくみはその電気を、まだ少し早いけれど點して置いて、急いでさつきのお料理を盛へて來た。そこへ坊ちゃんも丁度歸つていらつした。
 その夜おくみは、青木さんにお留守を頼んで、坊ちゃんを伴つて四谷まで買物にやらせて戴いた。
 「坊ちゃんのお好きなものを何でも買つてお上げ申しますから電車のところまでさつきとお歩きなさいませう。」
 おくみは門口でかう言つた。
 「もう、かうしてお連れ申して出るのも今夜きりだといふ事もお知りにならない坊ちゃんは、はじめて常衣の人におなりになつた背をうれしさうに、先に立つてお歩きになる。」
 「姐ちゃん、あそこに赤い灯が附いてるよ。」と、立ち止つてお待ちになる。
 「あれは自動電話。さ、早くまゐりませう。」と、手を引いてお上げする。
 おくみはそれとは言はないで、今日の帯を表にするお詣りの、裏と細とを買ひに行くのであつた。

「でも細君なんていゝ加減なものだからね。また變なものに來られたら大變だ。——御覽よ、今時分蝶々が二匹あそこを飛んでら。」
 青木さんは考へたくな事を考へさせられてもなすつたやうに、他の事を考へひになる。
 「もう今日もこれで暮れてしまひませうね。」と、おくみも話を換へて、そちらのぶらんこの柱のそばの土の上を、二つもつれて低く舞ひくする黄色い蝶々の方を見た。
 「玉蜀黍がいつの間にかあんなに高くなつた。」
 「あそこの花床にはずるぶんいるんなものが蒔いてあるのでございませうね。」
 おくみはお先へ失禮してあちらへ歸りかけた。
 と、
 「おくみさん、背中に襦袢が附いてるよ。」と仰しやつて下さる。
 「さうでございませうか。さつき襦袢をあれいたしましたから。」
 「もつと上。」取つて上げよう。待つて御覽。」
 「どうもすまませんでございませう。」とおくみは顔を赤らめた。
 「たうと自分で髪を結つたの？」
 「髪でございませうか。」

「でも細君なんていゝ加減なものだからね。また變なものに來られたら大變だ。——御覽よ、今時分蝶々が二匹あそこを飛んでら。」
 青木さんは考へたくな事を考へさせられてもなすつたやうに、他の事を考へひになる。
 「もう今日もこれで暮れてしまひませうね。」と、おくみも話を換へて、そちらのぶらんこの柱のそばの土の上を、二つもつれて低く舞ひくする黄色い蝶々の方を見た。
 「玉蜀黍がいつの間にかあんなに高くなつた。」
 「あそこの花床にはずるぶんいるんなものが蒔いてあるのでございませうね。」
 おくみはお先へ失禮してあちらへ歸りかけた。
 と、
 「おくみさん、背中に襦袢が附いてるよ。」と仰しやつて下さる。
 「さうでございませうか。さつき襦袢をあれいたしましたから。」
 「もつと上。」取つて上げよう。待つて御覽。」
 「どうもすまませんでございませう。」とおくみは顔を赤らめた。
 「たうと自分で髪を結つたの？」
 「髪でございませうか。」

「でも細君なんていゝ加減なものだからね。また變なものに來られたら大變だ。——御覽よ、今時分蝶々が二匹あそこを飛んでら。」
 青木さんは考へたくな事を考へさせられてもなすつたやうに、他の事を考へひになる。
 「もう今日もこれで暮れてしまひませうね。」と、おくみも話を換へて、そちらのぶらんこの柱のそばの土の上を、二つもつれて低く舞ひくする黄色い蝶々の方を見た。
 「玉蜀黍がいつの間にかあんなに高くなつた。」
 「あそこの花床にはずるぶんいるんなものが蒔いてあるのでございませうね。」
 おくみはお先へ失禮してあちらへ歸りかけた。
 と、
 「おくみさん、背中に襦袢が附いてるよ。」と仰しやつて下さる。
 「さうでございませうか。さつき襦袢をあれいたしましたから。」
 「もつと上。」取つて上げよう。待つて御覽。」
 「どうもすまませんでございませう。」とおくみは顔を赤らめた。
 「たうと自分で髪を結つたの？」
 「髪でございませうか。」

八の馬鹿

私がしばらくくみた或貧しい漁村に、八といふ馬鹿がゐた。八といふのは十文に二文足りない馬鹿な人間といふ意味だから、博士にでも男爵にでも、下女にでも、犬にでも、馬鹿には平等に附與して、はすの便利な普通名詞なのだけれど、村では八といへば、不公平にも、一人この八のことになつてゐた。

村中で八を馬鹿にしないものは、たゞ石と丸太と、人の女房及びそれ以外の多くの女が、自然の命令に従ひ、又は自然に對する反感の企圖の下に、従つて、歡喜又は煩悶、人間の或は獸的平氣を持つて胎内に安眠させてゐる、未來の人間とだけであつた。村といつても、人家はいくらもない。人口も、うぢやう／＼した豚のやうな子供と、その背中に吸つ附いてゐる準子供を除くと大人はいくらもゐない。子供はすべてこのことを實行する先頭走手である。つまりそれだけの村でゐて八を知らないものはあり得ないからであつた。

にしてゐた。但しこの場合、子供が八を馬鹿の子分だと信じてゐたといふことを註記したところで、私の外見的急進肯定を合理にするには役立たない。これは八が馬鹿で以て鳥のやうに黒いといふ、大人の比喩と、子供等によつての、その比喩の直受とを意味するだけだからである。

八と鳥とは、それより先に或交渉があつた。八は元來は村の直産物ではなかつた。他の村か町かの粗製な製産品であつた。併しどこものだかはだれにも分らなかつた。いつから村にゐるのかといふことも私はねづから聞かないでしまつた。三十七八になる或一人の女の言によつて、その女がまだ雛をしたりしてきやつきやつ言つてゐた當時、或十二月時分のほろ、寒い午後、もとゐた、村の女の先生が、齒下駄をはいてと／＼向うの村からやつて来た。そこでこちらは鼻汁をすつて頭を下げた。その後から、赤い胸かけをつけた、毛の長いがたがた馬が、荷を背負つてと／＼やつて来た。

その女の子は一人のそ／＼と馬鹿の後へついで村の通りの中ほどまで行つた。稀に通る大きな動物だから、面白くて附いて行つたのであつた。

すると向うから、膝までしかな、黒い色のぼろ／＼の着物を着た、髪はぼろ／＼延びた一人の男がやつて来た。まっ黒い足をして、踵足のその／＼やつて来た。通りの家のものが、つき／＼に戸口へ出て覗いた。八がはじめて村へ這入つて来たのであつた。人が出て見たのは、最初に八を見附けた人間が愕いたのが鼻火線となつて、次の家から家へ好奇心が點火されたのである。その最初の発見者に傳きを與へた所以は、八が半分毛を捲つた泥まぶれの鳥の死骸を片手に握つて、股のところをがぢり／＼と噛みしやぶりながら乗り込んで来たからであつた。八はもとより馬鹿だから、何にも言はないで、のそり／＼、失はれた人間のやうに歩いて来た。一われは水を以てバブテズマを投ぐ。されど汝等の未知なるもの一人汝等の中に立てり。とも一われに後れ来りてわれにまさるものとはこれなり。とも言はなかつた。

笑つた。おまへだつて、そのちんちくりんの赤ら髪と、その二本の反商とは、馬のあとへ吸つ附いて行つたときと一寸も變つてゐやしまいと私は言はずに黙つてゐた。

この女は顔には竹の皮のやうな黒いぼろ／＼が一面にあつて、併しそれはどうでもいゝ、それよりも八は、つまりその時から四十でゐたつたらしい。如何となれば今にやつぱり四十四の人間に見えるからである。村の大人が鳥の子分だといひ、子供等がその嘲笑を、正面から受取つてゐると私がさつき言つたのを二分間記憶出来るものには、八がいかに馬鹿だらけの汚い顔をしてゐるかは、いかに馬鹿な男爵にでも直ちに再びこゝでの的確な寫像が現像できるであらう。彼のその黒さと汚さに次いで彼に目立つてゐるものは、第一に彼の長い、ほこりだらけな、くしやくの髪と、瘦せた、ひよろ／＼した長い體軀、彼のしよぼ／＼した目であつた。公平に言へば彼を形成してゐるすべてのものがストライキングに出来上つてゐた。併し私にはその目が一等八を特徴してゐるやうに思はれた。一寸見ると泣き出しさうな顔に見えるやうな目で、同時に眠いやうな、又何が何でも平氣だといふやうな、さうかと思ふと陰鬱なやうな、面

も笑つてゐるやうな、あらゆる表情を一度に發現してゐる目であつた。それが、各の二分の一秒にちき／＼瞬きをする。瞳の閉開と共に、目の上下の皺と、小鼻との痙攣が加はつて、迅速に且つ間斷なくちき／＼、ちき／＼と瞬いてゐるのである。それで以て目がくたびれるせゐるとあるまいが、八はよく居眠りばかりしてゐた。

八が村へ来たときのことは、さつき女の女以外に多くのものが記憶してゐた。或ものは、八はこのさきさきの村のもう一つ先の町から来たのだと言つた。併しその町では、まだもつと先の村からのそ／＼来たのだといつてゐるさうであつた。その所謂出て来た村へ行つても、またその先へ行つても、つまり循環環小数が切り切れないのと同じであつた。八は、どうしてこの村から向うへ行かないで、こゝにばかりゐつてゐるのかといふことは、馬鹿な村人にはもとより分らなかつた。私にだつて分らなかつた。村のものたちは、然りつばい大人大洋が、少しでも顔色をかへると、青くなつて大ききわをして巢穴へ逃げ込むけれど、一寸でも笑つて見せると勇み立つて、百人の籠の上をかけ廻つて、わつしよ／＼といひながら、彼の胸の中

の鬚を取つた。鬚はまつ裸で赤城のやうに黴いた。ぼろ／＼の、灰色な、又は藍色な、低い草履根が、山を背にしてうぢやう／＼と群がつてゐた。それが赤城の巢であつた。その狭い通りの中程に二間四方くらゐの大きな井戸がたつた一つあつた。こゝへ、村中の若い女たちが帯の代りに繩や小紐を結んで、片かたの下駄をはいたり、跣足になつたりして水を汲みに来た。彼等がそこへがや／＼集まつて、二十本ばかりの繩釣瓶で丸桶へ水を汲んだり、わい／＼言ひながら肩にかついで運んで行くさまを見てゐると、彼等は全て水を汲むために生きてゐる動物のやうに見えた。

けれども彼等の多くはその忙しい生存が夜になると、結果的に言へば、てん／＼に争つて子を胎むことに熱中した。そのため、多くの子供が水銀劑で解けた。その水銀劑は或野生の植物が供給した。解けない奴は、大きくなつて青鼻汁を垂らしてうぢやう／＼わい／＼と活動した。子供等は村の巡査にお辭儀をすることと八が馬鹿だといふことより外には何にも知らなかつた。その巡査は、七月になると、眞つ裸で村を歩いた。人のいゝ巡査であつた。十二

はそれを掘つて来て、穴の中へかこつて置く。かこひ餘したのは、小さい女の子や婆さんたちが手の甲で鼻汁をこすりながら庭で薄く切つて、薪に干した。十一月十二月には、どの家でも、目のふちを赤く爛らせた婆さんや、赤ら髪の子が、月日の薪の上で、ぎしり／＼と手を切つてゐる。或意味から言へば、婆さんは晩年には芋を切り芋を食つて地獄へ行くのであつた。女の子たちは芋を食ひ芋を切つて、子を産むべく下ろすべく大きくなるのであつた。村中にはどこへ行つてもさういふ切芋が薪の上に干し並べてあつた。それへ薪が眞つ黒になつてゐた。全で薪を干したやうになつてゐた。

さういふ村にゐて、しかも、鼻たれや赤蟻や、日腐り婆さんたちに馬鹿にされてゐる八は、彼等の上に卓然として、嘗て芋には見向きもしなかつた。どんなに腹が減つても米でなければ食はなかつた。米を毎日食ふところは村ではたゞ村長の家と郵便局をやつてゐる物持の家と、寺の坊主ぐらゐのものであつた。村長や郵便局は金があるから食ふのであらうが、寺の坊主は、金は一文もないくせに、且つ爺さんと婆さんの財布の一文銭をかき集めて活きてゐるくせに、

威張つて米なんか食つてゐた。佛さまに供へるために米を焚かなければならないかも知れないけれど、佛典によれば、佛は印度の穀治屋の婆さんのところで腐つた豚を食つて、歸りに赤痢になつて道ばたでしやア／＼と下して、喉が乾いてたまらないから田のどろ水を掬つて飲んで男である。そんな男が米でなくては食はないといふやうな贅澤なことは言はない筈である。もしさう言つてゐるとすれば、佛だけに統一ばいづつ飯を焚いてやつて、坊主は芋を食へばいいわけである。けれども米を食つてゐるの處誰かであつた。

錢ぐらゐの素通しの眼鏡をかけてゐた。その眼鏡は、或とき片つ方の、耳へかける柄の先が五分ばかりぼくりと折れて地びたへ落ちた。遺査はその折れをくる／＼見廻したが目つからなかつた。二三日して、村の女の子の一人が使ひに行きがけに、土の中から爪でほじり出した。太陽の光線できら／＼光つてゐたからであつた。

「八よ／＼。と上から座板をごと／＼言はせると、八は直ぐに、呼鈴が押されて鳴るやうに迅速に、下からもぐり出た。冬の寒い夜中などに、火の番は、窓からばり／＼小便をしながら、下から出て来て暗がりを目をばち／＼睨んでゐる八に向つて、「しゅッ／＼」と犬をけしかけるやうに息を鳴らした。すると八は直ちに命令を聞きわけて、赤火竿の綱をたぐつて、灯籠をたぐり下して持つて来る。そのときは眞つ暗い沖の方で、海がごろ／＼鳴る中に、一點の赤い松火がぐる／＼と振られてゐるときである。海鼠を取りに出た最後の船の歸着を知らせる灯である。

はしたといふ話であつた。「ちよいと、ちつとしちよれ、だれか来た。」と物置の中などで男が言ふ。「八ぞい／＼。かまはんよい。」と女はくす／＼笑ふといつたやうな調子であらう。

「よし来た。およい、手前もこつちへ来いよ。かア〜かア。」と五六羽の鳥が飛んで来て八のぐりり〜下りた。そして、土の上の藁、即ち八の口で洗濯された藁の粒を拾って食った。

「おや、お前ばかりずん〜食ふぢやないか。おや〜、こいつは石の砕けらだ。ベツ。かアかア、かア〜。」と一羽の鳥が口を、少しく体懸してゐたが、やがて、

「さうだ」といふ風に八の手元へ飛んで行つて、袋のはしに喰つ附いてゐる白い米粒を突ついで食ふ。八はあんげらんとして顔曇つた飯を喰んでゐる。このとき程八の顔面の多忙なことはなかつた。目も開きなく、鼻の上に、口も頬もが〜動かしなればならなかつた。つまり彼の顔は目と口を中心として、兩個の渦動に轉回するのであつた。鳥はそのどきどきまぎれに、八の手の先に附いてゐるまで口へ入れた。

「おい八さん、その中指を上を上げるよ。そこに一粒附いてゐるから。さうだ。かア」と嘴を持つて行く。こんなづら〜しい鳥が出世して代議士や銀行の頭取などになるのであつた。

そこへ子供がわい〜言ひながらやつて来る。

「しよ〜い〜。」と一人の子供が鳥に砂を投げ

「よせやい、鼻汁たれ。おい諸君、ぼつ〜行かう。」と鳥は悠々として立つて行く。下〜下りると八は八と大きな子供だと思つてゐた鳥も、天空へ舞ひ上ると、何んだ、よく見れば他より小さな、黒豆のやうな八と黒豆のかけらのやうな鼻汁たれ共ぢやないかと思ふ。だから鳥は、この次にもい〜氣になつて下りて来るのであつた。

「見いよ、八が飯を食うぢやら。」と子供は八を取巻いて珍らしさうに見てゐた。けれども幸にして彼等は代議士の子でないので、たゞ遠巻きに見てゐるだけで八の飯を取つて食はうとするものはなかつた。この點は感心である。八は目をぱちくり〜させながらゆつくり〜食つて行く。この八と、同じ米の飯を食ふ村長たちとの違つてゐるところは、八の顔はいくら物を食つても、食はないときの顔と少しも變らないことであつた。いつまでも腹の太つてゐるやうな、同時にいつ見ても腹に何にもないやうな顔をしてゐた。

「八の袋へ砂を入れちやうらうかい。」と一人の鼻

汁たれがいふ。

「おい、これ〜何うする。そげんことをすると海に食はせるぞ。」と丁度い〜ところへ年取つた赤蟻の漁師が来て砂地へ杖を打つ。あとから五六人の若い赤蟻が網を捲いでやつて来る。

「どけい〜。あつち〜行つて遊べい。食はせるぞ。」といふ。子供はのそり〜逃げて行く。

八はさうして安全に食事を了〜ると、ごろんと地びた〜轉がつて目をつぶつてゐる。その顔を見ても何事にも不氣な事つぽな顔にも見えるけれど、日の當り合合では、八は村の何人よりも最智慮ある人間で、それがすべての人の運命を豫知して、驚かに彼等の前途のために腹想してゐる顔のやうにも見えた。

「おい八。」赤蟻がいふ。

「御見たいな鼻をしちよらいなう。」と、餘計なお世話をやきながら刺を下す。

八はそんなことは平氣で目をさすまですやすや寝て、目没と共に番小屋の下へ這入り込むのであつた。

八はそんなにして、十日目に一度ぐらゐるしか飯を食はなかつた。寺や村長などところへ飯を買ひに〜寒ろたきものを興へに〜出かけた。

「何ちふ馬鹿ぢやる、人がやらうぢふの。」と婆さんは怒つた。後になつてこの婆さんも他の女たちも、八に物をくれるには、八が通るときを見計つて、往來〜拾つて置けばい〜といふことを知つた。けれども村のものも貧乏だから減多に八に物を施す餘裕もなかつた。

「うりイ、八がたアけアの着んもを買うちよらア、あ〜い。おや、八がおたけちゃんの着物を買つてるぞ、アアい。」と、或時村のものが笑つた。おたけといふ婆のぢれた女がゐた。それが、八が冬の眞ん中に、いよ〜ぼろけはてて臂の上までしかない着物を着てゐるのを見て、自分の單物のぼろ〜になつたのをくれたのであつた。八はさういふものを三年でも五年でも着てゐた。道ばたに落ちてゐるぼろ布は、たとひ洋だらけになつた一寸四方の小布でも八はすぐ拾つて海で洗つて乾かして、自分のぼろ着物の上へ縫ひつけた。時には、唐米袋や古手拭の切なぞが八のコートの一部分に點綴されてゐた。

「全でぼろが歩いぢよるやうなもんぢやなう。」と或時村の巡査は笑つた。十二錢の眼鏡の、両も柄が折れたのをかけてゐる癖に、いかに八を嘲るやうにから〜笑つた。日の腐つた床屋

「よし来た。およい、手前もこつちへ来いよ。かア〜かア。」と五六羽の鳥が飛んで来て八のぐりり〜下りた。そして、土の上の藁、即ち八の口で洗濯された藁の粒を拾って食った。

「おや、お前ばかりずん〜食ふぢやないか。おや〜、こいつは石の砕けらだ。ベツ。かアかア、かア〜。」と一羽の鳥が口を、少しく体懸してゐたが、やがて、

「さうだ」といふ風に八の手元へ飛んで行つて、袋のはしに喰つ附いてゐる白い米粒を突ついで食ふ。八はあんげらんとして顔曇つた飯を喰んでゐる。このとき程八の顔面の多忙なことはなかつた。目も開きなく、鼻の上に、口も頬もが〜動かしなればならなかつた。つまり彼の顔は目と口を中心として、兩個の渦動に轉回するのであつた。鳥はそのどきどきまぎれに、八の手の先に附いてゐるまで口へ入れた。

「おい八さん、その中指を上を上げるよ。そこに一粒附いてゐるから。さうだ。かア」と嘴を持つて行く。こんなづら〜しい鳥が出世して代議士や銀行の頭取などになるのであつた。

そこへ子供がわい〜言ひながらやつて来る。

「しよ〜い〜。」と一人の子供が鳥に砂を投げ

「よせやい、鼻汁たれ。おい諸君、ぼつ〜行かう。」と鳥は悠々として立つて行く。下〜下りると八は八と大きな子供だと思つてゐた鳥も、天空へ舞ひ上ると、何んだ、よく見れば他より小さな、黒豆のやうな八と黒豆のかけらのやうな鼻汁たれ共ぢやないかと思ふ。だから鳥は、この次にもい〜氣になつて下りて来るのであつた。

「見いよ、八が飯を食うぢやら。」と子供は八を取巻いて珍らしさうに見てゐた。けれども幸にして彼等は代議士の子でないので、たゞ遠巻きに見てゐるだけで八の飯を取つて食はうとするものはなかつた。この點は感心である。八は目をぱちくり〜させながらゆつくり〜食つて行く。この八と、同じ米の飯を食ふ村長たちとの違つてゐるところは、八の顔はいくら物を食つても、食はないときの顔と少しも變らないことであつた。いつまでも腹の太つてゐるやうな、同時にいつ見ても腹に何にもないやうな顔をしてゐた。

「八の袋へ砂を入れちやうらうかい。」と一人の鼻

汁たれがいふ。

「おい、これ〜何うする。そげんことをすると海に食はせるぞ。」と丁度い〜ところへ年取つた赤蟻の漁師が来て砂地へ杖を打つ。あとから五六人の若い赤蟻が網を捲いでやつて来る。

「どけい〜。あつち〜行つて遊べい。食はせるぞ。」といふ。子供はのそり〜逃げて行く。

八はさうして安全に食事を了〜ると、ごろんと地びた〜轉がつて目をつぶつてゐる。その顔を見ても何事にも不氣な事つぽな顔にも見えるけれど、日の當り合合では、八は村の何人よりも最智慮ある人間で、それがすべての人の運命を豫知して、驚かに彼等の前途のために腹想してゐる顔のやうにも見えた。

「おい八。」赤蟻がいふ。

「御見たいな鼻をしちよらいなう。」と、餘計なお世話をやきながら刺を下す。

八はそんなことは平氣で目をさすまですやすや寝て、目没と共に番小屋の下へ這入り込むのであつた。

八はそんなにして、十日目に一度ぐらゐるしか飯を食はなかつた。寺や村長などところへ飯を買ひに〜寒ろたきものを興へに〜出かけた。

る。そして三十年の間、精進して、小止みもなく目をばち／＼させて来たのである。あたり前なら、もう恩給が附いて、貴族院ぐらゐへ入れられてもいゝ筈だけれど、だれ一人、八のためにさういふことを運動してやるものがあるなかつた。

それでも八は一寸も不平を言はずに床の下にもぐつて暮して来た。未だ嘗てたゞの一度も口を利いたことがない。笑つたこともない、欠伸をつしたこともない。大人しく、何の音も立てずに床の下にゐた。雪が積つて裏の入口が寒くしてしまふと、その雪が溶けて一人て出口が開くまで、ちつとしてゐた。七八月には蚊がうぢやうぢやたかつて體中を刺しても、八は掻きも動かしもせず我慢してゐた。中學校用、師範學校用、高等女學校用、女子師範學校用、商業學校用、農學校用と、學校によつていろいろに體身の使ひわけがしてある今日に、それらのいづれを聞いても、精進又は忍耐の部に八のことが書いてないのは誠に日本の道徳的進歩のための一大根事である。

それは或秋の暮であつた。村のものは近頃八が番小屋の側にゐなくなつたことを發見した。火の番の若者が、夜床の下を覗いて見ても八は

ゐなかつた。
「八い、八い、ゐないかい。うりイ變だぜい。」と、若ものは竹竿を持つて来て八の穴を突つ突いた。それでも八はゐなかつた。
「どこへ行つたんづら。」
「もうこの村に飽きたんづらうか。」
「さうぞい。お前がそんなえな婆さまになつたけ、八があいそりつかして他所へ行つたんだい。」

「お前がそねいにいゝ男ぢや怖れたのよ、こげんものがゐるところにやうらゐなアチユて、どこかへ行つたんづらう。」
「あは、／＼／＼。」
と村のものたちが笑つた。
すると、たゞの半鐘の上へ鞭をかけて煩冠をした。郵便配達の爺さんが、村のはづれの出岩の上で、八がわん／＼泣いてゐたと言ふ報告を持つて歸つた。人々はいろんな噂をした。巡査が通りかゝつて、作れて歸らうとしても、たゞうん／＼泣いてばかりゐて動かないのだと言ふものもあつた。
「行つて見よう／＼。」と子供等は駆けて行つた。
「ゐないよ。誰ばつか吐かア。」と、やがて彼等

の一人は歸つて来た。八は出岩からまたどこかへ行つたものらしかつた。それから尙十日ばかりも八の姿が見えなかつた。
その間に、或ものは、八が社の後の赤剱山で、深だらけになつて轉がつてわん／＼泣いてゐるのを見たといふものもあつた。その外いゝ加減なことを言ふものもあつた。
「死んだんづらうぜ、そいぢや。」
「さうよなう。どこか病めるけ、泣いとつたんづらうい。なう、かはいさうに。」と年寄りたちは言つた。

それから二三日して大雨風があつた。村中の屋根がばら／＼に吹き飛ばされて、そこいら中へ牛小屋の中のやうに藁がちらばつた。船といふ船は道ばたまで引き上げられた。ごう／＼と土砂ぶりの雨が暴れ狂つた。寺では鐘をがんに叩いた。社の時の太鼓も鳴り響いた。子供等は顔へ上つて泣いてゐた。男も女も、その晩はいたづらどころではなく、自分の家の倒れるのを恐れながら固まつてゐた。火の番の若いものたちはびしよぬれになつて黒い夜の中をか

き出したり、猫を探して歩いたり、倒れた垣を起したりした。海に向いてゐる家々の雨戸は、づ／＼になつて開かなかつた。
その夕方がどんよりと濁つて暮れて行く頃、村のはづれのうどん屋の煤だらけの二階に、七つになるおしいといふ女の子と、四つになるおつうといふ女の子が、ぬれそぼちた板戸の戸袋のところ立つて、雀や／＼、五兵衛がとウこの雀の子といふ歌を歌つてゐた。すると、おつうが、

「うりイ、あしこに八がゐるいなう。」と姉に言つた。
「どこにやア。」と姉が鼻汁を吸つた。
「うり、八ぢやぞい。まあ何するだア。海へはひちよらア。——うり、わん／＼泣いちよら。どうしたんづら。あ、れ波が来た。あ、ずん／＼海へ這入つて行かア。——母やあ母やあ。」と、おしいが下へ下りて行つた。
やがて、父やと母やが上つて来て向うを覗いた。

「誰をつけい。だあれもゐやせんが。」
「うり、うそだいなう。この子は。」と二人は代り／＼言つた。
「そんなもゐない、なう、つうや。」と姉は自己

を主張した。
「一人ぞん／＼向うへ行つたい。」と、つうは廻らぬ口で言つた。
「あつちへ向いてかい？」
「うん、ずん／＼行つたい。」
「うり、そしてどうしたい。」
「もつとずん／＼行つたい。」
「やア？ 死んだんぞい、そいぢや。」
「ずうと體が腫れたかや。」
「あ、。」
「うり、まあ。」
と大人二人は愕いて薄暗い潮が満ち寄せて来るのを見守つた。

やがて村中のものはみんな濱へ出た。八が水の中へ立つてゐたのをたしかに見たといふものが二三人もゐた。
巡査は夜うどん屋へやつて来た。いつも暮れるとすぐに寝るおつうは、母やにぼろ／＼の垢光りの寢間着を濡せられかけてゐた。そこへ父やは門口で巡査に八のことを説明してゐたが、

「つうや、一寸来いよ。」と呼び出した。
「うん、いやアだ。」と巡査が氣味が悪いのでつうは應じなかつた。それを母やが無理に引つ

ばつて来た。
しいも近所から歸つて来た。
「お前たちは八がずん／＼深い方へ行くのを見たんぢやの？」と巡査は訊いた。すると第一にしいが八を殺した責任者でもあるやうに、しやくり上げて泣き出した。つうもおん／＼と泣き出した。

翌る日には火番小屋の近所のものたちは八の穴の前へたかつて、中を覗いたり突ついたりしてゐるんな八の追憶を囁つた。例の三十七八の女といふのもそこにゐた。三十年前の丁度同じかういふ秋の暮に、彼女がはじめて八が村へ這入つて来たのを發見した話をした。例のやうに女の先生にお辭儀をしてそれから馬が通るところから話した。

床の下の藁の中から、八の缺けた籠籠が一つ出て来た。子供等はわい／＼言ひながら、その籠を往來中へ蹴り歩いた。
私が雀の餌ほどの月給で、その村の役場へ出てゐたときのことである。

(大正四年四月)

年譜

明治十五年 (一歳)

九月、父悦二、母ふさの三男として廣島市猿樂町で生れる。當時父は同市役所學務課につとめてゐた。兄二人と次弟とは、いづれも十歳未満で没した。

明治二十四年 (十歳)

九月、母三十七で没す。あとは父、祖母に育てられる。後に同市本川小學校の四年、第一高等小學校の二年を終へて廣島縣立第一中學校に入學する。

明治三十四年 (二十歳)

四月、中學卒業。
九月、第三高等學校に入學。三年間の在學中、神經衰弱と胃病とに苦しむ。

明治三十七年 (二十三歳)

九月、東京帝國大學英文學科に入學。夏目漱石先生の講義をきく。
十月、祖父宮助七十七で没す。

明治三十八年 (二十四歳)

一月、夏目先生の「倫敦塔」と「猫」とが帝國

文學」と「ホト、ギス」で發表される。
九月、神經衰弱にたへかねて、一年間休學に決心し、廣島の家や、瀬戸内海の或島で保養する。

明治三十九年 (二十五歳)

三月、廣島の家で處女作「短篇 千鳥」をかき上げて夏目先生に奉呈する。
四月、先生の「坊ちゃん」が「ホト、ギス」で發表される。

五月、「千鳥」が先生の推薦の辭と一しよにこの月の「ホト、ギス」に掲げられる。

九月、先生の「草枕」が「新小説」に出る。この月上、京復校。先生の門に入り、漸次、高濱虚子、坂本四方太、寺田寅彦、松根東洋城、森田草平、小宮豊隆、野上豊一郎、同彌生子の諸氏に引合はる。

明治四十年 (二十六歳)

一月、第二作「山彦」を「ホト、ギス」で發表す
四月、先生は大學を辭して創作生活に移ら

れる。この月、私の最初の短篇集「千代紙」が初山書店から出る。
五月、「お三津さん」を「中央公論」で發表。

明治四十一年 (二十七歳)

七月、大學を卒業する。同月、父五十七歳で没す。歸郷。「鳥物語」が「ホト、ギス」に出る。十月、千葉縣成田中學校の教頭に就任。

明治四十二年 (二十八歳)

一月、「黒髪」を「國民」に出す。
八月、歸郷して家宅を賣りはらひ、祖母と小母とを成田に伴ひ來り、家をもつ。

明治四十三年 (二十九歳)

一月、「小貓」を「ホト、ギス」で發表。
三月から十月まで「長篇 小鳥の巢」を「國民」にかく。

明治四十四年 (三十歳)

二月、「鳥」が「太陽」に、「赤い鳥」が「中央公論」に、「女」が「ホト、ギス」に出る。
五月、成田中學校を辭して上京。海城中學校の講師を勤めつゝ、創作をつづける。この月、結婚。同校には大正七年まで前後七年在職。受持時間のあひ間に、物置部屋にはひつて創作したことも度々ある。

七月、八月にわたり「瓦」を「讀賣」にかく。

八月、「民子」を「新小説」にかへげる。

九月、「女帯」を「中央公論」に出す。

十月、短篇集「女と赤い鳥」を春陽堂から出す。

十二月、「羊」を「太陽」で發表。

明治四十五年 (大正元年) (三十一歳)

一月、「黒血」を「新小説」に、「鏡」を「中央公論」に、「伯母とお濱」を「太陽」にかへげる。

三月、「人形」を「東亞の光」に、「せんぶり」を「太陽」に出す。短篇集「返らぬ日」が春陽堂から出る。

四月、中央大學講師となり、海城中學と兩方へ出る。中央大學には爾後大正七年まで勤める。

六月、「藤」を「新小説」に、「馬車の出来る間」を「太陽」に出す。短篇集「お三津さん」が春陽堂から出る。

九月、「囚徒」を「中央公論」にかへげる。

十一月、「穴」を「新潮」に、「留守の間」を「太陽」に出す。長篇「小鳥の巢」が單行本として春陽堂から出る。

大正二年 (三十二歳)

一月、「黒蜻蛉」を「新小説」に、「別れる日」

を「中央公論」に出す。

二月、「大伯母」を「文章世界」にのせる。

四月、「紅血」が「新小説」に出る。短篇集「藤」を春陽堂から出す。

五月、短篇集「女鳩」を濱口書店より出版する。

七月、「蛇草」を「新小説」にかへげる。この月から十月まで「長篇 桑の實」を「國民」に連載する。

八月、「霧の雨」を「中央公論」にのせる。

大正三年 (三十三歳)

一月、「桑の實」が單行本となつて春陽堂から出版される。

三月、「戀」を「新小説」に出す。短篇集「赤蜻蛉」が同村書店から出る。

五月、短篇集「留針」が春陽堂から出る。

九月、短篇集「珊瑚樹」を植竹書院から出す。

大正四年 (三十四歳)

三月、全集第一巻「瓦」を春陽堂から發賣。

四月、「八の馬鹿」を「中央公論」に掲げる。全集第二巻「赤い鳥」を出版。

六月、同第三巻「小貓」。

七月、同第四巻「女」。

九月、同第五巻「千鳥」。

れる。この月、私の最初の短篇集「千代紙」が初山書店から出る。

五月、「お三津さん」を「中央公論」で發表。

明治四十一年 (二十七歳)

七月、大學を卒業する。同月、父五十七歳で没す。歸郷。「鳥物語」が「ホト、ギス」に出る。十月、千葉縣成田中學校の教頭に就任。

明治四十二年 (二十八歳)

一月、「黒髪」を「國民」に出す。

八月、歸郷して家宅を賣りはらひ、祖母と小母とを成田に伴ひ來り、家をもつ。

明治四十三年 (二十九歳)

一月、「小貓」を「ホト、ギス」で發表。

三月から十月まで「長篇 小鳥の巢」を「國民」にかく。

明治四十四年 (三十歳)

二月、「鳥」が「太陽」に、「赤い鳥」が「中央公論」に、「女」が「ホト、ギス」に出る。

五月、成田中學校を辭して上京。海城中學校の講師を勤めつゝ、創作をつづける。この月、結婚。同校には大正七年まで前後七年在職。受持時間のあひ間に、物置部屋にはひつて創作したことも度々ある。

十月、同第六巻「霧の雨」。ゴリキイ作「懺悔」の翻譯を博文館から出版する。

十一月、全集第七巻「黒血」。

十二月、同第八巻「金魚」。

大正五年 (三十五歳)

二月、全集第九巻「桑の實」。

三月、同第十巻「藤」。

四月、同第十一巻「八の馬鹿」。

五月、同第十二巻「小鳥の巢」。

六月、長女すけが生れる。

七月、全集第十三巻「小鳥の巢(下)」。

十二月、童話集「湖水の女」を春陽堂から出す。

大正六年 (三十六歳)

四月、世界童話集第一編「黄金鳥」を春陽堂から出す。

七月、同第二編「鼠のお馬」。

八月、同第三編「星の女」。

九月、同第四編「青い鸚鵡」。

十月、同第五編「海のお宮」。

大正七年 (三十七歳)

一月、長男瑞吉が生れる。世界童話集第六編「湖水の鐘」を出す。

二月、同第七編「魔女の踊」。

森田草平集

三月、同第八編『黒い沙汰』。
五月、同第九編『銀の王妃』。この月、氣管支喘息を發し、爾後今もつて、持病となる。
六月、世界童話集第十編『馬鹿の小猿』。
七月、童話童話集『赤い鳥』を發行。爾後昭和四年二月まで十二年にわたり、その經營に努力し、同時に毎月缺かさず一二篇の童話をかく。
九月、喘息のため大學病院に入院。同月退院。

大正八年 (三十八歳)

五月、世界童話集第十一編『感ばり猫』。
六月、長男瑞吉、消化不良で大學病院に入院。九月まで在院。
七月、世界童話集第十二編『黒い小鳥』。
九月、同第十三編『七面鳥の踊』。瑞吉の保養のため、赤い鳥社を東京に残し、一家舉げて葉山に移る。
十月、世界童話集第十四編『大法師』。同第十五編『一本足の兵隊』。
大正九年 (三十九歳)
十月、世界童話集第十六編『あひるの王さま』。一家葉山を引上げ歸京。
十一月、世界童話集第十七編『かなりや物語』。

『古事記物語』上下二巻を赤い鳥社から出版。
大正十年 (四十歳)
四月、世界童話集第十八編『蟹の王子』。同月、乗馬をはじめ、現在までたえず修練す。
十一月、童話集『救護隊』を赤い鳥社から出版。

大正十一年 (四十一歳)

五月、世界童話集第十九編『せんたくやの馬』。
大正十二年 (四十二歳)
四月、世界童話集第二十編『小馬と機關車』。

大正十五年 (昭和元年) (四十五歳)

八月、世界童話集第二十一編『象の鼻』。
十一月、祖母れい、百二歳で没す。

昭和二年 (四十六歳)

六月、『アンデルセン童話集』をアルスの『日本児童文庫』の一冊として出版。

昭和三年 (四十七歳)

五月、大島中將を團長に、私たちは理事となり、十三歳以上十五歳までの中等學生に三年の期間、乗馬を通して精神教育を施す目的で、騎道少年團を作る。一年生入團。

昭和四年 (四十八歳)

二月、この月かきりで『赤い鳥』を廢刊する。
三月、不慮の災難で左大腿骨を折り五月まで入院。あと十月まで苦痛な治療を續ける。
五月、世界童話集第一集『黒い騎士』を春陽堂から出す。同月、騎道少年團第二回新一年生を迎へる。同月、團は東久通宮殿下御邸に召され、一同の乗馬を台費に供へ奉る。
六月、世界童話集第二集『湖水の女』。
八月、同第三集『踊の焚火』。
九月、同第四集『かるたの王さま』。
十一月、童話集『十二の星』を春陽堂から出版。

昭和五年 (四十九歳)

二月、賀陽宮殿下、御乗馬で騎道少年團を御檢閲下さる。同月、肺炎にかゝり、重症。
四月上旬まで就床。
五月、騎道少年團第三回新一年生を採用す。

私に後生樂と云はれ、程健忘症だ。そのせぬ
 か、過去のことは大抵忘れてしまふ。書く時は、
 それでも、一字々々石にでも刻みつけたらな
 簡で、指の尖から血のにじみ出るやうな苦痛もす
 るが、書いてしまつた後はほろりとしてぬる。どな
 長生とすゝでせうよ。

昭和五年の晩春

森田草子

煤煙

水中に満る、如き手つきして
頭のあらぬ偶像をかく

日が落ちて、空模様の怪しく成つた頃である。
 東海道線の下り列車は、途中で故障を生じた
 ので、一時間餘りも後れて岐阜驛へ着いた。車
 掌が「きふ、きふ」と呼びながら、一つ宛車輛の
 戸を開けて行く。其後から、乗客は零れる様に
 プラットフォームへ降りて、先を争つて線路の
 上に架けた橋を渡らうとした。
 小島要吉は三年振りで此停車場に立つた。今
 頃故國の土を踏まうとは昨日迄も思つて居なかつた。
 去年の夏大學を卒業した時でさへ、歸省して見よう
 なぞと云ふ心は起らなかつた。小島は時から都へ出た
 が、いろ／＼因由が有つて、故郷へは歸らない。一
 生歸りたくない。天が下に自分の生國といふもの
 が無ければ可いと思ふことさへあつた。それが今度止むを得ない
 事情で、突然歸つて来て、母も聞かれた土音を

耳にし、見慣れた風俗を眼にすると、幾許水く他
 國に放浪して、自分だけは他所の人間に成濟し
 たつもりで居ても、矢張此處の土と水とで出来
 た人間だと云ふ感じが俄に強く成つた。要吉は
 妙な心持に成つて、一番後から橋架を渡らう
 としたが、偶と便所の側に、兩人の纏附が巡査
 に連れられて竹の子笠を被つた儘立つて居るの
 が眼に着いた。他の乗客が通り過ぎるのを待合
 せて居るものらしい。何處から護送されて来た
 ものか、一人は人相の悪い老翁で、じろ／＼と前
 を通る人の顔を眺めて居たが、最一人は肩の荷
 せた女で、流石に俯向き加減に成つて面を見せ
 なかつた。要吉は思はず足を留めた途端に、顔
 を上げた女と眼を見合せた。二十四五の色の悪
 着い、白眼の睨つた女であつた。因より知らぬ
 女である。で、只斯う云ふ者を見た時に誰もす
 る可厭な感じがした清りで、其儘通り過ぎた。
 改札口で切符を渡して居る時、直ぐ自分の背後

から其兩人が隨いて来るのを見た。
 荷物を受取るのに良暇取つて、人力車を雇つ
 て新出した頃は、町の見世に燈火が點いて居た。
 兩側に柳を植ゑた八間路といふのを直ぐに
 駆けさせると、間もなく芝居小屋の横だの看板
 だのがごた／＼して人通りの賑しい十字街へ出
 た。其處を突切つて、滑川に沿うて行くと、暫
 く監獄の裏手に成る。高い黒板塀の角で、又前
 の纏附を見かけた。扉に叩かれたが、腰纏を
 打たれて、巡査の前をよ／＼と歩いて行く。
 要吉は最一度好く女の顔を見定めたやうな氣
 がして、車の上から振り返つた。能くは分らぬが、
 其女は懐疑して居る様に思はれた。外套の襟を
 立てて、兩人は今夜何處で寝るのだらうと思つ
 た。兩人は同じ犯罪で捕られて行くのか、それ
 とも互に知らぬ同志で、偶、一緒に護送され
 るだけか。同じだとすれば何んな犯罪だらう。
 放火か、亭主でも殺したのか。何れにしても込
 入つた事情がある様に思はれてならぬ。又下ら
 ぬ妄想を始めたなど、自分で打滑して見たが、
 今更女と罪惡とが未來永劫離れ難いものの様に
 思はれて、靡り落ちさうな空模様と一緒に、要
 吉の胸を壓し附けた。
 要吉は自分の不行跡な生活を想ひ出した。去

年の冬、かねて妻と極つた雨江を故郷から招び寄せたに寄せて、女の身に成ると、却て招び寄せられない方が可かつたかも知れぬ。一日もほつと思つた日は無からう。それが此春服の兒が出来たと分つた時、産をする爲と云ふので實家へ歸した。其後で要吉もほつと息を吐いた。雨江は實家で女の兒を生み落したと云ふが、生れた兒も弱く、自分もそれから三箇月に成るのに、未だぶらぶらして居るさうだ。當人からは只一日も早く快く成つて東京へ行きたいと云つて寄越した許りだが、母親のお絹からは是非一度歸れと幾度も云つて来た。それにお絹は又お絹だけで別に相談したい事があるの、外でも無い、要吉の家に賣れ残つた山林を抵當に金子を借りようと云ふのである。お絹は平生の氣性にも似合はず、要吉に桶突いて執拗く云つて来た。それには又それを云はせる者が有るので、要吉は其人と母と、引いては自分と三人の關係に想ひ到る毎に、常に咽喉を扼されるやうな心持がした。初めは手紙で間に合はせる積りで居たが、周囲の紛糾した事情に堪へなく成つて、何事も一思ひに造切つて仕舞ふやうな了簡で、急に新橋を發つて来た。が、借て此處迄来た上で考へて見れば、自分の様な意志

の薄弱な者が、面の當り會つた上で、何を爲し得よう、何を言ひ得よう、其結果は離れた縁を一層離れさせるだけに過ぎない。要吉はこの儘此處から、引同さうかと思つた。車は監獄の裏から寂しい町を幾町か走つて、堤へ上つてやがて長良橋へかゝつた。川風が寒い。石河原へ引上げた新造の船の横腹を瀧を焚いて流して居るのが、橋の上から見える。長良の町端れから往還を左へ折れて、一里許り走れば、要吉の生れた村へ着くのだ。一筋の道が宵闇の中を仄白うつく。氣候が急に冷たく成つた所爲か、其邊の村々をそつて歩く若衆一人にも出會はない。人力車の輪が轆々として、何處を如何して来たとも知らない。村の取附の水車小へで、杵の音が耳へ這入つた時、初めて眼を覺した様に頭を上げた。人力車の輪音を聞附けて、犬が小舎から走り出して吠え始めた。其處から二町許り行つて、用水の上の土橋を渡ると直に生れた家だ。要吉は門前まで車を降りて、濡りを押さうとしたが、分割の工合が悪くて開かない。扉に凭れたまゝ少時躊躇つた。何だか自分の家へ戻つたやうな氣がしない。知らぬ他國に行暮れて、一夜

の宿を借りて寄つた様な心持である。そして間に中から扉を引いて、弓張提灯を持つた五十近い女が顔を出した。「まあ要吉ぢやないか。餘り遅いで、今奥三松の宅へ訊きに出かける所ぢやがな。さあ早うお遣入りやすな。」扉に片手を掛けたまゝ、お絹は身を開いて要吉を通した。要吉は一寸母親の顔を見て、頷いた許りで、黙つて濡りをくぐつた。車夫が後から革靴を両手に下げて這入つて来た。お絹は一寸門外を見送したが、追ひ越る様に隨いて来て、「奥三松は如何した、あれは如何しだい。」「え、奥三松？ 知りません。」「まあ停車場まで迎へに遣つたのに。屹度人込でうろ／＼して居て、見外して仕舞つたんぢやろ。」左様でしたか、私も氣が附かなかつた。」要吉は行儀よく並べた間、石の上を母屋の方へ歩いて行つた。小さい平家造りである。湯を立てたのか、庇から煙がもう／＼と立昇つて、ばち／＼と豆殻の爆る音がする。偶と見ると、一人の女が風呂桶の前に蹲んで、肌を脱いだ兩の肩に濡手拭を一重かけたまゝ、小氣味よく

發育した乳房の邊りをあか／＼と火に照されて居るのが眼に映つた。足音を聞き附けて此方を向いた拍子に、黒い瞳がざらりと流れた。戸口まで立上つて来て、「矢張要吉ぢやたらうがな」と聲をかけた。「あ、お倉か」と言つたまゝ、要吉は側を擦り通つて縁鼻にどきりと腰を下した。「奥三松に會はんのぢやとさ」と、お絹が張合の抜けたやうに言つた。「まあ何の事だ」とお倉は舌打して、「それに今頃迄何處を迂路々々してけつかるんだらう、あの御間がごと、口汚く罵つた。奥三松はお倉の弟である。」

「歳が行かんもんぢやで仕方がないわな。其間戻つて来るぢやろ」と、今度はお絹が取成す様に言つた。お倉は風呂の蓋を取つて、手を突込んで湯の加減を見て居たが、「要吉、直ぐお風呂へお遣入りやして如何ぢやな、着替へんさる前に。」「左様ぢや、左様するが可え」と、車夫から荷物を受取つて、座敷へ運んで居るお絹も言つた。要吉は立上るのも懶い位疲れて居るので、脚馴して居たが、お倉が急ぎ立てる様に言ふので、

一日肩の張つた洋服を脱ぎ棄てて、下駄を突かけて土間へ廻つた。湯氣の一杯立昇つて居る風呂場へ飛込んで、頭を桶の縁へ凭せたまゝ、ぢやぶりとも音をさせないで沈んで居た。お倉は門前の物置から柴を一把抱へて来たが、どきりと其處へ下して置いて、「お湯の加減は宜しいかな」と訊いた。要吉は返辭をしないうで、うつとりとお倉の容子を眺めて居た。お倉は風呂の下を覗く様にして、長い火箸でつゝいて居たが、手に餘る黒髪を地へ束ねて桶で留めたのが、俯向く拍子にざらりと肩へ落ちた。お倉は周章でて桶を拾つて、兩腕を上げて手早く束ねようとした。小さい頭が太く長い頸の上に乗つて、腕から胸へかけて若い男かと思はれるほど氣持よく筋肉が發育した中にも、何處か女らしい婀娜さも見えて、暗闇から浮出した様にすらりと立つた姿は、名工の手に成つた銅像の様に思はれた。一體此女は幾歳に成るのだらうと思つた。要吉が知つてからは、何時でも此通りの容貌をして、此通りの身體附をして居る。お倉は此村に一軒ある××の娘であつた。親爺は村内に死人があつた時墓穴を掘るのが役で、冬に成れば夜番もする。其手際には川魚を

いで遊んで居た。
日頃から此二人は合口で、お絹も自分が若い盛りに町から在郷へ嫁入りして来て、山のこけ猿の様に手が荒れて仕舞つたといふことを、生涯の不平にもし又自慢にもして来たやうな女だから、お倉の外に一寸話の合ふ者は無かつた。お絹の實家は今潰れて仕舞つたが、元名古屋に存つたので、お絹は誰に向つても好く自分が十三の歳から御殿へ上つて、前様のお側でお宮仕へをした時の話をした。別けて好くするのは、秋になると御殿中様のお供をして、出来町の先のお林へ早狩に行つた話であつた。髪を兒輪に結つて、羽二重の裾襦袢を着て、摺鉢の帯を懸結びにして、赤い鼻緒の草履を穿いて、御駕側へ引添つて、しゃなら／＼と済まして行く。自分の家の傍を通る時に、近所のお友達や母親達が見物して居て、あれ彼處にお絹さまが行く／＼と小聲で囁くのが聞えると、胸が躍つて嬉しかつたと云ふのである。要吉も此話は小さい時から側で何度となく聞かされた。それが如何云ふものか、子供心にも作話のやうに思はれて成らなかつた。お絹が其時の様子を衣裳の色合や模様まで、目に見る様に委しく話せば話すほど、餘計に論の様に思はれた。お絹は又お倉に對し

でも負けぬ氣に成つて、昔、新地の枕水といふ妓樓に居た萬浦太夫の全盛を説いて聞かせた。大阪の札指の零落れた家の娘で、其頃年紀はまだ十七にも成らぬ位、それは／＼お絹を見るやうな可愛らしい娘であつたが、可哀想にさる大蔵に身受けされると、間もなく病み附いて死んださうな。お絹の談話工合から見れば、尾張大納言も萬浦太夫もさのみ運庭が無いやうに見えた。
此様にしてお絹とお倉とは殆ど毎日の様に話合つて居た。お倉は何日も意氣地か有るの無いか、お絹は、お倉が分らない女であつた。第一あれだけ永くあんな種業を勤めて來ながら、左様いふ女に有勝ちな、色澤の悪い、病み遣けた容子は少しもなく、子供こそ生まないが身體は何日もみづ／＼と脂切つて、皮一重下には若く血汐が漲つて居る様に見えた。これからして譯の分らない女で有つた。
先刻から要吉は茫然として湯の中に浸つて居ると、お倉が不意に風呂の縁へ手をかけて、「背中を流さうかな」と訊いた。
要吉は夢から覺めたやうに飛上つたが、「いや、最上、出る、出る」と、急に手拭をちやぶ／＼と塗り出した。

「まあ静手として被せしやいよ」と、お倉は抑へ附けるやうにして背中を流して呉れた。
此時要吉はお倉の二の腕に入渠をして、灸で消した痕があるのを見附けた。強い腕の力で背中に擦られて、好い心持に成つて、「お前幾歳やらに成つたんだね」と訊いた。
「三十四」と言下に答へる。
「一寸まごつたが、まだ一人身か」と訊ね直した。
「え、と笑つて居る。
要吉は風呂から上つて、お絹が居る食膳に向つた。お絹は盆を持つて側に坐つて、お給仕をしながら、種々三年の間に變つた村の噂をした。併しあれ程差迫つた手紙を出して、要吉を呼び寄せた肝心の用事に就いては何事も言はなかつた。成るべくそれに觸らない様にして居る容子も見えた。そして一番多く兩江が産をした當時の騒動やら、それから後の消息を語つた。
「彼娘が慣れもんぢやでな。それに月足らずではあるし、生れた當座はこれで育つかしらと思はれる程小さな兒ぢやつた。なアお倉さま。」
「本當に自宅の阿母でさへ、あんな兒が育つと云ふは珍らしいと云つてたんぢや。」

お倉は風呂から上つて、湯氣の立つ身體を拭き拭き大きな聲で返辭をした。
「兩江さま此頃は最々大抵快く成つた様ぢやが、一時はどつと床に就いてな。それに被娘の阿母さんと云ふが、左様云つては悪いが、私が見て居ても眞實の娘とは思はれん位構つて遣らん人ぢや。」
お絹は要吉の顔色を眺めては、ほつり／＼と話した。そして何かと云ふとお倉の方を向いて同意を求める様に「左様だつたね」と訊ねた。久し振に會つた爲でもあるが、我子にも氣を置いて居るやうな氣色を見ると、要吉は何となく可憫らしく成らなかつた。
「未だ戶外へ出歩かれないやうな鹽梅ですか。」
「そ、そんな事も有るまいよ。明日にでも使者を遣れば、屹度飛んで來るだらう。」
「なに、それにも及びません。」
それから暫く経つてから、要吉は好い位に談話を切上げて、子供の時に起臥した寢間へ這入つて、記憶のある夜具を引被つて枕に着いた。停車場へ行つたといふ與松が歸つて来て、お倉にがみ／＼言はれて居るのを夢現の境にして、其後はぐつすり寝込んだが、間もなく何者にか驚いて眼を覺した。枕頭には古い行燈の

油に添んだ紙がぼんやり照されてゐる。何處からともなく紙を叩く音がして、大勢の聲を揃へて唱へる御誦歌が聞える。それが竹藪の向うへ通つて遠く微かに聞えるかと思ふと、又ぼつと大きく近く聞える。秋の夜長に成ると、何處の津堂とか藥師堂とかの建立と稱へて、田舎では好く老人や若い者や、男も女も、緒に連れ立つて勸進に出掛けるのだ。要吉はそれが耳について久しく眠られなかつた。
二
明くる朝要吉が寢床を出た時は、障子に日影が／＼と當つて居た。曇つた空は昨夜の間に名残なく晴れた。楊枝を銜ながら縁側へ出て見ると、藏の前の明地に竹屋の佐兵衛が來て居る。鹿の櫛を取替へるために備はれて來たものらしい。裏の竹藪から太い眞竹を伐り出して、鋸で整に引き割る。引割つてから節を丹念に割つて取るのだ。佐兵衛は要吉の顔を見るとき、冠つて居たお笠の様な帽子を取つてお叩頭をした。
「種を代へるんだね。毎歲今頃取替へるものかしら？」
何有に、左様と云ふ譯も御座いません。何時

でも田畠の隅な時見て遣つときますぢや。」
青竹を割つて櫛を造ると云ふことが、要吉の心に適つた。何となく田舎へ戻つたといふ感じが深い。それに興を催して、まだ楊枝を銜へたま、其處へ蹲んで、泥手と佐兵衛の櫛を引く手を見詰めて居た。
藏の前の明地といふのは、元當屋根の柱が煤びて黒い母屋が立つて居たので、大地震の折に七分通り倒れかけたのを、恰度祖母や父の亡くなつた後で、家内は小人數で避難して居た時分だから、ついでに取崩して仕舞つて、其頃の蔵家にお倉を繼がせて住まふやうにした。それが今も小さい家だ。母屋の跡は其後十餘年來明地の儘で捨ててある。べん／＼草も生えた。裏の藪から根を張つた芽生えの笹も茂つた。子供は其中を狂ひ廻つて遊んで育つた。夏と秋との收穫には隣家から麥の穂や籾を乞せて貰ひに來た。年の暮には小作人が集つて、樽で米を量つて、新穀の伏へ入れて藏へ納めた。或年の秋祭には其處へ小屋掛けして、村芝居を興行したことさへあつた。屋敷跡で芝居を打つ様ぢや、最う其家の運勢も未だと云つて、村の年寄どもが識つたさうな。それが識を爲したわけでもあるまいが、お絹の手一つに委ねて置いた身代は見

頼いた。要吉は十四の歳から東京へ勉強に出されたが、それが大學を卒業するころには、最う小作人も年貢米を量りに、寄つて来なく成つた。

勿論其中には不作もあつた。三年續いて耕地の上を洪水が溢れて、米一粒野米一把取れないこともあつた。左様成つては、年貢米を宛にするものが出来ないうに、片方では要吉の學費が段々かさむので、其頃から少しづつ田地を減し始めた。お絹は子煩悩であるから、我が子が成業するために、身代の無く成るなどは何とも思つて居なかつた。只それが向う五箇年の學費があるつもりで、豫算を立てて金子を調達して、お絹に預けて置くと、一年餘りの間に何處へか消えて仕舞ふ。又三箇年位はと思つて拵へると、一年足らずの間に無く成る。お絹は自分でも氣を揉んで非常に心配して居るが、其中から無くすることは矢張無くして居た。こんな都合で元々多くも無い身代だから、今では雜木道りて薪や柴しか刈れない山林が數町歩と、租税が高いのと年貢が滞るので、誰も買手の無い小作人の宅地が七箇所許り残つて居るだけに成つた。それだから要吉は學生時代から少し宛は筆で稼いで、學費を補ふ様にして居たが、學校を出た

其日から自分の胸一つで世に立つ外はなかつたのである。

「要吉や、顔が洗へたら直ぐ御飯を喰べなさらんか」と、家の中からお絹の呼ぶ聲がした。

二三度呼ばれてから漸と聞附けて、要吉は知らぬ間にお絹が汲んで置いた金盥の湯で、ベちやべちやと顔を洗つたまゝ家の中へ這入つて行つた。茶の間ではお絹が席立をして、長火鉢の側に子然として待つて居た。要吉は座に着いたが、茶碗が二つ伏せてあるのを見て、

「阿母さんも喫らないで、待つて居て呉れたのですか。それは何うも——」

「久し振で一緒に喰ばれよう思つてなと、お絹はいそ／＼と箸を上げたが、「何も口に適ふやうな物が無うてお氣の毒ぢやなも。」

「なに澤山です。」

「それでもな、お前さんが所好ぢやつたと云つて、佐兵衛が山の芋を持つて来て呉れたで、早速汁にして見た。さ、加減見てお呉れな。」

お絹は努めて愛想よくしたが、何處かきよときよとして我子を催る容子が見えた。斯うして親子差向ひで顔を見合せて居ながら、二人の間には遠い距離が出来たやうで、何うも打解けた

後では、又自分の家の様に入り浸つて居ると云ふことを薄々聞いて居た。それ以前でなく、其頃から氣が荒く成つて、家中を引掻きまはして、有金を掴み出して使ひ捨てる。それでも足らんので、お絹を口汚く罵つて、打つたりはたいたりすることも有つたさうだが、お絹の方に末練があつて、如何しても別れられないで居た。そんな目に會ひながら、直ぐ其後から忘れて仕舞つて、二言目には何父様が、と要吉の方へも決して悪うは言つて寄越さなかつた。其男が酒にでも酔拂つて、「俺はこんな片田舎で朽果てるやうな平凡盡上ではない。立派な腕を持ちながら、手賃が無いため一生頭の上らぬのが残念だ」と、空の煙草を壘へ投げ附けて嘖り立つ時などは、お絹は隠されて紅くなつた肘を撫でながら、涙を流して幾度も點いた。何でも男の言ふことを正直に信じて居た。此男の手にかけては、お絹は宛然新細工の様に如何にでも成るのであつた。要吉も是等の事情を大抵は知つて居た。それで心の中では憤慨もしもしくも思ひながら、自分から進んで如何することも出来なかつた。一體、要吉は何事に依らず成る様に成らせて置くことしか出来ない男で、それには又始終東京で暮して遠く離れて居たから、

都合の好いこともあつた。けれども、今日の當りお絹の落着かない容子を見て、心では既う自分を疎外して居るのだと感附くと、我を忘れて母親が憎らしく成つた。で、案を下に置いて、涙手とお絹の顔を見入つた。

昨宵釣洋燈の火影で見た時は、さのみとも思はなかつたが、今朝見ると、お絹の老け様は一通りでなかつた。昔から名代の洒落者で、今も身振みがよく、何日頃の流行かは知らぬが、黒天鷲絨の襟を掛けて青筋の張つた頸筋の色の際立つて白いのや、眼の縁に小皺が寄つて紫色に見えるところなどは、昔ながらの様でもあるが、頬がげつそりと拵けて頬が抜け上つた爲に、何處へなく顔が野卑に見えて、これが自分を生んだ親かと情ない位であつた。昔、要吉が七八つ時には、他所へ連れて行つても、阿母さんと呼ばれるのを嫌がつて姉さん／＼と呼ばせたものだ。今こんなに成つて居ながら、まだ年齢を隠す心持が失せないのか、好く氣を附けて見ると、いやに黒光ると思つた髪は染めたものであるらしい。これ程迄にして男に顔がこれいと努めるのか。いかにも人間の弱點を目前に見せ附けられた様で、要吉は漫ろに淺ましく成つた。淺ましいと云ふよりは、母親が可憫ら

心持に成れない。要吉は豫てお絹に或關係の男があることも、それが何日からも知れぬ昔から續いた間柄で、今如何することも出来ない云ふことも知つて居た。其男といふのは矢張名古屋生れの畫工で、要吉の父が生前から知合であつたさうだが、或事情から一時國を跨がせなかつた。それが父の歿後又繁々出入するやうに成つて、来る度に毎も手土産など買つて来ては、要吉を自分の子の様に可愛がつた。それがたゞお絹に取入る爲ばかりでなく心から可愛く思ふらしかつた。尤も其時分は要吉もほんの子供で、何の事やら譯は分らず、お絹が伯父様と呼べと云ふから、其通りに伯父様、伯父様と云つて懐いて居た。其伯父様はいろ／＼家の中の世話を焼いたが、鼓早が大仕事で丸焼けに成つた頃、好い仲間があるから芝居小屋を建てよう云ふので、お絹を説伏せて田地を大半買入させたが、板葺の小屋が出来上つて、田舎廻りの旅役者で一興行濟んだ頃には、もう人手に渡ると云ふ様な事もあつた。其外これに類した事は幾つもあつたが、要吉は別に氣に留めなかつた。それが段々物の譯が分つて来ると、最う伯父様とは呼ばなく成つた。其男の方でも流石に遠慮して稍遠ざかつた。其後要吉が東京へ出た

出して永いこと行方の知れなれた人ぢやが、去年不意に臺灣から大金を儲けて戻つて来て、あの堀に有つた自家の宅地な、彼處を買つて立派な普請はするし、それはえらい勢ひぢや。其人が自家の判さへ捺きや、幾許でも貸さうと云ふんぢやげな。

要吉は俯向いたまゝ聞いて居たが、「ま、貸す人があるにしても無いにしても、阿母さんも彼人の爲に金子を工面するのは、好い加減に止めたら如何です。随分久しいものぢやないか。彼人の爲には自家も何處となく餘計な損をして来たのですからな。」

「それだからさ」と、お前は相手の言葉を抑へる様に、「今度青山様の御道具がお拂下げに成るに就いて、それを引請けて、名古屋へ来て居る西洋人に嵌める事が出来さへすりや、大變なお金に成ると云ふのぢや。左様なれば、從來損した位は一度に埋合せが着くと云つてぢやが、何分側から競争する者もあるので、早い處手附を打たにや成らぬが、それが未だ手に入らぬので、伯父様も毎日氣を揉んでおいでぢや。」

「だつて、左様いふ物は又其道の商人があつて、素人に儲けさせる迄放つて置く筈がない。それに舊大名の道具が今頃拂下げに成ると云ふのも訝しいし、左様いふ事は得て詐欺師の種に使はれるものでせう。」

「いえ、そんな事はお前、伯父様も左様云ふ方には眼が利いてるで、間違ひは無いわな。此間私も一寸見せて貰つたが、六枚折の屏風一雙で三千圓もすると云ふんでな、それはよく見事な物ぢやつた。」

「三千圓の屏風は如何でも可いが、私はどうも其んな事に係り合ふ氣には成れませぬね。」

斯うきつぱり言ひ切られると、お前は又しよけて仕舞つた。

「伯父様も一生懸命に成つてお坐ぢやがなア」と、未練らしく言つたが、「それにな、實は彼人も仕事の方が面白うなうてな。畫きにかゝると何うも手が震へて不可んさうぢや。近頃は身體も減切り弱つて、私も困つて居るわな。」

「矢張酒毒ですか。」

「左様ぢやらうな」と、お前は息を吐いた。

伯父といふのは、名古屋から出る七瀬橋の圖案を渡世にして居たのであるが、舊時代の職人で、新しい意匠の持合もなく、左様でなくとも餘り歓迎されぬ所へ手が利かなく成つては、今後如何することだらう。あれでも繪を畫く人の端くれかと思ふと、要吉は何だか才なくも訝しいし、左様いふ事は得て詐欺師の種に使はれるものでせう。」

「いえ、そんな事はお前、伯父様も左様云ふ方には眼が利いてるで、間違ひは無いわな。此間私も一寸見せて貰つたが、六枚折の屏風一雙で三千圓もすると云ふんでな、それはよく見事な物ぢやつた。」

「三千圓の屏風は如何でも可いが、私はどうも其んな事に係り合ふ氣には成れませぬね。」

斯うきつぱり言ひ切られると、お前は又しよけて仕舞つた。

「伯父様も一生懸命に成つてお坐ぢやがなア」と、未練らしく言つたが、「それにな、實は彼人も仕事の方が面白うなうてな。畫きにかゝると何うも手が震へて不可んさうぢや。近頃は身體も減切り弱つて、私も困つて居るわな。」

「矢張酒毒ですか。」

「左様ぢやらうな」と、お前は息を吐いた。

伯父といふのは、名古屋から出る七瀬橋の圖案を渡世にして居たのであるが、舊時代の職人で、新しい意匠の持合もなく、左様でなくとも餘り歓迎されぬ所へ手が利かなく成つては、今後如何することだらう。あれでも繪を畫く人の端くれかと思ふと、要吉は何だか才なくも訝しいし、左様いふ事は得て詐欺師の種に使はれるものでせう。」

「左様、來年ぢやつたらうな。」

「阿母さん、阿父様も氣の毒な人ぢやつた。些たア阿父様のことも思つて上げて下さい。」

「私が」と、お前は眼を圓くして、「私が阿父様の事を忘れて居るつて、お前迄が其んな事を思つてお呉れか」と、俯向いてしく／＼泣き出した。

が、又顔を上げて早口に言出した。

「私はこれでも阿父様の忌日命日を忘れて暮したことはない。けれど、あの伯父様はな、お前知るまいが、阿父様の生きてぢやつた頃から随分自家の利益に成つた人ぢや。そりや芝居小屋なんかで損したことも有るにや有つた。それを言出されると、私はお前の前へ顔を上げられんが――」

「阿母さん」と、要吉は鋭く言ひ切つた、「私はそんな事言出しちや居ない。」

「そ、それが」と、お前は狼狽して、「そんな事お前は言出しは爲なさらぬ。けれども、それを思ふと私の胸は實に切ない。それと云ふが、伯父様だつて皆お前の利益を思つて、自宅の身代を殖したいばかりで計畫んだ事ぢやけれど、何うも思ふ様に成らなんだのぢや。お前だつて伯父様のことを餘り怒り思つては濟むまい、濟むまい。」

段々泣聲に成つて、しどろもどろな事を言ふ。

要吉は黙つて見て居たが、やがて、「阿母さん、ま、泣くのは止めて下さい、泣かなくとも謂は分つてる。私は斯うして東京から態々來た位だから、阿母さんもそれ程に思つて居るんだもの、決して謔文に印を捺すのを拒むつもりは無い。勿論私もあんな賣れ残りの林など當にしちや居ないんだから、阿母さんの好い様に爲さるが可いのさ。だが、愈々抵當に入れて金を借りると成りや、もつと好く事情も調へた上で、強に見込が着いてからにしたい。ね、左様でせう、それが至當でせう。」

お前は返辭をしないで、子供の様にしやくり上げて泣いて居たが、急に袖で眼を拭つて顔を上げた。

「最う解つたで何にも言つてお呉れでない。今度伯父様が見えたら謂を言つて斷りませう。ね、私も好く得心が行つたで、最う心配してお呉れんが可え。」

要吉もお前が當て附けたやうな變り方に氣が附かんではないが、別に何とも言はなかつた。やがて二人は冷えた飯を茶漬にして、飲み込む様にして、食事を終へた。

今朝も空一面に若く晴れ渡つた。三反許り昇つた太陽の光線を眞正面に浴びて、要吉は町から長良の町の方へ新道を歩いて行つた。近頃賑道に編入されて道普請をしたので、幅の廣い道が何處までも眞直に續いてゐる。こんな道を少し急ぎ足に歩いてると、何時となく胸が廓然として心持の好いものだ。電信線が一本だけ道に沿うて低う張つてある。それへ幾羽とも數へ切れない雀が行儀よく並んで棲つて居て、人が近づくとぱつと立つ。要吉はそれに氣を取られて、殆ど何も考へないで歩いて居た。

幾度も市場へ野菜を曳いて行く荷車を追ひ越した。其間自分も後から來た郵便夫に追附かれた。饅頭を被つて、荒い麻の囊を袴の先に結び附けて擔いだのが、飛ぶが如くに引つて仕舞つた。要吉は其後影を見送つて居たが、側と可厭なものも眼に映つたので、俄に惡寒でもする様に足を留めた。

前面の道から十間程横へ入つた大根高の中に、六坪か七坪の小さい笹竹の藪がある。土俗道三の首塚と稱へて、要吉が小兒の時分には、稲葉山の麓のおぼろが池と共に諸人恐れて近寄ら

なかつた。墓の中には一基の墓石が半ば土に埋もれてると云ふことだが、要吉は嘗て見たことではない。舊記によれば、道三は俗名を齋藤庄九郎といふ。京都の油賣で其性博愛、美濃に來つて國司土岐氏に寄寓して居る間、欺罔つて其一門を襲し、此國を横領した。一時は悪逆強く世に時めいたが、老後子の義能に代を譲つて、其身は別に營を築いて隱居するに及んで、忽ち仲違ひして父子干戈を交へ、長良川を挟んで陣するに至つた。一戦して道三の軍破れ、僅に身を以て逃るゝ所を、百姓の爲に竹槍で突殺された。弘治丙寅二年四月歿す。行年六十五歳とある。其後首は河原に捨てられたが、近臣それを拾つて此所に埋めたといふ。村の百姓は因よりこれだけの事をも知らない。只此數には道三の執念が何日迄も残つて居て、若し過つて足を踏み入れた者があれば、直に怖ろしい祟りがあると傳へて居る。それも要吉が子供の時の話で、それから十四五年も経つた今日でも、小学校へ通ふ子供達が道草を喰ひ過ぎて、夕暮れ人顔の顔に見え出した時など、矢張此毒藤を袂で頭を隠して駆け抜けるか如何かは分らない。

何と思つたのか、要吉は前後を見廻して、位々む様に畑中の小徑を傳つて、此數へ近づいた。垣根に手をかけて、及び腰に成つて藪の中を覗いて見た。竹に絡つた藪だの藪草だのが未枯れて、大分奥の方まで見透されるが、別に怪しいものも眼に留らなかつた。それでも中へ踏込んで見ると、氣には成れないと見えて、勝手と手を携いて立つて居た。

四年の間、月の初めの朔日には、夏も冬も、この藪に此二人の影を見ないことはなかつた。只如何かして朔日に雪が降つたり、雨風の烈しい朝などは、老婆一人で來ることもあつた。老婆は歸りの道すがら孫に向つて言つて聞かせた。「此様にして毎月お前を連れて來て、道三の墓へお詣りして御詫をするのも、皆お前の祖父様が餘り氣が荒かつた爲ばかりぢや。あの時私が幾許留めたか知れぬのに聞き入れなさらんので、昔から祟りがあると云ふ道三松を到頭僕つてお仕舞ひなされた。それから自家は道三に祟られたのぢや。」

のである。其後誰から聞いたと云ふこともないが、何日となく要吉の知り得た事實を組合せると、要吉の祖父に當る人で、祖母の連合といふのは此村の里正であつた。若い歳から親の跡目を繼いだので、血氣に任せて我儘な振舞ひをすることも随分多かつたさうな。或時何のためかは能く分らぬが、道三松を伐らうと言出した。其頃祖母は長良の常願寺といふ寺から嫁に來た當座であつたが、それは餘りなと云ふので、切に留めた。けれども、留められると尙張合が有るもので、血氣盛りに祟りなし、退込んで俺の遺口を見て居れと云つたやうな調子で、一向聞入れる様子もなく、翌日から袖を解つて來て、大小三本あつた老松の中で、初めの日は左の一本を伐つた。其日は何事もなかつた。それ見たことかと云ふ様に、勢づいて、次の日も右の一本を倒した。三日目には、愈中の一本で、四五百年も経たかと思はれる此大木を伐り倒せば、それでお仕舞ひと云ふのだから、皆朝早くから川掛けた。祖母も其日は流石に氣が地んで、閉かな日向で要物をして居る所へ、備はれた袖の一人が息せき切つて駆け來た。突然祖母の袖を掴んで、「大變だ、大變だ」と許り、何を言ふのか分

らなかつた。漸く今此處へ旦那が釣られて戻つて來ると云ふことだけ分つた。祖母は切り倒れる松の下に成つて負傷をしたに違ひないと思つたので、其儘使の者を捨て置いて、ひとりで駆け出した。途中まで行くと、向うから祖父が人の背に擔がれて來るのに出會つた。取敢ず座敷へ擔ぎ入れて帯圍の上に寝かしたが、其時も祖父はまだ正氣を失つて居た。袖は皆界口同音に言つた。今朝も毎もの通り向ひ曳きの大綱で、勢よく伐り込んで、九分通り伐れたところで、いざと云ふので皆片側へ寄つて、此方から綱で引張ると、流石の大木もめき／＼と軋んで、見る／＼凄まじい地響きを立てて倒れたが、怖ろしや、其倒れ口からばつと血を噴いた。それが眼に映ると、根元の方に見張つて居た祖父は即座に卒倒して仕舞つた。其場に居合せた者は、誰も彼も皆血が噴いたのを見たと言つた。それで自分達も何んな祟りを受けるか知れぬと言つて、青く成つて職へて居た。祖父はそれから息を吹き返すには返したが、兩眼は其儘閉ひて、熱は何日迄も退かなかつた。醫も、加治所講も、祖母が心づくしの介抱さへ更に驗が見えないで、四十日餘りも病んだ果に、三十一を一期として息を引取つて仕舞つた。

祖母は其頃懐妊つて居たので、間もなく男の兒を儲けた。元來氣丈な女であつたから、そんな幼孩を力に二十の歳から六十の餘まで、さまざまな憂い目辛目も堪へ忍んで、四十年の間、寡婦を通して來た。其子が成長して、お絹といふ嫁を買つて、祖母はもう是れで安心して眼が眠られると云ふ段に成つてから、一生の杖でも柱でもあつた息子が又病痺に親しむ身と成つた。それが人の思ひ腫れといふ病で、永年煩つて、終ひには一間に閉ぢ籠つたまゝ、見るもみじめな最期を遂げた。息子が病氣に罹つた時、一番力を落したのには祖母で、或年京都へ上つて六條の本山に參詣したついでに、名高い易者があると言つて訪ねて行つて見て貰つた。易者は祖母の顔を見ると、直ぐに首を振つて、「お前さんはえらい驚人だ。例でもお前さんの家では由緒ある樹を伐つたことがあるに相違ない。それがお前さんの家へ代々祟るので、お前さんの息子だけぢやない、孫があれば、孫も同じ様な病氣に成るか、それが違へば氣が狂つて早死にする。氣の毒ぢやがお前さんの家の血統が絶えなければ、其祟りは退くまいよ」と、圓星を指した謀なことを言つたきりで、向うを向いたまゝ、後は何を訊いても相手に成つて呉れなかつ

た。それでは取附く島もないので、必死に成つて願つた末、やう／＼易者は、「まあ其祟りの元へ行く詫づいて見るのだな。それも縁が有るか無いか、私は請合はぬ」と言つた。それだけの言葉の端を手頼にして、祖母は着く成つて故郷へ戻つて来た。それからである、祖母が世を終るまで、毎月の朔日には、雨の日も風の日も、人目を避けて此道三の墓へ詣るやうに成つたのは、小さい時は、要吉も實際祖母の云ふ通り左様いふ祟りや呪ひが有るものと信じて居た。世の中は只眞暗に見えた。自分の一生は、雨のしよぼしよぼ降る晩に、野中の細道を提灯一つ力にとぼ／＼と通るやうな気がして、心細かつた。祖母は八つの歳に死別した。それから母の手に一つで育つて、随分甘やかされたが、如何いふものかお前には餘り懐かなかつた。お前が例の伯父様と一緒に鼓卓の町へ出掛けて歸宅の遅い時などは、子供心の寂しさに、門の柱に死ねながら黙つてひろ／＼とした野木を眺めて居た。冷たい涙が二筋頬を傳つて流れる。こんな時には歸つて来ない母よりも、死んだ祖母が戀しく成つて、聲を出して、「お祖母、お祖母」と呼んで見たこともあつた。

に對する恐怖の念は薄らいだが、其代り疾病の遺傳が有りはせぬかと云ふことが氣にかゝり出した。手を切り足を斷ち、木の斷株の様に終たきりで、何から何まで人の世話に成つて、それでじり／＼と命數の盡きるのを待つ。そんな事が堪へられようか。いや左様成るまで、斯うして手を束ねて待つて居る方が、猶更堪へられな。眞夜中側と眼を醒まして、蒲團の上に坐つたまゝ、生甲斐のない前途を想像して、戦慄したことも何度有るか知れぬ。其都度父のことを憶ひ出しては思ひ返した。其通りの生涯を経て通つた人が、既に自分の前に有るのではないか。自分はその不幸な父が代り、晩年の、唯一の慰藉であり希望でもあつたと云ふではないか。それだけでも自分が此世へ生れて来た甲斐はある。自分と云ふ者が此世に存在した意味はある。假令父と運命を共にし數奇を分つとも、父の爲に犠牲と成つたと思へば、悔いる所はないとまで思ひ詰めた。

父の傳と云つては、直接要吉の記憶には残つて居なかつた。が、其頃父の按摩を頼まれて來い／＼したお倉のお袋がいろ／＼話して聞かせて呉れた。この袋の話を依ると、要吉が生れる迄は、父は飽迄家の跡目が自分一代で絶える覺悟をして、人から養子など勧められても、頑として聞入れなかつたさうだ。それで生前から氣に入つた小作人に家屋敷や田地を分けて遣りなどした。それが子供に顔を見てから急に思ひ止まつたと云ふことである。要吉は此話を聞いて父が自分を生れるものと思つて居なかつた。と知つた時には、何とも名状し難い妙な心持がした。父は其身限りで小鳥の家の血統が絶えるものと思つて居た。或は絶やさうと計つて居たのかも知れない。「只一代延びた」と、要吉は冷やかに考へた。

を言つた。「先の旦那は本當に氣の寛大な人ぢやつた。世間ではお粗さまの悪い噂が立つて、要吉だつて誰の子か分るもんぢやない、其證據には些とも似て居らんぢやないか、とそんな事を言ひ觸らして居ると告げたら、只寂しさうに薄笑ひして私の家で私の家内が生んだのぢや、私の子に相違ないではないかと言つたきりで、相手に成らず、餘計な告口したやうで、却て此方の顔が赧く成つた」と。婆は別段何とも思つて居ないのであらう、こんな事を平氣で言つたが、聞いた要吉は足下の大地が摩り落ちて行くやうな氣がした。此上聞かして見る勇氣は出なかつた。其後も此事については何人とも口を利いたことがない。今でも未だ婆の言つたことを虚偽とも眞實とも思ひ定めては居らぬ。何方も可厭であるが、何方にしても一身の破滅は免れない。只人間は何んな境遇にも慣れて仕舞ふものである。其後の要吉が放縱な生活は、其時すべての理想に對する信仰を失つた爲だとは、流石に自分でも考へることを恥ぢて居た。

それが今通りすがりに、久らく忘れて仕舞つて居た道三の首塚が目に着くと、自ら祖母の佛が眼に泛んだ。六七十年前に此佛で起つたといふ家の悲劇が憶ひ出される。松の樹の幹から血を噴いた。そんな事が有るものかとは、要吉には如何しても思ひ切れない。それは恐らく一種の幻覺でもあつたらう。けれども祖父は確にそれを見たのだ。その爲に生命まで取られたのだ。祖父で無かつたら、そんな血は見えなかつたかも知れぬ。けれども祖父に取つて、松の樹を伐つて血が出るのは、人の腕を切つて血が出るよりも痛な事實であつたのだ。祖母は堅くそれを信じて居た。父は分らない。が、其人は生きながら影に成つた魂を見るやうな人であつた。要吉も此家傳の幻覺を免れぬのではなからうか。昔、祖母が此墓の前へ連れて來て手を合せて拜ませた時、小さい心に種子を蒔いたのだ。何日かは其種子が芽を吹かずに止むまゝを一周りして見た。それから又元の所へ出て、だらりと手を垂れたまゝ立つて居た。

「要吉、何して居るのぢや、そんな處に立つて？」

「不意に聲を掛けられたので、要吉はぎくりとして振返つた。お倉が道から此方を見て立つて居た。

「え、なに」と、要吉は強ひて何氣ない顔をして、

「お倉は今土の中から引いた許りの蕪菁を一杯詰めた手籠を提げて居た。裾を高く踏折つた下から白い腰巻を見せて、朝露に濡れた脛には茶の枯葉がへばり着いてゐる。

「早うから何處へお出掛けやアした？」

「うむ、一寸常願寺まで。」

此寺は祖母の生れた家であるが、又隅江の實家でもある。要吉と隅江とは又從兄妹同志で有つた。

「あ、お在所へ。何か、隅江さまは貴方が此方へお出のこと最う知つて見えるかな。」

「いや、未だ知るまい。」

「ま、それぢや早う行つてお上げなさい。そりやア可愛らしいんですよ。見やしたら、屹度連れて行きたく成る位だに。」

「赤ん坊かい。」

「え、一寸何んな氣持がするの、殿方てえものは？」

「何が。」

「初めて子持に成つてさ。」

「左様さね」と言つたが、「成程、お前は子供を生んだ覚えが無いんだね。如何だい、遣らうか。」

「そんな事言ふもんぢや有りませんよ、冗談にも。大切なお兒を私等風情に」と、お倉は眞顔で言つた。

「だが、子供は眞個一人欲しいと思ふことが有りますよ。亭主なんざ一生欲しいとは思ひませんよ。」

「そんなものかい。」

「だつて、何やら言ひ掛けたが、不圖氣を變へて、今夜彼方でお泊りやアすか。」

「いや、歸るつもりだ。何故？」

「何故と云ふこともありませんが、お倉は言葉で濁して、「阿父さ、今頃何れの鮎が捕れたで、お上げたいと云つてましたから——」

「それは有難う。ぢや又。」

「お倉は誰を伺して五六歩踏み出したが、お倉が又「ちよいと、ちよいと」と呼んだので振返つた。

「何を言つてるんだな」と、要吉は事もなげに斥けたが、お倉の眼附を見ると又氣に成るので、「隅江が何かお前に言つたのかい。」

「いえ、何も聞きません。ですが、そんな事位私が見りや大抵解りませアね。」

「莫迦な」と、要吉は空嘯いた。

「そんな事如何でも可いに、早う行つてらつしやい。左様なら、お倉は尻上りに言つて、後もお向かずに、林の方へ歸つて行つた。

お倉に別れると要吉の心は又沈んだ。自分は既に人の親であると思ふと、それが今初めて起りでもした様に愕かされる。父は其身一代で家の跡を斷たうとした。そこへ自分と云ふ者が生きて、父は其生涯の秘密を抱いたまゝ、死んで行つた。切めて自分の代には父の志を果さうと決心したことも有つた。それが矢張り知らぬ間に——若し左様云ふことを許されるなら——知らぬ間に次の代が出来て仕舞つた。生れて来る子は、何も知らずに、此呪はれた家の一員と成つて、其小さい肩に涙の呪詛を分けて擔はねばならぬ。斯う成れば最う手の下しやうは無い。生命の流れは今後幾萬年を経て、時の流れの悉きるまで續くかも知れぬ。斯う考へて来て、要吉は思はず両手で胸を擁抱した。強い恐怖の念に震はれたのだ。死は不可思議である。而も生は更に不可思議である。其測り難い神祕に、これから行つて面の當り會はなければ成らぬ。

要吉は幾度も途の上で振返つた。何だか怖ろしい物を避けて見ないで居る様にも思はれて、氣がきして、故らに眼を放つて前の小藪を見遣つた。小藪は光の波の深ふ中に、只前に黒く立つて居た。

四

やがて要吉は柱を赤く塗つた寺の門をくゞつた。本堂の屋根に草が一二本立つたまゝ枯れたの水眼に着く。正面の雨滴落に鑄物の天水桶が振盪である。近寄つて中を覗くと、足の長い蟲が青く濃んだ水の上を彼方此方走つて居る。それを見詰めたまゝ、何の爲にこんな處へ来たか忘れて仕舞ひたいやうな心持に成つた。

森とした寺内で俄に大が氣たましく吠え出した。要吉は自分が吠えられる様な氣がして、ふいと顔を上げると、庫裡の戸口にぼろ／＼の糞を下げた食が一人立つて居た。犬はそれを遠巻に吠える。戸の中から女が手を出して、盆の米を糞の中へ明けて遣つた。食はそれを貰つて糞の口を緊めると、連れて逃げるやうに門の方へ出て行く。内からレツ／＼と犬を吠える聲がした。それでも却々吠え止まぬので、盆を持つたまゝ、隅江が出て来たが、男の姿を

見て、

「いまアと、眼を睜つた。

要吉は女の側へ近寄つた。

「あの犬は自宅に飼つてゐるのか。」

「いえ、角の床屋の犬ぢやさうですが、始終自宅へ来て居て、人様に吠え着くので困つて仕舞ひます。」

斯う言ひ、隅江は前に立つて戸口を入つたが、戸外から来た者は眼がぼつとして、家の中が薄暗い。縁の高い上り框には、黒塗の杵の腰高障子が閉めてあつた。それを開けると、又

「ばつと明るい。」

要吉は靴を脱いで上つた。今迄其處で隅江が針仕事をして居たものと見えて、紅い唐縮緬の鏡を取つた座蒲團の周圍に、縫ひかけの紅縮緬の裏が放り出されて、お斗を抜いた儘の針箱だの線だの針だのが散らばつてゐる。が、此處へ上ると直ぐに要吉の眼を引いたのは、縁側の方を庇にして、小さい蒲團の下に寝かされたもので有つた。被けた蒲團が堆いので、顔は未だ見えない。其間隅江が奥から座蒲團を持つて来て勤めたので、要吉は黙つて其上に坐つた。

「まア何日お歸りやアした。些とも存じませんでしたか——」

「一昨日の晩着いたばかりだ。急に思ひ立つたので知らせる暇が無かつた——」

「まア好かつた」と、隅江は何にもない嬉しさうな顔をして、「あんなお手紙でしたけれど、それでも一週来てお呉れやアすと可えがと、何の位思つて居たか知れませぬわな。」

要吉は返辭をしなかつた。兩人の視線は申合せた様に小さい蒲團の方へ注がれた。足許が少しうごめく様である。

「最う見て遣つて頂戴したか。」

「うゝむと、笑つて頭を振つた。

隅江は蒲團の側へ控寄つて、上から平手で敲と叩いた。要吉も及び腰に成つて枕元を覗き込んだ。薄赤い頭の毛がもじ／＼と生えて、顔の少し膨んだ小さな生物が見える。何だか怖ろしい物でも見たやうに要吉は急いで身體を退いた。何うもこれを見て親子と云ふやうな心持は起らない。それが世間の人は左様でないのに、自分一人起らない様に思はれて、何となく氣が咎めもした。

子供は薄目をして眠つたまゝ、呼吸もしない様に見えたが、時々うつ／＼で口を窄めて、乳を吸ふやうにびく／＼させた。

「お夏ちゃん、もう起きなさい」と、相手に解る

やうな物言ひをして、隅江は子供の背へ手を廻して抱き上げた。未だ頭が据らぬのか動かす度にぐら／＼して、見る眼に危さうである。要吉は思はず手を出して留めようとした。

「さ、眼を開いて、此方向いて御覽。これ誰方だえ、誰方が解るかえ」と、隅江は男の方を向かせて、子供に親の顔を見せる様にした。

要吉は黙つて母子を見た。頭の中を往來した心持は自分にも解らなかつた。

其時急に小兒が顔を變めたかと思ふと、形に似合はぬ大きな聲をした。

「唸したの、お夏ちゃん。大人の爲る様なこと何でも爲ますわね」と、隅江は子供の顔を覗いて嬉しさうにした。

「お前、子供が可愛いかと、突然要吉が附かね事を訊いた。

「ま、面白いこと言やアすな」と隅江は倒れて眼を睜つた。

要吉は笑はなかつた。

「可愛う御座いますわな」と、隅江は伏日に成つて、小兒の頭の毛の中へ、唇を押附けたまゝ、言つた。何故そんな事を訊くのか、要吉の心持は隅江には解らない。これ迄も男の心の中で考へることが、自分なぞの考へとは段々懸離れて、

寄附出来ないやうな氣は始終して居た。けれど小兒に對しては、自分と一つ心持には成つて呉れぬのかと思ふと、今更寄邊ないやうな氣がして成らぬ。それにつれて、去年東京へ出てから半歳の間の辛かつたこと、心細かつた事などが順繰りに憶ひ出されるか、恨むことも嘲つことも知らない女は、矢張り黙つて俯向いて居る外はない。

要吉も女の顔の曇つたのが眼に着いた。直ぐ女の胸で思つて居さうな事が心に泛ぶ。それが如何して遣ふことも、如何して貰ふことも出来ないうやうな氣がする。斯う成ると、要吉の様な舞も境遇に支配されて、自分で舞臺を作ることも出来ないうやうな氣がする。斯う成ると、要吉の様な舞も境遇に支配されて、自分で舞臺を作ることも出来ないうやうな氣がする。斯う成ると、要吉の様な舞も境遇に支配されて、自分で舞臺を作ることも出来ないうやうな氣がする。

暫く二人の談話が途切れた。縁側の障子は眩しいほど明るい。茄子の帯を縛り上げて肩に掛けたのが、風の吹く度にかさかさとした響きに響いて、其影が長く成つたり短く成つたりする。要吉はそれを見詰めて居た。其間子供が泣き出したので振向いたが、隅江は子供を抱へたまゝ此方に向いて居た。要吉が振返ると、急に眼を反して、牛乳の吸口を小兒

の口に含ませた。髪も薄く成つた様であるし、一體に衰れた所爲か、以前は左程でもなかつた雀斑が目立つて、顔が汚く見える。元からはき附かぬ質の女ではあつたが、産後の爲でもあつたらう、いかにも容子が懶るさうで、これでも覺て要吉が放縱な空想を系がく對象に成つた女だとは、如何しても思はれない。

「身體はもう快いのか」と、つい釣込まれて要吉は優しく訊いた。「最う大抵快く成りましたが、未だ如何かすると眩暈がして——」「それぢや暖かく成るまで、悠然此地で養生して居るが可い。」

「え、と聞えない位の聲で言つたが、少時してから、今度は何時頃迄此方にお坐やアすなう。」
「さ、用事が済めば直ぐ歸る積りだ。」
「左様も急いでお歸りやアすのか。阿父さんも一度會ひたがつてだに。」
「先刻から見えぬと思つて居たが、今留守かい。」
「伊勢の一身田の方へなも、此間から——」
「左様か、そりや残念だ。」
「けれども阿母さんは直き歸ります。」

「さア今日は左様もして居られない。一寸岐阜へも廻る用があるから」とは言つたが、急に立上る様子もなかつた。何時迄話して居ても、別に變つた話の種子があつてもななければ、又一向談話も済まない。要吉は物足らなかつた。それが皆自分の所爲であると思ひながら、矢張り物足らなかつた。男と女とが差向ひで坐つて、話の前後話しても差支のないやうな話でなけりや出来なく成る。それで子供だけは生む。これが世間通りの夫婦と云ふものであらう。要吉は取返しのかねぬ物を落して来たやうな心持がした。

暫くすると、隅江の母親といふ人が戻つて来た。寺のお庫裡などには似合はない、至つて無愛想な機織買ひの女で、角額で鼻栗に節のあるのが要吉の氣に喰はなかつた。隅江が其子で矢張り鼻栗に節があるのを平常から氣にして居た。

一通り挨拶が済むと、要吉の方からいろ／＼東京の様子や、自分の一身の事も好い加減に取纏つて話したが、そんな遠い所の話は別に此女の興味を惹かなかつた。それが故郷の話に成ると、急に調子づいて話し出した。お絹が山林を抵當にして金子を借りようとして居ることも、

ちやんと聞いて知つて居て、お絹さんにもあれでは困ると繁冗く尋ねた末に、「自家へは些とも相談に見えたことは無いし、此方からは出すのも變ぢやで見て居るが、全體お前さんは如何する氣ぢやないか」と言つて、目を結んだ。自分の親の不始末を明らかに並べられて、要吉は河とも言へなく成つた。隅江もはら／＼して聞いて居たが、

五

目が落ちてから急に風が生暖かく成つた。要吉はのそりと我家の関を跨いだが、如何したのか、未だ灯火が點いて居らぬ。家の中が闐然として、隅江が薄暗い。立つたまゝ一寸思案したが、又引回して戸外へ出ようかと思つた。途端に襖の向うで、どき／＼と物の倒れる音がして、ひいと思音に女の泣く聲が洩れた。何やら被覆れた男の聲で罵つて居る。要吉は驚いて一足下つたが、女の泣聲がお絹だと分つたか

ら、矢張り合の機を開けて飛び込んだ。「要吉か、好え所へ戻つてお呉れだ」と、お絹は我子の足音へ轉び伏した。「如何したんです、阿母さん」と、要吉は急込んで訊ねた。「如何も斯うもない、ひ、人を打つたり蹴つたり、私や、私や斯んな目に逢ふ強えはない、強えはない——お絹は涙が喉に詰つて、言ふ事が能く聞取れない。」

相手の男は云ふ迄もなく例の老番工であつた。それ迄は火鉢の向角に中腰に成つていきり立つて居たが、要吉の顔を見ると流石に萎んで見えた。俄に挨拶も出来ないと見えて、濡い面をしながらもち／＼と尻を叩いた。要吉は二人の顔を見較べたまゝ、唯の様に茫然突立つて居た。何か言はうとしても、舌が上顎に密着いた様で聲が出ない。

「お前が確に出来ると云つたので、先方とも約束したのぢや。それを今更そんな女や子供のを言ふ様なことを言つて破約が出来ると思ふか。ね、要吉、左様ぢやないか」と、此方に向けて急に聲を優しくした。「お前には好く話をせにや分らんが、ま、聞いてお呉れ。」

「いえ、聞くに及びません」と、要吉はわな／＼顔へながら言ひ放つた。先刻から一刻も座に堪へないやうな心持がして居たのを、自分の前をも憚らないで母親を呼捨てにして、我物顔に振舞はれては、最う我慢が出来なく成つたのだ。「何んな話か知らんが、今夜は聞いてる暇が有りません。談話がしたかつたら又出直して来て下さい。」

男も顔色を變へた。一だが、全體、お前は私を何だと思つてゐるんだ。え、思ひ當ることは無いかの。」

要吉はぎよつとした。若し此男がお絹に對すると同じ様な明らかな態度で、自分に對する様に成つたら、今此處で此胡麻頭頭の頸筋の肉の厚い老爺の口から、自分の一番恐れて居ること——實際の親だと云ふことを言ひ出されたら如何しよう。如何する事も出来ない。一度そこへ考へ及ぶと、何とも云はれぬ憎惡の念がむらむらと湧いて、夢の中で罵られる様に、手足が自由に利かないやうな氣がした。何がなしに早く此滑稽な幕が閉ちて仕舞ひたく成つた。

「早く歸つて下さい。何でも可いから早く歸つて下さい。」要吉は手を掛けて押出さむ許りにした。

「歸れと言やア歸る。」

老妻は何と思つたか素直に立上つた。「一寸お絹の方へ眼を遣つたが其儘何も言はないで出て行つた。」

要吉は戸口まで送つて出て、茶の間へ引返さうとすると、上り框の上にお絹が心配さうな顔をして立つて居る。要吉は直ぐ其顔色を讀んで可憐な心持がした。

「阿母さん、灯を點しちや如何です。」

「あゝ、と、勢のない返辭をしたが、久らく経つてから大儀さうに洋燈を出しに行つた。」

要吉は暗がりの火鉢の前に坐つて、火鉢の先で豆の様に成つた火を細出しながら、次の間でお絹がこゝろゝ爲せる物音を聞いて居た。

其間洋燈が来て、急に一間の中が生々と明るく成つた。お絹は如何したのか夕飯を止めると言つた。要吉は強いては勧めず、今日行つた常願寺の様子など氣の紛れさうな話をいろいろして聞かせた。お絹は「あゝ、あゝ」と返辭だけにしたが、空耳を走らして聽いては居なかつた。そして、時々ひとりで風託さうに溜息を洩した。

要吉は先刻から始終それが耳について、何か言はうとしては又引込めて居たが、到頭悔へ切れなくなつて口を切つた。

「阿母さん、あの人のことが未だ心配に成るのですか、そんなに。」

「いゝえ、あんな人の事なんぞ、些とも心配してやしません」とお絹は努めて平氣な聲で言つたが、「只、ねえ、彼人も身體の工合が始終悪いのだし、今夜の様に憤ると、蛇度又お酒でも飲んで後が悪いのぢやが、誰も聞て居て世話を

して遣る者も無いしねえ。」

お絹は襦袢の袖を引出して、竊と眼の隅を拭ふやうであつた。

要吉は見るに堪へない様な氣がしたので、遠でて眼を瞑つた。可憐ぢやないか。如何してこんな女——左様だ、こんな女を非難することが出来よう。他迄わが身の因果に負けて居るのだ。この外見の弱さうな身體が續く限りは、絶えず其ために苛まれて生きて居る外はないのだ。お絹自ら知らないで左様成つてゐる。後し知つたところが、これだけ深く因果が根ざしては最う如何することも出来なからう。それに自分は此女の體から出たのではないか。同じ血が脈管を通じて、同じ因果の芽が身體に宿つて居るのだ。これ迄の自分のことを考へると、大抵は目に見えぬ因果に支配されて来た。過去の自分は其因果が遣つたのだ。將來の自分も矢張左様成行くのを免れないかも知れぬ。今夜の事は何だか自分の鏡を見せられた様に思はれる。而も儂り好ましい鏡ではない。

「阿母さん」と、要吉は思ひ入つた様に喚んだ。「あゝ」と、氣の無ささうな返辭をして、お絹は家へ顔で廻した。

「そんなに心配しなさんが可い。金子は借り

ることに爲ませう。今夜は最う追つかけても間に合ふまいが、明日の朝には貴方から左様言つて上げて下さい。」

「本當にえ」と、お絹の顔は急に晴れた。「本當に左様してお呉れぢやと、私も安心しますがえ。」

「本當ですとも。急に要るのなら、明日にでも其手續をしたら可いでせう。」

「左様なりや、伯父様も彼様は言つて歸つたもの、何んなに嬉しがるか。大變儲かると云ふ話ぢやものね。」

「そんな事は如何でも可いです。」

左様言はれても、お絹は今迄と打つて變つて、にこゝろと子供の様に喜んで居た。要吉は其様を見ると涙が胸一杯に突掛けて来るのを辛と帳へ／＼した。

お絹は不意に顔を上げて、何やら聞耳を立てて居たが、

「あれ、雨ぢやないか。」

成程檐端に細々と上に沁み込むやうな雨滴の音がする。何時の間にか天氣が變つたのだらう。「もう寝ませうか」と要吉が言つた。

「左様ね。」

お絹は雨戸を繰りに立つた。

要吉は階の上の起直つたまゝ、凝手と戸の節穴から出す夜明の光を見詰めた。頸筋の邊りが汗でぬたたくする。昨夜は夜通し夢に驚はれたものらしい。一番終ひに番場の渡船場で船から上つて口口村を通らうとすると、十二三の女の兒の夢びた青梅の様な顔をしたのが、大の耳を切つては梅へ入れて鹽漬にして居るのを見た。それだけは明々と疊えて居るが、如何してこんな夢を見たのか解らない。最う一度枕に頬を押附けて見たが、寢附かれさうにもないので、起上つて臺所の方へ出て行つた。井戸端で顔を洗はうとすると、戸外は一面にひどい霧だ。冷たい清水の中へ手拭を突込んで、頭を好く冷した。少し癒つた様な心持がする。何と思つたか頼子を切つて表へ出ようとする、茶の間に居たお絹が、

「今朝おぢやに早うから何處へお出だえと、聲を掛けられた。」

「うむ」と口の中で言つたとき、戸外へ出て仕舞つた。

四方の山は霧に隠されて、遠いのも近いのも全然見えない。土手の上の薔屋が一軒霧の中か

ら浮出して見えるが、裏口が明いてゐるのか、朝餉を焚く煙の火が蛇の舌の様にちら／＼と天井迄燃え上るのが目に附く。用水について下ると、自然に土手の上へ出る。長い堤の上をすた／＼歩いて見た。雫の様に凝つた霧がほてる顔に打突かると、口を塞がれるやうで息苦しい。袂も何時の間にかしつとりと成つた。霧と河下の鐵橋を渡る汽車の音が非常に近く聞える。

其間に朝風がそよ／＼と動き初めた。紅葉山の黒い崖が先づ現はれた。河面を見下すと、淵れん／＼に成つた水の上を見る間に霧が割けて行く。此邊の川は秋から冬へかけて河床が露はれて、白く曝れた個體の様な石がごろ／＼轉つてゐる。河原の向うはひろ／＼とした林野で、野へでも歩いたのか一面に黒く見える。野原の中を細い徑が蜿つてつく。人を埋めに行く道だ。枯野の奥は村の三昧である。三昧の樹立には、未だ薄い霧が残つて居るやうに見えた。

それを見ると、要吉は急に其處へ行つて見たく成つた。で、直ぐに土手を下りて、着物の裾をからけて、素足で膝迄ある秋の水を渡つた。それから石河原を横倒しに走つて、間もなく目指す林へ着いた。

林の中はたゞ石の様に寂びて、木の葉一枚動かない。鳥も啼かぬ。人間が今息を引取るといふ部屋へ迷ひ込んだやうな心持である。要吉は足を殺めた。

其時ふと人の近寄る氣勢がしたので、立停つて頭を上げた。身丈の圓抜けて高い大男が、黙つて前に立つて、凝手と要吉を見下して居る。それが何處やら慥さうで、頭髪の延びた工合と云ひ、色澤の悪さと云ひ、見るも不快で、而も見ずには居られないといふ顔であつた。着物は此邊の百姓に似合はない絹布を重ねて着て居るが、帯は細帯で、素足に冷飯草履を穿いて、帽子を被つて居ない。眞正面に頭の上から要吉を見据えたまゝ動かさぬ。要吉も氣味の悪い男だとは思つたが、路の左右は丈の長い草が露に濡れて生えて居るので、これも道を譲らうとはしなかつた。暫く無言の儘で互に眼を見合せ居た。何と思つたのか件の男は踵を回して元来た方へ戻り出した。要吉は少時惘れて突立つて居たが、其男の姿が見えなくなると、急に思ひ出した様に跡を追ひ掛けて見た。小徑が噴ひ違つて四辻に成つた處迄行つたが、其時は最う何處へ行つたのか、怪しい男の姿はかいくれ見えなかつた。延上つて彼方此方と見渡して

も、矢張り影さへ見えぬ。何處かへ隠れたのぢやないかと思ふと、更に薄氣味が悪く成つた。「狂人も知れない」と呟いた。

林の中の小徑で見慣れぬ男に邂逅した。只それだけの事に過ぎない。それだけの事が何だか不祥の意味が有る様に思はれて、要吉は何うも心持が好くない。こんな事に頭を悩ますのは愚だと思ひながら、矢張り其男のことが氣に懸つて成らぬ。あの顔、あの眼の色、如何も一生忘れられさうに無い。何故だらう。俺は如何かしてゐるなと思つた。

三味は林の縁に在る。荒れ果てたもので、何處からが墓地の地境と云ふこともない。只道がや、廣く成ると、枯れた芒や茅草に囲まれた少許の平地があつて、正面の堂の中には三體の石佛が安置してある。眞中に雨曝しの石の蓮臺を据えたのが、半ば草に埋まつてゐる。葬禮の時には此上へ棺を載せるのだ。村に棲む者は、男も女も、早晩この蓮臺の上へ昇き据ゑられる運命を擔つてゐる。一人も残されぬ。要吉は一寸其側に立つて見渡したが、直ぐ祠堂の裏手へ這入つて行つた。

人が左様するから自分も左様するものだと思つたのだらう。それは如何でも可い。只要吉は此兩人の名を並べて見ることが出来ぬ。何れにせよ、昨宵の光景がまざりと眼に泛んだ。如何思つたとして、自分は父の子で無いかも知れぬ。自分の存在には初めから汚點が打たれたのだ。其汚點は肉體の中に潜んで居るのだから、自分を減さない限りは如何することも出来ない。この手、この指、皆不義の結晶に外ならぬ。いかにも

元的だ。併し人間が生れるなど云ふことは、元々餘り余韻と違はない。何れにしても五十歩百歩だ。「自然は破倫なり。」人間の事は要するに此一語に盡きてゐるんだ。斯う云ひ放つて見ると、何だか世界を眞黒に塗つて置つたやうな氣もする、只それに依つて心は少しも浮立たない。如何することも出来ないからだ。今在る状態はそれに依つて少しも動かないからだ。總ての人類が呪はれた所で、呪ふ者はそれに依つて幸福とは成らない。

要吉は墓地の外へ出たまゝ茫然立つて居たが何處へも行く處が無いやうな氣が仕出した。人間は何處かへ行かなければ成らぬ。けれども父を埋めた墓場へ来てさへ、自分の手を取つて

かゝと、要吉は同じことを繰返した。此時男は初めて口を開いて、「如何してだ」と、只一言反問する様に言つた。要吉は水を啜りせられた様にひやりとして、其低い聲が一時に惘天まで沁み渡つた。成程人間が此婆婆に厭きて死んで行くのに、他人がそれを妨げて、縦合一瞬間たりとも生を強ふる権利が何處にあらう。自分の思慮が足らぬ所が、許し難い越權の處置を他のヒューマン、ピイングの上に加へた様に思はれて、少時口籠つたまゝ返答が出来なかつた。やがて氣を取直して、「死んで不可いと云ふ理由は勿論無い。只私の眼に留つたから不可いと云ふんだ。人間は他人の目前で自殺することは許されぬ。」

は、何處を如何して歩いて来たか、家へ歸つて井戸端で足を洗つて居た。お絹は愕れた様な顔をして見て居たが、要吉の唯ならぬ顔色に恐れを抱いて、何處へ行つたかとも訊かなかつた。朝飯の膳を拵へて勸めて見ても、要吉は頭を振つて欲しくないと言つた限り、座敷へ入りつて夜着を引被つて寝て仕舞つた。

何うも寝苦しくて連も寝附かれさうになかつたが、何時の間にか寢入つたと見えて、眼を覺したのは午後の日影も大分薄く成つた頃であつた。眼が覺めて見ると、身體は輪の様に成れて、額に手を當てると燦けるほど熱い。少し頭を動かしてもづきんと痛む。そこで成るべく勝手として仰向けに成つて居たが、臺所の方へお倉が来て、何やら息を喘ませて談して居るらしい。お絹も聞いて居ながら、寂靜の様子少し周章して居るやうだ。櫛が閉いてるので、二人の談聲が此處まで傳はけに聞える。初めそれが耳觸りに成つて煩いと許り思つて居たが、偶と一瞥思ひ當ることが有つたので、急に肘を立てて耳を澄ました。

「ま、それでも如何いふ人達ぢやらう。」
「左様ぢやるか。娘だつて連子だと云ふし、主婦さんだつて何うせ金に惚れて隨つて来たのに違ひないもの。私も一度しか會つたことはないが、一寸見てもそりや一物ありげな女さな。これからは彼處の内も皆あの主婦さんの仕たい儘ぢやで、折角建てた家も賣拂つて戻つて行くぢやると云ふ噂ぢやが、それかと云つて、誰か人物の言ひ手は無かる」と言ひかけて、お倉はひとり失笑しきうにした。「いゝえ有るの、只一人有るんぢやさうな。あの桑ツさの許の囃衆なも、あの女の今日の周章で方といふは無かつたさうぢや。」

口無し、如何したとて彼方の身代はそつくら彼の主婦さんと娘の物に成るんぢやとさ。それでもお辰さは未だ未練が有つて、親戚を一軒々々頼んで廻つても口利いて貰ふ積りぢや、此方の言分が通らん間は罪も出させて、一人で力んで御座るさうなが、御葬禮が出ると、自宅の阿婆さんが困るだけさな。」
お倉は一人でのべつに徳舌つた。
「左様だがよ」と、お絹は矢張浮かぬ聲をしないで、「まア如何して無理に死ぬ程な氣に成れたんぢやらうか。金子は有るし、普請はつい近頃出来上つた許りぢやと云ふし、何が不足でそんな心を出したもんか。」
「それがなも、誰でも解らんと云つてだがな。あんなに田地を買つたり、金子を貸したりして、立派に遣りかけたのぢやが、誰一人近しう交際つた者は無いさうな。それに桑ツさは彼様云ふ人だしなも、側に居る主婦さんや娘でさへ全然氣が附かなんだと云ふのぢやもの、他人に解らう筈はないわな」と言つて、「一寸首を傾けたが、ただけど、人の死ぬのは大抵譯の分らんものぢやぞな。」
お絹は思はず溜息を吐いた。
「ふら〜と左様云ふ氣に成ると、自分で承

知して居ながら、如何しても後へ引けんよ云ふでな。何にしても人の生命程分らんものはない。」
そこへ要吉が蒼醒めた顔をして奥から出て来た。お絹はそれを見ると、

「まア好う寝んでぢやつたな。何處か悪いのぢやないかと心配して、三度も見に行つたがな。朝から何も喰べんぢやで乾度お肚が空いたらうに。」
要吉は手を振つて訊した。御飯は未だ欲しくないと言ふ積りであつたが、口の中が乾燥いで聲が能く出なかつた。お倉は上り櫃に腰掛けたまゝ、要吉を見上げてにや〜笑つて居たが、

母を招びに来て居たので、私も斯うして居られんのぢやつた。容器は又今度貰ひに来るわな。お倉はそ〜くさと出て行つた。
その後でお絹は茶を淹れて要吉に佑めようとしたが、お湯の方がといふので、言ふがまゝに湯呑に注いで渡した。
「今お倉やの話ぢやが、七五郎が三味で首切つて死んで居たといふ。今し方あの奥三松が林へ柴刈に行つて見附けたさうな。それから駐在所の巡査を招んで来るやら、村方の人が走つて見に行くやら、向うの土手は一しきり大騒ぎぢやつた。あんな人が死んで行くなんて、本當に思ひがけない。つい三四日前に伯父様が會つて、お金子の話もしたのぢやさうな。——伯父様と云へば如何したのか、使者を遣つても未だに見えぬが。」

やらが一々自分の考へて居た通りの様に思はれた。初めからあの男の身の上を知つて居たやうにも思はれた。何の爲に死んだのか、自分だけにはあの男の心の奥まで解つてゐる。一生の間は唯一度出會つた、而も死ぬる間際に出會つた。あの男も自分と出會はなければ成らなかつたのだし、自分もあの男と出會はなければ成らなかつたのだ。二人の間には眼に見えない連鎖が繋がれてあつたかも知れぬ、いや、あの男は單に自分の心の影に過ぎなかつたのでは有るまいか。あれが自覺しない自分の半面で、如何しても離れることが出来ないのでは無からうか。實在の人間としては餘り玄妙に過ぎる、不可思議に過ぎる。要吉は自分も墓穴の中へ引入れられさうな心持に成つた。

「彼んなことを。それでも最う餘程大きく成つてでしだらう。」
「あゝ。」
「あ、忘れて居たが、お前にとて今頃珍らしい鮎を持つて来てお呉れたぞえ」と、お絹が口を容れた。

お絹は要吉が師の股袋のやうな顔附をして、自分の話を聞いて居るさうもないのに氣が附くと、下を向いて口を塞いだ。
林に首振りがあつたと聞いた時、要吉は直ぐあの男だと思つた。思つただけで別に驚きはしなかつた。それが當前の様に思はれた。自分分はちゃんとそれを豫期して居たのだ。お倉の話も聞いて居る間も、あの男の家の様子やら何

「え〜と顔を上げる。」
「私は明日の朝東京へ歸らうと思ひます。」
「まア何んぢやとえ。」
「其人が死んぢや、金子の都合も出来にくから

うから、兎に角印形は阿母さんに預けて行きます。私の立つた後で好い様にして下さい。」
「如何して、急にそんな事を言ひ出すのだ。」
お絹は泣き出しさうな顔をして、我子を見返した。

七

要吉は奥三松一人連れて、未明に村を立つた。長良の橋を渡る頃、月の色が次第に薄白くなって、四邊は一層仄暗い闇に包まれた。夜明が間近に成つたのであらう。
暗がりに来て、又暗がりに去る。何うやら身後に後暗い事でもあつて、わざと人目を避けて故園を出るやうな気がした。奥三松は水漬を吸りながら黙つて聞いて来る。二人の足下に橋板が高々舞いた。
町へ這入つても未だ人通りはない。監獄署の裏は寂然として、黒い板塀が一しほ高く見えた。それを外れようとして、奥三松がふつと提灯の火を吹き消した。薄い煙が一線横に靡いて、お絹の鼻が鼻を打つ。何時の間にか、夜は白々と明け放れて居た。
やがて停車場へ着く。要吉は奥三松の手から荷物を受取つて、

「最う可いからお歸りな。」
「へえ。」
「姉やにも宜しく言つとくれ。」
奥三松は一散に駆け出した。要吉は少時其後を見送つて居たが、不圖、今朝立ちがけに門迄送つて出て悄然立つて居たお絹の顔が眼に泛んだ。明日立つと言ひ出してからはお絹は唯おるおるして、荷掛へを手傳ふ間も始終涙含んで泣き居た。實際親一人子一人の仲で、長年離れ離れに暮して、偶々逢つたと思へば直ぐ別れて仕舞ふと云ふは心細いに違ひない。それを手紙なく思ふ容子が時々見えながら、口へ出しては決して留めようとしなかつた。彌々立つ前に成つて、「隅江さが今日にも来たら、塵落するぢやらう、私が彼の娘に對して言譯がない」と、さも術なさうに繰返して居たが、要吉の口から「阿母さんの所爲ぢやない」と言つて貰ひたかつたのであらう。
要吉は泣きたいのか、笑ひたいのか、自分でも解らぬやうな氣持に成つて、四邊を見廻した。他人の中より外に自分の住む國はない。路傍の群集に紛れて、不問行方知れずに成つたまふ、他人の中に生ひ立つた迷兒の様に、忘れられるものなら忘れたい、生れた家も、生んだ親も――

自分が自分だと云ふことも。
不意に汽笛の音がした。
要吉は飛び上つて、足早に改札口へ近づいたが、下り列車が地面を揺がせて構内へ這入つて来た。西行――何方でも可いではないか。何爲に又東へ歸る必要があらう。二たび彼の渦巻の中へ投じまいとしたら、心からあらゆる舊い縁を斷つて新に孤獨の境涯に入る覺悟があるなら、西へ指してこそ行くべきではないか。
二三人後れて来た乗客が要吉を突除けるやうにして駈けて行く。要吉の頭の中は旋風の様にぐる／＼と廻つた。其中から一人の女が被れ切つた、憐愍を乞ふやうな眼差で、凝手と此方を見守つて居るかと思はれた。要吉の足は立竦んだまゝ、動かなかつた。
其間、汽車が徐々と動き出した。
要吉はプラットフォームの上立つた儘、冬枯れの田圃の中を迂曲りながら遠ざかつて行く列車を見送つた。如何したら一思ひにあの女が捨てられよう、あの女から逃れて自分の行く處へ行かれよう。それさへ覺えないと成りや、お絹と逢つた所はない、氷人間の情性に壓せられて、二度目ひ上る力もなく、じり／＼と深沼の底へ沈んで行く――あの自分を生んだ女と。「穴

張親の子に違ひない」と口の中で呟いて、つと踵を回した。側に立つて居た藤長と面を見合せると向うでにや／＼と笑つた。先刻から始終自分の舉動に注意して、此方の腹の中まで見透して居られた様な気がしてならぬ。で、わざと何氣ない顔をして、プラットフォームの端の方へ寄つて行つた。
彼の二人は――と、此前汽車から降りた時見かけた繩附の老翁と若い女とを想出した。あの二人は如何したら。彼時ちらと自分の眼に觸れた限りで、二人の姿は永く人の世から隠れて仕舞つた。監獄の門をくゞつて、自分の背後に重い鐵の扉がたりと落ちる音を聞いた時は、何んな心持がするだらう。人間の社會から全く切斷された獄舎の中へ這入つてこそ、初めて過去と縁切つた、新しい生涯に入ることも出来るのではなからうか。
便所の側の梧桐の葉が黒く末枯れて、風の吹く度にごろ／＼と地に落ちた。要吉はそれを見て居た。又それを見て居るのでもなかつた。
やがて四分の一時間許りして、大垣發の上り列車が着いた。要吉は機械的に其一室へ乗込んで、片脚に身を横へた。此列車は貨車を連結したもので、何んな小さい驛でも一々寄つて行く。

要吉は誰とも口を利かなかつた。身體も精神もへ／＼と疲れて、別に物を考へても居なかつた。偶々顔を擧げては、其都度同じ乗客の顔が自分の前に並んで居るのを見ると、斯うして知らぬ人と一日一緒に居るのが不思議で成らぬ様にも思はれた。
百里の道は一日がかりの汽車の旅である。箱根の山を越す頃には、日も傾いて、谷間の陰が薄寒さうに見えた。大磯邊りから誰彼れて、大船で灯が入つた。汽車の中で日が暮れる程淋しいものはない。此世に只一人生きて居るやうな心持が、何處からともなく身に透る。
十四の春初めて首都へ出た時も、恰度此邊で日が暮れた。關東者の調子の高い話聲に挟まれながら、浴出さうにして居た覚えもある。それでも新橋へ着いてからは、教へられた通り人力車を請つて、同じ村から出たと云ふ縁故を頼りに、築地橋の袂で屋根に大釜の看板が出てゐる金物屋と訊き／＼、お絹の父親を訪ねて行つた。此處だと分つた時の嬉しさも、座敷へ上つてから――生れて初めて他人の中へ這入つた所爲でもあらうが――思つた程に落着かれなかつたことも、昨日の様に忘れなれない。萬端世話に成つて、一年餘り其家から學校へも通つた。其

間お種とは朝夕一つ家に起臥したが、同い年でも女のことではあるし、東京に育つたのだから、田舎者の要吉なぞでんで子供扱ひにして、眼中に置いて居なかつた。それに父親の遺業から二人の娘に遊藝を仕込んで、姉は常磐津、妹は那、春秋のお波へには眼の色を變へて鬘つといふ有様であつた。未だ其外に總領の息子で、大阪役者に成つて居るのがあつたが、音信不通とかで逢つたことがない。其後木柵町の芝居へ来て、成田屋の相手に「春雨兼」の「下山」ぞを演つて居ると云ふことを他所ながら聞いたが、生家へは立寄らなかつた。それは扱置きお種は翌年の春十五で花柳の名取に成つて、新富座の大演會に出たが、十六の歳には千葉の百姓へ買はれて行つた。何でも先方の男とは親子程年紀が違つて居たと云ふ。間もなく父親は死んだ。姉の養子の代になつてから、内輪の苦しさは段々人日に立つた。それでも何うやら斯うやら六七十年持耐へて居る間、或年世間一帯の不景氣から編りを喰つて到頭店を開けて神田の明神下へ引越した。そして其養子は元勤めて居たお店へ通ひ出した。其頃要吉も豫備門から大學へ移つて、下宿生活にも飽果てて居たから、談合の上で、お種の母親に當る小母さんと一緒に、本郷

丸山で假の所帯を持つた。それだけなら未だ可
かつたが——要吉は急に深い追憶から覺めて、
汽車の窓から黒い丘や書や小家やを見詰めて居
た。車輪の音は絶えず眼を誘ふやうに轟々と響く。
要吉の心は復た昔に回つた。

一昨年の秋、お種は片附いた先方から離れ
て来た。唯子供が無いからと云ふ言分であつた
さうな。當人は何とも云はなかつた。嫁入した
時、草筒の底へ入れて行つた小鼓も其儘一緒に
戻つたが、鼓の主は別人の様に變つて居た。最
早お種は元のお種ではなかつた。それを憐れと
見たのが——言葉少なに控日な女の容子を物
の哀れに思つたのが、二人の因果であつた。其
後のことは言ふに忍びない。

佛し何日迄斯んな生活が續けられるものか。
新しい境涯に入るには、心を鬼にして、古い鼓
を置いて棄てなければならぬ。それには自分か
ら丸山の家を去る外はない。恰度好い折だ。此
機智を外したら再びこんな折は来なからう。今
度こそ歸つたら席の暖まらぬ間に、一思ひに足
を上げなければならぬ。

八

一旦目を覺しながら、うつら／＼して居る間
に又寐入つたと見えて、二度目に頭を上げた
時は天井裏まで明るく成つて居た。枕頭には
毎日の通り新聞が置いてある。乗合馬車の喇叭
の音だの物賣の呼聲だのが、朝の静な空気を
傳つて、此處迄聞えて来る。何だか自分が故郷
へ歸つたと云ふこと、其間に起つた様々の出
來事が遠い時日を想つた夢の様に思はれて成ら
ぬ。

十五分も経つて漸と起き上つた。楊枝を衝へ
ながら茶の間を覗くと、長火鉢の向うに小母さ
んが坐つて、それと向合つて、一人の女が此方
へ背中を向けて居た。後姿がお種であつた。
二人ながら黙つて居る。足音を聞くと、小母さ
んは顔を上げたが、お種は益々俯向いて仕舞つ
た。

「今お湯を取つて上げますよ」と、小母さんは金
盥に銅壺の湯を汲出して呉れた。それから拂塵
と箆を持つて、寢床を上げに取つて返した。
要吉は含嗽して、二度茶の間へ出て来た。そ
れを見ると、お種は少し膝を觸つて、
「昨晚お歸りでしたさうで御座いますね。」

若し少しでも不快な顔色が見えたら——
何時の間にか、汽車は都近く走つて居た。品
川の沖は暗かつた。芝浦邊の街の灯がちら／＼
と祭の夜の様に見えた。乗客は皆降りる用意
をした。

新橋のプラットホームへ降りた時は、鎖で
仕切られた後ろへ、迎への人々が各自提灯を振
舞つて山道の様に誘つて居た。要吉は一人其中を
抜けて、足早に停車場の出口まで来たが、思は
ず其處に立ち停つた。無数の街燈が蛇の舌の様
にきら／＼と眼を射つて、四邊を取巻く雜然た
る都會の物音が、一つ／＼と聴分けられる様にも
思はれた。石段の上に立つたまま、頭がぐらぐ
らとした。

丸山の奥へ戻つたのは彼此七時に近かつた。
町は未だ宵の口ながら、此界限はどこも皆戸を
閉めて、ひっそりと寂靜つたらしい。人力車の
音を聞附けたのか、小母さんは影衣の上から羽
織を引掛けたまま駈出して、表の木戸を開けて
呉れた。
「まあお歸りなさい、存外早う御座いました
ね。」
「え、と、要吉は一寸振返つたが、直ぐに自
分の居間へ通つた。小母さんは後の戸締りをし

八

「あゝ」と、何気ない風をして座に着いた。
「被方は皆様御健康ださうで、赤さんも嘸——」
要吉はお種の顔を見返した。女は直ぐに睫毛
を伏せて黙つて仕舞つた。二人は少時手持無沙
汰に坐つて居たが、
「大變顔色が悪いやうだね。如何かしたのか
い」と、男の方から言出した。
「え、と、お種は両手で自分の顔を撫でて見
て、「何ですかね、何うも氣分が勝れませんが、
昨日も姉の宅へ行く途中から悪く成つて、先方
へ着くと其儘臥つて仕舞ひましたの。」
要吉は何だか自分が其病氣に責任があると云
はれた様な氣がした。
「毎もそんなぢや、早く養生をしなければ不可
いね。」

「でも、私の疾病はね、一日経てば斯うして起き
て居られるんですもの」と、稍々言ひ込んで、阿
母さんが何か私のごとで貴方にお願ひしやしま
せんでしたか。
「何を——未だ何も聞かないよ。」
「それなら可いんですが、今後若し何か言出し
ても、餘り相手に成らん様にして下さいまし、
ね。」
そこへ小母さんが戻つて来たので、お種は急

で、佛て洋燈を持つて跟いて来た。
「今晩あたり如何かしらとは思つてましたが、
眞個早う御座いましたね。お故郷では皆様お變
りもありませんか。」
「あゝ別に——、要吉は氣のない返辭をした。
小母さんは一人いそ／＼と所帯の洋服を疊
んだり、背後へ廻つて小櫃巻を被けたりして、
「では、一つお茶の熱いのを入れませう」と立上
つたが、偶と衣紋等に懸けた胸裏の紅い女の
平常着が眼に附いたので、それを外して一緒に
持ちながら出て行つた。
要吉もちんとそれを見たが、故と氣の附かぬ
容態をした。留守中お種が泊りに来て居る筈
である。先刻から顔も見せず聲もしないのは
如何したのであらう。何となくそれが氣にかゝ
る。

机の周圍は整然と片附いて、瀬戸物の手焙か
ら、座蒲團から、缺けた灰皿から、書散らした
反古、讀み差して開けたまま捨てて置いた書物
まで、五日前に立つた時の儘そつくりしてある。
この日々見慣れた部屋の光景が一つ／＼眼に映
ると、嘗て失はれた自己の幾分が戻つて来た様
な氣がして、要吉はぐつたりと其處へ倒れて仕
舞つた。

口に嚙んだ。小母さんは一寸二人の顔を見た
まゝ、別に氣にも留めぬ様子で、片隅へ寄せて
あつた朝飯の膳を出して佈めた。
それが済むと、要吉は自分の居間へ戻つた。
掃除をした後で、障子がかりりと開放してある。
木理の持上つた縁側へ一杯に湯が射して、手水
鉢の水が圓の壁にちら／＼と映る。崖の下の小
家だから、今頃でなければ日が當らない。
留守中に着いた一通の手紙を持つて、縁側の
柱に凭れながら封を切つた。神戸といふ友人か
ら来たので、「近頃君は段々僕から遠ざかつて行
く。僕の僻目かも知れぬが、何うもそんな様に
思はれる。平生君が何を考へて、何をして生き
て居るかも知らなく成つた。兎に角一度會つて
語りた」と云つて、巻紙の末に、「例の金業會を
又始めることにしたから、今週の金曜日には毎
日の教會迄来て貰ひたい」とあつた。金業會とい
ふのは、今年の青葉の頃から一週に一回若い
女が集つて、外國文學の研究をして来たので、
神戸が會の主人であつた所から要吉をも誘つて
其中へ加へた。それが追々情氣を生じて、何時
となく中止の姿に成つて居たのを又再興しよう
と云ふのである。要吉は一人苦笑ひをしながら
手紙を巻返して手欄の上に載せて置いた巻煙草

を吸はうとしたが、火が熄えたと見えて煙が出ない。つと振向きま庭へ捨てた。

今朝置いた庭の霜は蜜柑の皮の蔭だけ残して消えた。小さい池の水が澄んで、底に映る金魚の影も見えぬ。昔此家に棲んだ一葉女史が月夜に硯を投げたと日記に書いた池で、垣根の下に二三木葉つて枯れた芭蕉も矢張り垣から有るといふ。要吉が永く此家に居つたのも、一つは其様な事が心を通じたからで、何日も神戸が来て、「君は一葉さんの家に居る間に、何か大作をしたら好からう」と言つた。それは何日出来るといふ宛もないが、此處に住むのは随分久しい。

何時の間にか、お種が十能を持つて入つて来て、火鉢に火を埋けて居たが、其儘出て行かうともせず、徐かに縁側へ出て、手欄に片肘を掛けたまゝ、同じ様に庭を見詰めた。要吉も知らぬ振をして物を言はなかつた。二人は斯うして暫く並んで居た。

一昨年の冬、恰度今日の様な日曜の日であつた。要吉が學校から歸つて、何の氣もなく庭から這入つて来ると、お種は髪を洗つたと見えて、此手欄に凭れて日光に背を曝しながら、膝の上

に、唄か何かの本を開いて居た。被衣の襟に身を包む濡髪からは、陽炎が立つと思はれた。足音を聞けると、急に上半身を振つて振向いた。明るい所から這入つて来たためであらう、女の顔は只ぼつと卵形に白う見える許りであつた。要吉は我にもなく其手を執つた。女は男の弄ぶが儘に手を借して居た。

併し女が何日も斯ういふ位置に許り居て呉れるものではない。偶々無意識で斯ういふ位置に置かれたのである。それが一たび意識して男の歡心を買はうと努める様に成つては最う堪らない。時には年紀の行つた女の甘えたやうな所作を見せられて、一種不快の念を禁じ得ないことさへあつた。それにも拘らず、其不快の念が湧きたびに、如何いふものか、却て女から離れることの出来ないものにされて仕舞ふ様な氣がした。お種は何時の間にやら持つて歸つた着物も大抵買入して、要吉の側を離れては、あの小鼓一挺抱へて街に彷彿外はない身と成つた。それと知つた時、要吉は思はず身震ひしたが既に遅い。一日経てば一日だけ事情が暗んで、自分の爲にも成らず、女にも愛い目を見せると知りながら、心苦しい日夜を明して暮して行く。これが何日迄つゞくのであらう。

「もし」と、不意にお種が呼び掛けた。

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

「お種、お種が呼び掛けた。」

で暮すと云つてゐますが、如何して女が踊の師匠なぞして遣つて行かれるものでない。彼様な事を云つて居る所を見ると、未だ何んな氣で居るかと思ふに成れば案じられるのですよ」と、眞正面に相手を見上げて、「それで、お願ひと云ふのは、私が言つたのでは聞かないから、貴方から好く得心の行くやうに、彼女に言つて頂きたいのですがね。」

要吉はお種が云つて居たのはこれだと思つた。そして薄く胸を押鎖めながら耳を傾けた。小母さんの顔みと云ふのは、何とかしてお種が再嫁する様に勧めて呉れと云ふので、段々聞いて見ると、現に姉の許へ貰ひに来て居る口がある様子で、何でも先方は深川の廻米問屋だと云ふことであつた。

それを打明けられた時には、要吉も一種の容することの出来ない氣持に捕はれた。一人の女を二人の男で分つ——自分が關係したことのある女を、幾許先方で貰ひたいと云ふにもせよ、それに乘じて自分の身抜けをするために、自分が手傳つてまで、何も知らぬ他人に押附けようとする。そんな眞似は逆も出来るものでない。先方の男も氣の毒であるが、お種は三たび意味もなく男の手から離れて行く。それが知

らん顔して見て居られようか。見て居られないからと云つて、未だしも左様成り行くが女の爲には仕合せであらう。それを思へば何んな卑劣な所行をも思はねば成らぬ。今の一時ではない、永い一生の間、其男の前には知らん顔をして過さねば成らぬ。——要吉は自分が道徳上の墮落を目前に見せ附けられるやうな心持がした。

「いづれ其間違つたら善く談して見ませう。」一時逃れに左様は云つたものの、そんな事が自分の口から言はれるものでない。それだけは斷じて出来ない。

「貴方が強く言つて下されば、彼女もねえ。それぢや何分お願ひしましたよ」と、小母さんは心を残して立上つた。足音が襖の外に消えると、要吉は急に苛々して、部屋の中をぐるぐる廻つたが、不圖これも嫉妬心ぢやないかしらと云ふ氣が附く。あれだけ女を棄てて仕舞ふ覺悟で居ながら、此方の手を引くには待設けても無いやうな都合の好い話を持出されて、こんなに心が苛つのは、未だ未練があるからだらうか。又ごろりと机の前に倒れた。

正直に前と同じ道を歩いて、要吉は丸山の家の前まで戻つて来た。何だか直ぐ家の中へ這入るのが可厭に思はれたので、又引返して柳町へ出た。小石川と本郷との高塚から落す悪水を溜めて、其處に洞川が流れる、其上に架けた柳橋の袂に、露店の魚屋が戸板を並べて、悪臭を放つ魚肉の切身に附木の札をつけて賣いで居る。恰度夕飯前の人の出盛つた所で、殊に此邊は職工や労働者の集窟だから、結立の鬨だけ光らせで、醬油で煮しめた様な匂を流した細君達が金切聲を立てて商賣と賑み合ふ。其中を要吉は何か一人で咳いたり聲高に物を言つたりして急いで歩いた。往き違ふ者の中には胡散臭い眼をして顔を見める者もあつた。

洞について下つて行くと、地面に席を敷いた古着屋に續いて、植木屋がある、人形焼の屋臺がある、大きな傘を掲げた餅屋もある。今日は葎餅問屋のお賽日と見えて、子供や女や年寄なぞがぞろ／＼と黒門の中へ這入つて行く。要吉も其後から隨いて行くと、圓慶堂の横手の古い石塔の倒れた中に、猿芝居だの輕技だのが小屋掛けして、太鼓や銅鑼で喧ましく囃し立てて居る。けば／＼しい繪看板の下で、木戸番が聲を暖して客を招ぶ。暮の暗間からいやに白粉を塗

つた若い女が薄汚れた顔を出して、群集を覗いて居る。こんな連中が眼に留る毎に、要吉はいつとも何だか自分とは餘り縁が遠くない様な心持がした。今日は殊にしみ／＼と身に沁む。若しあらゆる保米を斷つて、親も子も妻も何も無い、天地の間に只一人の身と成ることが出来るなら、こんな仲間へでも這入つて、世界の果までも行つて仕舞ひたいやうな心持もした。

何時の間にかやら人込に押されて裏門の外へ出た。急に人通りが稀に成つたので、初めて我に返つた様に四邊を見廻した。「これから何處へ行かうか」と考へた。

十

したといふ歩き方ではない。一日歩き通して来て、今夜もこれから夜通し歩かねばならぬと云つた様な足取である。要吉も其中へ交つて何處までも行つて仕舞はうかと思つた。二三間歩いて見て、直ぐ後れて仕舞つた。茫然道端に立つてると、「おい」と呼んで、肩を叩いたものがある。振向くと、それが神戸だつた。「あ、君か。」「如何したんだ。金葉會ぢや、君が来ないものだから、今迄散會せずに待つて居たんだが。」「そりや濟まないことをしたね。」「なに、そんな事は聞かないが又如何かしたんぢやなからうかと思つてね、それに」と、神戸は背後を振回つた。

三間許り離れて、目に立たぬ程の綿の袴を穿いた女學生らしい女が一人立つて居た。焦茶色の毛皮の襦袢が年紀よりも老けて見せる。要吉と視線が合ふと、此方へ近づいて来て、しづかに頭を下げた。「それに」と、神戸は言葉をついで、「これから僕が君の許へ行くと云ふと、眞鍋さんも丸山なら歸途だから一緒に寄つても可いと云ふのでね。」

「あ、左様か、それぢや」とは云つたが、何となく此處から引回すのが躊躇はれた。
「いえ、私は」と、眞鍋と呼ばれた女は初めて口を開いて、「又此次にお伺ひしても宜しいのですから。」
「左様ですね。それぢや餘り晩くなる様だと不可まさんから、此處で失禮しませうか」と、神戸は側から引取つて言つた。
女は二人に別れて、間もなく往來の群集に紛れて見えなく成つた。
要吉は神戸と顔を見合せた。
「何處か其邊を歩かないか。」
「さ、歩いてても可いね。久し振で池の端でも散歩するかな。」
二人は壹枚坂を上つて行つた。
「一體如何したんだい」と、神戸は二たび相手の容子を氣にして訊ねた。
「いや、別に」と、眼を地上に落して、「四五日故國へ歸つて居たものでね。」
「え。それぢや何だね、今度は皆さん御一緒にな。」
「なに、只一寸歸つただけなんだから。」
神戸は未だ何か言はうとしたが、餘り立入つてもと思つて控へた。

「あつて要吉は語頭を轉じた。「あの何は、此方から通ふんだと見えるね。」
「今のあれか、何でも家は白山の先きだと云ふことだが。」
「何日か、君は銀座だとか云つたぢやないか。」
「うむ、あれは岡部三枝子さ。何かい、君は彼の女だと思つて居たのか。」
「左様ぢやないのか。」
「別人さ」と、神戸は笑ひを含んで、「三枝子はもつと派手で、風俗が下町式だよ。此方は、左様さね、最初會員の中に日白の女子大學を出たのがあるよと云つたらう。それだよ。」
「何といふ名だ。」
「眞鍋朋子。」
「朋子、左様か。」
「併し間違ひともしや面白いね。如何して又君にはあ、云ふ顔が氣に適應のだらう。」
要吉は自分が物笑ひに成つた様な氣がした。
「あの眉と肩との間の暗い陰は、誰の眼にも附くぢやないか。冥府の烙印を顔に捺したやうな——一度見りや一生忘れない顔だ。」
「其代り一度見りや深山な顔だらう。」
「如何しても始終見て居られる顔ぢやないね。」
「一度見りや深山な顔で、一度違つたら一生忘

られない顔と云ふのだな。」
やがて二人は切通しの坂を下りて、不忍の池の畔へ出た。腐れた水は毎もの通り動かないが、空の曇つたためか、何處となく輝かでない。蓮は大抵上へ返つて、所々に枯れた葉が折れたなりに水の上へ出て居る。刻々に迫る夕暮の色に追はれる様に、點燈火は池を廻つて走りながら、一つ／＼街燈に打を入れて行く。それと後になり、前に成りして、雲見橋から辨火洞の方へ歩いて来たが、三橋寄りの所で、路傍に人群りして居る後ろへ立つて、二人は足を留めた。
その貨席らしい家の中二階に、赤と白と段だらゝの蓆を張つて、外を向けて響音機を鳴らして居る。歌の文句は能く解らな、が、運びのある年の行つた女の聲を一杯に張上げて、三味線や太鼓迄も合の手で、馬子唄か船頭唄か、いづれ海か山で唄はれるものらしい。其内に一曲濟むと、前に立つた職人傭の小僧が、「船頭かはいーや音頭の瀬戸で」と、直ぐ歌の節を眞似しながら立つて行く。
要吉も黙つて動き出した。神戸は其後から流水を大きく廻つて、要吉と肩を並べたが、
「あんな様な墮落した女の、何と云つて可いか、コイシユハイトを失つた聲と云ふものは、聴や

かな中に何處か手頼ない所があつて、聴いて居ると、僕は身に沁むがね。」
要吉は只頷いた。
神戸はなほも言葉をついで、「左様ぢやないか、吾々の癡類した心持は、あんな女のあんな聲に、辛うじて、其鳴を見出すのだけ。其外には言葉はし様もなければ、理解される宛もない。考へると淋しいね。」
一人は黙々として行く。
「矢張人間を動かすものは、人間の聲だね、肉の聲だね。何うもあの聲には誘惑が滲んで居るよ。人を墮落させる力が有る」と、神戸はだんだん自分の聲で自分ではずんで来るらしい。
「左様か」と、要吉は誰に言ふともなく言つたが、「何が人生の快樂だと云つても、誘惑に抵抗しないで身を委せて居る位好いものはないね。」
「後で命を奪つて呉れたならなほ好いさ。誘惑を怖れるのは人生の音書漢だよ——誘惑に克つたと云ふのも。日が暮れてとぼ／＼草場の手前迄辿り着いてから、一生を振り返つて見て、何等の悔をも残さなかつたと思ふやうな淋しさは堪へられんぢやないか。」
神戸も何處迄自分の云ふことを信じて居るの

だらう。や、有つて、要吉は下を向いたまゝ、
「併し僕は駄目だね、誘惑に對して殆ど抵抗力が無いのだから。」
神戸は何とも言はなかつた。
西の空が切れたのか、上野の森から石段へかけて舞臺のフラットライトでも廻した様に、其邊一面に明るく成つたが、見る／＼間に又暗く成つて行く。
池を廻るに伴れて、一旦掃天の屋根に隠れた向側の待合の家つゞきが又見え出した。聲並に二階へ打がついて、障子へ映る人影までが廻り燈籠を見るやうに、此世のものとは思はれない。不意に何處かの座敷で下方を入れて騒ぎ出した。水を渡つて聞えるためか、賑やかな聲の太鼓の音が心寂しい。
「おい君」と、要吉は神戸を呼び掛けて、「一寸向側を見給へ。何だか斯う芝居の書割でも見る様ぢやないか。」
「左様」と、神戸は洋杖を立てた。
「十八軒でも有りさうだね。」
「うむ」と、又小石を踏んで歩き出したが、「近頃創作は如何した。未だ手を着けないか。」
「逆も書けさうにない。」
矢張事實を其儘

書くんだね。平凡な様だが、眞實の事を書くと云ふことは如何しても最後の手段だね。日記を書く積りでさら／＼と遣つて見給へ。」
「日記に眞實の事が書けるかい。」
「併し自分のことは誰でも、他人の事を日記に書く時や眞實のことを書くだらうぢやないか。」
要吉は思はず相手の顔を見た。「だが、僕は他人の事に成つたら猶更書けない。矢張自分の事を書く外ないものね。」
「ぢや仕方がない、デイヒツング、ウント、ゾー ルハイトで書いたら可からう。」
「そりや洒落か眞面目かい。」
「何方でも可い。」
「だが僕はねえ、何うも書く人ぢやない、書かれる人に生れて来たのぢやないかと思ふことがあるよ。」
「其代り實際の生活其者が作品だらう。」
「何だ」と、要吉は苦笑したが、「只其方は値が高いからね。」
神戸は急にしんみりして、「併し誰かの言葉

ぢやないが、其日送りの頓智や警句でお茶を濁して、生涯何も爲すに仕舞ふ者は、身代を銅貨に換へてばら撒くやうなものだと云ふよ。其邊はお互に戒めなけりや成らんね。」

何時となく池を一周して、二たび雪見橋の袂へ出た。片側町の柳の樹の下は暗かつた。仲町へ出ると、狭い町筋の両側の灯が入り亂れて、白雲を欺く程明るい。二人は十字街頭に立つて、一寸眼を見合せたが、ふいと又向横町へ反れた。

十一

昨夜一時頃、要吉は池の端から自宅へ戻つた。とろ／＼として目を感じたら、雨の音は止んで居たが、夜は未だ明けない。胸がむか／＼して、二日酔らしい氣持である。漸と小母さんが起きる迄床の中で辛抱したが、勝手の方でことと云ふ音が聞えずと一筋に起上つた。

此日は一日中身體が倦怠く、机に向つても書物さへ手に觸れる氣がしない。日の暮から悪寒がして、毛の穴が獨立つので、急いで夜着を引被つて寝たが、眞夜中に成つても眠性が止らぬ。つゞけざまに夢を見て居るやうな、覺めて居るやうな心持で、手足の所縁はず自分で注射し

て、それにつれて熱が往來するかと思はれた。頭まんじりとも爲すに夜を明した。朝に成つて、稍後痛が去つた様だから、一寸寝返りをして見ようとしたが、膝の關節が硬張つて曲げることも出来ない。怖る／＼蒲團を上げて見ると氣味の悪い程赤く腫上つて居た。かねて母親のお絹が自分を生み落した前か後かに、重い痛風に罹つて、永く煩つたと云ふことを聞いて居る。今迄そんな氣觸ひは少しも無かつたが、如何かしたらそれぢやなからうかと案じられた。

そこで近所の醫者を迎へに遣つて、診て貰ふと、矢張急性の髄膜炎だと云ふ診斷である。其上少し瀉烈に來た様だから早く入院して手當をしなければ不可なりと云はれた。一たび病人と成つては、醫師の言葉に従ふ外はない。其醫者の紹介で、小石川若荷谷の奥の野野病院といふへ這入ることに成つた。醫者の宅の電話で訊いて貰ふと、恰度病室も明いてゐると云ふので、これも好都合であつた。

其日の夕方、要吉は身の周りの物だけ持つて、一人人力車に乗つて出掛けた。小雨が降つて來さうなので靴を下させたが偶と此家へは最う歸らないのぢやないかと思つた。あれだけ此家を去る計畫をしながら、無事の日は爲す所な

く、病氣に成つて出て行くのが自分ながら笑止である。車夫は氣をつけて、徐々曳いて行く。切支丹坂は勾配が急だからと云ふので、大塚の火の車側まで行つて又引返すことにした。其處迄は場末でも流石に町つゞきだが、其處からは路の上を高い杉の樹立が鎖して、車はごろごると暗闇の中へ這入つて行つた。ところ／＼道の曲り角に街燈が弱い光を放つてゐる。何處に病院があるのか、要吉は未だ知らない。車夫も知らなかつた。石の門があるので、此處だらうかと思つて訊いて見ると、門番がこれは寺院だとほざく。寺へ来るにはまだ早いと、要吉は人力車の上でひとり苦笑したが、聲を出すだけの力はなかつた。此様にして、兎に角無事に目指す病院へ着いた。

女關へ着くと、看護婦が二人出て來て肩を借して呉れた。兩方から釣られる様にして長い廊下を定めぬ病室へ通つた。一しきり當直の醫員だの看護婦長だのが來て、いろ／＼世話を焼いて呉れた。最後に副院長が診察したが、始終心安げに物を言ふ人で何となく心が落着いた。副院長が出て行くと、間もなく又看護婦が來て、電法をするんだと云ふので、暫く足の纏帯を解いたり巻いたりした。それが済むと附添の

看護婦一人残して皆出て行つて仕舞つた。

夜が深けたと見えて其後は森とした。時々蒸氣の通ふ鐵管の中で、かたんと吃驚する様な音のする外には、物音一つ聞えない。病室は六疊で、壁も天井も白い。電氣燈の光で見ると、毛布も藁蒲團に被けた上被ひも寒い程白い。白いつくめの中に仰向けに成つて寝て居ると、生きながら白木の棺に納めて、海の底へ沈められた様にも思はれる。一人世間から遠く隔離されたやうで、此處迄は誰も追掛けて來ないやうな氣もする。偶と若し自分が本當に死んだらと考へて見た。自分が死んだ後の周囲の者の行末を一人々々明細に眼に泛べて見た。最後に如何しても自分が一番可憐に思はれた。

こんな事を考へて居る間も、足の疼痛は忘られない。それが疼くのもなく、やめるのでもなく、一種異常な陰性の痛みで、何とも云はれぬ不快な心持がする。氣が附いて見ると、窓の外は突でも降つて來たのか、しと／＼と重い音が絶間なくつゞく。それが何だか足の痛みと調子を合せるやうで堪へ難い。硝子窓を透して見ると戸外は何處迄も深く暗い許りである。

「おい／＼」と看護婦を呼んで窓掛を下させようとしたが、何時の間にか寢入つたと見えて返

辭をしなかつた。

明くる朝に成つて見ると、要吉の當がはれた室は病院の建物の東の端れにあることが分つた。庭は只平に廣い許りで、窓際はまだ突支棒を支つた若木の外には、草一筋生えて居ない。ずつと向うの垣根に沿つて、一面に厚い植込みが見える。其處は傳染病室であると云ふことだ。この殺風景な庭を眺めて、要吉は二週間餘り明し暮した。初めの間はいぢけた底寒い天氣が續いたが、後には毎日快晴に成つた。それに於て要吉の病氣も日に見えて快く成つたが、それから何うも捗々しく行かない。自分でも快く成るのか悪く成るのか分らない様な氣がして焦躁しい。恢復期に入つた病人は、健康體の時よりも、反つて心持の澄々するものだといつて居たが、一向そんな覺えはなかつた。

お種は最初から眞心籠めて介抱した。今でも一日置きか、二日置き位には必ず見舞ひに來た。要吉も初めの間は、又此様にして此女の情に絆されて行くことかと、内々それを恐れて居たが、病院の單調な生活に倦んで來ると、此頃ではお種の來るのを待望しく思ふことさへあつた。米市場の方の縁談は如何成つたのか、此方から訊くのも氣の毒な様で、女は猶更何と

も言ひ出さない。只來ては只歸つて行つた。

十二

午後一時頃である。朝から仰向けのまゝで讀み續けた小説にも飽きて、鬱陶しく成つたので、看護婦を呼んで窓を開けさせた。白い窓掛が帆の様に風を孕んで、隙間から若い空が見える。要吉は、吐つた様な心持で、蒲團の中から乗出して、久らく新鮮な空氣に面を晒して居たが、急に顔色が變つた。ぞく／＼寒氣がするので速に横に成つた。看護婦も氣が附いて急いで窓を閉めて呉れた。

そこへ一人の看護婦が廊下の入口から顔を出して、「此方が御面會に」と、一葉の名刺を差出した。

附添の看護婦が受取つて、寝て居る眼の前に置いたのを見ると、神戸直方とある。要吉は「ああ」と言つて點頭した。

看護婦が引返すと、間もなく廊下に足音が聞えて、身丈の高い神戸の姿が先づ戸口に現はれた。把手に手を掛けたまゝ、一寸振向いて物を言つた様であつたが、續いて女の長い杖が現はれた。

神戸はつか／＼と枕元へ近づいて、「其後

は如何だ。今日は珍らしい人を伴れて来たよ」と言ひ、洋袴の腰をたくし上げて坐つたが、「眞鍋さん、お道入りなさい。」

朋子はしとやかに一禮して、入口の壁に近く座に着いた。

要吉が速くて起直らうとする、神戸は、「ま、左様して居給へ」と、手を擧げて留めた。言はれるまゝに要吉は又仰向けに成つた。

「如何で被せしやいます」と言ひかけて、朋子は稍依違つた。「未だお顔色が悪い様で御座いますわね。」

其聲が極めて優しく、調子が暖かで、眼を睨つて聞いてゐると、恰もそつと柔かに抱かれる様な心持がする。

「左様」と、神戸は何気なく頷いて、「先達て来た時よりは悪い様だね。又如何かしたのぢやないか。」

「あ、昨夜から少し熱が出て」と、要吉はうつかり顔をして仕舞つた。それが口へ出ると共に努めて苦痛を装はねば成らぬ様な気がした。

「それや不可ね、又後戻りするやうぢや。」

「なアに」と言つて、要吉は眼を半眼に閉ぢた。斯うして力の無い風を装ひながら、竊に朋子の容子を窺つて居た。

それを機會に神戸も朋子を促して立上つた。「ぢや、又来ようね。」

「さうか、わざ／＼何うも。」

朋子の穿いた赤い鼻緒の上草履が廊下に消え、要吉は芝居の幕が降りた後の様な物足りなさを覚えて、枕に頬を押しつけたまゝ、擬手と其後を見守つて居た。ざわ／＼と心が落着かぬ。

間もなく朋子一人引返して来たが、入口から覗き込んで、

「あの、只今の書物はお明きに成つてませうか。」

要吉は一寸驚いて其顔を見たが、

「明けてます。お持ちなさい。」

「拜借して行つても好う御座いますか。」

「何方をお持ちなさいませう。」

「何方でも。」

要吉は二たび女の顔を見た。「ぢやダンソンチオの方から先きへ。」

何時も物を言はぬ時の此女の顔で、少し反身に成つて、伏目に一所を凝視してゐる。堅く閉ぢた唇はやゝ豊かに過ぎて、熱のために上皮的乾燥いだのが男の心を惹く。

「大切にしまへよ。」と言ひながら、神戸は宛もなく枕元に散らかつた書物を一册取上げた。

其下には何日か神戸が見舞つた時に、こんな際でもなけりや読む機會はなからうからと、持つて来て貸して呉れた聖書が其儘開かれもしないで伏せてある。

「如何だ、聖書は讀んで見たか」と言つて、手に持つた書物の表紙を見たが、「オスカア、ワイルドの『サロメ』だね。」

「其方は讀んだ。」

「君のことだから左様だらう。面白い。」

「あ、面白いよ。」

「矢張新約聖書の中のサロメがバプテスマのヨハネの首を盆に載せて呉れといふ、あれだらうね。」

「うむ、あの女がそれへ接吻するんだ。」

「生首にか。」

「あ。」

神戸は書物を開いて、出た所を二三行黙讀した。

「汝は常に眼を見る。」

「さばかり人を見てあらはは殆し。」

「何等かの怖ろしきこと起るべし。」

要吉は竊と朋子を覗く眼を反した。

「眞鍋さん」と、神戸は朋子を呼びかけて、「貴方ダンソンチオの『トライアムフ、オブ、デス』をお讀みに成つたことが有りますか。小島君は此處へも持つて来て居ます」と又一冊の洋書を取上げた。

「え」と、朋子は小首を傾げたが、「それですか、いゝえ。」

「ぢや是非讀んで御覽なさい。初めから終ひまで刺戟の強いものです。綺麗な所が眼の覺めるほど綺麗なら、汚い所も鼻持の成らぬ程汚い。」

「はア」と言つた許りで、朋子は又口を閉ぢた。そこへ看護婦が這入つて来て、院長の診察があると言つた。

要吉は神戸に向つて、「それぢや、一寸失禮だが——」

「さ、何卒。」二人は片側へ寄つた。

看護婦は直ぐ毛布をはねて、足に巻いた繻帯を取り始めた。少時すると三四人どや／＼と這

すなも。」

「俺が病氣だと云ふことを如何して知つた。」

「え」と、岡江は意外な面持して、「そりや貴方、丸山の小母様から知らせ頂いたがな。それ貴方知りやアせんのかな。」

左様かと要吉は心の中で頷いた。今度の病氣は全快つて仕舞ふまで、故郷へも知らせるなと云つて置いたのだが、知らせた上は仕方がない。

要吉は枕の上に頭をつけながら熟々岡江の姿を見た。田舎者が田舎者らしくしてりや未だ見られる、田舎者の盛装した位見苦しいものはない。着替へる位なら五分の隙もないやうで有つて欲しい。辻褄の合はぬ服装をして、それで當人は得意で居る程可厭なものはない。

其下から要吉は直ぐ何故自分は何か知らぬ岡江にこんな罵倒を浴せ掛けるのかと思つた。岡江を嘲るのではない。自分自身を嘲つて居るのだ。今其處で岡江が朋子に出會つたかと思ふと、何だか見られたくないものを見られたやうで、少からず自分の虚榮心を傷けられる。其傷けられた虚榮心に對して岡江を罵つて居るのだ。左様思ふと、如何にも自分の心掛がさかしい。

「今玄關の所で神戸様にお目に懸りましたが、今度は彼方にも大變お世話に成りやしたさうだなも。」
「うむ、まア可いや。コートでも脱いで然然したら可からう。」
斯う言つた要吉の聲は優しかった。
隅江は暮方迄居て、丸山の家へ歸つた。故郷の事なぞ此方から訊きもしなければ言ひもしなかつた。

十三

其後はお種がふつつり来なく成つた許りで、又單調な日が続いた。神戸は二三度見舞つて呉れたが、朋子からはあれきり何の音沙汰もなかつた。
又三週間経つた。師走の末に、要吉は漸と退院して、二たび有哉無哉の間に丸山の家へ戻つた。此上居る必要もないが、病後の衰弱に託けて、一間に閉籠つた儘うつらうと暮した。誰も訪ねて来なければ此方から行きもせぬ。家の者とも減多に面を合せなかつた。机に向ふこともあつたが、別段何を書くでもなく、何を讀むでもない。唯始終何事かを待つて居るやうな心持がした。何事かは自分でも分らない。

不圖、此次には如何したら可からうかと云ふ氣が附く。病んで起てない間はともあれ、一旦恢復した上は、如何にかして此不自然な境遇から逃れなければ成らぬ。一刻も早く如何かしなければ成らぬ。が、併し自分一人の力では最如何することも出来ない様に思はれた。自分は何を餘りに熟く知つて居る。加之、そんな事よりも、未だ根本に於て何物かが解決されずにあるのぢやないか。それを解決した日には、自分の身が如何成るか分らない。従つて目前の事なぞ如何だつて構はない様なものである。こんな手前勝手な都合の好い理窟を着けて、無理に安心して、一日延ばしに其目を送つた。
隅江は何とも言はない。又言ひたくも言ひ得ないのであらう。要吉の方から談話をしかけなければ、一日でも物を言はなかつた。故意とか、それとも其様なつもりも無いのか、成る可く要吉の側へは近寄りぬ様にして、始終小母さんの所について居た。小母さんと割合に好く談話もした。
全體、此女は俺を如何想つて居るだらうか。要吉は時々こんな事さへ考へた。未だ此女に良人の愛情を求める心が有るのだらうか。そんなものは最う要らぬのぢやなからうか。幸抱

強いと云へば是程辛抱の好い女もない。けれど、何處迄が辛抱して居るので、何處からが無神経なのか分つたものでない。こんな考へが泛んだ時は、流石に自分ながら非道い心根だと思つたが、其後から又、何うもそんな様に思はれた。
夜半に隣の部屋で子供が泣き出すと、要吉も敏度眼を覺した。まじり／＼天井を見詰めながら、この先き自分には、此儘人の良人と成り人の父と成つて、普通の生活を續けて行くだけの覺悟が有るだらうか。都合あつた女とは故障なく手を切ることが出来たとしても、それならそれで満足して、人並に人の爲るやうな家庭を營むことが出来るだらうか。安んじて一生を過されようか。此處迄考へて来て、其後は何時考へることを止めた。それから先きは成るべく曖昧にして置いて、良心の隅をつゝきたくない。
年の暮だと云ふので、小母さんが小松や注連筋を買つて来た。今朝から隅江と二人でお正月の煮物やら仲餅を切るやら、どきどきとして、日影の薄い家の中も何處やら春めいて見えた。
一日居間に引籠つて居た要吉も、何を想附いたのか、廻套を手持つた儘ふらりと茶の間へ

出て来た。小母さんと隅江とは仕事を片手に何やらひそ／＼と話し合つて居たが、それを見ると急にばつたり止めて仕舞つた。要吉は可厭な心持がして、二人の顔を一々々々見廻したが、
「一寸出て来るよ。」
「今頃から」と、小母さんは顔を變めて、「追附日が暮れるぢやありませんか。」
「うむ、直き歸るんだ。其邊の年の市の景氣でも見て来ようと思つて。」
「戸外は風が冷たいんですよ。」
要吉はずん／＼上り樞の方へ出て行つた。隅江は連つて下駄を揃へた。

初めて外出したので、何と云ふこともなく人の顔が珍らしい。足の向くまゝに本郷三丁目の方へ遣つて来ると、軒に張つた注連飾や菘葉の乾いたのがさら／＼と風にざわつく。霞でも降つて来さうな空模様になつた。往來の人は益々忙しさに駆け出した。其中を一人外套を着た身丈の餘り高くない男のそりと急ぎもしないで向うへ行く。背後附が何だか知人に似寄つて居るので、要吉は其跡を追掛けて見ようとしたが、間もなく夕暮の同じ様な黒い人込の中へ紛れて分らなく成つた。向うの人は要吉に認め

られたと云ふことも知らないで過ぎたらう。別に逢はなければ成らぬ人と云ふでもない。それが如何いふものか、要吉は妙に寂しい心持に成つて、何時までも風の吹きまくる中に立つて居た。

十四

年が明けてから第三の金曜日に、要吉は猿樂町の教會の玄關を上つて行つた。午後一時から金業會の新年に成つて最初の會合を開くと云ふのだ。玄關は明け放したまゝ、廊下には人影が見えぬ。突當りの階段を上つて行くと、校舎の二階へつゞくのだが、未だ早いかして誰も来て居なかつた。そこへ外套と帽子とを放下して置いて、又玄關まで下りて来た。小使を呼んで見たが返辭をせぬ。

廊下の左側の扉を開けるとそこは教會の會堂で閑然として人氣もない。一段高く成つた説教壇の背後は白い壁が龜の様に圓形に凹んだだけで、何一つ裝飾の無いのが奥床しく見える。説教壇の下に一臺の古い洋琴が据ゑてある。扉の硝子の窓から射す青や赤や黄色の光線が象牙の鍵の上を流れる。要吉は何心なく其前に坐つた。指を出して一つ鍵を押して見た。又一

つ押しして見た。續いて鍵の上に指を走らせて見た。音楽の心得なぞは全然無いのだから調子を成さう筈はないが、それでも自分の指頭から音が出て耳へ傳はると云ふのが面白い。彼方を押へて見たら此方を押へて見たり、何時迄も飽かず推して居た。
偶と背後に人の氣配がした様なので、思はず手を止めて振り返つた。何時の間に這入つて来たのか、そこに朋子が立つて居た。前に手を重ねて立つたまゝ、手として動かない。頭を下げようともせぬ。唯じろりと要吉の顔に眼を注いだ。それも要吉の顔を見て居る様でもない。何も見居居らぬのかも知れぬ。
斯うして居れば、二人ながら何時迄経つても物を言ひさうもない。何かしら言出さなければ成らなく成つて、要吉は洋琴の前を離れて立上つた。
「貴方、これをお習ひに成つて？」
「ほんの鳴らすことだけ。」
「ぢや何か一つやつて御覽なさい。」
「いえ、駄目で御座いますの。」
此時ふと男の心に浮んだことがある。何か物の本で讀んだ様でもあるし、又今自分が想ひ着いた様でもある。何方にしてもそれを言出さ

なければ、一寸外に云ふことを見附からぬので、思ひ切つて言つて仕舞つた。

「貴方は、如何考へておいでですか。」

「何で御座いますと、朋子はそつと洋琴の端へ手を掛けた。

「懇の語ですよ」と早口に言つて、女の顔を覗く。

「はア。」

「笛の歌口を強く吹き込む様に、一人の女を美しく想ふのが眞の懇でせうか、それとも洋琴の鍵盤の上に指を走らす様に、女の唇から唇へ早く移つて行つて、其間に諧音を見出すのが眞の懇でせうか。」

「そんな事は」と、朋子は静に見返して、「先生だけは既に極つて被坐しやるのだらうと思つて居ました。」

要吉は何とも言ふことが出来なかつた。朋子の態度は落着いて居るが、顔だけはやゝ凝らめて、黒みがかつた唇が愈々黒ずんで見えた。平常地味な服装をして、努めて若い血潮の溢れるのを隠さうとして居る。それが一寸した機会にも現はれるのだらう。何うもこれに似た顔を見た様な気がする。何處かで見たに違ひない。左様だ、故郷へ歸つた夜初めて見たお倉の顔だ。

勿論兩者の間には野生の儘なものと、幾代の修養を経たものと、差別はある。併し如何しても兩者の間に相通する何物かがある。何物とも指しては云はれない。けれども其何物かを、要吉は自分ひとり捉へ得たやうな心持がした。

此時廊下にはばた／＼と足音がして、二三人若い女の聲がしたかと思ふと、不意に扉を開けて中を覗いた者がある。二人は何か悪い處でも見られた様に身を聞いた。覗いた女は一寸要吉に目撃したが、

「眞嗣さん、此處に被坐して。先刻から随分捜してよ。」

朋子は戸口を振向いたが、何とも言はないで、徐に出て行つた。

要吉は洋琴に凭れかゝつたまゝ、其うしろ姿を見送つた。「新しい誘惑」といふ聲が頭の中を響く。響くやうに聞えた。それを耳にしなから矢張りそれに引かれて行く。今迄も左様であつた。此後も左様であらう。

少時すると、又廊下に足音が聞えた。

「未だ合堂に被坐しやるかも知れないわ。」

「乾皮左様よ。」

二人の女の顔が同時に扉の背後から出たが、直に又引込めた。其後で神戸が現はれた。

「や、何うも遅く成つて失敬した。」

「いや」と、要吉も漸と気が附いた様に言つて、側へ近づいた。

それから皆二階の教室へ集つた。十畳に足らぬ程の小さな間で、火鉢を中央に十脚許りの椅子を並べて、それへ面々が腰を掛けた。會員は段々減つて七名だけに成つたさうである。朋子の外には、日白の女子大學から来るのが三人、此教會附屬の女學部から三人、其中に國部三枝子といふのがある。一人は三枝子の友達で、今一人は年配も五十の位、其前身は吉原で名の賣れた藝者でおちやらと云つたさうな。如何いふものか、こんな所へ粉れ込んで、殊勝らしく讚美歌を唱つたり、種々な會の世話を焼いたりして、それを親しみにして居るらしい。

神戸は恰度大人が一人子供の中に交つて遊んで居るといふ態度で、案皆に相手をした。平易な話をさも面白さうに、時々は警句を言ふことも忘れたかつた。要吉には左様は行かぬ。矢張り相手よりも自分に興味の有りさうな事しか言はれない。何でも此夏前には初め着服の車場の話をして、それから戲曲の脚色に移つたことと記憶えてゐる。大分骨を折つて、草稿迄作つて話したが、聞いている方では些とも面白くな

つたらしい。手持無沙汰にして居ると、神戸が来て何か話をせよと云つた。此前の話をして話したからと云ふので、サツフェーの断片について話した。リネーカヂヤの岩角から身を躍らして海に入つた此女詩人の死は、いろ／＼異説があつても、矢張り死んだことにしたい。死因は分からぬこととして置きたいと言つた。サツフェーから想ひついて、紀元五世紀の初めにアレキサンドリヤに住んだと云ふ中興の學者ハイベシヤが、基督教徒のために美しい生身の肉を貝殻で削り取られて虐殺されたといふ話をした。熱い國だけに埃及の女の死方は皆胸しい。クレオパトラは毒蛇に身を刺させて自殺を遂げた。それはシオークスピヤに寫されたが、マアロウに書かれたダイドといふ女王は熱帯の香料を積み上げて、其中に立つて焚け死んだ。こんな風で、終ひには事實だか戯曲の中の話だか分らなく成つて止めた。

要吉は机の兩端に手を掛けて、始終下を向いて話した。下を向いて居ながら、始終一人の女の顔がま／＼と眼に見える様に思つた。

十五

此日の會を閉ぢてから、同じ方角へ歸るのは、

朋子と神戸と要吉との三人だけであつた。三人は水道橋の袂まで来た。此處で朋子と要吉とは、神戸に別れて、同じ道筋を丸山と駒込へ歸る筈である。左様成ると、要吉は今迄最う一度朋子に近づく機会があつたらと思つて居ただけに、氣が替つて、神戸と一緒に大久保へ行かうと言出した。

そこで二人は朋子と別れて、水道橋停車場の石段を登つて行つた。荷架に腰を下しながら電車待つた。神戸は如何したのか、選手と考へ込んで物を言はぬ。それを見ると、要吉は何とか言はずには居られないやうな氣がして、

「おい君と、神戸を呼びかけた。一随分無意味な言だね。」

「何が。」

「金葉會さ。」

「如何して」と、神戸は意味ありげに笑つた。「今度此會を始めたのは、實際あの二人だよ。あの二人が言出したのだ。三枝子と朋子との會だと思へば、それだけで可いぢやないか。僕は三枝子一人の會だと思つて居るよ。」

要吉は下を向いて苦笑ひしたまゝ返辭をしなかつた。

の方に乗客が一人しか無い。神戸は又語り續けた。

「去年の暮、左様だ、最終の授業の済んだ日に、僕が矢張り此電車待つて居るとね、背後から息を切らしてはた／＼と駆けて来た者が有るんだね。毎時あのばつとした浪手な服装だらう。長い袂が闊曠としてね。何處へお出です」と訊くと、「え、一寸信濃町迄」と言ふのさ。それで信濃町で降りるのかと思ふと、又新宿迄参りますと、分らない位に口の中を言つて居た。到頭新宿迄一緒に来たんだよ。僕も其時は何とも言はれない氣持だつた。君は同情が無いから他人の事など注意しても居まいが」と言ひさして、神戸は要吉の方を振向いた。

要吉は黙つて腰掛けたまゝ、聞いて居るのか居ないのか分らなかつた。

「あの濃い髪のと、あの唇の白味がかつた邪慳らしい口元とは、今でも眼に泛べようと思へば、直ぐ泛ぶね。」

斯んなことを言つて、神戸は要吉から何んな返辭を待設けて居るのだらう。

「左様、あんな顔がフエツと云ふのだらうね」と、要吉はわざと冷淡に言つた。心の中ではダークな顔を想ひ泛べて居た。

神戸は何とも言はなかつた。
 大久保へ着いてから、線路を横切つて一町許り行くと神戸の住家である。細君は持病で寝て居ると云ふことであつた。神戸は三枝子から寄越したといふ、彩色の繪畫書だの歌の草稿だのを見て呉れた。それから金業會の連中が書いたといふ小品が五つ六つ、其中に朋子の「末日」と云ふ題の短篇が一つあつた。
 「これを見給へ。君よりは旨いかも知れぬぜ」と言つて、神戸はそれを要吉に渡した。
 要吉は引留められる儘に、十二時過ぎまで話込んで居た。甲武線の電車は勿論ない。新宿まで出て市街電車に乗らうとしたが、これも車庫へ歸るもの許りで、今から出ようとするのは一臺もなかつた。已むを得ず人力車に乗つた。往來の絶えた路はもう凍つていて、本郷迄二里の間冷たい風を切つて戻つた。
 宿へ着いたのは夜の二時に近かつた。此位暗く成ると夜明まで寝附かれぬのが癖だから、浴燈を明るくして、持つて歸つた「末日」の草稿を読み始めた。自意識の強い女が意氣地の無い男を振棄つて信州へ隠れに行くといふ筋だ。如何にも性急らしい淡霜の走り書きで、所々に四字さへあつた。何と思つて朋子がこんな事を

書いたものであらう。要吉にはそれが氣に成つた。何うもそんな経験があつて書いた物とは思はれぬ。そんな経験も無いのに、空想の上で、男を愛すると云ふことよりも、先づ男を棄てることを描いて居る女かも知れない。
 其夜要吉は「末日」について長い批評を書いた。一番終ひへ持つて行つて、「傳説に依ればサツプオーは顔色のダークな女であつた」と書き添へた。翌朝草稿と一緒にそれを郵便で送らせた。
 一日経つて返事が来た。こんなに早く返辭が来ようとは待設けて居なかつた。それが何だか好くない辻占の様に思はれて、封を切る時の要吉の手は震へた。あの意味が朋子に通じないで仕舞ふ筈はない。通じて居て通じない風をされたら、それこそ堪へられなからう。少時手紙を持つた儘思案して居たが、思ひ切つて讀み下した。すらくとした手紙の文體で、當前の事を評べた末に、只一句「此夜此頃御言葉のはしく、まで繰返して、思ひ願ふことの繁く候」とあつた。
 次の金曜日に要吉は、又例の教會へ行つた。霜降の道の悪い日であつた。毎もの通り毎もの教室で神戸にも會つた、其外の連中にも會つた。

朋子は別段變つた容子もなく、外の人に挨拶すると同じ様に要吉にも挨拶した。要吉の眼には朋子の態度が幾様にも取れた。何だか今迄自分もが勝手に描いて居た夢に冷水を注がれた様にも思はれた。朋子は三枝子の姿を見ると直ぐ其手を引張つて片隅の方へ連れて行つた。何やら面白さうに話しては二人できゃつくと笑つて居た。要吉はそれにも眼を離さなかつた。此女の表情なり舉動なりの何處迄が心から出るのか、何處から技巧を弄すのか分らない。
 斯んな風で會は面白くもなく閉ぢられた。要吉が神戸と一緒に玄關に出ようとする時、最う先へ歸つた筈の朋子が返つて来て、背後から呼び留めた。
 「あの先達で拜借した御本は御逸譯の方が拜借出来ませうか。先讀何うも能く解りませんで、」
 要吉は一寸顔を見たが、「え、宜う御座います。此次に持つて参りませう。」
 「いえ、それでは餘り何ですか、私がお宅へ伺ひませう。」
 「そりや構ひませんが」と、要吉は口籠つた。家へ来られては少し好くないことがある。
 「では、何日頃お伺ひして宜しう御座います

う。」
 「左様ですね、明日は土曜日から、ちや明日の午後お待ち申して居ませう。宅は分つて居ますね。」
 「存じて居ります。それでは何卒。」
 朋子は一人毎もの道を歸つて行つた。後の二人は何處かで、夕飯を喫べようといふので、ぶらぶらと九段の方へ向つた。
 要吉は途々歩きながら考へた。如何いふ積りで、朋子が宅へ来ようといふたのか、合點が行かぬ。或は先達で往復した手紙が、自分ながらやゝ知を越えたと氣が附いて、其防禦策として、萬一としたら隅江とでも悪意にならうといふ考へかも知れぬ。そんな處まで氣を廻して見たが、何れにしても餘り来させたくない。
 飯田町の郵便局の前まで来た時、一寸と言つて、神戸を外に待たせて置いて、名刺の裏に二三行走り書きした。

の宅へ行きませう。書物は其節持つて参ります。」
 別に懐中から一通の手紙を取出した。眞剣朋子と宛名を書いたまゝ、未だ封がしてない。中味を抜いて、件名と取代へながら、郵便面へ送り込んで仕舞つた。
 それから神戸と一緒に夕飯を喫べたが、此事については何も言はないで別れた。

日手紙を今朝遅く見たとすれば、九時迄には間に合はぬ。間に合はなければ見合せたかも知れぬ。来なければそれ迄だ。何事もなく済んで仕舞ふだけである。要吉はどうか左様成れば可いと思つて見た。が、若し此處へ違つて来たとなれば、云はゞ偽つて誘き寄せたのだ。明らかさまに左様告げる外はない。明らかさまに告げた上で如何成るかは分らぬ。唯、これ迄の通りで済まぬのは明白である。
 再び改札口へ来て、停車場の時計を覗いて見ると、矢張九時六分過ぎだ。要吉の杖時計が少し進んで居たものと見える。そこで又倚架に腰を下して、先刻からこれで三度目で、胸に挿んだ「死の勝利」を抜いて讀み始めた。要吉が初めて此書を手にしたのは、今から三四年前未だ大學へ這入つた當座で、餘程身を入れて讀んだものと見えて、或所は赤インキで横線が隙間もなく引いてある。赤インキの處だけを飛び／＼に讀んで行くと、大抵は懸に描む若者の熱病に罹つたやうな練習ばかりだ。要吉は急に書物の上手を伏せて、自分は本當にあの女に惚れて居んだらうかと自分の心に組して見た。氣して見たばかりで、それに答へようとは思はなかつた。こんな疑問を出しては其儘にして置くといふこ

「あれから神戸君と話をして居る間に、金業會のことに就いて、貴方とも御相談申したい事が出来ましたから、お差支なくば、明日午前九時までに水道橋の甲武線電車停車場へ来て頂きたい。私は其處に待合せて、御一緒に大久保の神戸君

外、袴の衣裏に兩手を突込んだ儘、要吉は人待處に水道橋停車場のアラトフオームを何處となく注反した。電車は仕切りなしに發着する。昇降の乗客は何れも、足に要吉の前を通り過ぎた。改札口の警士も初め二三回は、お乘りに成るんぢやありませんかと注意したが、頭を振つて側を向いたので、其後は氣にも留めぬらしい。不圖砲兵工廠の練場に沿うて其人らしい影が見えるので、蹠手と眼を離さずに居ると、段々近づいて袴の袂へかゝる頃には、側寄も附かぬ女に成つて仕舞ふ。氣がついて杖時計を出して見ると、午前九時を六分過ぎて居る。或は来ないのぢやないかと思はれ出した。要吉はまた小石を敷いた上を大踏に歩き始めた。唯

十六

とが、不安の間に何とも云はれない快感を興へるのである。

この時石段を登る足音がして、裳裾の衣擦と忙しき息遣ひとを聞いた様に覺えて——或は後から左様思つただけかも知れぬ——要吉は不意に眼を上げた。其刹那石段の上には現はれた女の半身が燃着くやうに脚子へ映つた。脚子が終に造つて来た。要吉は思はず立上つて二三歩前へ出たが、その儘其處へ立竦んだ。脚子は要吉と眼を見合せたばかりで、直ぐに切符を求めに行つたが、やがて驛夫に剪刀を入れさせて、首に巻いた毛皮の巻を取りながら近寄つた。しとやかに一顧して、

「大へん御待たせ申しました。御手紙が門の受取函へ這入つてましたのを、今朝に成つて拜見しましたから。」
「いえ、私こそ火急な事を云つて上げて……それでも能く間に合ひましたね、手紙が。大抵無駄だらうと思つて居ました。」
何氣なく言ひましたが、要吉は自分ながら脚子が顔へた様に思つた。
「今朝に限つて、受信函を私が開けに参つたのです。それに毎も十時前でないや家を出ませぬのを、今日は九時前に大急ぎで出たものです

から、家内ぢやア何だか變に思つて居る様でした。

要吉はそつと女の顔を見た。急いで来た所爲か少しく上氣して、手に持つた巻で口元を蔽ふ様にして居るが、彫刻意味があつて言つたのでは無いらしい。
他人の家を訪ねるので脚子も態々着變へて来たものと見え、毎時の人を人とも思はぬ様な色合でなく、くすんだ顔ではあるが、流行の色の御着に御着をしながら見せた。羽織の袖に二筋三筋御着の縁を引いたのも、何となく懐かしげである。要吉はそれに力を得たやうな氣がした。事實を告げるなり今だと思ふけれども口では欠典外の事を言つた。
「死の彫刻の獨逸譯を持つて来ました。矢張り書入れがしてあつて汚いですが。」

脚子はたゞ黙つて頭を下げた。
「そこへ電車が着く。要吉は、一ぢや、これに乗つて参りませうかと訊いた。脚子が頷いたので、倚架の上に捨て置いて置いた巻物を取らうとする時、「あ、それは私が持つて参ります」と言つて、手を出した。
「いやと、後ろから押すやうにして電車へ乗込んだ。

電車の中は幸ひ空いて居たので、二人並んで腰を掛けた。要吉は努めて軽い體談を仕向けようとしたが、二三言訊き間には自分から口を塞いで、眞直に正面を見詰めた。頭の中は車輪と一緒に成つて忙しく廻轉する。斯うして電車に乗込んで作持つたからは、手を束ねて事實の追跡するの持外はない。自分ながら拙い地位に置つたものだ。恰も斯う成るべき筈でないものが、斯う成つたやうな氣がする。切めて此際つく胸を相手も信つて呉れたらと思ふ。あらゆる物を見逃さぬ女の眼だ。恐らく知らぬ筈はあるまい。或は心の底を見抜いて居るのかも知れぬ。見抜いた上で出て来たのかも知れぬ——自分との密會に加はるつもりで、此間も電車は無難なく駛る。停車場へ着く度に、乗客がどよ／＼と乗込む。それと都合つて降りる者もある。要吉は唯いろんな物音の交つた雑然たる騒音を耳にする許りで、まるで眼前の未來を知らないで居た。

やがて電車は大久保の停車場へ近づいた。要吉はだん／＼前向いた。脚子の足袋の爪先を見詰めたまゝ、顔を右に向けて居た。電車が孫々と進行を留めると、車掌が大久保、大久保と呼んだ。乗客は大抵降りて行つた。要吉はそれで

も立たうとせぬ。脚子は少し腰を浮かして、小聲に、

「あの、此處ぢやありませんか」と注意した。
それにも返辭をしないで、要吉は端々前向いて仕舞つた。其内電車は發車する。要吉は女の足袋の爪先を選手と見詰めた儘で居たが、此時の脚子の顔の表情を明々とするやうな氣がした。
脚子は確かに溜息を洩した様であるが、又聲に涙を下して身動きもなくなつた。此後少々の時間、二人の頭の中は、殆ど無切れない程の感情が稍女の様へ通じた。即ちなく、電車は橋本を過ぎ、中野の終點に到着した。乗客は皆降りた。二人も其後から頷いて降りた。此時要吉は初めて脚子の顔を眞面に見た。
「眞面さん！」

「はアと、極め一落着いた返辭をした。此女の落着く時は心の中は極めて動亂して居る時である。
「私は貴方を欺いたのです、聞いて此處まで出したので。それは折人つて騙して頂きたい事が有つたからですが、若し私が爲たことをお説立なら、何卒介はず此處からお降り下さい。御遠慮には及びません。——それとも私が行く

處まで一緒に来て下さいませうか。」
要吉は一息に斯う言つて女の顔を覗き込んだ。
「は、伺ひませうと、脚子は眼を伏せたまふ答へた。
「……来て下さる！——要吉は人目さへ無けりや此處へ……来たかといふ宛も何も無い。唯此處迄来ただけです。宛に何處外へ出ませうか。」
脚子はまた黙つた。
二人は乗感した分の貨物を擲つて停車場を出た。線路に沿つて少し行くと踏切がある。それを横切ると、一面に畑が開けて、青い影が五寸程延びて居る。夜更りの雨では黒く濡つて居るが、空氣は清く澄んで、小春日和の暖かさに、草木の液を吸上げる音も聞えさうである。要吉はうつととして、初戀をして居るやうな心持に成つた。女と同じ眼が日光を浴びて、同じぼんた空氣を呼吸して、人目の少ない同道を歩んでゆく。懐かしくも、肩が當つたりする度に、要吉の胸は這潮の寄せて来るやうな溫柔の情にゆるいだ。

やがて踏切が前方に現れて居る所迄来ると、要吉は急に首を傾けて、

「新井の婆は誰か此路を行つた様に覺えて居るが、貴方は被在した事が有りませんか。」
「ずつと以前祖母と一緒に参つたことが有りませう。最う六七年前にも成りますから判然記憶して居ませんが、此處此方御座いましたでせう。」
「お祖母様が誰か此處に居たのですか。」
「ええ、始終眼が悪いものですから醫師様へお参りすると云つて、私を連れて来たのです。」
要吉は頭を回した品の好いお婆様が、孫娘に勞られて、醫師へ醫を眼に診せて見た。それは自分の記憶に残つて居る二十年前に死んだ祖母が、いつも坊主で居ながら左様思つたので、東京には遠方に頭を回した年寄の無いことを憶ひ出して、直に切實にして見ようとしたが、如何しても眼に音ばなかつた。
「一度音いお年寄でせう。」
「家内のもは皆音い人です。唯私だけが不善い。」
要吉は退屈した。
「如何でも不善いのです。」
二人は眼を見合せて笑つたが、要吉は急に堅く成つた。眞面目な家庭に生れて、暖かい両親

の手に育つた朋子は、自分とは如何しても近寄
り難い他人の様に思はれにからしである。
路傍の茶の木の梢に滑り落ちて、急に道幅が廣
く成つて、雑木林の間から藥師堂の瓦屋根が
見え出した。

掛茶屋の軒から一本の椀を差出して、種々な
講中の名を茜色や紺に染抜いた小旗が幾つも
吊してある。

そこを通り過ぎて、山門をくぐると、鋪石の
上に鳩が群を爲して居た。それが人の足音を聞
いて、ぱつと立つ。中には屋根の上へ舞上るの
もあつた。鰯口の網にすがつて、御堂の奥を覗
き込むと、藥師の尊像は油煙に煤びて能くも拜
まれないが、列を爲した燭燭の探火が風にまた
たくと、香の煙が蛇の様にねつて空へ上る。
御堂の上では一刷毛の白い雲がなだれて、香堂
の底へ吸ひ込まれるやうに消えた。

二人は踵を廻した。手水鉢の側に、眼の端れ
た小さい婆さんが、鳩に遺る豆を小皿に載せて
賣つて居る。要吉は其風を取つて二三杯鋪石の
上にはい撒いた。

朋子は足許へ鳩が寄つて来るので、動くこと
も成らず、其處に立竝みに成つた。逆上せる程
の日光を眞面に浴びて、うつとりと鳩が豆を拾
て下さい。私は教會で貴方のお目に懸つて、
貴方の側に坐つて、貴方の聲を聞くたびに、他人
に云はれない苦痛を嘗めて来た。私は今こんな
事を貴方に打明けたとて、決して貴方から何物
をも求めるのぢやない。況して貴方の前途を如
何しようといふ考へなどは少しもない。何の希
望もない。何の目的もない。それは全く絶望的
な執着です。私は唯貴方に會つて、此事を白
状して、若し貴方の心の隅に私といふものを
記憶してさへ貰つたら、それで十分です。私は
それで満足します。

要吉は火鉢の角を強く握つたまま、低い聲で
囁いた。朋子は他處日には何等の感動も受けな
い、殆ど化石したやうな容子で耳を傾けた。
壁の向うでは、少時止んで居た爺さんと婆さん
との話聲が又一段高く成つた。それを聞くと、
此方の空気にまで滑稽に氣觸れさうで、要吉は腹
が立つて堪らないが、不圖自分の云つてる言葉
もウエルテルめいた誇張に過ぎて、感情を伴は
ないのに氣が附いた。何だか他人の書下した氣
概で芝居を演つて居るやうで、自分の爲に物を
言ふ様な氣がしない。今迄云つた言葉がすべて
空に費されたかと思ふと蠟々度を失ふまで急
き込んで来た。

ふささを眺めて居る。眼が潤んで、竹の色が
際立つて紅い。今にも其場へ崩折れさうな。要
吉は手を出して扶けようとして、俄に妙へた。
良あつて鳩が向うへ去るのを見て、朋子は徐に
歩を移した。要吉も並んで歩く様にして、
「何處かお加減が悪いんですか？」
「いえ、そんな容子に見えますでせうか」と、
遠くを顔を見せた。

「別に左様といふ譯でもないが、何なら一寸向
うの家で休んで行きますか？」
「先生はお勞れに成りませうか？」
要吉は返辭をしないで、先づ茶屋の軒をくぐ
つたが、そこは餘り往來から見え透るので、庭
の枝折戸を開けさせて裏座敷の縁側に腰を掛け
た。少時左様して居たが、日影の射さぬ處は矢
張寒い。で、又靴を脱いで障子の中へ這入つた。
二人は火鉢を中にして黙つて相對した。何か言
はなければ成らぬと思ふが、俯て言出す事にな
い。いろ／＼迷つた思ひ、
「此處はよく書生の來る所だせう、栗飯を食ひ
にと言つた。直ぐに下らないことを言つたと
思つた。」

朋子は唯いつと白い面を見せた許りで、別に
返辭をしなかつた。沈黙は再び續いた。斯う成
「私には心の中で思つて居ることが逆も言へな
い。成程私のこころは汚れて居る。何日か會
堂の洋琴の側で貴方からも言はれた通り、從來
さまざま女——さまざまな事をして来た。
それを隠さうとは思はない。貴方にそれを隠し
て——と言ふ下から、丸山の家の内と外とに残
した二人の女が眼に泛んだ。二人を柱としなが
ら、自分もそれに纏まれて身動きも出来ぬ、あ
の惨日な境遇から逃れようと思へば、新しい
誘惑の力にたよる外はない。今の自分には誘惑
に從ふ外は何の力もない。唯悪いことを重ね
て行く。切めて一つの悪いことを忘れるために
他の悪いことに移つて行く——其外に如何する
力もない。それを隠して、貴方から何を求めよ
う。私の目の心持は宛難破船だ。此後自分
の身が如何成つて行くか、私にも解らぬ。唯、
貴方に依つて力が與へられたい、新しく生き
る道が求めたい。」

「私はそれ程迄に思つて頂く価値があるでせう
か」と、朋子は要吉の言葉の切れるのを待つて言
つた。其聲は妙に變つて居た。
「価値の問題ぢやない」と、要吉は押被せる様に
言つた。「私が貴方を選んだのだ、貴方は選ばれ
たのだ。左様思つて下さい。去年の夏から一週

ると、要吉は神祕が昂つて愈々意氣地がない。
けれども其意氣地のない容子が、或種の女に對
しては自分に有利であると云ふことを忘れなかつ
た。先刻から壁一重取つた隣の部屋で、何か
爺さんと婆さんが話々と話し合つて居る。爺
さんが少し耳が遠いと見えて、婆さんが時々大
きな聲を出す。それが耳障りに成つて、煩
い。今に止むか／＼と待つて居たが、低く成る
かと思ふと又高く成つて、何時迄も止みさうに
無い。要吉は終に背々して来た。朋子はと見る
と、眞直に坐つたまま、顔の色がやゝ蒼ざめて、
唇をきつと結んで居る。

「私の爲たことを、矢張り償つていらつしやる？」
「え」と見返したが、又靜に眼を伏せて、「此處
迄御一緒に向つたぢや有りませんか？」
要吉は女の顔を見た。「最一度言つて下さい、
最一度今の事を仰有つて下さい。また談話が
途切れさうに成つた。」
「私は貴方を——」と、要吉は思ひ切つて言出
した。「けれども今日の様な大膽な事をする前
には、何れだけ一人て苦しんだか、それは申し
ますまい。私は此上他人の前で知らん顔して
貴方にお目に掛けることは出来なくなつた。許し

に一回他所ながらお目に掛つた許りだ。私は
貴方を知らない、貴方が私を御存しない通りに
知らない。それが如何いふものか——」
二人はまた黙つて相對した。久らくして朋子
の方から口を開いた。
「先生、私からも申上げたいことが御座いま
す。」
「何でも伺ひませう。」
「朋子は黙つてまじ／＼と火鉢の灰を見詰めて
居たが、
「何卒戶外へ出て下さいまし。此處ぢや如何も
お話し申されません。」
「左様、少し其邊を歩きませうか。」
「え。」

直ぐに女中を呼んで、茶代を渡して其家を出
た。藥師堂の裏の生垣に沿うて、田圃の中まで
來ると一條の街道が白くつゞく。遠い丘の上を
走る雑木林が煙つて、有りふれた水彩畫の畫題
に似て居る。道の下を春の水がちよ／＼と落
ちる。日は暖かいが、風は冷たい。要吉は前へ
立つて歩いたが、向うから一分隊の兵卒が、
軍曹に連れられて來るのを送り過して、
「先刻私に言ふと仰有つたのは——何んな事でも
遠慮なく言つて下さい。私は何時でも用意し

「はア」と言つたが、其儘二三問聞いて来る。最
う何も言はないのかと思つて居ると、

「私——」
要吉は息を詰めた。

「先生が私に仰つて下さつたやうな、左様い
ふ心持を抱いたものなら、私の方が尤なんだ
御座います。」

要吉は自分の耳を信じかねた。其處に立留つ
たま、朋子の方を振り向いて見る力もなかつた。
朋子は徐に後を続ける。

「先生は記憶えて居て下さいますか。金葉曾で
先生の一番初めの講義の時間に、白聖が無くて
困つて被坐した時、私が隣の教室から取つて来
て、先生のお側へ参つたことを——外の者にさ
せないで私が持つて参りました。」

夢間は四方に開けて何處からも見通される。
二人は黙つて徐に歩みを移した。やがて道が二
筋に岐れる處迄来ると、兵隊が十人餘り道頭神
の前に壘を敷いて休んで居る。其前を通り抜け
た時に、要吉は初めて振り返つた。

「能くそんな事まで記憶えて被坐しやいます
ね。」
「自分の爲た事だけは記憶えて居ます。」

また向話が途切れた。それから少許行つて、
道が新橋へ通入つた時、向うから葬式の行列
の来るのに出逢つた。古い錦標の袈裟をかけた
老僧の車についで、五歳許りの女の兒がおと
なしく位牌を掲げて乗つて行く。棺の上には白
と紅との小袖が重ねて懸けてあつた。若い女が
死んだのから知れぬ。見送りの人も極めて少
い、僅に近親と思はれる老人が二三人隨いて行
く許りである。二人は道の片側に寄つて行列
を通した。櫓が過ぎ去つた時に、不圖眼を見合
せて互に莞爾とした。

再び路の上を並んだ時、要吉は何と思つたか
こんな事を訊いた。

「貴方は毎も地味な柄の物ばかり着て被坐しや
るやうだが、如何したのです。錦標のことなど
能くは解らないが、何だか斯う枯葉の様な色合
ばかりぢや有りませんか。」

「私には袴袴云ふ色が一ばん能く自分を表はし
てる様に思はれますから。」

要吉には此返辭が何故か不快に思はれた。
「故意とらしくして、不自然ぢやありませんか。」

「え、不自然なんです、私が不自然なんですも
の。」

つと寄添つて、甘える様に要吉を見上げた。
其眼の色は頬を賣る女でなければ見られないも
ので有つた。それが出たかと思ふと扱へる間も
なく消えた。

「でなければ母が華美好きなものですから、
二三年前迄は、そりや華美な物許り着せられて
居ました。今では姉などと一緒に他所へ参りま
しても、故處私の方が上に見られる位ですが、
女子大學へ通入つた頃迄は、髪もお下げにして、
まるで子供見た様でした。初めて學校へ上つた
日は蒸汗して——」

夜は早口に言つて、襟巻で口元を抑へて笑つ
て居る。眼の隅が濡つて、今の容子が却て子
供らしかつた。要吉は横から顔を見てく様にしな
がら、

「如何したのです。何だか解らない。」

「あんな小さな子が来た」と言つて囁すんで
すもの。」

要吉も聲を出して笑つた。
「そんなに小さかつたんですか。」

「え、小さかつたんです。」
「今でも何處か小さい。」
「こんなたわいも無い問答が、要吉には二人を
親しくする様に思はれた。ついでに自分が初め

朋子の姓を神戸から三軒子と取違へて岡部だと
教へられ、久しく左様思つて居たと云ふことを
話した。尤も、神戸が何故取違へたか、そこ迄
は言はなかつた。朋子はそれを聞いても別に感
じない様であつた。

それから幾度も村へ入つたり畑へ出たり、
幾度も道を尋ねて、それでも尚行過ぎて區分題
り道をしたたりして、日の下る頃柿木の停車場
へ着いた。其處から又お茶の水行の電車に乗つ
た。二人の間に未だ外の人が感に懸けられる
位の距離を置いて腰を掛けた。朋子は非の上に

「死の勝利」を載せて、其上に長い鼠色の手袋を
穿めた両手を重ねたまま、窓の外を眺めて居る。
何時の間にか書物が朋子の手に渡つて居たと云
ふことが、要吉には訝もなく嬉しかつた。やが
て大久保へ電車が着くと、又どや／＼と人が這
入つて来た。其中で要吉の前に腰をかけた、古
ぼけた總會を着た小柄な男がじろ／＼眺めて居
たが、「小島さんぢや有りませんか、久らく」と

元氣な聲を懸けた。
「あ、久らく。つい失禮して居りました。」

要吉はやゝ遠くて挨拶した。この人は狭山と
云つて、永く文壇に名を知られた小説家で、要
吉も一面識があるのだ。

「先夜の清原寺侯爵の遺持には、貴方もお出の
様に聞きました。如何でした。兎に角新聞ぢ
や大變です。」

要吉は弱身を持つた身のつとめて他所事を
言はうとした。そして衣裳から巻煙草を取出し
た。

「いや如何もと言つたとき、狭山さんは一寸
朋子の方を見て、氣の乗らない様子である。
要吉は構はずが無いので、取出した巻煙草を持
振つて居たが、思はずがち／＼と噛み砕いた。
少時して狭山さんは市ヶ谷で降りた。要吉は
朋子をかへり見て、

「今の人は神戸君の悪意な、あの狭山風業です
が解りましたか。」
「え、大抵御容子が解りました」と笑つて居
る。

十七

二人は次の牛込停車場で又電車を捨てた。
二人は見附を這入つた。九段の富士見軒へで
も立寄つて、一緒に夕飯を喰べて歸ることにし
た。だら／＼坂を登りかけて、朋子は一寸足を
留めた。

「私の小さい時通つた學校だから見て下さいま
す。」

「し。」
要吉も振向くと、支那に掛けた富士見小學校
といふ横額が目にとまつた。

「随分遠方まで来たんですね。」
「え、元此先の番町に家が在つたものでは
す。」

こんな話から要吉は朋子の生ひ立ちを聞い
た。一家の事情も知つた。左様しながら歩いて
ると、何時の間にか中坂の上へ出て仕舞つた。
招福社の息居前へ出る積りだつたので、
「来過ぎましたね。最少し後の曲角から右へ
折れるんでしたらう。」

「え、と云つて、知つてながら見て被坐したの
か。左様、貴方は此邊はよく御存じの筈では
ない。」

「でなければ、先生がずん／＼前へ被坐しやる
から。」
要吉は其儘顔を回さうとしたが、朋子は立つ
たま、動かない。

「如何したのです。」
「私、最う此處で失禮したい。」
「何故、如何して急にそんなことを？」
二三問問答の末に、朋子は又後から隨いて来

な人の海は足許まで押寄せて、直ぐ目の下には
汽笛の音だの車輪の音だのが絶間なく騒々し
い。
二人はかうして何時迄も無言のまま、坐つて居
た。時間が鋭い羽音を立てて飛び去るのが、耳
に聞える様に思はれた。
「最う歸ります、もう歸らないと内の都合が悪
う御座いますから。」
斯う言つて朋子は立上つた。其聲音には冷
やかな失望の色が含まれた。要吉はぎくりとし
た。此方にも未だ言残したことがある、仕残し
たことがある。が、今夜は最う如何することも
出来ない。今夜ばかりでないと思ひ返して、自
分も立上つた。
途々も稀に言葉を送すばかりで、女の素直は
何となく素直なかつた。要吉も物の度を過ぎた
時に感ずる一種の哀愁を感じた。多分女もそん
な心持がするのであらうと思つて、僅に安ん
じた。
駒込妙義坂の上まで来た。二人が袂を分たう
とした時、要吉は二三歩女の行く方へ一處に歩
きながら、
「此次は何日會へるでせうね」と訊いた。
「何日でも。」

「ぢや明日。」
「明日と、朋子は躊躇して、一今夜こんなに
早く成りましたから、午前の中は出られないか
も知れません。」
「それぢや午後でも。」
そこで、翌日の午後二時から二時迄の間に、矢
張水道橋の停車場で落ち合ふことにした。
「私は今夜は眠れさうもない」と言ひかけて、
要吉は偶と思ひ出した。「あの片方の手袋を私
に下さい、切めて貴方の手に能く似た物でも持
つて居たいから。」
朋子は直に渡さなかつた。
「え、如何して、不可い？」
一旦執られた手を引込めさうにしたが、急に
腕で要吉の掌に握らせた。
山の手の草深い町だから、早仕舞ひして、大
戸を下して寝た家が多い。要吉は坂の上に立つ
たまま、朋子の姿が其處の店屋から射す灯火の
中へ出たり、又暗がりへ隠れたりするさまを見
送つて居たが、其間に分らなく成つたので、漸
と踵を回した。
夜風に吹かれながら、要吉は一人白山坂を降
りて行つた。ひどく興奮して居るが、頭腦は妙に
明晰して来た。心の隅まで限なく見えると共に

に、軒燈の屋敷などが眼に着いて成らぬ。今朝
家を出た時とは、女にしても勿論左様だらうが、
自分の心持にも大變な相違を來した。一日の
間に斯んな極端まで押詰めようとは流石に思
ひも掛けなかつた。殆ど眼を閉いで溝壑を躍り
越えて仕舞つた。其結果が如何なるか、そんな
事は今考へた所で仕方がない——自分は若く自
分を知つて居る。到底一人の力で自分を救ひ得
る男ではない。目下の變則な境遇から自分を
救つて呉れるものは、矢張誘惑の力である。唯
罪惡のみが自分を罪惡の淵から救つて呉れる。
自分はそれを待つて居た。そして、今それを見
出したのかも知れないが、此處に少し気がかり
なのは、今日の一日を振り回つて見ると、何處か不
合理な所がある。自然の成行でない。朋子の仕
草にも、何だか強ひて矯飾した跡が見えないで
もなかつた。少くとも彼の女の遣つてること
は皆自分で意識して遣つて居る様に見える。
それでも構はない。無意識でして居られるより
も、意識した上で遣つて呉れる方が可い。それ
にしても彼の女の烈火の様な情熱は何處から
來るのだらう。あの性急な燃え立つやうな情
火を煽つたものは——が、初めてそれに觸れた
者は矢張自分を置いて外にあるまい。左様思ふ

と、稍自ら媚びられぬでもない。要吉は幾度か
途の上に立停つたり、又急に歩き出したりなど
した。
丸山の家へ戻つたのは未だ九時前であつた。
小母さんは頭痛がすると云つて、宵から寝て仕
舞つたさうだ。即江はひとり寂しさうに待つて
居たが、火鉢の前に向ひ合つて坐つたまま、何
處へ行つたとも訊かなければ、此方から言ひも
しなかつた。要吉は洋袴の膝を胡坐かいて、注
いで出された湯呑の茶を啜つて居たが、
「洋燈をもつと明るくせんか。」
別段燈籠に言つた譯でもないが、始終気がね
しておど／＼して居る即江は思はれた様にでも思
つたらしい。遂て洋燈の心を思ひきり上げた
が、要吉の顔を一瞥して、直ぐ膝の上へ眼を落
して仕舞つた。それから又油煙が氣に成ると見
えて、心を少し引込めて見たが、直に又元の通
りにした。要吉は無言でそれを見て居た。何と
云ふことはなしに、一種の憐憫の心が浮ばず
は居られなかつた。只憐れむ心である。少しも
自分の非を悔む後悔の念は起らない。女を憐れ
む心の下には、自分を憐れむ心が隠れて居る。
要吉は涙が胸先へ突掛けて、つと聲に出さうな
のを辛うじて喚ひ留めた。自分を憐れむ位涙

を誘はれ易いものはない。
「最う寝ようか。」
「はい、寢床はちやんと取つて御座います。」
「左様か」と立上つて、茶の間を出て自分の部屋
へ滑入つた。灯を點すのが面倒なので、暗がり
の中で上衣を脱ぎかけたが、其儘机に凭掛つて
番手と頬杖を突いてると、一日の光景が續々と
眼に逐ふ。
「併し不思議な女だ。まるで噴火山の様だ、灰
も噴く、火も噴く。近寄ると硫黄臭い煙の中へ
捲込まれさうだ。」
少時黙つて居たが、「いや、處女だ。如何して
も處女に相違ない」と呟いた。
十八
水道橋停車場の石段を上つて行きながら要吉
は自分にも氣が附くほど胸の動悸が早まつた。
今でも矢張初戀か何ぞして居る様に、女に逢ふ前
には我にもあらず胸の轟くのを感じ得ない。何
時迄こんな心持を繰り返すことであらう。
石段を上り詰ると、生憎アラットフォーム
に朋子の姿は見えなかつた。最う一時半にも成
るが、矢張家が出難いのかも知れない。要吉は
直ぐ思ひ返して、倚架の上に腰を下した。昨日

と今日と同じ所と同じ様にして、相手の女の
來るのを待つ。何だか自分ながら顔が腫められ
るやうな氣がした。仕方がないから、強ひて自
分の今遣つて居ることに考へを向けまいとした。
何でも好いから耳目に觸れる物に心を寄せて、
自分が何の爲に此處へ来たかも忘れて仕舞はう
とした。初めは昇降の乗客をまじり／＼見て
居たが、やがてそれも向きて、今度は欄干に凭
れて、石垣の下を通る物賣や通行人を眺め出し
た。支那の學生が通る、豆腐屋が喇叭を吹いて
行く。三輪神社の拜殿では三四人の子守が手を
繋ぎ合つて、「つぼんだ、つぼんだ、蓮華の花が
寒んだ」と寒さにもめげず遊んで居る。要吉は
涙手とそれを見守つた。斯うして成るだけ永く
辛抱して此方に向いてゐると、何時の間にか朋
子が遣つて来て、背後から聲を掛けるかも知れ
ない。
朝から曇つて居た空は今にも崩れさうに成つ
て、風がよい／＼冷たい。子守連は何時となく
姿を隠した。顔の皺だらけな下駄の齒入が、破
れた鼓を敲いて、寒さうに車を引いて行く。と
見ると、其隠れた袖無しの中を穿ち、はらは
らと霧が降り出した。要吉は初めて振返つた。
土手の上の吹き曝しで、北風を尻面に受けるか

ら、寒さは彌が上に寒い。乗客も選んで歸路に着いて、プラットフォームの上には人影も途絶えた。

「若し傘を来ないとしたら」と、要吉はひとり考へた。左様考へても、初めは腹が立つよりは却て微笑まれた。女に待ちぼうけを喰はされて、寒まじりの寒風に吹かれながら立つてゐるの

が、自分だとは如何しても思はれない。自分の作つた小説の中の人物の様な気がする。自分が作つた小説の主人公を自分が虐待してゐるやうな氣もする。左様思へば一種の抒情詩的な情緒が湧いて、何も彼も忘れて溶けて行く様な氣持に成つた。

要吉は柱に凭れかゝつたまま、砲兵工廠の古い煙突から代赭色した汚い煙がわく／＼と立上つて、横に二町許りなだれた末は、空を吹く強い風に吹散らされて消えて行く様を見詰めた。胸の内衣裳には、昨夜の手袋が燃える様に熱して居る。要吉は須臾もそれを意識せずには居なかつた。手袋のことを思へば、指先の細つた、手の甲の指の附根の所が子供の様に凹んだ小さい手が眼を泛ぶ。此處へ来たら、如何いふ態度で迎へて、何と言つて遣らうかと、そこまで細かに豫想して準備した、其計畫が悉く書前に歸した

たが、
「何でも大變速で息を喘ませて被坐したやうですよ」と小母さんが側から口を出した。
然る帯を解いてから座に着いて、兩女の去るのを待つて、封を切つた。薄い書簡用紙五六枚にペン先の細字で認めた長い手紙である。二三行讀むと、直ぐ顔の色を變へて、思はず手紙を下に置いた。又取上げて一氣に讀み下した。
失禮などと申すことは、最早要なき文字の様に思はれますから、申しません。只私の眞の告白を何でも聞いて頂きます。昨日の私の行爲のいよく出でていよいよと虚偽の多かつたことを御許し下さいませ。すか。
是非なし、我類に百千の鞭をも加へたまへ。私は云ふべきだけのことを云ひ、受くべきだけのことを受くる外ありません。眞實の我姿を解せられずして愛せられる程苦しいものはない。眞を申せば、私の世界には戀も愛も同情も皆無意義の文字に過ぎない。残れるものは只理解と云ふことだけ、人と人との關係は理解といふことだけ。それで私は理解といふこ

たかと思ふと耐らない。興奮した旅望の充たされたい所へ加へて、痛く自尊心を傷けられた様な氣もして、苦痛は一しほ鋭い。

秋時計を出して見ると、二時迄と約束した時間が七分許り過ぎて居る。昨日来たのも恰度これ位であつた。若し此處へ息を喘ませて歸けて来たなら、何んな風で何と言つて来るだらう。理解を聞くのも程しくたいではない。要吉は再び好奇心と妄想とに扱はれた。

又半時間許り経つた。幸は其の間で降り止んだが、空の氣色はいよ／＼悪く成つて、日が暮れる様に四邊が薄暗い。要吉も最う来ないものと諦めた。改札係の驛夫までが、今更自分をじろろ見る様な氣がするので、つとめて平氣な顔を装つた。この平氣な顔が装はねば成らぬと云ふことが、更に要吉の不快を増した。何んな事があつても、今日は償はねば置かぬと心に誓つた。

此儘、同じ改札口から未だ使用しない切符を驛夫に渡して出るのが、何だか可厭に思はれたので、恰度そこへ電車が来たのを幸ひに乗込んだ。初めは大久保の神戸でも訪ねようと思つたが、こんな時に友達に會つた所が先方も此方も面白くあるまい。そこで又氣が變つて、四谷

とを心配して申すのです。先生から愛されようが憎まれようが、それは第二の問題で、理解が同情を生むかも知れないのです。理解の結果が如何成らうと、只理解それだけが唯一の幸福なのです。途中で何んな御心を害ふ様なことが有つても、長たらしき告白を是非忍んで讀んで頂きます。
われとわが眼を閉ぢ、耳を閉ぢ、色相界を遠ざからむとした自分は、それだけの點に於ても、死の淵へ一歩近寄つたのです。斯う外界と絶縁した身ながら、昨夏以來先生に對して何等かの接觸を感じて、何處となく怪しき思ひに襲はれたのは疑ひなき事實です。私は他人の服装、言語、素振などには無頓着な方なので、先生のことには妙に些細のことまで氣が着く。友達と先生方のお時をする時私は何時も無遠慮な出鱈目を申すのです。それを眞に受けて聞いている友達を見ても面白いのですから、併し先生のこと

見附で降りた。市内電車に乗換へる積りで立つて居たが、停電と見えて何時迄待つても来ない。其邊まで行く間に来らだらうと、外濠についた廣い路を又水道橋の方へ向つて歩き出した。雪がちら／＼降る。

電車は未だ来ない。雪はだん／＼繁く降り出した。地面の上は降る後から消えて行くが、電車の敷石の上は淡く靴の跡にく／＼と溜まつた。

到頭水道橋まで来て仕舞つた。外套の肩から胸へかけて眞白に積つて居る。要吉はそれを拂ひ落さうともしないで、暫く道の中央に立つて居たが、急に辻待の車夫を呼んで丸山迄曳いて行けと吩咐けた。
家へ着くと、小母さんが出迎へた。
「毎日遅く成りますねえと、咎める様な口調で言つた。それを聞き流して部屋へ這入ると、追掛ける様に、手紙が来て居ますよ。
「うむ」と言つたまま、机の上を見ると、四角な袋に見覚えのある別子の手袋が眼に着く。故と落着いて上着の袖を脱ぎながら、「使が持つて来たか。」
昔後から手傳つて居た剛江は、御當人が持つて来た様でした。私は出ませんでしたし

た時も私は強ひて冷淡な風をして、何事も知らない様に「然うですかそんな事が有りましたか」となどと申して居た。それも事實です、お許し下さい。一昨日金葉會で『死の勝利』の獨逸譯の方を拜讀したいと申ししたのは、全く其場の讀でした。何の爲に讀をついたのか、私にも解りませぬ。獨逸語は四年前に家で厭々ながら『メールヘン』の一冊位は讀まれたこと有りませんが、英語でさへ解らぬ所が如何して獨逸語で解りませう。それを先生が明日の午後待つて居るからと仰つた時は、流石に申譯なく成りました。何故眞實が語れなかつたか——唯ひとり我胸の奥に自由に先生を思はせて頂きたかつたのです、決して／＼口外したくなかつたから。私は逆もそんな事を口外する資格は無いのです。私は逆も熱い酒を盛る器ぢや無い。ダブル、キャラクタアに備まされて居る身は就れにも左様いふ事は口外し難いのです。假初に戀といふ字に唇を借すは、我理想とする戀の手前取かし、自他を欺くものなれば、戀とは純一無雜なものでせう。自分を形造る

幾億萬の細胞の一つが、等しきウイブレーションに燃えた時に名附けべきものでせう。私は左様いふので無ければ満足しません。永遠などといふ思ひかなとは望まない迄も。只一轉瞬でも左様いふ純な境界に入りたい。成らうと努力しました。遂に駄目でした。

お許し下さい。昨日私は禁じられて居る酒を三杯まで一滴残さず頂きました。後で何様に成るか、全く無経験で豫期は出来なかつたのですが、私は寧ろ狂して見たかつたのです。上野へお伴したのもあの儘では自分に對して自分が少からず不足であつたからです。まつたく暗い所へずん／＼這入つて行つて、道に迷ひでもしたら好いと思ふ様な心持でした。けれど、駄目です。如何したつて私は駄目です。胸が一杯に成つて居ても、はつと全我を投げて投じることが出来ないので。波瀾は始終絶えないのです。底には絶えず同じ方向に静に流れる潮流が有るのです。昨日は自分ももう駄目だといふコンクリュージョンに來て仕舞つたのです。それが他から來

人は皆笑ふでせう。併し先生だけは御笑ひ下さるにしろ御怒り下さるにしろ、愛想づかしを遊ばすにせよ、何處かに私の心を吐いてる所を御取下さると信じて申したので。これに對しては屹度屹度御返辭を下さい、それ迄は御日に懸りませぬ。

二月二日 朋

小島先生 御前に
二仰。申落しましたが、昨日中野の停車場へ降りて、先生が大久保と云つたのは論です、貴方を偽つて——と仰有つた時は、私は——私には先生の御聲とは聞えなかつた。私の聲です。私が實は勇氣の無い爲に云はれずに居たことを、代つて云つて下さつたのです、甚く自分の胸に徹して彼時は反抗する力が逆も無かつたのでした。

て、重ねて描みながら、「如何も文章が生硬で不可い、同じ事でも何故もつと女らしく書けないだらう。」

斯う呟くやうに言つて、折角描んだ手紙を又擱けた。「理解せよ? この上何を理解せよと云ふのだ。莫迦な。單純に理解其者に伴ふ享樂なら、理解する方にあるんで、される方に有らんぢやない。理解されたいと云ふのは、それからして既に何物かを待設けて居るんだ。」

要吉は強ひて他所事を云つて見たが、胸に徹へたのは其んな物ぢやない。女は見事に昨日の一日を覆して、而もそれが一步でも退いたのぢやない。却つて男に内薄して居る。

因より要吉も終局のない戀を夢想して居なかつた。何時か、如何なる方法に於てか、終局を來すべきものと思つて居た。若し手際よく失戀することが出来たら、それでも構はない。唯こんなに素早く女から先んじられようとは思はなかつた。尤も昨日の朋子が言葉にも仕打にも、何處か故とらしい所はあつた。嬌飾した跡はあつた。要吉も流石にそれと氣附かないでもなかつたが、まさか是程迄に出抜かれようとは思はなかつた。斯うなれば戀愛も單に知力上の争ひに過ぎない。それが機才に於ても、明か

幾億萬の細胞の一つが、等しきウイブレーションに燃えた時に名附けべきものでせう。私は左様いふので無ければ満足しません。永遠などといふ思ひかなとは望まない迄も。只一轉瞬でも左様いふ純な境界に入りたい。成らうと努力しました。遂に駄目でした。

お許し下さい。昨日私は禁じられて居る酒を三杯まで一滴残さず頂きました。後で何様に成るか、全く無経験で豫期は出来なかつたのですが、私は寧ろ狂して見たかつたのです。上野へお伴したのもあの儘では自分に對して自分が少からず不足であつたからです。まつたく暗い所へずん／＼這入つて行つて、道に迷ひでもしたら好いと思ふ様な心持でした。けれど、駄目です。如何したつて私は駄目です。胸が一杯に成つて居ても、はつと全我を投げて投じることが出来ないので。波瀾は始終絶えないのです。底には絶えず同じ方向に静に流れる潮流が有るのです。昨日は自分ももう駄目だといふコンクリュージョンに來て仕舞つたのです。それが他から來

遇に依つてせしめられたと云ふのならばですが、原因は内なる我に潛んで居るのですから、先天的なものでせう。若し同あらば私一身に受くべきものと覺悟しました。

けれど切めて、切めて先生だけ——此處に私の云ふに云はれぬ苦しさが昨日あつたので、私が彼様な事を造つたのも御許し下さいませうか。いよく酔ふことの出来ない自分を確め得て、切めて先生の御胸に凭つて、日頃の苦しい涙を思ひざま流して染みだかつたのです。で、あんな事でもしてもつと泣きたかつたのですが、泣かうとしても泣けませんでしたが、笑泣するなんて事は何んなに成つたら出来るでせう。随分切實に感ずる苦痛に對しても涙を次第々々に禁じられて行くのであらうか。私は自分と自分に失敗して、もう歸りますと申上げました。切めて一秒でも長く御側に居て、堪へ難い思ひも味ひたいのを、遅く成ると家で叱られますからと申しました。誠です。あれは眞實が語られなきに、左様云つたのです。家が何です。両親の前に頭を下

けて小言を聞くのが唯一の苦痛の様な身に成つて見たい位です。母は勿論不興な顔附をして種々申しましたから、私は母が云ひ終らない間に、面白さうに種々話して聞かせたのです。新井の塾師へ久しぶりに行つたこと、天氣が好かつたの、空が何うだの、雜木林だの、麥畑だの、鳩だのと、のべつに饒舌つたのです。そして眞實に面白かつたから、今度又行つて見ませうと勧めました。

私は白狀しますが、家では稀な孝子として、両親が唯一の誇りと成つて居るので、勿論それだけの事は盡しますから、非常に親切な子だと思つて居るのでせう。私の心を以て親に對し家に對しては何事することも出来ませんから、切めて無意味な器械的な勞働を以て報いてる迄なのです。いやもつと／＼酷い事も考へて居るのですが、それは自分にも怖ろしいから竊に思つて居るだけで、言葉には出しますまい。

こんな者の爲に、先生は何んな犠牲でも拂ふとまで云つて頂いた。只他人に犠牲を強ふることを何とも思はない方が、

に男が打ちられたのだ。要吉は自分の置かれた地位が滑稽に見え出すと共に、心の底から屈辱を感じずには居られない。

其中から男は矢張り心を惹かされた。女に對する情愴が加はるに件れて、奇妙にも女に對する慾望が鋭く成つて、昨夜の生々しい記憶が去らぬ。何んな風に手を廻して、女の足が如何成つて居たか、細かな姿勢まで眼に泛ぶ。髪の毛の頬に觸れた跡がうづく様に思はれる。「私は逆も然い酒を盛る器ぢや無い。」そんな事は言はせない。

彼時は煽られた情熱のために、底の汚い心が半ば神祕的な薄闇に掩はれて居た。それが今は亦深々な情愴と成つて頭を擡げた。××××××××××。これだけでは如何することも出来ない。要吉は復讐のためにも必死の目的にも、何んな手段を盡してでも、今一たび逸した鳥を捕へなければ置かねと誓つた。

要吉は直に筆を執つて、必死に成つて長い手紙を書いた。「餘りに早く解部を急ぎ給ふのかな」と書き始めて、成るべく先方の自尊心を傷ける様な毒々しい言葉を述べて、これを讀んだら逆も其儘解乎としては居られぬ様に筆を廻した。

して書いた。眞夜半頃迄かゝつて漸く書き終つた時は、大分心も落着いて居た。初めから讀返して見ると、如何も面白くない。皮肉が皮肉に成つて居ない。到る所此方が負けて居ながら、それを無理に隠してのが見え透いて、如何にも見苦しい。要吉は筆を投げて溜息を吐いた。

一體此女は何者だらう。此手紙の勢頭に女は欺いたといふ。而も男を弄ぶのでなく、自分で自分を弄んで見たのだと云ふ。只、何のために左様しなげりや成らぬか、其理由は一言も洩らさない。

いや、種々書いてはあゝ、寧ろ誇大してまで並べてある。併し昨日此女を動かしたものは、矢張り好奇心に過ぎない。始終新しい刺戟に飢えて居たので、男の爲に何んな境地に持つて行かれるか、それが見たさに、此危險な遊戯に加はつたのだらう。生れ附き爲の強い、容易に人に屈しない女が好奇心に驅られたら、何事をも敢てしないものは有るまい。其上此女は自分の鋭敏な感性に従つて、實際は庸い平凡なものを理想化する特殊の手腕を持つて居る。

昨夜なぞも詰り火花が烈しいために、氣紛れ土居の松林の下の生塔に添うて、要吉は先刻から立盡してゐる。空は藍色に暗れて、朝の日光が吹ひ附くやうに射すので、昨夜積つた雪がもう地面から溶け始めた。靴の底で踏んだ跡が温々する。要吉は溝石の上立つて見たり、又二足三足歩き出したりして、氣を苛立つて居たが、少時すると向角から車夫が一人妙な腰附をして駈けて来た。

十九

それから筆を執つて、一字づつ紙に落す様に、長い間かゝつて、別に次の様な短い手紙を認めた。

「啓、留守中に御持參相成りし御狀一通り拜見致候。今更御合せいたす顔もなき次第に候。只、お互に自分が許きたる種子は自分で刈るだけの覺悟は致居候。兎に角今一度御目にかゝりて、申残したることも申上げたたく、明朝猿樂町へお出の節、私は教會前の珈琲店にて御待ち申し度候、以上。」

署名は故と省いたが、明朝の明を令と改めて、丁寧に封じて、上に宛名を書いた。少時左様の儘で居たが、氣に懸ると見えて、又最前の册子の手紙を取上げた。同一事でも、此女の云ふ事には力がある。一種の鬼氣があつて人を震ふ様に思はれる。初め讀んだ時からして何やら氣に成つたが、そこともなく古い半屋の隅から吹き上げる様な、陰森な氣が紙面を離れぬ。第一此女をコーケットとして、單に近代文學に感銘した生物として見ることは、如何もあの顔のあの表情と一致しない。要吉はそれを何とも思ひ別けかねたが、強ひて考へまいとして、息を強めて洋燈を吹き消した。

が情熱とも見えたのだ。此女の感情位性急に燃え上るものはない。宛然機發するやうだ。あの天上の炎の様に見える淨い情火の下には、汚い肉慾が隠れて居ないとは如何して云はれよう。

此處迄考へて来て、要吉は思はずぶろくと思ひついた。女は昨夜何を求めて居たのだ。何故それに氣が附かなかつた。いや、氣が附いて居ても、何故其機會を掴むことが出来なかつた。女から身を振附ける様にされて、未だ如何することも出来なかつたではないか。どうも彼の女は肉體か精神か、何方か平衡を取れて居ない。

斯んな風に容赦なく女の心に突込めば突込む程、要吉は自分の心に突込んで居た。女を解部してと思つたが、矢張り自分を解部して居たのだ。二人の性格の間には、それだけ類似の點が見出される。初めの憤怒が消えたと共に、だんだん女の仕打があつても好く成つた。女が何處迄も自分を弄ぶ氣になら、弄ばれても遣らう。其代り此方も弄ばずには居まい。つまり弄られたり、弄んだりして、其間に満足を求めるといふ、往々職業婦の仲間に見るやうな下劣な心持に成つた。

「は」と、車夫は威勢よく駈出して、半町許り手前に乗捨てた人力車を引張りに行つた。それから半時間餘り後には、要吉は教會の赤煉瓦の建物と相對した珈琲店の二階で、ひとり紅茶を啜つて居た。綿紗の窓掛を通して横様に朝日が射すと、××××××××××の様な林檎が明るく見える。白い帆布の上の壁に盛つた林檎に埃がかゝつて居る。要吉は紅茶の茶碗の前に据ゑて、それから立つ湯氣を見詰めて居たが、又立上つて食卓の前を歩き出した。

「来たら先づ何と言はう、如何して迎へてやらう。——第一先方が何んな風をして遣つて来るだらう。」

要吉は面を見合せた時の有様を豫想して、二三の會話を作つて見ようとしたが、全然何とも考へ得られなかつた。

餘程興奮してると見えて息が詰る様な氣がする。鏡の前へ立つて、一寸自分の顔を寫して見た。いかにも情氣返つて、昨夜は終夜眠られなかつたといふ容子が、何處か見えなかつた都合が悪い。眼は充血してゐるか、頭髪は亂れてるか、顔の色も女の注意を惹くほど蒼朧めて居ないや成るまい。

こんな事は別段悪いこととも思はないで、

自然に要吉の心に泛ぶのだ。まだこれ位ではない、戀の目的を遂げる爲なら、何んな虚偽でも許略でも敢て尻込みしようと思はない。唯それが驚くと、われを忘れて、自分が計重んだ虚偽で自分を欺いて、自分が掛けて置いた係りに自分が掛つて、自分の刃で自分が傷く迄行かねば止まぬ。恰度自分が織る蜘蛛の絲に十重二十重と絡まれる、シャロットの妖術が掛い果報に似たとも云へよう。それが又今日まで要吉がすべての戀に成功すると共に、又必ず失敗して来た所以でもあるのだ。

折柄教會の屋根の大雪計が閉かに七時を打つた。要吉は今迄向つて居た鏡を離れて、窓際へ近寄つた。窓掛で身体を隠す隙に、斜めに街上を見下した。積つた雪は大抵掃き寄せられて、目の當る所は地面が乾きかけた。女學生が多勢右からも左からも集つて来る。それが教會の入口で出會つて、互に頭を下げては一緒に中へ這入つて行く。講師らしい西洋の婦人が遣つて来ると、其方へ駈けて行く年配の若い女學生もあつた。要吉は眼を離さず見守つて居たが、其中に朋子は交つて居ない。追々出校する女學生の數も稀に成つて、やがて玄關に人の影も見えなくなつた。小使が一人ひよつこり出て

来て、振鈴を持ったまゝ、後を見廻つて居たが、直ぐ又何處かへ行つて仕舞つた。要吉は良失望の氣味で窓を離れようとした時、急に胸が波打ち出した。朋子がひとり後れて遣つて来た。因よりに要吉が此處に居ることは知つてるのであらうか、殆ど側目も振らず真直に道を歩いて、教會の玄關を上つて行つた。間もなく又姿を現はして、石段の上に立つたまゝ、外面を見廻して居る。要吉は急いで珈琲店の二階を降りて行つた。一寸朋子の顔を見たまゝ、教會の前を通り抜けてよるとすると、女も後から隨いて来た。十間許り歩いて町の曲り角まで来ると、

「私一寸お友達に會つて、傳言を頼むことが有りますから——直ぐ戻つて参ります。」
「左様ですか、何卒。」
朋子は駈けて教會へ引戻したが、言つた通り直ぐ戻つて来た。そして懐から端書を二三枚出して、角の郵便筒へ入れた。要吉にはこの何でもない日常の動作が小憎らしく見えたが、何とも言はないで、前に立つて大略に歩いて行つた。電車の鈴の喧しい大通りを離れて、九段中坂の急な傾斜にかゝると、要吉は歩調を緩めて、初めて口を開いた。

「眞鍋さん——」
「はア。」
「私達の何は——左様だ、ま、戀だと云はせて下さい。私達の戀は宛然イブセンの戯曲の様にすね。始まつたかと思へば既に終局に来て居た。」
要吉は口元に寂しげな笑ひを泛べて、女を振向いた。朋子は俯向いたまゝ、返辭をしなかつた。
二人は其儘何とも言はないで、九段の廣場を抜けて、招魂社の裏手へ廻つた。立停つて見渡したが、樹にも岩にも淡い雪が溜つて、四邊の物静かな中に、噴水の音だけが絶えず動いて止まない。
「今日も私の行く處迄来て下さいませるか。何うもこれや腰掛ける場所も無い。」
「は、何方へでも。」
「尤も郊外まで出る氣にも成りませぬね。如何でせう、其邊の料理屋へでも行かうと思ひますが、貴方はそれで宜う御座んすか。」
「私なら何處でも構ひませぬ。」
そこで二人は又招魂社の境内を出て、直ぐ其處の板塀を廻らした門構への家の軒をくぐつた。まだ朝の間で、男衆が入口の三和土の上を

洗つて居た位だから、外に客らしい者は居ない。
裏の小座敷へ通された。家が大きいのに天井など保びて、持つて出る器具も古い。如何やら廢れた驛路の本陣へ着いたやうな感じがある。それが要吉の心を惹いた。
女中の去つた後は、二人ながら何とも言出さない。朋子は膝の上に手を重ねて端然として坐つて居る中にも、何處か不決定な容子が見える。男から口を切るのを待つて居るらしい。
「私は如何することも出来る人間ぢやない。弱い男です。それだけは貴方も安心して居て下さい」と、要吉は投出すやうに言つた。一寸女の羞色を窺つたが、又言葉を續いで、「昨日新井の塾師で、彼の様なことを一旦口外した上は、私は貴方の前に全然抵抗力を失つたも同様です。貴方から総令何んな取扱ひを受けても、如何することも出来ない。」
「それは私の方が尙更左様ぢや御座いませぬか。」
要吉は凝手と女を見据えた。何の積りで斯んな事を言ふのか、矢張負嫌ひが手傳ふ竹筒返しに過ぎないのだらう。
「其代り貴方は相手の腕を縛つて如何すること

も出来ない様にしたぢやないか」と、要吉は自分で自分の手を掴んで、「私は最う貴方の身體に觸れることさへ出来ない。」
朋子は只黙つて居る。
「ね、理解せよとは——お手紙の中にあつた理解せよとは、何を指して云ふのです。貴方が私を——愛することが出来ないといふ、それですか。ね、愚癡らしいが、最う一画面の當り聞かせて下さい。」
「左様ぢや御座いませぬ」と、女は伏目に成つたまゝ言つた。
「ぢや何です、何を理解するのです。」
「私はもう駄目な女で御座います。」と言ひ切つて、朋子は自分の膝の上に俯向いて仕舞つた。
要吉はまじり／＼女の髪の水色のリボンを眺めて居たが、「貴方は私に如何したら可いのです。既う斯う成りや、如何も斯うも無いと云ふことは解つてる。それが解つて居ながら、私は如何することも出来ないぢや有りませぬか。」
そつと女の肩へ手を掛けて、女の耳の側へ熱く成つた唇を寄せた。「貴方は斯うしてこれきりで、二人の關係が済んで仕舞ふものと思つておいでですか。」
朋子は俯向いたまゝ、頭振を擡つた。

要吉は曇みかけて、「では先夜上野でのことは如何です。まさか冗談にして仕舞ふ積りぢや無いでせう。」
「私は一生懸命でした。」
「何か言はうとすると、女は又言葉を續けて、「一生懸命でも、如何することも出来ませんでした。」
要吉は女の肩に掛けた手を離して溜息を吐いた。
「仕方がない。私は自ら招いたのだ。自ら招いてこんな地位に陥つたのだ。貴方に不足を云ふ筋もないが、貴方も餘り大膽に振舞つて下さつた。」
「先生も、それは——」
「だから何とも言はない。けれども私の態度に不眞面目な物が有つたにせよ——縱しんば貴方を欺かうとしたのにもせよ、私は全力を擧げて人を欺かうとしたのだ。決して餘裕が有つた譯ぢやない。全力を擧げて人を欺くといふことは、もう欺くんぢやない。眞面目なものでせう。ね、察して下さい、私は其爲に貴方の前に自分といふものを全然曝け出したので、斯う成つては隠れるにも隠れやうがない。貴方はそれで好からうが、私は如何成ります。」

「私がこれで好いと思つて下さいまして？ 私だつて好くは有りません。」

要吉は両手に握く女の両手を把つた。「ね、私を憐れんで下さい。愛することが出来なけりや、切めて憐れんでも下さい。それも出来なけりや。切めて——切めて私を欺いてなりと下さい。」

言ひさして聲を濡せた。これ程までに自分を卑しくしたかと思ふと、自分の聲で自分が悲しく成つた。其儘又ついでに行く。

「私は欺かれるだけで深山人間かも知れない。始終機會さへあれば自分で幻影をつくつて、自分を欺いてる。幻影の中に生れて、幻影の中で死んだら思ひ残すことは有るまい。貴方も他人を欺くと共に何故自分を欺かうとは爲さらんか。お互に生きようと思へば自ら欺く外に道はない。」

斯う言つて、女の顔を覗き込み様にしたが、朋子は矢張押黙つて居る。

要吉は竊と女の手を離して、「それぢや貴方は如何しても徹骨徹髓に醒めた女だと云ふのか。けれども醒めて見た所で、矢張新しい幻影の中へ起きるに過ぎない。縱し本當に底の冷たい水に觸れることが出来たとしても、そりやナラシ外に道はない。」

「一體其胸は如何したのです。」

「え、是れ？——と直に手を引いて口元を隠した。目だたぬほど上反つた胸は一枚置きに義齒を入れて、物を言ふたびに煙々と人の眼を射る。

「何時か元祿が流行りましたでせう。あの時に遣らせたのです。」

「莫迦な」と口では言つたが、何かしら始終思ひ切つたことをしなけりや一日も居られない女だから、そんな事も遣りかねないかも知れぬ。

女は男の稍倒れた顔を見たり顔に見て居たが、「いゝえ、左様ぢや御座いません。眞實は永く胸を病んで困つたものだから。」

「何故そんな、ちよいと小刻みに涙を吐くのです。女は皆そんな所に興味を持つてゐるんですね。」

「ぢや、此れからは最う申しますまい」と、朋子は俯向いて素直に言つた。

少時して要吉から又口を開いた。「今のことね。」

「左様ですね」と、氣の無い返辭をしたが、直ぐ又、「飲ませて下さいませうか。」

「え」と、朋子は落着いて笑つて見せた。

「其代り私酒盃ぢや飲まない。」

「ぢや、何で——」

要吉は黙つて火鉢の縁に掛けた女の両手を見詰めた。手の甲に若い筋が淡く透いて見える。

「何でも可いから、片一方の手を前へ出して御覽なさい。」

朋子は言ふが儘に左の手を出した。要吉はつと其手を握つて、指を揃へて掌に凹みを作らせた。衣襟から小さい繻子を取り出して、其處へ強い酒を注ぐ。それ迄爲れるが儘にして居た朋子は、酒が掌に充つると同時に、ばつと指を開いた。酒はだら／＼と火鉢の中へ滾れて、白い灰が立上つた。要吉は身を反して避けた。

「ぢや止ませう。」

朋子は片手を前へ出したまゝ、顔を背向けて笑つて居たが、急に笑ひ止んで、

「いえ、今度は眞實に」と、掌を要吉の前へ突附ける様にした。

「お終ひ迄大人しくして居なけりや——」

「え、乾度。」

今度は言つた通りに終ひ迄静手と辛抱して居

「え、何なんです。」

「今爲たことでさ。あれはね、矢張ダンゴンチオの中で讀んだので、切めて貴方に左様でもして貰ひたかつたから——けれども、最うあれ以上貴方から與へられようとは思はない。」

斯う言つて、相手の顔附を熟々見守つて居たが、「貴方は眞實に小説なぞ讀んだことはないのか。」

「え、小説といふものは全く手に取つたことが有りません。」

「何故。」

「だつて、私は一人で深山ですもの、他の女の話などは如何だつて構はない。小説の中の男や女と一緒に成つて、泣いたり笑つたりすることは、私には連も堪へられさうもない。」

要吉は黙つて聞いて居ながら、ひしと胸を打たれた。斯んなに自我の強い、他途自分自身を生きる道を歩まねば止まぬ女が、空想の中なら知らぬこと、呼吸をする現實の世界に有るだらうか。此女の小さい頭の中の秘密程解らぬものはない。

「私はね、左様は云ふものの、貴方も近頃流行る小説や戯曲なぞ随分讀み散らしたんだらうと、實は今迄も疑つて居た。ね、眞實に讀まない？」

「左様ですね」と、氣の無い返辭をしたが、直ぐ又、「飲ませて下さいませうか。」

「え」と、朋子は落着いて笑つて見せた。

「其代り私酒盃ぢや飲まない。」

「ぢや、何で——」

要吉は黙つて火鉢の縁に掛けた女の両手を見詰めた。手の甲に若い筋が淡く透いて見える。

「何でも可いから、片一方の手を前へ出して御覽なさい。」

朋子は言ふが儘に左の手を出した。要吉はつと其手を握つて、指を揃へて掌に凹みを作らせた。衣襟から小さい繻子を取り出して、其處へ強い酒を注ぐ。それ迄爲れるが儘にして居た朋子は、酒が掌に充つると同時に、ばつと指を開いた。酒はだら／＼と火鉢の中へ滾れて、白い灰が立上つた。要吉は身を反して避けた。

「ぢや止ませう。」

朋子は片手を前へ出したまゝ、顔を背向けて笑つて居たが、急に笑ひ止んで、

「いえ、今度は眞實に」と、掌を要吉の前へ突附ける様にした。

「お終ひ迄大人しくして居なけりや——」

「え、乾度。」

今度は言つた通りに終ひ迄静手と辛抱して居

「左様ですね」と、氣の無い返辭をしたが、直ぐ又、「飲ませて下さいませうか。」

「え」と、朋子は落着いて笑つて見せた。

「其代り私酒盃ぢや飲まない。」

「ぢや、何で——」

要吉は黙つて火鉢の縁に掛けた女の両手を見詰めた。手の甲に若い筋が淡く透いて見える。

「何でも可いから、片一方の手を前へ出して御覽なさい。」

朋子は言ふが儘に左の手を出した。要吉はつと其手を握つて、指を揃へて掌に凹みを作らせた。衣襟から小さい繻子を取り出して、其處へ強い酒を注ぐ。それ迄爲れるが儘にして居た朋子は、酒が掌に充つると同時に、ばつと指を開いた。酒はだら／＼と火鉢の中へ滾れて、白い灰が立上つた。要吉は身を反して避けた。

「ぢや止ませう。」

朋子は片手を前へ出したまゝ、顔を背向けて笑つて居たが、急に笑ひ止んで、

「いえ、今度は眞實に」と、掌を要吉の前へ突附ける様にした。

「お終ひ迄大人しくして居なけりや——」

「え、乾度。」

今度は言つた通りに終ひ迄静手と辛抱して居

「左様ですね」と、氣の無い返辭をしたが、直ぐ又、「飲ませて下さいませうか。」

「え」と、朋子は落着いて笑つて見せた。

「其代り私酒盃ぢや飲まない。」

「ぢや、何で——」

要吉は黙つて火鉢の縁に掛けた女の両手を見詰めた。手の甲に若い筋が淡く透いて見える。

「何でも可いから、片一方の手を前へ出して御覽なさい。」

朋子は言ふが儘に左の手を出した。要吉はつと其手を握つて、指を揃へて掌に凹みを作らせた。衣襟から小さい繻子を取り出して、其處へ強い酒を注ぐ。それ迄爲れるが儘にして居た朋子は、酒が掌に充つると同時に、ばつと指を開いた。酒はだら／＼と火鉢の中へ滾れて、白い灰が立上つた。要吉は身を反して避けた。

「ぢや止ませう。」

朋子は片手を前へ出したまゝ、顔を背向けて笑つて居たが、急に笑ひ止んで、

「いえ、今度は眞實に」と、掌を要吉の前へ突附ける様にした。

「お終ひ迄大人しくして居なけりや——」

「え、乾度。」

今度は言つた通りに終ひ迄静手と辛抱して居

「私に力を入れて、私も矢張りはれた身だ。ね、聞いて呉れますか。」

「女は點頭いた。」

「私の身はデレマの上にある。私は——正しい父の子で無いが、それでなかりや生甲斐のない身か、何方かです。何方かは誰も知らない。又知りたくもない。いや、唯一人知つた者があるが、私は其女を憎まずには居られない。」

「斯う言つて、相手の容子を眺めた。朋子は身動きもしない。」

「それは私の母です。勿論私はと、急に苛々して、「私は斯んな事を打明けた所で、それに依つて貴方の同情を買はうとするのではない。勿論憐憫を求めるでもない。人を愛すること、人に同情することも出来ない貴方だと知つたから云ふのだ。私の此秘密を知つて居る者は固より私ひとりだ。今貴方に話せば、貴方と私と二人だけだ。」

「女は靴と手に力を入れた。」

「貴方は此秘密を口外することは出来まい。つまり私の此秘密を握らせて、貴方を私から離れることが出来ない様にしたのだ。解つたか。」

「若し女がそれを「餘り残酷だ」と言つたら、「貴方の方がもそつと残酷だ」と言ふ積りで居た。」

「と云つた女の意味が解つた。冷酷な手紙の註もよく解つた。炎々と燃上つては、空をも焦すやうに見えながら、どこか油が無くて燃える火の様に思はれた。彼の胸の情熱の秘密も解つた。」

「此女の眼に映じた世界は何んなに空漠な、寥廓としたものであらう。氷と雪に閉ぢられた獄舎と云つただけでは、未だ云ひ盡されたとは思はれぬ。其身に成つて見なければ、他人は如何なることも想像することも出来ない。要吉には理なくも亡父が想出された。尤も父の顔も、何んな人と云ふこともおぼえて居ない。が、父の眼に映つた世界は矢張りこんなものでは無かつたらうか。目前に左様いふ世界が存在すると知りながら、自分は唯彼等の世界の閉ぢられた扉の前に立つて戦慄するに過ぎない。」

「二人とも物を言はなかつた。其間、長いやら短いやら解らぬやうな時間が経つた。やがて、「あ、左様だつたか」と、要吉は太息を吐いて、「貴方の言ふことが爲すことの意味が初めて能く解つた。私は斯んな怖ろしい現實の事實に接しようとは思はなかつた。」

「又、少時言葉を途切らしたが、「私は最う貴方を自分の方へ引込めようとは云はぬ。何處でも可

併し女は何とも言出さない。

二人はそれ限り物を言はないで、何時迄も離れなかつた。一時に煽られた感情が漸次に沈静して行くにつれて、何とも名状し難い心の空虚を感じた。同時にそれが終に充たれないことも知つて居た。

何時の間にか障子の日影が移つた。

「最う大分遅いでせうね。」

「朋子はそれが開えたと見えて眼を上げて四邊を見廻したが、ちらと前歯を見せたりで、其儘倦怠さうに男の腕に凭れかゝつた。斯んな媚めかしい嬌態が若い素人の女に如何して出来るのか。要吉には何とも思ひ分らない。只、此上何時迄かうして居た所で、如何にも成らない、それだけは解つて居る。勿論女の側には居たい。が、時として女から離れて、一人に成りたいこともある。

「最う立ちませうか。」

「男は低い聲で囁いた。」

「え、と、女も振返つた。」

「そこで女中を喚んで、身繕ひして立上つた。二人の腕は手を着けられずに残つて居る。要吉は先に立つて襖を開けようとしたが、急に振返つて其處に立つて居る朋子の肩に手を掛けた。」

「私は如何しても理解だけぢや満足が出来ない。私の望むのは貴方のデスバイズする——あれだ。それを知つて居て呉れるか、ね、それをして。」

「女は上眼に相手の顔を見返したまゝ、點頭いて見せた。要吉はそつと其項に唇を附けた。」

「其儘、二人は梯子段を駈下りて街上へ出た。再び馬場を抜けて中坂の上立つた。日は沈んで、脚下の町の屋根から向ひの高臺へかけて、一面に薄白い霧が懸つて居る。其中からニコライの回蓋が黒く浮出して見える。大都會は今が埋葬の間際かと思はれた。此寂かな夕暮の空に彼方此方工場煙突から幾條となく煙が立つ。遠いものは段々灰色にかすれて、霧と見分け難いのもあれば、近いものは盛に黒煙を上げける。中にも砲兵工廠の高い煙突から吐出すのは、三四町許り瑠璃色の空を横様に靡いて、凄じい勢ひで廻轉して行く。二人は立停つたまゝ、眼を放つた。」

「煙が好く御座いますね。私、煙の立つのを見てると、眞實に好い心持なんです。」

「貴方の心の中の動搖を象徴的に表はして居る様だから？」

「朋子は返辭をしないで、凝手と煙の渦を眺め

時の様に永い一生を暮して行く、そんな事は出来ぬ。又聲に力を入れて、「貴方はそれが出来ると思ふか。」

「朋子は男の腕に顔を埋めたまゝ頭を掉つた。」

「ね、貴方は何人をも愛することが出来ないんだ。それなら強ひても私を愛して下さい。私は待つて居る。貴方が愛して呉れることが出来る迄待つて居る。」

「何時迄待つて下さいませても、私は駄目で御座います。」

「要吉は思はず女を引起して、凝手と其顔を見詰めた。「何故、如何して? 私はそれ程迄に貴方から——」

「先生ぢやない。私が——私は——と、泣眼した眼を伏せて、男の視線を避けるやうにしながら、「幾許強ひても——そんな要求が起らない身體ですもの。」

「なに?」

「私は女ぢやない。」

「其儘下に突伏して仕舞つた。」

「要吉は着着に成つた。ざらりと電光を頭の中へ送られた様な心持がした。少時は立上る力もない。聲を出さうとしても聲が出ない。——今に成つて初めて理解の外に人事關係がない

と云つた女の意味が解つた。冷酷な手紙の註もよく解つた。炎々と燃上つては、空をも焦すやうに見えながら、どこか油が無くて燃える火の様に思はれた。彼の胸の情熱の秘密も解つた。」

「此女の眼に映じた世界は何んなに空漠な、寥廓としたものであらう。氷と雪に閉ぢられた獄舎と云つただけでは、未だ云ひ盡されたとは思はれぬ。其身に成つて見なければ、他人は如何なることも想像することも出来ない。要吉には理なくも亡父が想出された。尤も父の顔も、何んな人と云ふこともおぼえて居ない。が、父の眼に映つた世界は矢張りこんなものでは無かつたらうか。目前に左様いふ世界が存在すると知りながら、自分は唯彼等の世界の閉ぢられた扉の前に立つて戦慄するに過ぎない。」

「二人とも物を言はなかつた。其間、長いやら短いやら解らぬやうな時間が経つた。やがて、「あ、左様だつたか」と、要吉は太息を吐いて、「貴方の言ふことが爲すことの意味が初めて能く解つた。私は斯んな怖ろしい現實の事實に接しようとは思はなかつた。」

「又、少時言葉を途切らしたが、「私は最う貴方を自分の方へ引込めようとは云はぬ。何處でも可

い、連れて行つて下さい。私は貴方の行く處へ行く。」

「来て下さい」と、堅く男の手頸を掴んで引寄せた。掴まれた痕が痛い。此世に怨恨を残して死んだ亡霊が、行連ふ人を手當り任せに黄泉の國へ引摺り込むやうな氣もする。引寄せられて、要吉は固より幸福ではなかつた。けれども、斯う成つては最う仕方が無い、如何することも出来ない。

「私は貴方に云ふ事がある」と、良あつて要吉が言出した。「昨日貴方は内の者は皆善い人で、自分だけが不善い——自分だけが一人違つて居ると言つたでせう。」

「え、言ひました。」

「其時は唯それだけの軽い意味に聞いた。私は自分の暗い過去に思ひ合せて、明るい家庭に生れた貴方が羨ましいと云ふよりも、只自分とは遠いものの様に思はれた。が、左様ぢやなかつたのです。二人は生れながら同じ様な運命を背負つて居たのです。」

「暗い波の上を夜駛る二艘の船——互に相手を捜して居ながら、此處知らずに過ぎたら、一生逢ふ期はなかつたかも知れない。」

「私を何んな身だと思つて呉れる」と、要吉は

てゐる。要吉は言葉をつげかけた。
 「貴方は何日か海岸で浪の音を聞くのが嫌ひだと言ひましたね。」
 「ええ。」
 「あの煙は音の無い波浪だ。眼に見える形は如何にも猛烈で、強い力が能つてるやうだが、それと共に絶望だ。何の音も立てない。そこが貴方の氣に入つたのでせう。」
 朋子はなほ黙つて煙に見惚れて居る。殆ど男の側に居ると云ふことも忘れて、只黒い煙の渦巻が風に靡いて散つて行くさまに心を奪はれて居る。
 要吉は凝手と女の様子を見守つて居たが、何時迄も押黙つて居られるのに堪へなく成つて、「何を考へてるのか」とやゝ語氣を荒くして訊いた。
 「ええ」と、朋子は例の遠い所から呼び戻された様な顔附をして、男を見返したが、「何にも考へては居ません。」
 要吉も二たび押しして訊く氣はなかつた。成程自分は此女の秘密を知つた。が、同時に此女の世界から押出されたやうなものだ。何と思つても、最う仕様がなにかも知れない。——要吉は遠い空を眺めながら、一種の漠とした世界苦

に打たれた。
 中坂を下へ降りた所で、腕車を雇つて女を先へ歸らせた。朋子は男の言ふがまゝに一人腕車に乗せられて行つた。車夫が腕車を上げるのを見て、要吉は直ぐ電車の線路毎ひに女と反対の方角へ歩き出した。何處へ行く宛もない。只何處かへ行かなければ成らぬやうな氣がする。日が暮れかゝつたので、行き迷ふ街上の人の足音が小忙しい。電車の鈴も一層賑しく鳴る様に思はれる。何と云ふこともなく胸膨れがして、唯訴へたい、懺悔したい、聲を上げて泣いて見たい。神壇の前に跪いてなどとは云はぬ。自分と同じ様な生きた人間の前でも、聞いて呉れる人さへあれば、あらゆる我儘を離れて正直に懺悔し得られると思つた。幾年にも斯んな心持に成つたことはない。十字街頭の横るが如き往來の中に立停つて、地面を見詰めて居ると、後から來る人が皆追越して行く。何時の間にか、兩眼に一杯涙が溜つて居た。
 見ると、向うに老人の乞食が一人、寒い風に吹かれながら尺八を吹いて行く。毎時見掛けの乞食で、巻頭巾を被つて、大きな包みを背負ひながら、牛の如く歩む。尺八の音は枯れがれて殆ど聞取れない。要吉は側へ近寄

たことが、斯程迄に深刻な意味で虚構であらうとは誰が知つて居ようぞ。あゝあの女の涙——あの涙には毒が有るやうだ、あの涙が自分の頬に痕跡を残さなかつたのは、正に不思議と云つても可い。
 眼を睨ると、朋子の面影があり／＼と泛ぶ。それが如何しても生きた顔が泛ばない。何處かいて見ても、女は冷たく成つて、眼を閉ぢたまゝ寝床の上に横はつて居る。朋子は今でも死んで居るのだらう。親類の人らしいのが大勢枕元に寄つて居る。皆打蕩つた音子をして、一人も物を言ふ者はない。要吉は來るべき所でない所へ來た様な氣がして、一旦は引返さうとしたが、又立戻つて、凝手と女の顔を見て居た。仰向けに寝かされた女の死顔は煙の様に蒼白い。髪は綺麗に梳かれて白い敷布の上に垂れて居る。要吉は我を忘れて枕元へ近づいた。人々の騒いでる間に、倒れかゝる様にして死體の唇へ接吻した。見る／＼死毒が身體へ傳はつて手足が利かなく成つた。四邊がぼんやり暗く成つて行く。
 二人は影と日向と別々の世界に住んで居る。死ななければ接近することは出来ない。朋子は自分の方へ來て呉れと言つた——來て呉れとは、

に打たれた。
 中坂を下へ降りた所で、腕車を雇つて女を先へ歸らせた。朋子は男の言ふがまゝに一人腕車に乗せられて行つた。車夫が腕車を上げるのを見て、要吉は直ぐ電車の線路毎ひに女と反対の方角へ歩き出した。何處へ行く宛もない。只何處かへ行かなければ成らぬやうな氣がする。日が暮れかゝつたので、行き迷ふ街上の人の足音が小忙しい。電車の鈴も一層賑しく鳴る様に思はれる。何と云ふこともなく胸膨れがして、唯訴へたい、懺悔したい、聲を上げて泣いて見たい。神壇の前に跪いてなどとは云はぬ。自分と同じ様な生きた人間の前でも、聞いて呉れる人さへあれば、あらゆる我儘を離れて正直に懺悔し得られると思つた。幾年にも斯んな心持に成つたことはない。十字街頭の横るが如き往來の中に立停つて、地面を見詰めて居ると、後から來る人が皆追越して行く。何時の間にか、兩眼に一杯涙が溜つて居た。
 見ると、向うに老人の乞食が一人、寒い風に吹かれながら尺八を吹いて行く。毎時見掛けの乞食で、巻頭巾を被つて、大きな包みを背負ひながら、牛の如く歩む。尺八の音は枯れがれて殆ど聞取れない。要吉は側へ近寄

たことが、斯程迄に深刻な意味で虚構であらうとは誰が知つて居ようぞ。あゝあの女の涙——あの涙には毒が有るやうだ、あの涙が自分の頬に痕跡を残さなかつたのは、正に不思議と云つても可い。
 眼を睨ると、朋子の面影があり／＼と泛ぶ。それが如何しても生きた顔が泛ばない。何處かいて見ても、女は冷たく成つて、眼を閉ぢたまゝ寝床の上に横はつて居る。朋子は今でも死んで居るのだらう。親類の人らしいのが大勢枕元に寄つて居る。皆打蕩つた音子をして、一人も物を言ふ者はない。要吉は來るべき所でない所へ來た様な氣がして、一旦は引返さうとしたが、又立戻つて、凝手と女の顔を見て居た。仰向けに寝かされた女の死顔は煙の様に蒼白い。髪は綺麗に梳かれて白い敷布の上に垂れて居る。要吉は我を忘れて枕元へ近づいた。人々の騒いでる間に、倒れかゝる様にして死體の唇へ接吻した。見る／＼死毒が身體へ傳はつて手足が利かなく成つた。四邊がぼんやり暗く成つて行く。
 二人は影と日向と別々の世界に住んで居る。死ななければ接近することは出来ない。朋子は自分の方へ來て呉れと言つた——來て呉れとは、

たことが、斯程迄に深刻な意味で虚構であらうとは誰が知つて居ようぞ。あゝあの女の涙——あの涙には毒が有るやうだ、あの涙が自分の頬に痕跡を残さなかつたのは、正に不思議と云つても可い。
 眼を睨ると、朋子の面影があり／＼と泛ぶ。それが如何しても生きた顔が泛ばない。何處かいて見ても、女は冷たく成つて、眼を閉ぢたまゝ寝床の上に横はつて居る。朋子は今でも死んで居るのだらう。親類の人らしいのが大勢枕元に寄つて居る。皆打蕩つた音子をして、一人も物を言ふ者はない。要吉は來るべき所でない所へ來た様な氣がして、一旦は引返さうとしたが、又立戻つて、凝手と女の顔を見て居た。仰向けに寝かされた女の死顔は煙の様に蒼白い。髪は綺麗に梳かれて白い敷布の上に垂れて居る。要吉は我を忘れて枕元へ近づいた。人々の騒いでる間に、倒れかゝる様にして死體の唇へ接吻した。見る／＼死毒が身體へ傳はつて手足が利かなく成つた。四邊がぼんやり暗く成つて行く。
 二人は影と日向と別々の世界に住んで居る。死ななければ接近することは出来ない。朋子は自分の方へ來て呉れと言つた——來て呉れとは、

死んで呉れと云ふ外に意味はない。
夜は更けた。室内は火気に蒸されて春の様である。何時の間にやら戸の外は風が出て、家をも木をも揺がすばかりに、どうつと吹き、又どうと吹く。どうつと吹く木枯の中を白衣を着た人夫に昇がれて、しづ／＼と概が行く。音もなく、聲も立てず昇いで行く。これはわれ自らの概ではないか。眼を開くと火桶の炭は白う成つて、身体は水から上つた様に勞れて居る。此儘静手としてさへ居れば、如何しないでも死んで行けさうに思はれた。
床へ入る前に、要吉は巻紙を解いて、今宵の幻影を細々と書いた。未だ女に送るとも送らぬともはつきり決めたのではない。

二十

戸の隙間の白む頃、要吉は蒲團の中で不眠眼を覺した。最う寝附かれない。昨日一日の出来事が潮の如く頭の中へ戻つて来る。あの様な著しい日の後にも、毎日の通り夜が明けるといふことが、何だか隔されたやうな気がして物足らない。
九時頃、漸と床を離れた。一人朝飯の膳に向つて、不味さうに煮詰つた味噌汁を吸つて居る

と、縁側へ隣家の女の兒が姉妹連れで遊びに来た。自家に乳呑兒が有り世してから、近隣の子供が寄附くやうに成つた。初めの間は寄つてたかつて赤ん坊をあやして居たが、やがてそれにも飽きると、日の當る縁側へ陣取つて、二人で手毬をつき出した。
つゞきつばたの掘井戸は、ほうそり細りと掘る時に、お仙のやぐらに火が着いて、火イチャあるまいかである——
こんな唄につれて、障子に映つた影が揺れる。池の金魚が水面に泛んで、ゆら／＼と陽炎の立つやうな天氣であつた。

要吉は少時二人の影に見惚れて居たが、だんだん昨日の出来事が遠く見えて、まるで別世界で起つた事の様に思はれた。自分は矢張自分の想像に弄ばされて居たのでは有るまいか。日頃から瑣末な物の末に拘泥したり、又は誇大して見る癖が着いて、眞直に物の眞相を掴むことが出来ない。そんな事も今更氣にかゝる。が、それも押詰めて考へて見るだけの根氣はなかつた。只病上りの病人の様に、うつら／＼として一日の日を送つた。不圖、書棚から精神醫學の備忘録を取出して、彼方此方讀つて見て

居たが、未だ所要の項目が見附からぬ間に、何を日當に搜して居たのやら忘れて仕舞つた。
日暮前に郵便脚夫の手から一封の書を受取つた。朋子から来たのである。要吉は上書を見ただけで、何となく悪い前兆を掴まされたやうな気がした。何時か上野の森で逢つた夜の明くる日と云ひ、又昨日の今日と云ひ、何うも好い音信とは思へない。
で、指先を震はせながら、封を開いて讀んで行くと、先づ初めに、「昨日は誠に有難く、年來になき記念すべき一日にて、候ひき」と書き出して、お蔭で人生の内容を殖したのだ、私は實世間に對しては直接の興味しか持たないのだ、何人も人に強ひられて斯く成りしにも候はねば、今更人に強ひられて左右し得るものにも候はずだの、私は何でも彼でも嫌ひな様なれど、又何でも彼でも所好なれば、何時何處へ行くか其時々々に放任いたし置くべく候だのと、一時にも餘る長さを並べて末に、「私只今此手紙を書きながら、少からぬ興味を覺え居候。多分自分のご事許り申居候故なるべしとも考へ申候」と書添へてある。

要吉は長い間讀つて其手紙を見詰めて居た。別段腹も立たなければ騒ぐ氣もない。只、何のしたが、「私、今日被人して下さいますとは思つて居ませんでした。」
要吉は黙つて女の顔を見詰めた。
「眞個な様いふ心算ぢやなかつたんですか——濟みません。今日は如何しても日暮までに歸らないと不可せんから。」
朋子は他所見をしながら早口に斯う言つた。それなら何の爲にこんな眞似をしたのか。單に男の心を試して見たのか。それとも一時の出来心から、何日ぞや霞の降る中に男を待ちぼうけさせた、其同じ場所でも自分も來ぬ人待つて見たかつた——それが餘り容易く自分の希望を充されたので、勝氣な女の常として、どこか物足りないといふのか。要吉は頭の中でいんな想像を忙しく働かせながら、女の顔を見返して居たが、
「ぢや、御一緒に歸りませう」と、無造作に言つた。
で、二人連立つて石段を降りた。要吉は一寸女を振回つて、「毎日の道を歸るのも何だから、お茶の水の方から廻つて歸らうぢや有りませんか。」
朋子は唯慣まじやかに體の上部を曲げた。それが又女らしい素振に見えた。水道橋を渡ら

爲にあの女はこんな眞似をするので有らう。此上欺いたり欺かれたりしたとて、何の得る所が有らうぞ。此方で思ふ心の甲斐なきを知ると共に、女に對しても、索然たる感に打たれざるを得ない。
其夜更けて同じ人から又一通の手紙が來た。床の中で寝ながら讀み下すと、次の様な文句が簡單に認めてあつた。
是非御目にかゝりて申上げたきことの候
まゝ、何卒明日午後三時より四時迄の間に、水道橋停留場まで御越し下されたく、御目にかゝりたる上、何處へとも御供申上ぐ可く候。

「これも待設けて居た通りだ。」
要吉は手紙を枕元に抛り出しながら呟いた。何でも男は此方の思ふ通りに成るものだと思つてかゝつてられる様なのが忌々しい。が、一方には、女の意の儘に右したり左したりするのにも面白いと云ふ様な氣も動いた。女の掌の中に纏弄される——先方の奴隷に成つて、相手を支配する——そこに一種の頹廢した快感がないではない。
明くる日は朝から大學の圖書館へ行つた。薄暗い書庫へ這入つて、紙が朽ちて塵に成る臭ひ

を嗅ぎながら、彼方此方あまつて居たが、宛にした本が見當らぬ上に何うも心が落着かない。何となく池の縁へ立つて、老樹の幹の間から青黒い水を眺めて居た。午後の三時が打つと、遠てて風呂敷包を抱へながら急ぎ足に赤門を出た。芝鼓坂を下りて、水道橋の方へ歩いて行く。土手の上を走る電車が眼に着いた時は、何と云ふこともなく可厭な心持がしたが、自分は矢張斯うするより外に仕方が無いだと思ひ返して、又足を早めた。橋の手前から最うアラツトフォームの上に其人らしい影が見えた。近頃何度となく踏み潰れた石段を上つて行くと、朋子は五十餘りの被布を着た切妻の婦人と何やら話して居たが、急に談話を切上げたと思えて、其女は丁寧にお叩頭をして別れようとした。朋子も煙やかに體を返した。要吉は少し離れて足を留めたまゝ、兩女の挨拶振を眺めて居たが、此時程朋子の様子が女らしく見えたことはいない。昨夜受取つた手紙の主と同一だとは如何しても思はれない。そんな事を思つて居たので、朋子が何へ来て何か言つたのも能くは聞取れなかつた。やがて急に氣が附いた様に、
「餘程お待たせしましたか。」
「いえ」と言つて、朋子はしばらく言葉を送切ら

「今日は何だか言ふべきことを言残して来たやうな気がした。別れた後では、毎もこんな気がする。いつそ後戻りして、追掛けて見ようかと思つたが、やつと押除へて歩き出した。」

二三間来てから、要吉は何だか言ふべきことを言残して来たやうな気がした。別れた後では、毎もこんな気がする。いつそ後戻りして、追掛けて見ようかと思つたが、やつと押除へて歩き出した。

二十一

「園部さんは？」と、若い女子大學生が不意に言出した。金葉會の連中が皆其席へ着いた時である。

「今日は被入しやらないのぢやなくつて？」と、一人が應じた。

「いえ、今し方階下へ来て被入したのよ。何だかお加減が悪さうだつたから、最うお歸りに成つたかも知れないのよ。」

「でも可憐いわねえ、誰にも何とも言はないで歸つたのかしら」と、前のが鼻聲を出した。

「見て来ませうか」と、最初の女學生が立上つた。

「私も」と、今一人が一階に立上つた。二人はばた／＼と廊下を走つて、梯子段を降りる音がした。

神戶は一寸其後姿を見送つたが、何気ない體で又談話を續けた。

「澤井さん、貴方へ差上げた切符は最う無く成りましたでせうね。無く成れば、幾許でも後をお願ひします。」

切符と云ふのは、此處の女學部が何うも不振な所から、其勢力を張るために、廣告がてら演奏會でも開かうと云ふので、既に其日取も極つて、生徒やら關係者やらに切符の擴め方が頼んであるのだ。

「私なんかあれだけでも持餘してゐるんですから、最う澤山で御座います。」

「左様ですかと、神戶も苦笑した。

「皆様が随分困つてらつしやる様ですよ。餘り多いんですもの。」

「眞誠さん」と、神戶は眞向に朋子に話を向けた。「如何です、貴方にも願はれますまいか。」

「はア」と、朋子は今迄他事を考へて居たと云ふやうな顔をした。如何したのか、左の眼に細帯をして居る。

そこへ又廊下に入聲がして、前の二人の後から、三枝子が静に這入つて来た。

「何處へ行つてらして、三枝さん」と澤井が懐かしさうに訊いた。

「え、一寸と言つたきり、三枝子は座に着いた。派手な何處となく陰のある顔で、下町風な

ないで、眞直に駿河臺へ上つて行くとして、

「先刻貴方と話して居た人は、御存じの方なんですか。」

「え」と解らなさうに、男を見返したが、「彼方ですか。初めて彼處で會つただけなんで御座います。」

「左様」と言つたまゝ、又五六歩歩いた。やがて、「何日かのお手紙にダブル、キヤラタア」といふ事が有りましたね。如何いふことなんです、あれは？」

朋子は黙つて居た。

「只性格に極端な兩面を有すると云ふことか、それとも心理學などでダブル、パアソナリティと云ふ様な意味なんですか。二つの人格が代る／＼働いて、其間に連鎖がない？」

「何方だと思ひに成つて？」と、突込む。

「そんな事は私には解らない。後者なら丸で病的な状態だし、又性格に二つの側がある」と云ふだけのことなら、大抵の人は皆二重にも三重にも持つてゐるでせうね。」

二人は黙つて歩いた。すべて戀人は無言で居る時に最も了解し合ふと云ふではないか。それに、要吉は黙つて居る時ほど、相手の心を探らうとして、氣の焦躁することは無い。勿論、二人

は戀人ではないので有らう。

お茶の水橋の袂へ出た時、朋子は急に想ひ附いたやうに、

「ね、ニコライへ行つて見ませうか」と言出した。

「え、行つて見ませう。」

又一町許り東へ行くと、黒い鐵の扉の閉つた石の門がある。扉の小門が開いて居たので、そこから這入つて、禮拜堂の前へ出た。二人は玄関を上つて行つた。圓天井の下は唯ひる／＼として、軽く踏む足音さへ胸を冷す許り高く四邊に反響した。高い窓から射す薄い光線に照されて、眩い程輝立たした正面の金箔の色が落ちて見える。真中にある聖晩餐の繪を初め、基督一代の奇蹟が陳問もなく書かれて、其前に並べた黄金の大燭臺が人の眼を惹く。

男と女と、二人の不慣れな人気がない祭壇の前に並んで立つた。要吉は正面の聖晩餐の繪から眼を離して、徐々々と朋子の方を振回つた。朋子も漸次に男の方へ顔を向けたが、二人の眼を見合せた時、片頬に薄く笑つて見せた。要吉は女の顔に何とも云はれぬ不快な雲がかゝつて居ると思つた。カインの刻印だと、心の中で叫んだ。女の笑顔が消えて行くと共に、自分の

生命の精を奪ひ去られるやうな気がした。

「最う出ませうか」と、良あつて朋子が言つた。

二人は踵を回さうとした。其時迄誰も居ないかと思つて居たが、祭壇の下に長い白髯を生やして、小倉の袴を着けた老人が眠つたやうに静に懸掛けて居るのが眼に着く。堂の番人であらう。

禮拜堂の横手へ出て、二人はその石段を降りるやうにして下つた。門の扉の前に立つて、今一度下から禮拜堂と其側に立つた高い鐘樓とを見上げた。空の程かな日であつた。

「石段が好い。寺でも社でも門前に石段のないのは好くない。」

「鐘合は石段の多い所ですよ」と朋子が言つた。

「あ、貴方は鐘合がお所好でしたね。」

「夜分に好く八幡様の石段の上へ行きました。」

「夜分に？」

「鳩がよく啼いて居ました。」

「又お茶の水へ出て、本郷三丁目から道分迄来た。二人は袂を分つた。

「明日金曜日はですね。」

「先生被入しやいますか。」

「参ります。貴方も。」

朋子は頷いた。

ふ言葉が、如何にも毒々しく響く。幾度も同じことを書いては黒く塗り消して居たが、其次へ持つて行つて、如何に愛するも其甲斐なきを知ればなり」と附加へた。それから次々に書き足して、斯んな手紙を書上げた。

「われは執拗に君を愛す。日夜に君を想ひ、君を慕ふ。いかに想はむも其甲斐なきを知らばなり。君より愛せらるゝ日の永劫来らざるべきを知らばなり。これをしも戀なりとすれば、世に斯かる望み絶えたる戀を爲せしものありや。知らぬ、知らぬ、爲す所を知らぬ、出づる所を知らぬ、逃るゝ所を知らぬ。戀それ自體が刑罰なり。切めてもわれは永く其刑に服してあるべし。永く君が冷徹なる瞳子の中に生くべし。されど唯一昨日の手紙の様なるは堪へじ。君の手に成らずとせば、冷徹を過ぎて寧ろ輕薄に流れたるものとも云はまし。昨日の君が態度の如きも、如何に解くべきか。冷徹は尙堪ふべし、輕薄に至りては終に堪ふべからず。われ獨り居て君を想ふ時、毎に君が早く死すべきを思はざる能はじ。君は若くして死ぬ人なり。君の如くにして何時迄か

生くべき、何時迄か生くべき。」それを手帳から引裂いて、小さく巻んで衣袋へ入れた。間もなく神戸の話が済んで、皆が又椅子を火鉢の周圍へ引寄せようとした時、要吉は何氣なく朋子の名を呼んだ。

「はア」と言つたまま、朋子は立停つた。「あの先達てのお訊ねのダンモンチオですが」と、要吉も二三歩近附いた。「ダンモンチオの？」「彼處は大抵斯ういふ意味だらうと思ひますが、今一寸書附けて置きましたから」と早口に言つて、紙片を朋子に手渡した。朋子はそれを受取つて、黙つて頭を下げた。「一寸神戸の方を振回ると、最う他の女生徒を相手に今度の演奏會の話をして居た。要吉もそれに加はつて、少時難談に耽つて居た。何と思つたのか、朋子は少し用事があつて急ぐからと、一人先へ戻つて行つた。神戸は座談に長じて居た。特に自分よりも劣つた者を相手にする時、其成功は日ごましかつた。常に好んで未來を語つたけれど、心は他處に現在に繋がれて居た。それが爲に、餘り目前の効果を収めることに焦燥り過ぎる嫌ひはあつたが、其少し瘡せた顔に紅を潮して、自分の言

つてすることに、確信を持つてゐるやうな聲で語り出すと、聴手は唯酒にでも酔はされるやうに見えた。殊にそれが若い女であらうものなら、神戸は一層眞面目に成つた。苟も婦人の前で冗談を言はないと云ふのが、日頃此男の格好であつた。

「何うだ、最少し一緒に話さう」と言出した。要吉は黙つて其意に従つた。人通りの少い飯田河岸から、外濠の土手に添うて番町の方へ歩いて行つた。途々神戸は毎も口癖の「時代が悪い」といふ話を仕出した。思ひの儘に自己を發揮することの出来ないのは、時代と自分との關係が悪いんだ。自分が悪いとは如何しても思はれない、又思ひたくない。斯んな話から、如何しても雑誌を編輯して見たいと言出した。「批評」といふ題で、一つ純批評の雑誌が持つて見たい、極手薄な物でも可いから、内容のしつかりした、何人もそれを讀まずには居られない、縦し讀まないにしても、見得にでもそれを購ると云ふやうな、それ位な力ある雑誌にしたい。

それから未だ其雜誌の經營について、誰に書かせるとか書かせないとか、實際そこに物を採へたやうな委しい話をして居たが、急に調子を落して、「これも僕のことだから計畫だけで、何時實行するかも分らないが」と、自分で自分を嘲る様に言つた。

「左様さ」と、要吉も軽く受けて、「片手に戀をして片手に仕事をするのは些と難かしい。トルストイが言つたといふぢやないか、そんな邪魔なしに戀をするのは結婚するに限るんだと。」「トルストイの言ひさうなことだ」と言つたが、神戸は何か想出したやうに、「ね、吉野貞子は此頃彼方で分焼したと云ふことだね。」「へえ」と、振回つて、相手の顔を見ながら、「随分病身だつたと云ふぢやないか。」「病身だつて子供を生まないと限らないさ、君は時々面白いことを言ふよ。だが、子供を生んだが爲に性來虛弱なのが健康に成ることもあるとは云ふね。それからだん／＼肥立つて、頑丈に成つて、存外長生きでもされたら——」「そして曾日自分が美しかったと云ふことも忘れて仕舞ふ様に成つたら——少し悲慘だね。」斯う云つて、二人は顔を見合せた。話題に上つた貞子といふのは、一昨年三人の名で歌集戀

衣を出した中の一人で、一番若く、美しく、そして一番先に人妻と成つた女であつた。「で、何かい」と、要吉は相手の顔を見詰めたまま、「最一人の——彼人は矢張京都に居るのかい。」

「左様だらうよ」と言つたが、神戸は一寸空を見上げて、「似てるだらう、え、君は左様思はんか。」「三枝子にか」と、少し背ひ難い顔をした。「君は一人について見るから不可い、ばつと映つた顔全體の印象さ、あの派手な趣味も似てるぢやないか。」「左様言へば、左様さね。」神戸はなほ三枝子について、いろ／＼語つた。そして最後に、「斯うして、君に話して此處に戀を再現すれば、直接相對して居る時と、殆ど同様の享樂が得られる所から見れば、百々の戀は如何しても藝術的だね。何うも眞面目とは云はれない。」「眞個左様だ」と言つたが、要吉は未だ自分のことは一言も云つて居なかつた。人に語るには、餘りに手馴れない感である。「時に君達は電車で東山に通つたさうだね。」要吉は一寸友達の顔を見返したが、「違つた

「何でも君が煙草を逆さに喫んだのを見て居たさうだよ。」「煙草三本」と云ふ題で短篇を書かうかと云つて居るんだ。」「さ、書かれても仕方がないかも知れないね。」「それから、これは何日か君の言つたことだがね、舊い羈絆を絶つために新しい羈絆をつくると云ふことが、あの仲間で近頃流行つて居るさうだよ。」

「僕はそんな事を言つた覚えはないさ。」かう言つて、要吉は苦笑ひに紛らした。

二十二

此方にも聞えて居た。
「此女も黙つて苦しんで居る。俺のために、黙つて小さい胸を痛めて居る。」
要吉は遠ざかる足音を聞きながら、心の中で思つた。先刻から震た振をして、隅江の素振を一々見て居たのだ。尤も苦痛と云つた所で、此女に相應した取留めもない不安に過ぎなからう、此女を慰めて、其苦痛を除いて遣る位のこととは譯もない。それだけの事すら自分は仕ないで居るんだ。が、黙じそんな事をするのが却て残酷の極にも、可哀想の極にも思はれる。それは是迄も打拵つて置いた。隅江に取つては、斯うして何とも言はないで忍んで居るといふことが、一番此女の身に適つたことかも知れない。それが最も好く此女の美しい所、尊い所を發揮するのだ。自分はそれを知らぬではない。恐らくは常人すら思ひ及ばぬ程に認めもし、同情もして居るんだ。それだけでも隅江は憐れられて餘りあるではないか。——要吉は斯んな論理の不當なことも、爲我一點張であることも気が附かぬではない。時には自分がエゴイズムの化身でも有る様に痛ろしく見えることもある。が、自分で自分が安心するためにも、何處迄も此理窟を押し通して見ずには居られない。

で、頭を上げて見ると、手紙は誰から来たといふことが直ぐ眼に着いた。
先生、私歸宅を急ぎそはく、と歸りしこと可憐しと御覽遊はされてか。「これはあのダンメンチオの」と、先生の御手より白き紙片の我手に落ちたる時、我胸の中にては「香々」と響き候。其大騒ぎの中より、何で御座いますと再び御問ねいたし候時、先生は又ダンメンチオの、と仰せられ候。「否々」と、私は四角に頭を下げて御禮いたし候。傍には神戶先生あり、岡部姉其他あり、興ありと思召してか。私一期も早く家に歸りて開きて見たく成りし故にて候。
人は冷酷とも不貞操とも不道面目とも云はれ云へ、最早私には何等の痛痒なし。さはれ、先生の御手よりは決して二度とは云はせまじく候。冷酷は尙忍ぶべし、輕薄は堪ふ可からずとは、私より申出たき言葉に候。私の冷酷なるは事實に候。時には輕薄なる言葉さへ、仕打さへ、ひよいくと出ること能く承知の上にて候。されど先生だけは、よもそれを答

め給はじ、寧ろ如何にして斯く成りしかを恨れみ下されても然るべしと存候。舞舞を好む者には候はねど、先生に對してはお煩冗くとも難免辨解もいたしたく候。自分以外の總ての物に興味を失ひし絶望の結果はインデフアレントには候はずや。何が何でも、如何でも好く成りしに候。若し私の仕打に輕薄とも見ゆるものあらば、此如何でも好い形の髪へたるものに過ぎず、今後は「又か」とでも御注意下されたく、私全く知らぬ間に意味もなく目を洩れ出づるものに候。曾ては普通以上に自信心強き者なりしも、今はそれさへ用ひ盡して既に死せる針金に候。情なき者に候。
斯んな矛盾だらけの私、生涯自らより外なる人に解されむこと夢にも想ひかけざりしに、今宵の如く、然るに感じ候こと、生れて初めて候。多分初めの終りなるべく、過去二十年の無意味なりし生涯、今にして思へば生甲斐ありしよと涙も浮び出で申候。内に向つて流るる涙は寝ても覺めても絶えざりしに、近頃はそれが溶けて外に出づる様に成り

申候。
さは云へ、矛盾は自らも持備しものに候。矛盾に矛盾を重ねては終に無に歸する外なく、こゝに至つて、私は却て心持好く感じ居り候。無なり、空虚なり、我なく、人なく、思ふものなく思はるものなし。全くピヨントの境なり、思惟の外なり、想像を絶せり。それが好く候、それが好く候、それを我れ思れりと思ふ思ひに生きた申候、私の最後の興味は涅槃寂靜の日に響かれ居り候。此日を味ひ樂まむがために候。日夜様々な事を考ふるも、最後はそこに歸し申候。私に取つては死が唯一の懸崖なることに残り居候。されば却々容易き事にては死するを惜しと思ひ申候、眠るが如く死ぬるやうな不幸は考へて見るだけでも可厭に候。却々未練多く、死に行く最後の最後まで、内も骨も腐敗に成りて飛散し盡す滅絶の最後まで、靜に見届けて味ひ盡したく候。今こそ斯くてあれ、來らむ其日を思へば、漫ろに怖ろしくも覺え候。——我寂滅の日は、やがて君が寂滅の日と覺悟したまふや。餘り氣が立てば、我なが

ら何を書くやら覺束なく候、かしく。
要吉は思はずむつくり起上つた。更紗校様の夜着の上に、長く巻袖を捲げたま、何時迄も動かなかつた。胸の中は攻鼓を打つ様に動悸を打つ。因より女から受取りたいと思つたのは斯んな消息ではない。女はあらぬ方に逸し去つて、両も尙自分に離らうとするやうな風情を見せて居る。それがむづかしい、耐えられない。只、此女の言ふことは、考へると同時にそれを實行しきうな氣勢が見える。思想が感情を伴つて居る。頭で考へるのでなく、心臓で考へる。尤も、此手紙にも故と誇大したやうな所がないでもない。それが幼穉にも淺薄にも見える。が、一たび此女の背後に消む黒い影に想ひ及んで見ると——如何しても、此女は自分の手に自分の生命を握つて居る。何時でも自分は自分の主人で有ると云ふ自覺を持つて居るらしい。要吉は首を傾げながら、幾度か心の中で最後の一句を繰返して見た。「我寂滅の日は君が寂滅の日と覺悟したまふか。」
やう／＼氣が附いて、平常着に着換へようとした時は、一重の裏巻を透して、身體が氷の様に冷たく成つて居た。

其後一週間許り續つた。要吉は圖書館からの歸途に大學の正門を出ようとする、街一杯に砂塵を捲上げて、一時は向側も見えない。少時立停つたまま、風が通り過ぎるのを待つて居たが、偶と期子の後姿が眼に着いた。五六歩其方へ隨いて行く。向うでも仰見もせず、ずんずん足早に歩いて行くので、一町許り行つて漸く追附いた。期子は要吉を見ると、一寸足を留めたが、何とも言用さない。
「大學の前から隨いて來たんですと、おづ／＼相手の顔を見ながら言つた。
「些とも存じませんでした。」
女の舉動は何となく素氣ない。何時迄立つて居ても果しがたないので、
「其處まで一緒に参りませうと、男の方から言出した。
二人は足を緩めて、別に談話をするでもなく、追分の酒舗の前迄來た。要吉は此處でも別れる氣に成れなかつた。やがて人通りの少い町へ這入つた時、
「今日は如何して此方の道をお歸りなんです」と、訊いた。

「自家から少し買物を頼まれましたから」と、朋子は尋常な答をした。「それに、お茶の水の學校へ通つた時は、毎日此道を通つたんですの。」

其頃は女生徒の中の運動家で、テニスの選手であつたさうな。女子大學の家政科へ移つてからは、三年の間、毎日試験管弄りばかりして暮した。それから寮舎の生活やら校長の噂など一人面白さうに話をつづけた。要吉は俯向いたまゝ黙つて歩いて居たが、不意に、

「何故」と訊き返した。

「何です」と、女も顔を上げた。

「いえ、唯貴方がね、試験管いぢりが所好だと云ふこと——それが如何云ふ理由かと思つて。」

「え、それは、あんなに結果が精確に出るものはないから——」

要吉は何か言はうとしたが、思ひ直して、其儘顔を背向けた。此女は何を試験管の中へ入れて驗して見たので有らう。此女自身である。此女自身の魂である。此女は自分の魂を試験管の中へ入れて、あからめもせず、潔手と其反應を見守つて居たに違ひない。其結果は如何なる！ 狂人だ。狂人でなくとも、狂人に成る外に行く道はない。

やがて二人は、やちや場の坂の上迄来た。要吉は黙つて圓子坂の方へ歩を曲げると、朋子も何とも言はないで隨いて来た。慢るに往き行いて、谷中の五重の塔の下から日暮里へ出ようとする。薄暗い木下階の坂へ差しかつた時、

「先達のお手紙は確に頂きましたよ、要吉は思ひ入つた様に言つた。少時黙つて歩いて居たが、又言葉をつづけて、」成程二人の行く道は並行して居るかも知れない。が、それだけに、何處まで行つても出合ふことは有るまい、ね。」

「え、私ね」と、朋子はぐるりと振向いた。「お友達の中に疾うから先生に御紹介したいと思ふ方が、一人有るんですよ。其方はそりやア面白い性格で、乾度先生のお相手が出来るに違ひない。」

何を——何を言ふのか。要吉は思はず相手の顔を見返した。此女は自分が何を求めて、此處へ来たと思つて居るのだらう。あの顔、あのはいやいだ聲——矢張自分を調戲つて、外らして仕舞ふ簡かも知れない。が、此方の心持が眞面目だけに、何だか都合ひのない心持がした。二人は又墓地の下の線路を横切つて、日暮里の通りへ出た。と有る牛舎の横手から小徑を傳

つて行くと、田圃の中に、「兩忘塵」と横に自然木の頭を掛けた小門がある。朋子は其庵室に友達が居るから寄らうと言つたが、何となく気が進まないから止めにした。庵室の裏から三河島一帯へ掛けて、ところ／＼に腐つた稻の斷株が残つて居る許りで、荒れ果てた田野の中には眼を遮るものもない。二人は畦道を傳つて歩いた。朋子は幾度か下駄を泥濘に吸ひ取られた。折角来ても狭い溝のために半町の餘も後戻りを爲せられたりした。

空は薄曇つて、午後一時頃の弱い日影が射して居た。遠くから見れば、二人の影は夫婦のやうに纏れたり、離れたりした。海岸線の鐵道線路が向うに高く見えて白く塗つた柱の横木が下つて居る。汽車が停車場へ着くのであらう。

二人は兎角して線路の上へ出た。少時其土手の上を傳つて歩いたが、踏切のある所から小路を通つて、三河島の村中へ這入つた。晝寝をしたやうな寂かな村である。少許行くと千住へ通ふ往還へ出た。それに隨いて又少許行くと、道が二又に岐れて、其角に石の地藏尊が立ててある。何心なくそれを左へ取つた。

村を出離れると、淋れた田圃の中を一筋眞直な道がつゞく。道の盡くる所に一構への目に着く。被處へ身を投げると、見る／＼人間の身體が灰に成つて降るといふことですね。つまり自然の儘に捨て置けば、三年なり五年なり掛つて行はれる分解作用が、僅に五分間に行はれるといふんです。朋子は只黙つて居た。要吉もそれ限り何とも言はないで、又歩き出した。路はうね／＼と曲り軒つて、又町の瓦屋根が向うに見え出した。成るべくそれへ近寄るまいとしても、一筋路は次第に其方へ近附いて、やがて千住大橋の袂へ出た。此街道は都賀と田舎とが直接接觸する所だけに、眼に見ゆる物の色が昔日に繩せて、何處やら埃臭い。橋の上に立つて、どろ／＼とした水の面を眺めて居ると、荷車の通る度にゆさ／＼と橋板が揺れた。昔から幾人此橋の上に立つて、あの暗い水底を眺めたらう。引込と見えて、水は井を汲たまま、ずん／＼下へ流れて行く。此水を五分間つゞいて眺めて居たら、乾度其中へ引込まれて飛込むに違ひない。要吉は何か言はうとして止めた。

やうな建物があつて、赤煉瓦の高い煙突が屋後の屋根から突出して居る。要吉はそれに眼を附けたまゝ、

「火事場でしたな。」

二人は目じろきもせずそれを見詰めたまゝ、其方へ足を運んで行つた。此不吉な建物は此寒い日の此寒さうな四邊の風物と相應じて、何事かをしめし合せて居るやうに見えた。

其時背後から一挺黒煙の龍が来て、二人を追越して前へ出た。それに續いて二三臺の輪車が行つた。何れ身寄の者を焼き持つて行くのであらう。人足は息杖をついて、足の續くだけせつせと歩んで行く。輪車は見る／＼遠ざかつた。急に地から湧いてでも出たやうに、ばらばらと乞食の群が飛んで来て、此一行を取巻いた。しばらくは輪車と一緒に成つて、何處までも隨いて走つたが、其間一人後れ二人後れして、一行は難なく白く塗つた火事場の門をくゞつた。

二人はそれを見送りながら、別に何とも言はないで、偶と足許に物乞ひの聲がする。見ると水膨れた垢黒い顔をした男が、故と不具の足を露出しにして、顔にまるく白い砂を着けながら、底の濁つた聲で人を叫ぶ。要吉は手早く紙

人を出して、銅貨を其前へ投げて遣つた。其儘行かうとすると、又一人老婆の乞食が物憐れな聲で強談判ながらくつついて来る。指が三本しか無い手を此方の身體に觸る迄蒸出して、顔に頭を下げる。要吉は胸が感く成るやうな思ひをしながら、又友人から小錢を遣らうとすると、急ぎに前の老婆を押退けて、他の奴がそれを奪つて仕舞つた。老婆は嘔み閉くやうな聲を出して、前にも増して執拗くせがんで来た。要吉は仕方がないから又出して遣つた。それを見ると、前に着つて居た乞食の群がわつと一緒に成つて押寄せて来た。

「彼方へ行きませう、先生、煩いから彼方へ参りませう。」

朋子は泣聲を出した。二人は逃げる様にして横道へ反れた。二三町行くと、其處迄は流石に乞食も隨いて来なかつた。只、此細い路を傳つて行つても何處へ出られるか分らない。一歩毎に東京から遠ざかることだけは確かだけれど、要吉は最う一度振返つて、火事場の煙突を眺め遣つた。人を焚く煙は未だ出て居ない。

「ね、阿婆の噴火口」と言ひかけて、側に立つて居る朋子を見た。「え」と、女は乾いだ唇を開く。

「ね、阿婆の噴火口」と言ひかけて、側に立つて居る朋子を見た。「え」と、女は乾いだ唇を開く。

から左へ折れると、荒川堤の上へ出た。土手から河面まで四町許り、一面に枯れた蘆が生えて居る。

二人は風に逆つて歩いた。白づと眼に水が溜る。

「土手の下へ降りませう」と、要吉は風上から背後を向いて言った。朋子は手に持った包みを開いて、風を避ける様にしながら、何か言つたらしいが、言葉は唇から風の爲に吹き飛ばされて能く聞えない。

要吉は堤の小段を駆け下りて、黄色く枯れた草の中に腰を下した。朋子もついて降りて、其側に小さくしゃがんだ。土手がぐの字に曲つてゐるので、此處だけは風も通らぬが、前はざわざわと強く蘆の葉揺れの音が絶えない。それが皆生きてゐるやうに思はれる。自分達と同じ様に考へて居るんだとも思はれる。只、何故とも知らず怖ろしい。

朋子は真直に自分の前を見詰めて居た。鬢の毛が風にそよけて、唇の色が滲んで見える。要吉は「じろく」女の横顔を見送つながら、幾度も言出しかけて見ても止めた。何だか女の方では男が傍に居ると云ふことも忘れて居るらしい。だん／＼男の心の中には、樽の火から薄

い煙が昇る様に嫉妬の念を生じて来た。あゝ息が塞るやうで堪らない。何れにしても、吹く風の中で逢ふに應はしい女だ。闇の中で逢ふに應はしい女だ。

「私は初め」と、やゝ有つて、要吉は重い口を開いた。「私は初め貴方の心を自分といふもので充したと思つた。それが私の此世で抱いた一番大きな望みだつた。併し最う其望みも捨てました。」

斯う言つて、口元に淋しい微笑を浮かべながら女を見た。又言葉を續けて、

「ね、私は最う貴方に愛して貰はれようとは思はない。如何して貰はなくても宜しい。唯、これから貴方のために私が如何變化して行くか、それだけを見て居て下さい。ね、見て居ると言つて下さい。」

要吉は涙に成つた。涙含んだ眼に、凝手と相手の返辭を得て居た。女は少時もぢ／＼として居たが、やがて、

「今は見せて置きます。」

「今は？ 何故左様です」と、要吉は詰るやうにして、今はでなく今はだけ取消して下さい。」

「それなら皆取消します。」

要吉は無言で女の顔を見詰めた。其儘長い草

の中へ仰向けに倒れて仕舞つた。

朋子はそれを見送つたまま、別に介つて呉れようとは仕なかつた。こんな田舎廻りの役者めいた表情に依つて、女の心が動かされようとは男の方でも思つて居ないが、假令言葉や素振に虚偽はあるにしてもこの心持——この遺物のない心持に虚偽はない。何故この心持が素直に眞實の儘人に傳へることが出来ないのだらう。

若しそれが如何しても出来ないとなれば、左様云ふ約束を持つて生れて来たとなれば、眞個一人置いて行かれたやうな氣がして心の底から淋しく成らずには居られない。

要吉は起直つて、久らく俯向いたまま、黙つて居たが、やがて投出す様に、「え、貴方が見て下されなければ、私が見せるまでです。」

又言葉を途切らした。やゝ有つて、「あれは如何いふ意味です。最後のお手紙の一番終ひの所にあつた、あの一句は？」

朋子は一寸相手の顔を見返したが、又其眼を反して、「あれは唯、あの時あんな事が書いて見たかつたのです。」

「ぢや、あれもあの時きりの話ですね。」

それには返辭をしなかつた。口頃言葉少なな女ではあるが、今日は殊に初めから口を噤んで

たま／＼出て来て、茶筒の上から手紙を取つて渡した。故と其前で封を切つて見ると、

「本日午後四時に上野公園西郷銅像の下まで御越し被下たく、かねて淺草の親戚へ參る筈に成り居り候へば、其前には如何しても時間の餘裕これなく、早々。」

今最う四時を餘裕過ぎて、五時に近い。要吉は手紙を持ったまま、饜食な聲で、「これは何時頃着いたのか。」

小母さんは返辭をしなかつた。隅江は小母さんの顔を見て、「一寸ためらつたが、

「貴方がお出掛けやアすと直さした。」

「左様か」と言つたまま、要吉は手紙を扶へ入れて、又下駄を穿いて出掛けようとした。隅江は只浮かぬ顔をして、それを見送つた。

要吉は上野の入口で腕車を降りて、石段を登つて行つた。日の短い頃ではあるし、空模様も怪しいので、竹の葉は掃いた跡の様に人影もなうとすると背後から呼ぶ者がある。振り返ると、それが朋子だつた。何時になく紺絨のコートなぞ着て居たが、何を急いだのか息を喘ませて居る。

「合ひませんでした」と、背後を振り返って、「今丁度そこで先生をお見掛けしたのです。」

「左様でしたかと、要吉も冷淡に言つたまま、黙つて考へて居たが、「それぢや、兎に角御家の方へ歩いて行きます。又遅く成つても不可せんから。」

二人は動物園の前へ出て、谷中の畜場から園子坂の方へ行く道を取つた。途中で朋子は着て居るコートを引張りながら、

「可笑しいでせう、袴を穿いて斯んな物を着てゐるから。私一人です。」

「昨日お風邪でも引いたのぢや有りませんか。」

要吉は在外前日に言つた。朋子は左様だとも左様でないとも言はなかつた。やがて園子坂の方へ曲る角迄来たが、それを曲らないで、何とはなしに、兩脚に松の生えた閑かな道を五重の塔の下迄行つた。又踵を回さうとした時、要吉は並んで引添うて居る女に顔を背向けたまま、

「私は昨日貴方に別れてから、如何しても堪へられなく成つた。堪へぬ、堪へぬ。私は、私一人で貴方を占領したい——貴方に愛されたい。貴方の眼に私以外の男との間に區別がない様なことは逆も堪へられない。」

斯う言つて息をつきながら相手の返辭を得た。

「朋子は何時迄も物を言はない。折柄上り列車が人の耳を聳するやうな、氣味の悪い音を立てて、二人の顔に生暖かい風を打つてながら通つた。」

汽車の音が長く尾を引いて、森の彼方に消えた後は、一しきり魔物の通つた後のやうな沈黙がつづく。女は石の様に黙つて居る。要吉には、それが自分ならぬ外の者——恐らくは此世ならぬ他界の者、他人には解らない會話をひそひそと續けて居られる様に思はれて、遺溺がない。いよ／＼此女に近寄る望みを捨てなければ成らぬかと思ふと、胸は大石で抑へられたやうで、只最う子供らしく其處へ泣き倒れたい。

「如何することも出来ない、私は如何することも出来ない。」

要吉は前へ廻つて兩手で女の肩を掴みながら、前後不覺に減茶々々なことを言出した。貴

た。朋子はたゞ黙つて居る。二人は茶屋の裏まで来て、根岸へ抜ける路を左へ取つた。墓地の中は木の葉迄じめ／＼として薄暗い。頭の上では、大きな星が一つ雲の途切れに光つて居たが、間もなく消えた。二人はそれを見なかつた。

「ね、先生はこんな様な経験がお有んなさいませんか。」朋子が不意に言出した。

「え、？」と、要吉も振り回つた。「何んな経験？」

「夜なぞ、一人で坐つて居ると、四邊がきらきらと海の底の様に輝く。左様すると、今迄混沌とした頭が一時に爽やかに成つて、眼もはつきりと物の裏迄見える様に成る。」

要吉はぎく／＼とした。此女は何を言ふぞ。癡痴の發作前には好くそんな症候を見るものだとはドストイエフスキイの小説でもたび／＼讀んだ。が、此女にそんな物が——

「ね、そりやアと、少時して訊いた。「自分で故と左様しようとして左様成るのか、それとも自然に成るのか。何方です。」

「何方でもと、女は男の側へ寄添ふ様にして、「曾日はわざと左様したのが、今では自然に左様成る様に成つた。自然に左様成る時は、幾許それに抵抗しようとしても力が及ばない。」

「ふむ」と要吉は吐息をついた。成程如何かす

それが何だか正常な道理がある様に思ふことさへある。」

御院殿の坂を降りて、其下の踏切を越した。其處に毎も霞張りの茶店があるのが、今は店を仕舞つて縁臺も伏せてある。二人は立寄つて其端に腰を下した。雨の降つた後で、板が温々する。

朋子は何時迄も物を言はない。折柄上り列車が人の耳を聳するやうな、氣味の悪い音を立てて、二人の顔に生暖かい風を打つてながら通つた。」

汽車の音が長く尾を引いて、森の彼方に消えた後は、一しきり魔物の通つた後のやうな沈黙がつづく。女は石の様に黙つて居る。要吉には、それが自分ならぬ外の者——恐らくは此世ならぬ他界の者、他人には解らない會話をひそひそと續けて居られる様に思はれて、遺溺がない。いよ／＼此女に近寄る望みを捨てなければ成らぬかと思ふと、胸は大石で抑へられたやうで、只最う子供らしく其處へ泣き倒れたい。

「如何することも出来ない、私は如何することも出来ない。」

要吉は前へ廻つて兩手で女の肩を掴みながら、前後不覺に減茶々々なことを言出した。貴

方私を騙した、論吐きだと言つた。貴方は如何しても私を愛するんだ、愛せずには居られないとも言つた。朋子は肩を掴まれたまゝ、靜に男を見返した。仄暗い宵闇の下に、顔の色は能くも分らぬが、男の顔にかゝる女の息は火の様に熱かつた。

「貴方は私を愛するんだ、愛せずには居られない。」

要吉は執拗く繰返した。

「私、愛せました」と、朋子は初めて口を利いた。手ぐく包みの中から短い小刀を取出して、要吉の手に押らせた。

「これで何處でも可いから、私の肉を裂いて——血を吸つて下さいまし。それより外に、兩人が一つに成る道はありません。」

要吉は小刀と一緒に女の手を支へたまゝ、少時物が言へなかつた。肉を裂いて血を吸る。趣味としても可厭な趣味だ。一種の偏狂かも知れない。

「そりや」となほ堅く女の手を持つたまゝ、「そりや私に、一緒に死ねと云ふことか。」

斯う言つて親手と女の顔を見詰めて居たが、「私は死ぬ。貴方と同じ因由でなら死に得る。併し貴方は貴方のために死に、私は私のために

ると、此女にはそんな病氣があるかも知れない。が、併しそれが何だ。要吉に取つては、女の上よりも自分の身の上である。何時迄もそんな事を考へては居られない。

「愛させる／＼、何處迄も愛させる」とやがて自分と自分に言ふ様に言つた。「私は斯うして此様に貴方を思ふのが、貴方の前に新しく、跳くやうな氣はしない。今迄奪はれて居たものを取返すやうな氣がする。」

又二三歩行つて、一だから私の戀は復讐だ。痛切な復讐だ。」

路は樹蔭へ這入つて、いよ／＼暗い。辻の當夜燈が赤く見え出した。要吉は前に立つて歩いたが、折々朋子の足音が聞えない様な氣がして、振り返つて見ると、直ぐ背後へくつついて来て居る。其儘又向き直つて歩き出した。

「此戀を今初めてするとは思はぬ。一度有つたことを繰返すやうに思はれてならぬ。それが此世で有つたことぢや無いかも知れぬが、生前或因果の縁で縛られた、其因果を今果して居る、それでなけりや、斯んな冷嘲な——どうせ無駄と分つて居ながら、斯んな苦しい戀を繰返したけりやならぬ筈はない。情ないやうだが、私は貴方に對して最う執心さへ持つ様に成つた。」

「先達ての晩も、最少して方々へ使を出す所でしたから、今夜は先生のお宅へ最う母が参つてゐるかも知れません。」

「阿母様か？」

「え、上れば母が参ります。」

要吉は黙つて二足三歩を移した。朋子も後から隨いて来た。

「私の様な者が——これ迄家に居たのが間違つてゐるんですから仕方が有りません。」

坂下の新道へ曲る角迄来た時、要吉は立停つて、裏手と女の顔を見守つて居たが、

「何處かへ、何處かへ行つて仕舞はうか。」

朋子は頷いた。

何處へ行く。唯都の外へ出たい。懐中持合せもないが、錢の有るだけ汽車の切符を買つて、出来るだけ遠く東京を離れたら——汽車を降りると、直ぐに執行せしめられまい。

女が頷くのをみると、要吉は自分にも考へる邊を興へないで、根柢の新道を南へ急ぎ足に歩き出した。夜も深けたらしく、街の上にも灰白う霧が降りて居るが、人通りは割合に多い。二人は其中を縫うて渡るに歩く。

四五町行くと、朋子は後から呼び留めた。

「私、矢張り参ります。」

要吉は濃い夢の中から見る様に女を見詰めた。

「今夜は参りますが、何うせ自宅には置きますまいから、明日の朝玉子に居る友達の所へ、一時遣つて貰つて、正當に家を出るやうに計画します。」

「それぢや——え、左様成さる方が可いせう。」

二人はしばらく顔を見合せたま、途の上に立つて居た。其儘、又踵を回した。

玉子に居る女の友達といふのは、朋子が唯一人持つて居る友達で、一私のためには何んな事でもして呉れる、此女なしには私は手も足も動かせない。で、若し其友達の言へ引取ることが出来たら、直ぐ知らせるから逢つた上で何とでも爲さう。手紙も其友達が取次いで呉れる。途々朋子はこんな話をした。要吉は黙つてそれを聞いて居た。

土居の松林の蔭まで来て、二人は急に立停つた。

「ぢや、最う参りますか。」

朋子はうじ／＼して居たが、「ね、先生、此儘お目に懸れなく成つても、又出られるやうに成つたら逢つて下さいますか。」

要吉はそれには返辭をしなかつた。「貴方が死ぬ時は——何日でも好い——成度私と二人きりの所で死ぬと約束して下さい。私の胸の上で死ぬと。」

折柄人の近づく足音がした。朋子はさと別れて其方へ近づいた。自宅から迎への人と見えて何か二言三言言葉を交した上、連れ立つて歸つて行くらしい。要吉は「傷いた鹿」のやうに樹蔭へ逃れ去つた。

丸山の家へ戻つて、表の戸を開ける迄、要吉は唯今日の積きはかり考へて、今日の一日を振返つて見ようとはしなかつた。しばらく上り板に突立つたまま待つて居た。茶の間に灯火が點いて居るままで、家中寂として物音もしない。やがて障子を開けて、何気なく隅江が出て来たが、連つて、「お歸りなさいまし」と言つた。

障子の外から茶の間を覗くと、小母さんは眼を上げて一寸要吉を見返したま、黙つて火鉢の前に座蒲團を直した。何かに氣に障つた事がある、物を言はないのが此女の癖だ。要吉は中へ這入らないで、其儘自分の部屋へ戻らうとした。

「今頃迄何處に居たのです」と、背後から小母さんが浴せかけた。「他所からも訊ねに被入しや

るぢや有りませんか。のそ／＼女と一緒に彷徨き廻るなんて、身を持つた者のする業ぢやない。」

要吉は一寸立停つたが、何とも言はないで自分の部屋へ戻つた。隅江は後から洋燈を持つて這入つて来て、机の上に置いた。それから留守中に来た往復書と封書とを要吉の膝の前に差出した。再び立つて行きしなに、

「あの、毎日の瓶のお酒を持って参りますか。」

「うむ、要吉は頷いた。近頃癖が悪く成つて、寝る前に強い酒を飲まないと思ふに寝付られなく成つた。」

隅江が去つた後で、手に取つて見ると、往復書は書留の招待状で、封書は故郷の母親からの手紙であつた。其方は封を切らないで下に置いた。故郷から手紙が来る毎に、一晩位は封を切らないで延ばして置くのが常であつた。餘りに自分の身に近いことは、好い事でも悪い事でも聞くのが怖ろしい。

間もなく隅江は盆の上にウキスキイと煙した青魚とを載せて持つて来た。良人の常ならぬ顔色に氣附かねではないが、何事に依らず自分の方から訊ねることの出来ぬ女だけに、盆を前に据ゑたま、膝の上に手を置いて、何時迄も黙

つて坐つて居た。

「若し今夜の儘で歸つて来なかつたら——」

要吉は心の中で想つた。固より半ば空想で夢の中を往來して居た様なものであるが、それが又如何しても取返し附かぬ重大な事件の様に思はれる。自分の居なく成つた後で人々の周章でるさまや、其後長い一生の間、隅江がみじめな生活を送る姿がまぎ／＼と眼に浮ぶ。自分が手を下して自分と自分の周囲の者との前途を暗黒にして行く。これが如何しても免れぬ自分の約束かも知れない。

「お酒、注ぎませうか。」

「お酒、注ぎませうか。」

斯う言つて、隅江は瓶を手に持った。

「酒？」と、要吉は夢から醒めたやうに、今迄殘情な想像を排いて居た女の顔を見詰めた。「酒なら、今夜は最う止さう。」

隅江は瓶を下に置いて良人を見上げたが、口頃から大きな眼が涙みを持つた爲に一層大きく見えた。毎時の事で憎れて居るから、隅江は其儘何とも言はないで盆を下げようとした。要も油氣が脱けて、手附が倦さうに見える。

「お前、何處か加減が悪いのか。」

「い、え」と言ひかけたが、「はい、少許——」

「大切にしないと不可いよ」

女は俯向いたま、ぼたりと一帯大粒な涙を膝の上で落した。其儘盆を持つて出て行つた。家族は主人の出来心の犠牲とせられべきものではない。思へば、要吉が妻の手に觸れなく成つてから最う幾月だらう。今度隅江が這入つて来たら、突然其手を取つて顔中燃ゆるやうな辱を押付けて遣らうか。嘘言が分らなく成つて間違々することだらうが、又何んなに喜ぶことで有らう。あ、此女の息が詰つて蒼く成る所が最一度見て遣りたい。

斯んな勝手なことを想像しながら、偶と机の上を見ると視箱の蓋が開いて、其間に書き損ひの封筒が落ちて居た。何心なく取上げて見ると、隅江の手で宛名は自分の實家へ遣らうとしたのだ。要吉は可厭な心持がした。

二十五

昨夜は何處か身體の工合を損ねたと見えて、折々子供が夜泣きをした。隅江は徹夜眠らなかつたらしい。朝飯が済んでから小母さんと相談した上、二人で子供を連れて、傳通院の小兒科の醫者へ診て貰ひに行つた。

其後で、要吉は一人留守居をして居た。生欠伸が出て、何うやら自分も寢不足らしい。机

の上に額杖を突いたまゝ、ぼんやり障子の紙を見詰めて居たが、不意に室内の音が聞えたやうな気がして振り返つた。出て見ると、神戸が入口の隅の上に立つて居た。

「や、這入りたまへ」と言ひながら、要吉は足を退いた。

神戸はフロッタコートと洋袴の膝を窮屈さうに坐つた。成程、今日は猿樂町の教會に演奏會のある日だと思つたが、わざと黙つて居た。

「如何した、一人か」と訊いた。

「あゝ、皆醫者へ行つてね。」

「醫者?」

「なに、昨夜から少し子供が悪いんだよ。」

「子供が——そりや不可いね」と言つたが、相手が餘り氣乗りのせぬやうな様子を見て、其儘口を噤んだ。

それから別な題目について、いろ／＼話して見たが、毎時の様に談話がはずまない。如何やら互に戀と云ふ言葉を選けて居るやうな氣もした。やがて神戸が洋袴の膝をずらしながら、こんな事を言出した。

「何だね、他の者と向ひ合つて居る時に、かうして話が途切れると、非常に窮屈に感じるもの

だが、君だけは左様でもない。これは戀人だけだね。戀人と一緒に歩いて居て、何かの拍子に偶と言ふことがなく成ることが有る。そんな時は却つてそれが好い。」

「ふゝむ一言つたまゝ、要吉は返辭がつかなかつた。唯俯向いて火箸を弄つて居た。

間もなく、隅江と小母さんとが子供を伴れて戻つて来た。隅江は子供を抱いたまゝ、障子を開けて、一寸挨拶に顔を出した。神戸が親切らしく子供の容態など訊くにつれて、「へえ、お醫者様ではなも」と、何やら言ひ掛けたが不意に要吉の顔を見返したまゝ、言葉を途切らした。そして冷えた茶碗を下げながら、そこ／＼に廊下へ消えた。

午後一時頃、午飯を済ましてから、二人は猿樂町へ出掛けた。空は拭つた様に晴れて、綿のやうな電話線にふくらむ雲が結つて居る。神戸は何と思つたか、要吉を追掛ける様にして、「僕が斯うして君を引張り廻すやうに、三枝子は毎も澤井を引張り廻して居た。澤井でないにしろ、自分一人で都合の悪い時は、乾度誰かしら一緒に連れて来た。」

「さ」と言つた許りで、要吉は來るとも來ないと言ひながら、あんな女は今日來るんだらうね。」

「さ」と言つた許りで、要吉は來るとも來ないと言ひながら、あんな女は今日來るんだらうね。」

も言はなかつた。

教會へ着いた時には、最上會堂に一杯の徳業が集つて居た。女學部の主事は神戸の顔を見

「貴方を持つて居ました。最上時刻ですから何卒開會の辭を述べて下さい。」

神戸はにや／＼笑ひながら演壇へ上つて行つた。

徳業は大抵婦人ばかりで、一面に赤や黄や紫の色が揃いで、がや／＼と騒めく物音と共に若い人香が立上つた。其中を胸に紺紐の花を着けた人々が周旋する。要吉は群衆の中に交つて、ひとり隅の方に坐つて居たが、椅子に掛けたまゝ、地の底へ落ちて行くやうな寂寥を感じた。背に心の寂しさではない。身體までがずんずん滅入つて行く様に思はれた。

かく自分自身の中へ退き込んで、四邊の經過を忘れて居る間に、數番の番組が演じられた。何の位時間が経つたかも知れない。急に拍手の音が二隅に起つた。眼を上げると、恰度今業ががつかつた派手な裾襦袢を着た提琴唄が二たび呼び返されて、壇の上に立つて、聴衆に會釋をして居る所であつた。それを見ると、今頃自分が如何してこんな處へ來て、こんな人々と

顔を合せて居るのか、自分ながら解らないやうな心持がした。

此時偶と向側の窓に近く坐つた女の横顔が眼に着いて、思はず立上つた。朋子に相違ない。今日此處へ朋子が來て居ようとは思ひ掛けない。昨宵あゝして彼様に言つて別れながら知らぬ顔して此處へ來て居る、如何云ふ心算で、何爲に——要吉はわく／＼しながら、女の顔から眼を離さないで、竊と膝を下した。先方では既う要吉が此處に居ることも知つて居るらしい。正面を向いたまゝで、此方を向かない様にして居るが、始終男の眼で見詰められて居ることは自分でも意識して居る様に思はれた。

若い神祕な眼をした樂手が壇に上つた。詰襟の洋服がほつそりした身體に好く似合つた。番組に依ると、シヨパンの即興樂が始まるらしい。

要吉は竊と座を立つて廊下へ出た。その柱に凭れて腕組をしながら、一人考へに沈んだ。一體、あの女が昨宵歸つてから、自宅の首尾は如何なんだらう。自家の首尾が如何で有つたにしても、被褥して平氣で出て來たところは、何だか此方の存在を無視して、自分は自分の生活を替んで居る、此方とは没交渉だと云ふことを無

言の間に見せ附けられたやうな氣もする。それにしては彼の女の眞實の生活が知りたい、掴みたい。いよ／＼それが出来なければ——

急に會堂の中で拍手の音が起つた。ざわざわと人の立上る氣合がしたが、最初に扉を開けて出たのは朋子であつた。直に背後を振向いて、續いて出て來た三枝子と抱き合ふ様になつた。何か高聲に話して居たが、其儘手を引き合つて表の方へ出て行つた。要吉は入れ違ひに會堂の中へ這入つた。

「眞實は早く歸つたね。」

「左様か、僕は全然知らない。」

「何でも氣分が勝れないのを無理に來たとか言つて居たよ。家から迎への腕車が來て、早く歸つたんだが、一體當人が悪いのか、それとも阿母さんが悪いと言つたのか、能く分らなかつた。」

二人は階段を登り盡して、二階の休憩室へ這入つた。其處には名の聞えた學者、文士、畫家、それに若手の音樂家などが集つて、しつとりと煙草の煙を巻いて居た。要吉も神戸を通じて大抵知合であつた。神戸はこれから三河屋へ行つて晩餐を遣るから、君も一緒に附合へと言つた。要吉は何氣なく承諾したが、其言葉の下から直ぐに後悔した。自分が行くべき所でもないし、行つた處で仕様もない。それでも行くには行つた。幸ひ誰も注意するものがないから、要吉は自分の爲に他人の興を殺ぐといふ心配も入らない。只まじり／＼連中の顔を見てさへ居れば可かつた。

夜の十一時頃、やつと散會した。神戸と要吉とは酒のしぶきと煙草の煙との立草めた室を出て、眞黒な駿河臺を上つて行つた。線路の上はひつそりとして、偶にしか電車が通らない。お茶の水邊來て、二人はその停車場へ這入つた。客の様に成つた薄暗い石段を降りて行くと、漆塗の長いブラットフォームの上へ出る。神戸は此處から電車で大久保へ歸るのだが、いざ別れると成ると、未だ談話が残つて居るやうな氣がして、要吉も水道橋まで一緒に乗つて行くことにした。

電車は幾度も着く。直ぐ方向を轉換しては、又發車する。二人は倚架に腰を下したまふ、何時迄も動かなかつた。何だかひどく勞れたやうで、折々言葉が途切れる。夜が深けたのと、少し飲んだ酒が醒めかけたのとで、白い息も眼に見える様に、ぞくぞくする程肌寒い。

「寒いな」と、要吉が口を開いた。「眞個鐵が無い様に寒い。」

「魂でも賣るさ。」

「左様と、何やら考へて居る。」

神戶はつく／＼相手の顔を見守りながら、「買手がありや、眞實に賣る氣だから作は怖ろしいよ。」

「ふん」と、要吉も鼻の先で笑ひながら、「併し凄いなね。魂の買手が来さうな夜だ。」

二人は言葉途切らしたまふ、凝手と對岸を見渡した。ちらほらと電柱の灯がついて、漆の水は平に死んだものの様に動かない。

「君」と、要吉は又友達を呼びかけて、「生きたい、命が惜しいといふのが動物性本能なら、死にたいと云ふのも本能ぢや有るまいか。何だか近頃そんな無理が言つて見たいね。」

「如何だか、動物は自殺しないよ。」

「だが、自殺するものも有るといふことだ。」

斯う言つて、うつそり笑つて居たが、「ま、本能が不可ければ、衝動でも可い。寧ろ藝術的衝動だと思ふね。だから、死ぬ奴には皆芝居氣がある。一味の芝居氣なしぢや、何うも人間は死ぬるものでないらしい。スターン、リアリテイに壓迫されただけぢや——死なない。」

神戶は眞直に自分の前を見詰めたまふ黙つて居た。やがて、「君は如何だ。僕は近頃自分で思ふんだが、何うも自殺すると云ふ思はれ無く成つたやうだ。そんな時期は最う過ぎた様に思ふね。」

「さ、僕も左様は思ふが」と、まじ／＼相手の顔を見遣りながら、「どうも自殺する思はれない様だが、何だか他人から殺されさうな氣がする。」

誰に殺される？ 要吉はまじ／＼と女の顔を眼に注ぎて居た。が、わざと打消す様に、「それも思ふ事だ、何の因縁もなく——」

「人遣ひか何かでね」と、神戶は何氣なく笑つた。

「餘り未練を出して、こたはつてると、何だか其んな事で片がついて仕舞ひさうにも思はれるね」と、少時して又神戶が言つた。「併しそれぢや何うも思ひ切れない。死ぬ時は矢張自分が世

間から捨てられたやうな心持ちや死にたくないね。世間が自分に捨てられた様に思はせて遣りたい。ニイチエが癡狂院へ入れられた時は、世間がニイチエを捨てたのぢやない、ニイチエが世間を見棄てたのだ。」

半ば装へるが如き神戶の憂鬱な顔は、電燈の光が遠い所爲か、一層蒼味を帯びて汗顔に見える。

「君と僕は矢張違ふね」と、要吉はつく／＼言つた。「僕は世間に如何見えようが、そんな事は構はない。自分が氣遣ひに成るか——人は如何して氣遣ひに成つて、如何して自殺するか、それが問題なんだよ。」

神戶はじろりと見返したまふ、「君は自分が氣遣ひに成るやいな氣がするか。」

要吉は答へなかつた。

「僕は自分が狂人に成るとは思はない。狂人に成る間際迄じり／＼押寄せては行く。併し今一步と云ふ所で、如何しても知覚を失ふ譯には行かない。」

「つまり的を射越すことが無いんだね。左様さ、僕の筋は毎でも的を越して仕舞ふのかも知れない。」

又少時して、「だが、二人ながら中らないこと

は同じだね——

謎のやうな談話が途切れると、又渡入込む様に四邊が森とする。やがて車掌が側へ来て、「終電が出るから、乗るなら早く乗つて下さい」と注意した。

二人は速つて乗込んだ。

電車の中へは、二人の外に乘客もない。神戶は釣革に掴まつたまふ、

「君、其後戀愛事件は如何した？ 少し聞きたいね。」

「そりやア訊かないで呉れたまへ。言へる様な事があれば、此方から言はずには居ない。君こそ如何した？」

「さ、ルデインは危機に花んでる。併しルデインの事だから如何するか分らない。」

其間次の停車場へ着く。

「それぢや」と言ひながら、要吉は一人別れて電車を降りた。

其足で水道橋を渡らうとすると、丁度今聖堂の森を離れた月の色がいやに赤い。洪水が激つて暴風の來る微かと思はれる様に赤い。やがてそれも町の屋根に隠れた。雨の爲に柔かく成つた土が凍て始めて、踏む度にぎざ／＼と音がする。

神戶に氣遣ひに成るやうな氣がするかと訊かれた時、要吉は自分のことよりも、寧ろ朋子のことと思つて居た。此女の精神に異常があることは、何うやら疑はれない。又、精神に異常があればこそ、普通の人には窺ふことすら出来ない、別な世界を持つて居るのであらう。それを窺すには忍びない。此女の病氣を癒すのは、此女を殺すやうなものだ。昨夜——昨夜のあの女の仕事をしても、何うもモノマニツクな所があるとしたか思はれない。眼を睨ると、朋子の姿が宛ら涙もない北極の水の野に、ひとり香木が氷れる天を焦して、火の柱の様に燃えて居る様に思はれる。自分は火を弄んで居るやうなものかも知れない。果は自分も一緒に焼け死ぬ外に術はないかも知れない。それが如何成らう。

要吉は何時の間にか自宅の前に立つて居た。それと氣が附いた時、何となく足が凍んで、其儘退出したいやうな氣がした。

今朝から小兒の容態が急に變つた。うつらうつら眠つて居るのが却て氣掛りらしい。隅江は只おろ／＼して居る。午過ぎ、廻診に來て呉れる筈の傳道院前の醫者は未だ見えない。小母さ

二十六

歌存することが出来ないといふ挨拶。強ひて頼んで見た所で、如何にも成らぬらしい。それに此助手の口振に依ると、左様成つた患者は大抵助からぬもので、只病院へ死にに來られるやうなものだから、大分面倒臭いらしかつた。で、それぢや駿河臺へ行つて見ませうと立上ると、彼處も大抵一杯でせうと言はれた。それを聞いて急に落膽したが、兎に角行つて見ることにした。

瀬川病院の受付へ行つた頃は、冬の日も薄れて、うそ寒い玄關には誰も出て居ない。漸と通りかゝつた事務員らしいのを捉まへて、來旨を告げると、案の如く、此方は一杯だから何卒江東病院の方へ行つて貰ひたいと、にべもない。要吉はすこゝと玄關を出た。暫く立つて居たが、どうも彼んな小さな病人が、それ程重態に成つて居るものを、丸山の奥から兩國の向う迄連れて行く氣にも成れない。で、最う一度大學へ引戻し往診を依頼して行くつもりで、車夫には先へ歸つて、病院へは置入れない、内へ出來るだけの手當をする様に用意せよと言傳して歸して遣つた。

小兒科へ行くこと、幸ひ未だ前の助手が残つて居たので、それに面會して用件を頼んだ上、要吉は様子を見詰めて居ると、灰が折れて下へ落ちるたびに乾坤を揺がすやうな大きな音がする。あれ、庭前へ大の仔が二疋來て、面白さうに狂つて遊んで居る。早く來て下さい、二人であの様に遊ばせよう、手紙は此處で終つた。

線香の灰が落ちるたびに大きな音がする。夜半に心を鎮めて見て居たら、實際そんな音がするかも知れない。何時かの夜も、室中が照り渡るとか、音ばかりの夢を見たことがあるとか訊いて居た。如何かしたら、彼の女は幻視や幻聴を持つてるのかも知れない。が、これは左様ぢや無いらしい。書いて有ることといひ、人を愚弄するやうな口吻といひ、要吉の心の底で何か解つたやうな氣がした。解つたが、何うもそれをはつきり意識の上へ浮べたくない。

霜枯れた圓い草山の上を、さら／＼と冷たい夕風が通つた。要吉は両手に紙片を握つたまま、久らく動かなかつたが、偶と氣が附いて立上つた。立上ると共に、連れて池を廻りながら、表門の方へ出て行つた。丸山の家近く迄來て、町の角で小母さんに出會つた。

「小兒は」と訊くと、
「大變好いんですよ。眼も動く様に成りまして

はひとり運動場の櫛の横手まで來たが、どうも足が進まない。御殿の前の芝原の上へのめる様に倒れたまゝ、ぼんやり低い空を見上げた。空想の世界と現實の世界との餘りに鮮しい接觸に、目の眩ふやうな氣がして、自分ながら如何して可いかな解らない。昨日迄は殆ど小兒のことも忘れて居た。これが人の親だらうか。

空は一面に霞れた牛乳のやうな雲が張つて居る。夕ぐれなれば人も通らない、木も草も動かない。要吉も頭の中一杯に薄白い雲が張つたやうで、何一つ考へては居ない。

要吉はつと起直つて、衣囊から二つに折つた最前の手紙を取出した。果鴨の消印があるから王子に居る友達とやらの手を経て來たものらしい。封を切つたまゝ、芝生の上へ俯伏せに成つて、何か悪い物でも見る様に、片端から讀むに従つて巻紙を引裂いては、手の中へ丸めて行つた。

「君は初めより騒弄する氣で居たまひしなれば、よも人の君を欺くを咎めたまはし」と、最初から書出して、「この上御院殿の森處にて二人の演じたやうな喜劇を續けるに堪へない。何日ぞや家で許さぬのを押して演奏會へ出た時は、懐に長い手紙を持つて居た。あの時も餘程決

ねと、言ひ捨てて米を買ひに走つて行つた。要吉は小兒の容態が快く成つて居ようとは思ひ掛けない。それを聞くと、偶と自分の心の底で其死を願つて居たんぢやないかと云ふやうな氣がした。そして、慄しく舌々と打消した。

「病院は不可ませんでしたさうだな。」
「うむ」と言つたが、やがて、「彼方のお醫者さんは見えたか。」
「ええ。」
「何と言つてだつた。」
「今夜は寝られませんでした。」
「左様か、如何も少し手後れだつたと見えるな。」
「私が怒り御座いました」と、直ぐ涙聲に成つた。

心して出たのだけれど、お顔を見ると、流石に何とも言へなく成つて、其儘立歸つたと、此處迄讀んで來て、要吉は思はず手紙を掴んだまゝ立上らうとした。

「一たび逢つて別れてから、殆ど前の事を覆すやうなことを言つて寄越すのは、あの女には最早珍らしくない。長い手紙を懐にして居たといふ。それが白い紙の上に黒い墨で書いたものか、左様でないのか、何れにもせよ、顔を見ると何とも言へなく成つて歸つたといふのは、言葉が簡單なだけに、此方が傷けられたことは一しほ深い。

なほ讀み續けて行くと、「あの夜から母は持病で病みついて、未だ枕が上らない。今も枕邊に介抱して居るが、私は斯んな事すら最早爲難なしに爲ることが出来なく成つた。私の爲に氣を揉んで哭れる周囲の人々の苦痛を長びかすのは、一層殘酷だと思ひながら、未だ私が卑怯で、一思ひに親を殺すことが出来ないから、斯うしてじり／＼母が弱つて行くのを見て居る外はない。介抱する者もされる者も、互に理解の絶えた仲程辛いものはない。」此處から又急に筆を轉じて、「私は香を焚くことが所好だ。殊に線香が好い。斯うして護手と線香の燃えて行

苦しき口に口端を歪める。未だ訴へることを知らないだけに、悔めて口で吐けられない。元氣が出たと思つたのは、矢張り空想のみで、明る目の午過ぎから薄く白眼を開いたまゝ、全く動かない様に成つた。只口元へ手を遣つて見ると、微かに息が通つて居る。注射をするたびに、黒い眸子が動くやうに見えたが、それもほんの少時で、別段数日は無いらしい。三日日には食鹽の注射をした。太い針を小さな股にづぶりと刺して、見る／＼蛇が蛙を呑んだ様に膨れ上るのを見ては、女どもは皆面を背向けた。

固より口からは何も通らない。只灌腸だけで生きて居るのだから、裏れて行くのが眼に見えるやうで、終ひには顔に小兒らしい所が失せて、宛然年寄の様に淺紫しく成つた。

隅江は夜の眼も合せなかつた。要吉も流石に主我的な空想を走せる暇も、殘酷な思索に耽る餘裕もない。隅江と同じ事を愛ひ同じ事を喜んで、一切の餘事を忘れることが出來た。只、要吉の心持は變り易く、自分で自分の主人でない。死に瀕した病兒のために、折角開かれた此像しい感傷的な情緒も——それは自分の性質の好い方面を代表したものが——こんな生活を續けて居たら、又何時の間にか乾れて仕舞ふのだ

らう。要吉はそれを自覚して、且怖れて居るが、自分ながら如何することも出来なかつた。四日目の日暮は、夏子は最う此世に居なかつた。夏子といふ名は、此子の爲に神戸が選んだので、名に因んだ一葉女史が、元の住居であつたといふ同じ家の、女史が臨終の間であつたといふ同じ部屋で、一歳に足らぬ小さい兒は、掌に載せられた霞が消えてでも行く様に、ほつりと息を引取つた。隅江は蒲團の上から抱くやうにして、ばら／＼と留度なく涙を零した。女どもは皆泣いた。要吉は腕組をしたまゝ、それを見て居た。

の串ひも此方でしたいからと云つて奇惑したの、初七日の済むまで骨盤を寺へ預けて置いて、其間隅江に持たせて故郷へ歸すことにした。薄白い酒れたやうな日の後に、又薄白い夜が明けて、幾日も同じやうな日が續いた。隅江は殊に身の置所もなからしく、何處に坐つて見ても落着かない様に見えた。要吉もしばらく戸外へ出ないで、成る可く隅江とも言葉交すやうにしたが、如何いふものか、隅江の方が要吉を避けるやうな素振が見えた。此女がこんな素振を見たことは是迄にない。夏子の居た頃は、要吉が少し許り子供をあやす眞似でもしようものなら、心から嬉しうにして寄り纏つて来たものだが、淺薄な女氣の、子供が失く成ると共に、縁に繋がれた夫婦の情愛も絶えて仕舞つた様に思ふのかも知れない。それにしても、こんな世間知らずの妻の良人に對する依頼心を失はせたものは、誰でもない、矢張要吉である。要吉自身が仕向けたのである。要吉は自分が手を下して左様して置きなから、それを罪惡だと感ずる前に、又妻の頼りない心細さを察して造る前に、自分の身の寂寞に堪へないやうな心持がした。それが他人の所爲ではない、悉皆自分の心柄だと思ふと、一層取返しが付かないやうで、

寂しさの底が知れない。因より同情には値しないが、こんな男でも、矢張不審の人の數には洩れまい。初七日もやがて過ぎた。要吉は毎日隅江の顔を見ながら、何日立てとも言はなかつた。今度立たせて遣れば、それが一生の別れに成るやうで、二たび呼び戻すことが自分ながら覺えない様に思はれて、何だか歸したくない。少くとも自分からは言出し難い。斯んな風で、一日づつ妻の歸國を延ばした。勿論隅江の方からは何とも言出さない。三月、桃の節句が過ぎて二日目、今日は夏子の二七日で、隅江は小母様と連立つて寺詣りに行つた。其後に要吉は一人留守居をして居たが、つと立つて障子を開けた。日の入方の空は拭つた様に晴れて、一塵を留めない。電話線が編の様に霞んで見える。此二三日は風も吹かず俄に時候が暖かく成つた。海の向うから燕の來るのにも間もあるまい。此平穩な天地に對して、何うも心が落着かない。胸の中の動搖と周囲との不調和が際立つて、宛もなく消出したい。飛出して、何處迄も一直線に行つて仕舞ひたい。不圖郵便脚夫の足音がしたやうな氣がして、

二十七

出で見ると、上り樞に切手を二枚張つた重い郵便書が届いて居た。要吉は形容することの出来なない妙な心持で、胸を轟かせながら封を切つた。別に一本の手紙が其中に這入つて居た。王子の友達の許へ轉送を頼んで遣つたが、何と思つたか返して来た、彼人の仕さうなことで、今ついでに送るから読んで呉れとある。先づそれから開いて讀むと、例の思ひ上つた調子は何時もと變らない。其中に、「さりとて君は今何を爲したまふか、何を思ひたまふか。我には時間の中に候。互に遠き世の思ひに候。想像せむも怖ろしく候はずや。されば君が眼とわが眼と相會せる時、近寄り難き二つの世に思ひの衝なきよりは、却々に今は心易くも覺え候。半月の沈黙は自らつくりなせる虚構の世界に對する執着をいよ／＼増し申候。わが最後の息はこの世界の外ならじと迄誓ひ申候」などと書いてある。今一つの手紙には、「今日は桃の節句にて、主人役に白酒を過して、後の心持悪しく、何をしても後に悔いるが私の常に候。悔い得る人は幸なりと人の申せし」と書き連ねて、尙々書には、此返事は淺草の海禪寺へ宛てて呉れとあつた。

あるとは、要吉も豫々聞いて居た。朋子が此寺へ出入するとすれば、此前の手紙に線香の灰が落ちる言だとか、犬の仔と遊ぶとか、禪學の公案めいたことが書いてあつたのも、折々手紙の中に女らしくない粗大な文句が挿まれたのも、此女の手紙が男性化して居ることも、それ許りではない、最初から此女の常軌を逸した振舞が、すべて裏書された様に思はれた。尤も、こんな疑ひは是迄もたび／＼要吉の心に泛んだ。が、毎時懸命にそれを打消して来た。女の上に自分でつくつた文影を壊されるのが惜しさに、兩手で捧げる様にして来た。それ迄にして、漸とイリニュージョンをつけて来たものを、今女の手づから無残に壊されては、何とも言ひ様のない心の空虚と、自我の屈辱とを感せずには居られない。

如何がな禪學から引離して、自分の方へ引附けたさに、此女をアブノーマルのものにした。自分の家系が一種の幻視に備まされて居るのを願ひては、此女も左様したかつた。父の墓畔に繼死した男と出逢つた時、何と言ふこともなく、それが自分の半身の様に思はれた。大都の眞中に初めて朋子を見た時、何うもそれが偶然に出逢つたものとは思はれなかつた。此日自分と逢ふために、今日迄此世に生きて居たものの様にも思ひたかつた。そして、只自分だけが此女を知り得た様に思つて居た。が、何と思つた所で、當人がそれを裏切る氣な仕方がない。加之、此女は大分參禪が得意なやうでも有る。何の位修業を積んだのか知らぬが、自分も禪學の狂信者に用はない。併し、左様思ふ傍から、又それに逆行するやうな考へがむく／＼と頭を擡げた。自分には心からあの女を偶像の様に崇拜して来た。あらゆる熱情を捧げて来た。此儘では、何うも此儘では諦められない。あれも迷へる女だ。徹し頼頼でないにしても、頼頼は餘りだから撤回しても可い。あの女の頭腦に異狀が有ることは争はれない。あの怖ろしい程過敏な神經を有ちながら、自家

の行為の責任を知らない様に見えるのも、或はそれが爲では有るまいか。今の世に新しい女は幾許でも有る。あの女は普通の新しい女ではない。あの女の言動を裏附けるものが何かなければ成らぬ。何か暗い影が——黒い星の下に生れて、黒い運命に支配されなければ、こんな女は出来ない。

要吉は机に向つて長い手紙を書いた、これが最後と思つて書いた。先方が幻影を壊す氣なら、此方にも其覺悟が有る、此手紙は只それを壊されまいとする努力に過ぎない、左様思ひながら書きつづけた。何時の間にか二人が戻つて来て、隅江が側へ洋燈を持って来たのも知らなかつた。

啓、久し振りにて御狀に接し、例の臆病にて、暫しは封も得開かず、只々打睡め居候。それに近頃は事繁く、残念ながら氣根衰へて、手紙を書出して、何を書くやら筆の跡さへ墨東なく候。理性にては、矛盾せる二つのもの同時に存在するを許さずと申せ、感情ばかりは然らず、明かに矛盾せる感情の兩つながら一時に身に迫るが堪へがたく候。

半月の沈黙は、君自らつくりなせる虚構の世界に對して執着を増さしめしとのたまふか。さりとして其虚構の世界が何なりやは能くも解らざれど、何が故に今更虚構の世界とはたまふぞ。君自ら君の世界の眞實を疑ひたまふか。君の世界は恐らく夢ならむ。されど夢の如く眞實なるにあらざる。眼に見ゆる現實の世こそ、夢の如く虚構と成りたりとは、西の國なる新しき詩人どもの新しく唱ふる所に候。

かくて空想の世界は日に／＼現實の世界に迫る様に覺え候。近頃心の中で考へただけのことが、事實と成りて現はる手續の易々たること、我ながら怖ろしき言ひに候。時としては、未だ考へても見ぬことさへ、夙くも取返し難き事實として目前に現はること、魔性のものありて人の心を豫知するかと疑はるるまでに候。

何時ぞや、二人して都を出でむと、露の街を彷徨ひ歩き夜を記憶したまふか。私はあの眞實に死ねし、殺しも出来るやうな心持に成りたりしに候。其後氣

方衰へてうつら／＼暮す間には、あの夜のことを思ひ續けて、一時の衝動に依らず、十分なる省慮の結果として、なほ人を殺すに至る迄わが心の壊れ行くさまを考へなど致候。一種の罪人心理に有之べく候。

今は隠すも済なれば云ふべし。あの折霧の中を歩きながら、私は——場所も貴方の所好だといふ鎌倉鶴ヶ岡の社前にて——貴方を手にかけて殺した幻影を泛べて居た。其時如何いふものか、私は生き残つた、生き残つてゐる必要がある様に思つた。十二年間——十二年といふに根柢はない——棒太なる集治監の米に閉ぢられても、まだ生残つて居る必要がある様に思つた。——私は詩人である、藝術の徒である、美の崇拜者である。君を殺す、君を滅する區間に於て、我戀人は何んなに美しく我眼に映るるか。總て美しきものは其滅ぶる前の瞬間に於て最も美しいといふにあらざるや。私は許されざるものを見る第一の人で有らなければ成らぬ。

貴方ばかりとは云はぬ。私は貴方を殺し

たといふことが、私自身の上にも及ぼす影響を見られた。何物の前にもたじろがぬ科學者の好奇心を以て、自分の心理に及ぼす反響が見えなかつた。只、科學の研究は實驗者其人に取つて最も危険なものである。私は其儘永久に歸つて来ないかも知れぬ。そんな事は私の知つたことではない。

或人は近代人の人生觀は厭世でもない、樂天でもない、樂天と厭世との接近であると云つた。極度の戀愛は極度の憎悪と伴ふ。私は貴方を愛することの深ければ深いだけ、貴方を憎んで居たのかも知れない。私は貴方の身に残忍な行為を加へたい。そこに初めて切なる愛の表現を見出さうとした。埃及のハイベシヤが美しい生身の肉を見送で削り取られた様に——否々、今夜私の頭は平調を失つて居る。

併し何を言つても、今と成つてはすべてを過去の渦巻の中に葬る外はない——

此處迄書續けて、ぼつりと思想の線が途切れ頭の中に書きたい事がうじや／＼有るやう

で、而も何を書かうとしたのか想ひ出せない。巻返して、書いただけを讀直して見た。初め書簡文體で書出して、後の方では言文一致に成つて居る。要吉は眼險の熱く成つた眼に、少時紙の上を見詰めて居たが、其儘引裂いて、ぐるぐる巻いて封筒に納めた。直に出して仕舞はないと、又思ひ返して出さなく成ると思ふから、宛名を書くと共に立上つた。恰度そこへ隅江が夕餉の膳を持つて来たが、

「郵便なら入れて参りませうかな」と訊く。

「うゝむ」と、それを開流したまふ、自分で出て行つた。

間もなく、要吉は戻つて来た。膳の前に直された座蒲團の上に坐つて、器械的に箸を上げたが、何を喰つてるか自分でも知らない。時々物忘れでもした様に考へ込む。隅江はそれに氣が附いても、故と見ない振をして、凝手と俯向いたまふ、膳の上の給仕盆をまさぐつて居た。

今と成つては、總てを過去の渦巻の中へ葬る外はない。

唯、如何してすべてを過去のの中へ葬るか。それが要吉の身に刺された一つの課題である。夏子は世を早くした。恰も意あつて世を早めた様子も思はれる。此父らしからぬ父は、自分の手

を下して自分の前途を開黒にして行く。それを何者かが居て傍から手傳ふとしか思はれない。何者かとは矢張自分の意志に違ひなからう。人の意志が其人の外へ出て働くことも無いとは云はれぬ。故らに或境遇をつくつて、それに着くといふ傾向が止めようとして止められないのも、想ふにそれが爲では有るまいか。

何れにしても今は我が身一つを處分すれば可い。何時か——一週間も前でも有つたらう——或人の許で清國の四川省に傳教師の口があるといふ話が出た。北京から未だ五十日の餘も蜀の棧道のやうな路をはる／＼興に昇かれて行かなければ成らぬ所だと聞いて、稍心を動かされたが、其時は何とも言ひ出さないで歸つた。一人でそんな懸離れた所へでも行つて、物を言ふ相手も無く、只生きてだけ居たら、其間には口を刊くことも忘れ、頭も鈍く成つて、大方片が附くかも知れない。

隅江は要吉が黙つて差出した茶碗に、飯を盛つて渡さうとした。

「あ、お茶だつた、御飯ぢやない。」

一寸見返したが、別に湯呑に茶を注いで出した。要吉は初めて此女を見附けてもした様に、隅